

内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 御中

地方公共団体における多世代交流を通して活性化
するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する
調査研究事業
業務報告書

令和4年3月

株式会社 NTT データ経営研究所

目次

第1部 調査研究の概要	4
1.1 背景・目的	4
1.2 本調査研究の全体像（調査研究の構成と推進体制）	4
第2部 「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築（「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」の作成）	6
2.1 研究会の開催.....	6
2.2 コミュニティモデルの検討・構築（「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」の作成）	8
第3部 モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築	13
3.1 モデル地方公共団体の選定	13
3.2 モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援.....	15
第4部 令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウム	44
4.1 シンポジウムの開催概要	44
4.2 参加者アンケート結果	50

別添 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」

参考資料

第1部 調査研究の概要

1.1 背景・目的

令和元年12月20日に閣議決定した第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」においては、「多様な人材の活躍を推進する」を横断的な目標の一つとして掲げており、若者・女性等を含めた多様な人材の活躍を推進するためのコミュニティの実現を図る施策として「生涯活躍のまち」が位置づけられている。

「生涯活躍のまち」の推進意向を示す地方公共団体は年々着実に増加している一方で、具体化には至っていない地方公共団体も相当数存在している。

このため、多世代交流を通して活性化するコミュニティのモデル（以下、単に「コミュニティモデル」という。）の構築、その実践に向けた計画策定への支援といった取組手法等について調査研究を行い、その成果を横展開することにより、地方公共団体における「生涯活躍のまち」の取組を促進していく必要がある。

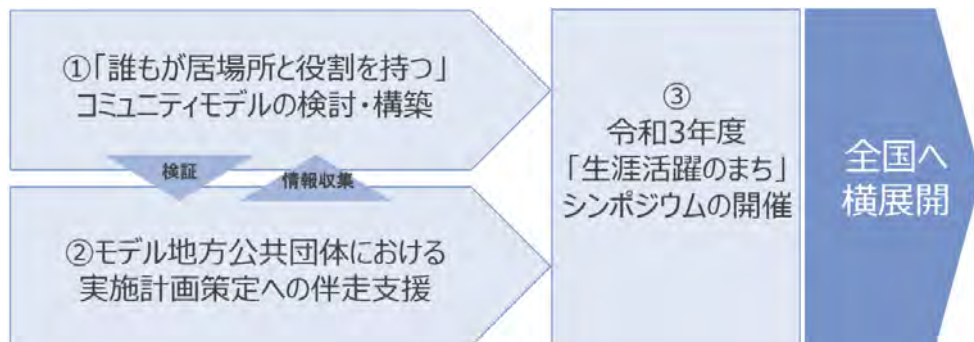
こうした方向性を受け、本事業は、

- ・ コミュニティモデルを構築し、
- ・ コミュニティモデルの実践に向けた計画策定に取り組む地方公共団体（以下「モデル地方公共団体」という。）に対する伴走的な支援を通して、
- ・ その取組手法等について調査研究を行い、地方公共団体等に対して、広く周知を図ることで、各地方公共団体における「生涯活躍のまち」の取組を促進すること

を目的として実施した。

1.2 本調査研究の全体像（調査研究の構成と推進体制）

上記の背景・目的を踏まえ、本業務では、次頁のとおり、①「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築、②モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援、③令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウムの開催の3項目で調査研究等を実施した。



本調査研究の構成

具体的には、①「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築に関わるものとして、「地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業 調査研究会」（以下「研究会」という。）を設置するとともに、そのなかで、誰もが居場所と役割を持つコミュニティモデルの検討・構築を行った。

また、②モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援を並行して実施し、計画策定の手法等について情報収集するとともに、研究会で検討を進めているコミュニティモデルの検証を行った。

なお、「生涯活躍のまち」の取組の促進に向けた地方公共団体への周知を目的とした③令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウムを令和4年3月11日にオンライン形式で開催した。

（※）②モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援にあたっては、一般社団法人 つながる地域づくり研究所（岡山県岡山市）の協力のもと事業を進めた。

第2部 「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築

（「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」の作成）

2.1 研究会の開催

本事業においては、コミュニティモデルの構築等を目的として、「地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業 調査研究会」を設置した。

地方公共団体における多世代交流を通して活性化する
コミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業 調査研究会 委員一覧

所属・役職	氏名
一般社団法人北海道総合研究調査会 理事長	◎五十嵐 智嘉子
NPO 法人 ETIC. ローカル事業部長	伊藤 淳司
東京大学先端科学技術研究センター 教授	小泉 秀樹
ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス合同会社 人事総務本部長	島田 由香
Community Nurse Company 株式会社 代表取締役	矢田 明子
生駒市 地域活力創生部長	領家 誠

◎座長

（氏名の五十音順、敬称略、所属は令和4年3月時点）

研究会は下記のとおり4回開催し、調査研究に対する議論を実施した。それぞれの議事概要等については、参考資料として添付している。

● 第1回研究会

日時：令和3年5月26日（水）10:00～12:00

形式：ZoomによるWEB会議

議事次第：

1. 事業概要
2. 事例調査と仮説モデル（案）の提示
3. モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示

● 第2回研究会

日時：令和3年10月4日（月）10:00～12:00

形式：ZoomによるWEB会議

議事次第：

1. 第1回研究会の振り返り
2. コミュニティモデルの構成について
3. コミュニティモデルの内容について（積み木を用いた考え方の提示）
4. モデル地方公共団体支援の進捗報告

● 第3回研究会

日時：令和3年12月23日（木）15:00～17:00

形式：ZoomによるWEB会議

議事次第：

1. これまでの振り返り
2. 「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」（案）について
3. モデル地方公共団体支援の進捗報告

● 第4回研究会

日時：令和4年2月24日（木）15:30～17:30

形式：ZoomによるWEB会議

議事次第：

1. これまでの振り返り
2. 「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」（案）について
3. モデル地方公共団体支援結果報告
4. 説明書の全国への展開について

2.2 コミュニティモデルの検討・構築（「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」の作成）

● 概要

本事業では、全国の地方公共団体が活用できる「生涯活躍のまち」の「コミュニティモデル」を、「誰もが居場所と役割をもつコミュニティ」の“作りかたと続けかた”のモデルとして検討することとした。4回の研究会での議論を踏まえ、その検討結果を「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」（別添参照）として取りまとめた。

● 検討プロセス

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書の取りまとめにあたっては、第1～4回の研究会において、下記のテーマについて議論を実施した。

なお各研究会での報告内容等の詳細については、参考資料1～4として本報告書に添付する。

各研究会の検討テーマ等

研究会	内容	主な意見
第1回	<p>〈検討テーマ〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ●事例調査と仮説モデル（案）の提示 <ul style="list-style-type: none"> ・事業概要説明 ・コミュニティモデルづくりに関する先行事例調査結果の共有 ・仮説モデル（案）の提示 ●モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示 <p>〈仮説モデル（案）の概要〉</p> <p>「誰もが居場所と役割をもつコミュニティ」の“作りかたと続けかた”のモデルとして、次の内容を想定</p> <ol style="list-style-type: none"> ①各検討プロセスにおける手法について、様々な選択肢を提示する。 ②個性ある各地域において、どのように手法を選ぶべきか提示する。 ③それぞれの手法を有機的に連携させる繋ぎ方を提示する。 	<p>○何のためのコミュニティづくりなのかを明確にするために、コミュニティづくりの目的（purpose）や将来像（vision）等をわかるようにすべき。</p> <p>○モデルは、あくまでモデルに行きつくまでのコミュニティ形成のプロセスについて提示し、各地域において理想的なコミュニティづくりのための道筋を支援するものとすべき。</p> <p>○地方公共団体の職員や地域住民等の人材育成も重要な視点</p> <p>○モデル地方公共団体の伴走支援で得られた知見を還元できると良い。</p>

研究会	内容	主な意見
第2回	<p><検討テーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ●コミュニティモデルの構成について ●コミュニティモデルの内容について ●モデル地方公共団体支援の進捗報告 <p><コミュニティモデルの内容について（積み木を用いた考え方の提示）></p> <p>前提としてコミュニティづくりの目的（purpose）や将来像（vision）等を明らかにした上で、</p> <p>①定型のコミュニティを示すのではなく、プロセスごとにさまざまな手法を提示し、状況に応じて選択することができるモデルとする。</p> <p>②「問題の見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3つのプロセスについて、それぞれ複数の大項目、小項目で構成し、一覧化する。</p> <p>③各プロセスにおける地方公共団体の果たすべき役割についても記載する。</p> <p>⇒地方公共団体が、地域の実態に即して手法等を選択する様を、積み木を積む動作に見立て、「コミュニティづくりの積み木モデル（案）」として提示する。</p>	<p>○コミュニティづくりは、地域の課題解決のために検討を始める場合と、地域で目指すべき将来像を実現するために検討を始める場合があるので、その双方を明記できると良い。</p> <p>○積み木モデルは分かりやすく、かつ臨機応変な形で示すべき。</p> <p>特に、「問題の見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3つのプロセスは、一方通行ではなく行ったり来たり循環する可能性もあるため、それを明記できると良い。</p> <p>○地方公共団体の職員について、誰がどう動くのかについても重要な視点として入れるべき。</p>
第3回	<p><検討テーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ●「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの<積み木アプローチ>説明書」（案）について ●モデル地方公共団体の進捗報告 <p><「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの<積み木アプローチ>説明書」（案）について（主な修正箇所等）></p> <p>第2回研究会での議論を踏まえ、次の観点を中心に内容を修正した。</p> <p>・「モデル」では定型的なコミュニティの型があるかのように捉えられてしまう可能性があるため、積み木</p>	<p>○コミュニティづくりに取り組むにあたって、地域の課題解決のために検討を始める場合と、地域で目指すべき将来像を実現するために検討を始める場合があり、双方とも「地域で目指す将来像づくり（ビジョニング）」のプロセスとして記載することが重要である。</p> <p>○地域で目指す将来像は、関係者での目線合わせになるほか、検討を進める中で悩んだ際に立ち戻るポイントになる旨を追記すべき。</p>

研究会	内容	主な意見
第3回	<p>を用いてそれぞれの地域の状況に応じたコミュニティをつくる「アプローチ」の説明書となるよう資料を整理した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティづくりによって実現したい地域の将来像や地域が抱える課題について写真を用いてわかりやすく提示した。 ・「問題のを見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3つのプロセスを説明し、必ずしもこの手順ではなく、臨機応変に活用する必要があることを追記した。 ・「誰が」主体的に動き「どのように」積み木を組み合わせるのかを決めることも重要であることを追記した。 	<p>○「問題のを見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3つのプロセスについては、同時並行的に取り組むことがありうる話なので、それが示せると良い。</p> <p>○今後は、地方公共団体への研修等の展開方策を検討すべき。</p>
第4回	<p><検討テーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ●「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの<積み木アプローチ>説明書」(案)について ●モデル地方公共団体支援結果報告 <p><「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの<積み木アプローチ>説明書」(案)について(主な修正箇所等)></p> <p>第3回研究会での議論を踏まえ、次の観点を中心に内容を修正した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個別の地域における将来像づくり(ビジョニング)の検討手法について、「生涯活躍のまち」から出発する場合と、地域の課題対応から出発する場合の2つのプロセスを追記し、将来像づくりの重要性を説明した。 ・「問題のを見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」のプロセスは実際には並行して検討すること、また臨機応変に行ったり来たりすることから、「課題発見」「事業構想」「資源活用」に修正し、順不同であることがわかる名称とした。 	<p>○モデル地方公共団体の調査結果を積み木で表現しているが、各団体の取組のポイント(工夫したところ等)が記載できると良い。</p> <p>○地方公共団体が、積み木アプローチを活用してコミュニティづくりを進めるにあたっては、地方公共団体の職員同士で教え合ったり、知見やノウハウを共有できたりする場があると良い。</p>

● 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書の概要・構成

<概要>

研究会での検討結果を踏まえ、地方公共団体向けに、①「生涯活躍のまち」について理解し、取組の意識を高めるきっかけとなること、②実際に取組を始めるための実践的な手引きとなること、を目的として、「生涯活躍のまち」コミュニティをつくるための検討方法等について取りまとめた「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書を作成した。

<構成>

取りまとめた「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書の目次構成は次のとおりである。

第1章 はじめに

- 1-1. 「生涯活躍のまち」とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
- 1-2. 「生涯活躍のまち」の5機能について・・・・・・・・・・ 4
- 1-3. 本書の目的・構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第2章 なぜいま「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが求められているか

- 2-1. 「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドラインの記載・・・・・・・・ 7
- 2-2. 目指すべき「生涯活躍のまち」コミュニティとは？・・・・・・・・ 8
- 2-3. 何が問題なのか？何を解決したいのか？・・・・・・・・ 10

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（vision）の検討

- 3-1. 本章について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 3-2. 検討プロセス①「生涯活躍のまち」から出発する場合<全体像>・・・・ 14
- 3-3. 検討プロセス①「生涯活躍のまち」から出発する場合<詳細>・・・・ 15
- 3-4. 検討プロセス②地域の課題対応から出発する場合<全体像>・・・・ 18
- 3-5. 検討プロセス②地域の課題対応から出発する場合<詳細>・・・・ 19

第4章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉

- 4-1. 本章について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
- 4-2. 〈積み木アプローチ〉の各プロセスについて・・・・・・・・・・ 24
- 4-3. 基本的な考え方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
- 4-4. 〈積み木アプローチ〉のご案内・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
- 4-5. 〈積み木アプローチ〉を用いた積み上げ例・・・・・・・・・・ 27
- 4-6. 各積み木の解説及び事例紹介・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
- 4-7. 地方公共団体の役割・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

第5章 モデル地方公共団体における取組事例

- 5-1. 本章について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
- 5-2. 神奈川県横須賀市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
- 5-3. 新潟県長岡市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
- 5-4. 滋賀県長浜市・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
- 5-5. 奈良県高取町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

第6章 おわりに

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書の目次構成

本説明書の制作にあたっては、地方公共団体を主な読者として想定して編纂を行った。地方公共団体等の理解を助けるため、第1章において「生涯活躍のまち」についての解説を付すとともに、第2章において「生涯活躍のまち」に関わるコミュニティづくりの必要性等について記載した。

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書では、コミュニティづくりを進めるための将来像づくり（ビジョニング）について、2つの検討プロセスを解説した（第3章）。また地域の実情にあわせた取組がなされやすいよう、コミュニティづくりの各段階における各種手法の組み合わせ方等を「積み木アプローチ」として整理した（第4章）

第4章

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉 4-4. 〈積み木アプローチ〉のご案内

活用できる積み木（手法）

▶地域の実情に合わせて、各プロセスの積み木（手法）を積んでいきます。



「積み木アプローチ」

● 「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」の普及に向けて

今後、「「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉説明書」を全国へ展開し、より多くの地域で「生涯活躍のまち」に取り組んでもらうことが重要となっていく。

後述する令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウムにおいて本説明書を発信した。

第3部 モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティモデルの検討・構築

3.1 モデル地方公共団体の選定

「生涯活躍のまち」の推進意向をもっているが具体化に至っていない地方公共団体の参考となるよう、モデル地方公共団体の実施計画の策定に向けて行う伴走支援を実施するため、モデル地方公共団体を選定した。

内閣官房から提供を受けた、「生涯活躍のまち」の推進意向がある地方公共団体のリストより、次の選定プロセスで、モデル地方公共団体を選定した。

選定のプロセスと結果は以下のとおりである。

モデル地方公共団体の選定プロセス

STEP ①	候補団体へのヒアリング コミュニティモデルのテーマや候補団体の意欲を調査	候補団体に対してヒアリングを実施
STEP ②	実地調査 候補団体を訪問し、実地調査を実施	ヒアリング結果から、4 団体を選定し、オンラインも活用しながら実地調査を実施 【4 団体／実地調査日】 ・神奈川県横須賀市／4 月 9 日 ・新潟県長岡市川口地域／5 月 21 日 ・滋賀県長浜市／5 月 25 日 ・奈良県高取町／5 月 24 日
STEP ③	モデル団体の選定 研究会においてモデル地方公共団体を決定	STEP①②を踏まえた検討結果を、研究会委員に報告した。了承を得てモデル地方公共団体を決定 【第 1 回研究会開催日】 ・5 月 26 日

選定にあたり、テーマと意欲を重視して、内閣官房と検討を行った。各団体は選定段階で次頁に記載するテーマと意欲を持っていた。

モデル地方公共団体の選定結果

地方公共団体	選定時点で想定したテーマ	当初時点での意欲	選定理由
神奈川県 横須賀市	仕事を退職したあとに地域で孤立する高齢者が増えており、町内会等のコミュニティにも参加していない、こうした高齢者を地縁やテーマ性を持つコミュニティに参加させ、居場所をつくる仕掛けの検討（健康×交流・居場所）	担当課長、担当職員は強い問題意識を持っており、課題解決に向けた意向あり	「高齢者の孤立」という多くの地域で見られるテーマを扱っており、担当課の意向も強い。
新潟県 長岡市 川口地域	いつでも戻ってくる事が出来るまち十分に活用されていない空き家の状況を地域で把握し、若者や子育て世帯等に提供する仕組みの構築（住まい×交流・居場所）	プレーヤーとなる住民・事業者の実施意向があり、市役所も意欲あり	地域に帰ってきたい人に向けて空き家があっせんし、居場所を提供するモデルとなる。
滋賀県 長浜市	時間的な制約やスキル等が課題となって「働きたいのに働く場がない」女性等が就労できる仕組みの構築（活躍・しごと×交流・居場所）	担当部長まで意向あり	子育てママ支援の新事業としてワークシェアリング事業を展開するモデルとなる。
奈良県 高取町	地域の困りごとや人手不足を、高齢者や農閑期の新規就農者等の活躍により解決する仕組みの構築（活躍・しごと×交流・居場所）	担当課の意向強く、新町長もゴーサイン	行政とシルバー人材センターが連携する形で新たに「しごとコンビニ®」の団体を立ち上げるモデルとなる。

3.2 モデル地方公共団体における実施計画策定への伴走支援

選定した4つのモデル地方公共団体において、「生涯活躍のまち」のコミュニティづくりのための実施計画策定に取り組んだ。それぞれのモデル地方公共団体で検討を行った内容等について、次頁以降で紹介する。

<伴走支援の内容>

本業務における伴走支援では、各モデル地方公共団体の状況や要望に応じて以下のような支援を行った。

- ・ 先行事例有識者の調整・手配
- ・ 年間スケジュール（案）の策定、全体コーディネート
- ・ 実地調査、定例協議のファシリテートと議論における課題やソリューションの深堀、論点整理
- ・ 各会議におけるまとめと次回に向けた TODO の整理
- ・ 実施計画策定サポート（様式の提示、モデル地方公共団体作成（案）のブラッシュアップ 等）
- ・ 過去のアンケート調査等のとりまとめ

3.2.1 神奈川県横須賀市（報告）

<人口規模>

388,078 人(対象とした鴨居地域は約 19,000 人)

<検討テーマ（検討開始時）> コミュニティセンターを軸とした、多様な主体が参加できるコミュニティの創出

都市部のベッドタウンにおいて、退職後の高齢者（特に男性）が社会で孤立しがちとなっている。

孤立を防ぐために、地縁のコミュニティに加えて、テーマ性をもつコミュニティを広めることで、高齢者の居場所や役割を見つける仕組みの構築を図る。

<検討主体>

生涯活躍のコミュニティづくり実施計画の検討にあたっては、地域福祉課が中心となり、調査・検討を実施した。また、地域のコミュニティセンター（以下横須賀市報告内、コミセン）として鴨居コミセンと浦賀コミセン、浦賀行政センターとも連携した。

<定例協議等の実施概要>

実地調査及び 7 回の定例協議を通じて、横須賀市で実施した調査結果や実施計画（案）等についての意見交換を行い、実施計画のとりまとめを行った。

会議体	日時	検討議題等
実地調査	令和 3 年 4 月 9 日	横須賀市の概要と「生涯活躍のまち」の取組の共有
第 1 回 定例協議	令和 3 年 5 月 17 日	課題に関わるデータ分析結果の報告
第 2 回 定例協議	令和 3 年 6 月 28 日	令和元年度、2 年度に市民を対象に実施した地域活動に関するアンケート調査結果の報告、今後自治会長等に対して実施するヒアリング調査設計
ヒアリング 調査	令和 3 年 7 月	地域の現状や資源を把握するため、関係者に対してヒアリング
第 3 回 定例協議	令和 3 年 8 月 3 日	ヒアリング調査結果の報告、今後、各コミセンに対して実施するヒアリング調査設計
ヒアリング 調査	令和 3 年 8～9 月	地域資源であるコミセンの利用状況など実態把握に向けたヒアリング

会議体	日時	検討議題等
アンケート調査	令和3年 7月15日～ 8月10日	地域交流 SNS を活用したアンケートで、市民の地域活動の状況や意向を調査
第4回 定例協議	令和3年 9月13日	アンケート、ヒアリング調査結果の報告、乳幼児期の子どもを育てる保護者の居場所づくりに関する調査結果報告
ヒアリング 調査	9～10月	コミセンの利用者、利用団体等へのヒアリングから、活用実態を調査
第5回 定例協議	令和3年 10月27日	アンケート、ヒアリング調査結果の報告
ヒアリング 調査	10～11月	子育て世代の居場所に対するニーズや要支援者および事業対象者の実態把握に向け関係者へヒアリング
第6回 定例協議	令和3年 11月25日	ヒアリング調査結果の報告 ※現地視察（鴨居コミセン等）と併せて実施
アンケート 調査	12月22日 ～23日	高齢者の特技と活躍可能性を調査するため、スマホ教室でアンケートを実施
第7回 定例協議	令和4年 1月26日	実施計画（案）の内容について

<検討プロセス（定例協議等の経緯）>

「横須賀市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」のとりまとめを行う上で経た、定例協議等の内容については次表記載のとおり。

定例協議	協議の内容等
<p>第1回定例協議 (5月17日)</p> <p>【データ分析】</p>	<p>市内における高齢男性の孤立という課題についてデータで分析するため、これまでに実施した次の調査結果等の内容を改めて整理した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市の人口推計 ・高齢化率の比較（対全国） ・転出超過率 ・市の人口移動状況 ・ひとり暮らし高齢者の増加率 ・地域活動に関する高齢者向けアンケート結果 ・市の日常生活圏域における人口・高齢化率 ・地域活動を実施・支援する会議体等の設置状況 <p>⇒これらをもとに、市内で高齢化率の特に高い浦賀地域、鴨居地域を対象に、高齢男性の孤立という課題への対応策を検討することとした。</p>
<p>第2回定例協議 (6月28日)</p> <p>【住民へのヒアリング調査設計】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・過去に実施した市内の地域活動に関するアンケート結果を精査したところ、自治会・町内会以外の地域活動に関しては、参加率が低いことが判明 ・なぜそのような結果となったかについて、サークルのような地域活動があることが広く周知されていないのでは、といった仮説を立てた上で、アンケートでは把握できない細かい地域住民の思いをくみ取るために、地域住民に対して、次の観点でヒアリング調査を実施するよう設計 <p><対象></p> <p>町内会・自治会長、民生委員等の地域活動のキーマン</p> <p><内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 担当する一人暮らし高齢者の人数と地域の活動への参加状況 ● 地域から孤立していると思われる方の有無 ● 高齢者が地域の活動に参加したきっかけ ● 地域でのつながり（仲間）の存在（良かったこと、課題） ● つながりがいない人のつながりがいない理由 <p style="text-align: right;">等</p>

定例協議	協議の内容等
<p>第3回定例協議 (8月3日)</p> <p>【ヒアリング結果等分析①】</p>	<p>第2回協議で構想したヒアリング調査を町内会・自治会長に対して実施したところ、次の結果となった。</p> <p><ヒアリング概要></p> <p>○対象：町内会・自治会長</p> <p>○内容：第1回定例会議のとおり</p> <p><ヒアリング結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活動については、町内会活動、各種サークル等が行われているが、参加者は女性が多く、新規参加者が少ない。 ・地域の子ども会が閉会傾向である。 ・男性は「ただ集まる」というより何か目的がある方がよいという印象がある。 ・目新しい活動の方が、参加してくれると思う。 ・子どもと一緒に参加する活動であれば、やる気が出るのではないかな。 <p>⇒今後は、地域の民生委員に対してヒアリングを実施するほか、地域のサークル活動の拠点となっているコミセンの利用状況や、コミセンで活動する地域住民に対して、サークルの立ち上げ経緯等を調査することに。</p>
<p>第4回定例協議 (9月13日)</p> <p>【ヒアリング結果等分析②】</p>	<p>新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令により、民生委員及びコミセンで活動する地域住民に対するヒアリングは断念。コミセンの利用状況等について調査した結果、次のことが分かった。</p> <p><ヒアリング概要></p> <p>○対象：鴨居コミセン、浦賀コミセン</p> <p>○内容：第1回定例会議のとおり</p> <p><ヒアリング結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・60～80代の高齢者の利用が多いが、平日の夕方以降や休日は若い世代の利用もある。 ・運動系、音楽系等幅広い種類のサークル活動が展開している。 ・既存のサークルへの参加はハードルが高い。 ・地域の人が興味のある内容の講座を行うと、サークル化する可能性がある。 <p>⇒コミセンは、サークル活動による交流・活躍の場となるだけでなく、多世代交流の場となる可能性があることがわかった。</p>

定例協議	協議の内容等
第4回定例協議 (9月13日) 【ヒアリング結果等分析②】	また、地域交流 SNS を活用し、地域活動に関するアンケートを実施したところ、趣味や好きなことに関する集まりへの参加意向が多く見られた。
第5回定例協議 (10月27日) 【ヒアリング結果等分析③】	緊急事態宣言下のため実施を控えていたコミセンで活動する地域住民に対するヒアリングを実施したところ、次のことが分かった。 <ヒアリング概要> ○対象：コミセン利用者 ○内容：地域資源の活用の実態やニーズの把握 ・ <ヒアリング結果> ・過去に経験があり、興味関心のあるサークル活動は参加しやすい。 ・参加者のレベルが同じのほうが参加しやすい（初心者向けの「はじめての〇〇サークル」等）
第6回定例協議 (11月25日) 【ヒアリング結果等分析④】	緊急事態宣言下のため実施を控えていた民生委員に対するヒアリングと、地域包括支援センターに対し、要支援者に関するヒアリングを実施したところ、次のことが分かった。 <ヒアリング①概要> ○対象：民生委員・児童委員、主任児童委員 ○内容：地域の特徴、高齢者や子どもに関わる地域活動について把握 <ヒアリング①結果> ・地域活動に参加するのは女性が多い。 ・男性は、明確な目的や役割がないと外には出ていかない傾向がある。 ・二人暮らしの高齢男性の方が、外に出ていかず認知症になりやすいという印象がある。 ・ 地域の子どもたちがふらっと寄れるような居場所や、子育てママが一息つける場所がほとんどない。(新たな課題の発見) ⇒これを受け、地域で子育て世帯向け交流カフェ「mam&kids salon「結—Yui—」」を展開する経営者にもヒアリングを実施。次の意見を得た。 ・子育て世帯が日頃の悩みや困りごとを相談できる場所としてカフェを作った。 ・定期的に利用をする人も出てきている。

定例協議	協議の内容等
第 6 回定例協議 (11 月 25 日) 【ヒアリング結果等分析④】	⇒ 当初の高齢男性の孤立という課題について、子育て世帯、子どもたちの居場所づくりの観点 が追加され、 多世代向けの事業構想へと発展 <ヒアリング②概要> ○対象：地域包括支援センター職員 ○内容：要支援者および事業対象者の方の相談理由と介護保険サービス外のニーズについて把握 <ヒアリング②結果> ・外出や機能改善への意欲が高いのは事業対象者および要支援 1 の方 ・まだまだ元気な方へデイサービスではなく、地域の楽しいサークル活動等、社会資源を紹介したいが社会資源の把握が困難 ・地域活動が参照できる一覧や、参加者を募る企画があると紹介できる。 ・介護予防サポーター、フレイルサポーター等、地域で活躍したいという方の活躍の場があるとよい。
第 7 回定例協議 (1 月 26 日) 【事業構想】	これまでの協議結果を踏まえ、鴨居地域を対象として、「世代を問わず誰もが役割と居場所のあるコミュニティづくり」の実現に向け、コミセンの機能を起点として、地域の誰もがサークル活動等によりコミュニティに参加できるよう支援するための方向性・スケジュールを定めた。

○定例協議等における工夫点

- ① 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で時間はかかったものの、住民や関係者等にヒアリングを行い、アンケートでは拾いきれない細かい思いを把握した。
- ② ヒアリングを通じて得た「市民の生の声」を他部署にも伝え、取組推進に向けた連携体制を築いた。

<検討結果の概要>

定例協議等を通じた検討の結果、**次の気づきがあり、高齢男性のコミュニティ参加に加え、コミセンを核とした、子育て世帯、子どもの居場所づくり等による多世代が交流、活躍できる仕組みづくりへと発展した。**

○新たな気付き

- ① 地域活動に関する詳細な実態の把握（例：地域活動の参加者は女性が多く、新規参加者が少ない。地域の子ども会が閉会傾向にある。）
- ② 既存施設の活用の実態把握（例：コミセンは60～80代の高齢者の利用が多い傾向にあるが、平日の夕方以降や休日は若い世代の利用もある。）
- ③ 実態把握に基づく、新たな課題の把握（例：地域の子どもや母親が気軽に立ち寄れる場所がほとんどない。）

今後の取組の方向性等

（※参考資料5「横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」を参照）

項目	内容
取組の方向性	横須賀市では、コミュニティに参加するきっかけをつかめない高齢男性や、気軽に立ち寄れる場所を求める子育て世代等、居場所・役割を見つけない人が、コミュニティに参加する道筋をサポートする体制を検討する。
スケジュール 今後の方向性等	<p>今回の取組を契機として、令和4年度以降、「交流・居場所」「活躍・しごと」「健康を維持する」の要素を含む、鴨居コミセンを核とした全世代・全員活躍型の「生涯活躍のまち」づくりの検討を開始する。令和5年度以降、他地区を含む横須賀市全体での「生涯活躍のまち」づくりの検討を開始する。</p> <p><令和4年度の実施予定内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域への報告と意見収集（課題の共有や意見の把握等）を進める。 ・情報収集・把握として、参加者の募集やイベントに関与する意向のある人を把握する。 ・実際のイベントや相談会の開催を実施し、相談と活動紹介、市民の興味関心の把握を行う。 ・最終的にサークル等の活動への参加や新たなサークルの創出に向けた支援を行う。

3.2.2 新潟県長岡市川口地域（報告）

<人口規模>

4,087 人(長岡市全体は 266,936 人)

<検討テーマ（検討開始時）>「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現

長岡市の社会移動をみると、依然 10 歳代後半から 20 歳代のマイナスが続いている。一方、30 歳代以降では転入と転出がバランスするものの、川口地域等支所地域では、「戻ってきた地元出身者」を十分に受止めることが出来ていない状況にある。具体的には、地域に空き家や求人等があるものの、それが可視化されておらず、U ターン希望者に十分に届いていない。

こうしたことを踏まえ、「住まい」や「仕事」を中心とした「生涯活躍のまち」づくりに資する情報を提供する仕組みの構築を目指すこととした。

<検討主体>

生涯活躍のコミュニティづくり実施計画の検討にあたっては、これまで若者が中心となった地域づくりを検討してきた経緯から、地元の若手の地域まちづくり団体「川口エンジン」(※)と長岡市とが連携した検討体「いつでも戻って来ることの出来るまち長岡・川口 検討 WG」を設置した。

なお検討メンバーは下記のとおり。

- ・長岡市 地域振興戦略部
- ・長岡市役所川口支所
- ・地域まちづくり団体「川口エンジン」

※ 地域まちづくり団体「川口エンジン」の概要

川口地域の活性化を目的に、川口商工会青年部メンバーを中心として平成 30 年度に結成されたまちづくり団体。代表は、地元建設会社の代表取締役。

地域体験型ツーリズム事業など、長岡市と連携した活性化事業を継続的に実施していることから、「生涯活躍のまち」づくりを支える住民側の主体として、検討 WG に参加した。

<定例協議等の実施概要>

「いつでも戻って来ることの出来るまち長岡・川口 検討 WG」では計 6 回の討議を行い、実施計画(案)等についての意見交換を行い、実施計画のとりまとめを行った。

会議体	日時	検討議題等
第 1 回	令和 3 年 7 月 29 日	先進事例① 低未利用の土地・建物を活用する手法を学ぶ 先進事例② 仕事をみんなで分かち合う手法を学ぶ

会議体	日時	検討議題等
第2回	令和3年 8月26日	川口地域の概況について シルバー人材に関する動向
第3回	令和3年 10月6日	「かわぐち人材センター（仮）」の構想について 空きスペースの利活用について（現地情報の共有）
実地 調査	令和3年 10月20日	空きスペース等の現地確認等
第4回	令和3年 11月11日	計画（案）の方向について
実地 調査	令和3年 12月8日	空きスペース等の現地確認等
第5回	令和3年 12月27日	実施計画（案）骨子について 空きスペースの利活用について（現地情報の共有）
第6回	令和4年 2月25日	実施計画（案）について 空きスペースの利活用について
実地 調査	令和4年 3月8日	JR 東日本 越後川口駅、駅舎等空きスペースの見学

<検討プロセス（定例協議の経緯）>

「長岡市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」のとりまとめを行う上で経た、全6回の定例協議の内容等については次の表記載のとおり。経過を通じて特にポイントとなった内容を以下に記載する。

定例協議	協議の内容等
<p>第1回検討WG (7月29日)</p> <p>【先進事例調査】</p>	<p>「住まい」や「仕事」を中心とした情報の収集・提供等を地域で実施することを目指し、先行的な事例を調査すべく、有識者からのレクチャーを実施した。</p> <p>先進事例① 低未利用の土地・建物を活用する手法を学ぶ 有識者：一般社団法人シェアリングエコノミー協会 ・シェアリングエコノミーの仕組み ・スペースシェアの事例</p> <p>先進事例② 仕事をみんなで分かち合う手法を学ぶ 有識者：一般社団法人 つながる地域づくり研究所 ・「しごとコンビニ®」の取組み内容や事業モデル</p> <p>⇒川口地域においても、空間活用や仕事情報等について、同様の趣旨の取組みのニーズやシーズがあるか、調査することとした。</p>
<p>第2回検討WG (8月26日)</p> <p>【地域課題や地域資源の把握】</p>	<p>川口地域の現況に関わる既存調査の整理を行うとともに、長岡市役所川口支所より仕事情報に関わる取組について情報提供を実施した。</p> <p>議題① 川口地域の概況について ・川口地域の人口動向の把握（人口減少、高齢化の進展、将来人口の推計結果等） ・地域住民の仕事等に関わるアンケート結果（良い仕事があれば地元で働きたい人が多い等）</p> <p>議題② シルバー人材に関する動向等 ・長岡市シルバー人材センターの運営体制の紹介 ・シルバー人材の働きかたの特徴 ・川口地域におけるシルバー以外の働き手の状況 ・川口地域における空スペースの調査について</p> <p>⇒「シルバーのような仕組みが現役世代にもあれば、労働力を得られる。少しだけ働き</p>

定例協議	協議の内容等
<p>第2回検討WG (8月26日)</p> <p>【地域課題や地域資源の把握】</p>	<p>たい、といったニーズもある。」といった認識のもと、人材に関わる検討を継続することとした。また、地域まちづくり団体「川口エンジン」主体で、地域の空きスペースについて実地調査を行うこととした。</p>
<p>第3回検討WG (10月6日)</p> <p>【事業構想①】</p>	<p>川口地域の現況に関わる既存調査の整理を行うとともに、長岡市役所川口支所より仕事情報に関わる取組について情報提供を実施した。</p> <p>議題① かわぐち人材センター構想について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シルバーに加えて、若者、現役世代、関係人口への仕事の手配もできるような形を構想していくことが必要 ・それを実現するためには、シルバー人材センターと地域側との連携が重要 <p>議題② 空きスペースの利活用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域まちづくり団体「川口エンジン」から、川口地域の具体的な空き家を紹介 ・家は空いているが人には貸したくないという人が多い。居住を目的とした単純な畳の部屋なので、スペースのシェアリングは難しいのではないか。 <p>⇒人材センターについては、有望な事業であると捉え、実施計画（案）に反映することとした。空きスペースについては、地域まちづくり団体「川口エンジン」による調査を続行することとした。また、WGメンバーで適宜現地確認等を実施することとした。</p>
<p>第4回検討WG (11月11日)</p> <p>【事業構想②】</p>	<p>人材、空きスペース活用等の事業を継続的に実施するための仕組みとして、「ラボ」の可能を検討した。また、地域まちづくり団体「川口エンジン」からは、空きスペースの調査状況について報告があった。</p> <p>具体的には次のような意見が交わされた。</p> <p><「ラボ」全般></p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでWGで議論してきた人材活用や空きスペースの話継続し、事業など具体的な形にできるよう取り組んでいくための仕掛けとして、ラボの設置等を検討してはどうか。 ・コミュニティセンター協議会が川口地域で立ち上がった。今後はこれとの連携についても念頭に取組むと良いと思う。 ・大筋の方向は非常に良いと感じた。コミュニティセンターとラボの仕掛けの違いを明確化してほしい。

定例協議	協議の内容等
<p>第4回検討WG (11月11日)</p> <p>【事業構想②】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度からテストをすること自体は良いと思う。ディスカッションがこれまで続いてきたので、大まかな方向性を決め、組織を作って試行錯誤をするフェーズに入るのが妥当だと思う。 <p><空きスペース利活用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元ならではの情報力で把握した空き家について家主の意向に応じているような展開ができると良い。例えば販売の希望があれば空き家バンクにつなげ、貸したいのであれば地域まちづくり団体「川口エンジン」が仲介するようなイメージもある。つなぎ方の方向性もラボの中で検討したい。 ・今後、県営住宅の利活用方法が変化する可能性もある。また、JR東日本越後川口駅の駅舎内や関連施設に空きスペースがあるとの情報もあり、将来的にはこのような物件を活用していく可能性もあるのではないか。 ・川口地域には不動産業者がいないという状況下で、仲介してくれる人は川口地域をよく知った人である方が貸す側、借りる側も安心できるという考えに共感した。 <p>⇒「ラボの具体的なゴール」等を明確化することが必要との認識から、引き続きその内容の具体化を図ることとした。</p>
<p>第5回定例協議 (12月27日)</p> <p>【実施計画の策定①】</p>	<p>これまでの議論を踏まえ、実施計画に「ラボ」を位置付けることを前提に、その内容と運営・推進体制等について議論を行った。</p> <p>具体的には次のよう意見が交わされた。</p> <p><「ラボ」全般></p> <ul style="list-style-type: none"> ・補助金等の受け皿となることを見据え、行政も参画した地域協議会を組織する。スピーディーに進めるために、基本は地域のNPO等が中心になるイメージであり、具体的な主体としては地域まちづくり団体「川口エンジン」を想定している。 ・鉄道会社や金融機関、地元新聞社等の参加も集ってはどうか。 ・飯山線沿線の地域対地域の交流事業や被災地間の交流等もできるのではないか。 ・建設・土建業の参加も検討した方が良い。 ・関係のある地方公共団体を首都圏の拠点づくりに巻き込む考え方があると思う。 <p>⇒議論の内容を踏まえ、ラボの内容を再度検討することとした。また計画については、ラボを軸に人材、空きスペースの利活用を含めた内容とする事とした。</p>

定例協議	協議の内容等
第6回定例協議 (2月25日) 【実施計画の策定 ②】	実施計画(案)について議論を行った。 ・川口地域では「住民主体・公サポート型」の公民連携まちづくりを引き続き推進することとし、地域まちづくり団体「川口エンジン」が発意する課題解決型の取組を、川口支所、地域振興戦略部が連携して、情報面等でサポートする方向とした。 ・「住民主体・公サポート型」のまちづくりを担う地域まちづくり団体「川口エンジン」では、①越後かわぐち関係人口共創ラボ(仮)の運営、②空き家・空きスペース活用事業、③仕事と人材マッチング事業の3事業を通じて、令和4年度以降自主財源の確保等を図り、持続可能な地域活性化活動の推進体制を構築することとし、計画書にとりまとめた。

○定例協議等における工夫点

- ① 地域ぐるみの取組を進めるため、地域まちづくり団体「川口エンジン」がWGに参加し、議論を主導した。
- ② 具体的なアイデア等を得るため、有識者からの先行事例に関するレクチャーを行った。
- ③ 地域まちづくり団体「川口エンジン」が空きスペースに係る実地調査を行う等、地域の実態に基づいた議論を重視した。

<検討結果の概要>

「住まい」や「仕事」を中心とした「生涯活躍のまち」づくりに資する情報を提供する仕組みを定例協議等において検討した結果、住民組織である地域のまちづくり団体が動くことによって、自治体の窓口などで把握することが容易ではない各種情報（空きスペース、仕事、人材等）が把握できることが確認された。「住民主体・公サポート型」のまちづくり活動により、自治体の取組の一部を地元住民が補完する可能性が見出された（例：空き家バンクやシルバー人材求人等の情報の充実）。

また検討を進めていく過程で、情報提供等の地域活性化に資する活動を定常的に進める仕組みづくりが必要との観点から、越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）のあり方についても検討が進められ、その結果が「長岡市（川口地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」にも反映された。

○新たな気付き

- ① 地域まちづくり団体「川口エンジン」の現地調査（空きスペース等）により、地方公共団体だけでは把握できないきめ細かな情報の収集が可能となるなど、「住民主体・公サポート型」のまちづくりならではの可能性が示された。
- ② 人材や空きスペースの活用といった具体的なテーマの検討を進めるに従い、持続的なまちづくりを支える推進体制の必要性が WG メンバー間で共有され、「越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営」の計画へとつながった。

今後の取組の方向性等

（※参考資料 6「長岡市（川口地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」を参照）

項目	内容
取組の方向性	<p>長岡市川口地域では「住民主体・公サポート型」の公民連携まちづくりを引き続き推進する。地域まちづくり団体「川口エンジン」が発意する課題解決型の取組を、長岡市役所川口支所、地域振興戦略部が連携して、情報面等でサポートする体制を検討する。</p> <p>生涯活躍のコミュニティづくりを担う地域まちづくり団体「川口エンジン」では、下記の 3 事業を通じて、R4 年度以降自主財源の確保等を図り、持続可能な地域活性化活動の推進体制を構築する。</p> <p>A) 地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営） B) 空き家・空きスペース活用事業 C) 仕事と人材マッチング事業</p>

項目	内容
スケジュール 今後の方向性等	<p><令和 4 年度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・テスト事業の実施（A.地域活性化事業、B.空き家・空きスペース活用事業、C.仕事と人材マッチング事業） ・補助事業等への参画 ・「生涯活躍のまち」づくりメニューの詳細検討 <p><令和 5 年度></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域まちづくり団体「川口エンジン」の本格運用開始 ・地域再生計画の検討

3.2.3 滋賀県長浜市（報告）

<人口規模>

113,636 人

<検討テーマ（検討開始時）>「働きたいのに働く場がない」女性等への仕事の提供を核として、事業者や市民の交流を生み出す仕組みのあるまちづくり

長浜市では、時間的な制約やスキル等が課題となり「働きたいのに働く場がない」という状況にある女性がいる一方、市内の事業者は人で不足等の課題を抱えている。

市内には子育て支援に取り組む団体である「合同会社 LOCO（以下、LOCO）」が、多様な女性等の個別の状況を把握しており、支援の意向を持っている。LOCO と長浜市が連携し、地元企業と女性等をつなぎ、仕事づくりを推進する仕組みづくりを検討することとした。

<検討体制>

長浜市の企画調整を担当する政策デザイン課が中心となり、「仕事・活躍」をテーマに業務を行う人権施策推進課（女性活躍関連事業を所管）、商工振興課（働く女性応援関連事業を所管）、市民活躍課（地域における活躍関連事業を所管）が連携し検討を実施した。移住や「ふるさと寄附」の活用に関連する内容の検討にはふるさと移住交流室も連携した。庁外の団体とも連携して仕組みを検討しており、LOCO やえきまち長浜株式会社（地域の交流・居場所づくりを推進）、長浜デザイン戦略室（クリエイションセンターの運営、関係人口・移住者との連携）との意見交換を行った。

<実地調査と定例協議>

実地調査及び 5 回の定例協議を通じて、長浜市で実施した調査結果や実施計画（案）等についての意見交換を行い、実施計画のとりまとめを行った。

会議体	日時	検討議題等
実地調査 第 1 回 定例協議	令和 3 年 5 月 25 日	長浜市の概要と「生涯活躍のまち」に資する既存の取組の共有
第 2 回 定例協議	令和 3 年 6 月 29 日	昨年度実施の関連ヒアリング調査の結果報告、今後の方向性 検討
第 3 回 定例協議	令和 3 年 7 月 16 日	関係者が一堂に会した意見交換会

会議体	日時	検討議題等
第4回 定例協議	令和3年 9月22日	意見交換会の結果報告
第5回 定例協議	令和3年 12月8日	実施計画（案）の骨子について
第6回 定例協議	令和4年 2月9日	実施計画（案）の内容について

<検討プロセス（定例協議の経緯）>

「長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」のとりまとめを行う上で経た、定例協議等の内容等については次の表記載のとおり。

定例協議	協議の内容等
<p>第1回定例協議 (5月25日)</p> <p>【課題や地域資源等の把握】</p>	<p>○長浜市における人口・少子高齢化の現状・課題について、次のデータを用いて確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人口の推移 ・人口動態（自然動態、社会動態） ・世代別・男女別人口減少数 <p>○事業構想の土台となる地域資源について議論するため、次の計画等を踏まえながら、市のビジョンと女性等への就労支援の実施状況、「生涯活躍のまち」づくりの拠点として活用が想定される拠点について議論した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長浜市総合計画 ・第2期長浜市まち・ひと・しごと創生総合戦略 ・女性等の就労支援事業の実施状況 <p>→女性のビジネスマッチング支援等を実施する LOCO を核とした「生涯活躍のまち」づくりができないか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・再開発した拠点の活用状況 <p>→JR 長浜駅周辺に所在する拠点「えきまちテラス長浜」について、「生涯活躍のまち」づくりの拠点として活用できるのではないか。</p> <p>⇒LOCO が実施する「働きたいのに働く場がない」女性等への仕事の提供を核として、事業者や市民の交流を生み出す仕組みの構築に向けた検討を進めることとした。</p>
<p>第2回定例協議 (6月29日)</p> <p>【事業構想④】</p>	<p>女性等への仕事の提供を核とした、事業者や市民の交流を生み出す仕組みを構築する上では、市が既に取り組んでいるサテライトオフィス関連事業、「長浜ワークロケーション事業」と連携し、仕事をキーワードに人の流れづくりに取り組み、人と地域をつなげることが有効と考え、その内容等について確認した。</p> <p>○サテライトオフィス関連事業</p> <p>令和2年度に実施したニーズ調査では、関西圏の事業者から利用を希望する声が寄せられており、市ではサテライトオフィスへの企業誘致を推進予定</p> <p>○「長浜ワークロケーション事業」</p>

定例協議	協議の内容等
第2回定例協議 (6月29日) 【事業構想①】	市内企業とリモートワーカーのマッチングを行うための事業で、令和3年度に実装予定 ⇒こうした事業間連携を実現するには、LOCOのほか、市の人権施策推進課、商工振興課等との連携が不可欠であるため、連携体制構築に向けた働きかけを行うこととした。
第3回定例協議 (7月16日) 【庁内横断・官民連携体制の構築】	市役所のメンバーに加え、実施主体・連携先となりうる民間の団体等の思いを、関係部署が一堂に会し議論する機会を設け、「民間主体／地方公共団体サポート型」という、長浜市らしい官民連携での推進の基盤を作った。これにより、 それぞれ共通して認識していた「仕事」に関する課題を中心に取組や現状等を共有し、共に目指す大きな方向性や連携の可能性を探った。 参加者は下記のとおり。 <長浜市> ・長浜市総務部政策デザイン課（担当部署） ・ふるさと移住交流室 ・長浜市人権施策推進課 ・長浜市商工振興課 ・長浜デザイン戦略室 <民間事業者> ・LOCO ・えきまち株式会社（「えきまちテラス長浜」運営） ⇒意見交換で検討した目指す方向性を踏まえ、具体的な取組の検討を進めることとした。
第4回定例協議 (9月22日) 【事業構想②】	官民連携の意見交換を経て、「女性の活躍・しごとの応援」と「サテライトオフィス・リモートワークを通じての都市部と地域の交流」という2つの柱で取組を整理した。 ○女性の活躍・仕事の応援 ・女性の参画についての意識変革「ステップゼロ」の取組 ・女性の非正規労働者が多いことの要因分析と対策 ・企業に対する啓発 ○サテライトオフィス・リモートワークを通じた都市部と地域の交流 ・長浜市らしい魅力の発掘を通じた、都市部のリモートワーカーと地域・市民との交流

定例協議	協議の内容等
第4回定例協議 (9月22日) 【事業構想②】	の推進 ・リモートワーカー（副業人材）と市内企業の連携の促進 ・事業の自立化に向けた検討 ⇒これまで整理・検討してきた内容を踏まえ、「生涯活躍のまち」の実施計画骨子をまとめることとした。
第5回定例協議 (12月8日) 【実施計画の策定①】	「女性の活躍・しごとの応援」と「サテライトオフィス・リモートワークを通じた都市部と地域の交流」という2つの柱を実施するために、 既存の事業との連携 等を通じて「地域共創型ふるさと寄附」を活用する実施計画（案）の骨子を作成した。主な内容は次のとおり。 ・LOCOと連携し、短時間就労が可能となる仕組みづくり ・地元企業とリモートワーカーがつながる仕組みづくり ・女性・企業・リモートワーカーをつなぐ仕事づくり ⇒この内容をフラッシュアップし、「生涯活躍のまち」の実施計画（案）としてまとめることとした。
第6回定例協議 (2月9日) 【実施計画の策定②】	骨子で示された方向性を踏まえ、次のとおり、具体的な取組の方向性について示す実施計画を策定した。 ・LOCOと連携し、地域の女性が短時間でも就労でき、地域の仕事を地域で回すことが可能となる仕組みづくりに取り組む。 ・地元企業とリモートワーカーがつながる仕組み「長浜ワークロケーション事業」に取り組み、地元企業のやりたいことや課題と、自身のスキルや経験を活かして関わるワーカーのマッチングを図る。 ・女性・企業・リモートワーカーをつなぐ仕事づくりを推進するため、ふるさと寄附の運営を外部委託等ではなく地域で行う体制を整備し、「安定した仕事づくり」と「魅力ある返礼品の開発」を実現する「地域共創型ふるさと寄附」に取り組む。

○定例協議等における工夫点

- ① 庁外の関係者と市役所のメンバーが一堂に会して意見交換を行う場を設けることで、前向きな意見が出るといった好循環が生まれた。

- ② LOCOのように、自分自身が汗をかいて頑張っている人の声を庁内の連携先の部署等に届けることで、協力を得やすくなった。

<検討結果の概要>

定例協議等を通じた検討の結果、次の気づきがあり、「働きたいのに働く場がない」女性等への仕事の提供を核として、事業者や市民の交流を生み出すことにより、地域の女性が短時間でも就労できる地域内循環の仕組みづくりが具体化されただけでなく、地元企業とリモートワーカーがつながる仕組みづくりが具体化されたことで、事業内容が発展した。

新たな気づき：

- ① 「生涯活躍のまち」というキーワードで事業を検討することで、一貫して見ることができ、すき間や連携の可能性等にも気付くことができた。
- ② 旧来の政策の枠組みを超え、庁内外の課題に目を向けることで、女性と移住者という人材の掛け合わせなど、新たな交流や気づきが生まれるきっかけになった。

今後の取組の方向性等

(※参考資料 7「長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」を参照)

項目	内容
取組の方向性	<ul style="list-style-type: none"> ・LOCO と連携し、地域の女性が短時間でも就労できる地域内循環の仕組みづくりに取り組む。また、地元企業とリモートワーカーがつながる仕組みとして「長浜ワークロケーション事業」に取り組み、地元企業のニーズとリモートワーカーのマッチングを図る。 ・女性、企業、リモートワーカーをつなぐ仕組みを作るために、地域でふるさと寄附の運営を行う。
スケジュール 今後の方向性等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の取組を契機として、令和 4 年度以降、「交流・居場所」「都市部との人材循環」の要素を含む、長浜市全体での「生涯活躍のまち」づくりの検討を開始する。 ・その際には、地方共創型ふるさと寄附の仕組み活用を試行し、計画内容の実現に向けて推進する。また、長期的には他の要素も含めた「生涯活躍のまち」の実現を目指し検討を進める。 <p><令和 4 年度の実施予定内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域共創型ふるさと寄附の仕組みを活用した時短勤務の試行 ・「長浜ワークロケーション事業」のロールモデルの拡大とニーズのマッチング

3.2.4 奈良県高取町（報告）

<人口規模>

6,729人

<検討テーマ（検討開始時）> 高齢者や子育て中の女性、介護をしている人等が活躍でき、全ての人の望む生き方を実現するまちづくり

高取町内ではこれまで担い手となってきたシルバー人材センターのメンバー減少、高齢化、固定化等の影響により、事業者や地域・地区の人手不足や担い手不足が課題であった。

一方で、高齢者や子育て中の女性、農閑期の新規就農者等、働きたいけど働けない町民がいることが分かってきており、これらの主体を結びつける「しごとコンビニ^①」の仕組みを導入することで、人手不足と働きたいニーズ双方の課題解決を図ることができるのではないかと考えた。

そこで、本業務においては町内の事業者や町民に対するヒアリング調査等を通じて、高取町の住民等のニーズを確認し、住民等にとって真に必要な「しごとコンビニ^①」の仕組みを構築するべく検討を進めることとした。

<検討体制>

高取町総合政策課が中心となり、調査・検討を実施した。その際、庁内及び庁外と連携しながら調査・検討を進めた。

庁内体制については、調整会議（町長・副町長・教育長・課長級が出席）の場で検討内容や進捗状況を説明することにより、庁内周知・連携を図った上で、各課へヒアリングを行った。

庁外との連携については、シルバー人材センター及び社会福祉協議会や商工会と連携して検討を行った。

<実地調査と定例協議>

実地調査や定例協議等を通じて、高取町で実施した調査結果や実施計画（案）等についての意見交換を行い、実施計画のとりまとめを行った。

^① 「しごと」を通じて多様な人が望む生き方を実現する」を理念に、地域の働く人と仕事を発掘してつなぐ、業務委託型の短時間ワークシェアリングの仕組み。

<https://shigoto-conveni.jp/>

会議体	日時	検討議題等
実地調査 第1回 定例協議	令和3年 5月24日	高取町の概要と「生涯活躍のまち」に資する既存の取組の共有
第2回 定例協議	令和3年 6月29日	コミュニティモデルの事例紹介：「しごとコンビニ®」 今年度の調査設計（ヒアリング等）について
ヒアリング調査	令和3年 7月	町民の感じている課題やニーズをヒアリング
第3回 定例協議	令和3年 7月26日	調査内容についての進捗報告
ヒアリング調査	令和3年 8～9月	地域の事業者が感じている課題やニーズをヒアリング
第4回 定例協議	令和3年 9月27日	調査結果についての報告
第5回 定例協議	令和3年 12月16日	実施計画（案）の骨子について ※現地視察と併せて実施
第6回 定例協議	令和4年 2月7日	実施計画（案）の内容について

<検討プロセス（定例協議の経緯）>

「高取町市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」のとりまとめを行う上で経た、全6回の定例協議の内容等については次の表記載のとおり。

定例協議	協議の内容等
<p>第1回定例協議 (5月24日)</p> <p>【現状分析、地域課題の把握】</p>	<p>高取町の現状・課題について、次の項目に沿って確認した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化の状況 ・交流拠点の整備・利用状況 ・地域住民の健康事業（体操教室）の実施状況 ・空き家の実態 ・新規就農者の農閑期における仕事のニーズ <p>⇒特に、新規就農者から寄せられた農閑期における仕事のニーズに対応するために、地域の困りごとを手伝う取組が必要と考え、「しごとコンビニ®」のアイデアを活用しながら、その具体的な内容を検討することとした。</p>
<p>第2回定例協議 (6月29日)</p> <p>【先進事例調査・調査設計】</p>	<p>○高取町で地域の困りごとを手伝う取組を具体化するために、「しごとコンビニ®」の制度概要や先進事例について共有した。</p> <p>○地域で困りごとを手伝う取組を検討する上では、町民や事業者の具体的なニーズ把握が鍵となるため、以下の内容で調査を実施することとした。</p> <p><調査対象></p> <ul style="list-style-type: none"> ・町内の事業者 <ul style="list-style-type: none"> →経済センサスを基に選定した先 (町内産業の特徴に鑑み、製薬、医療・福祉、農業は重視する) ・町民 <ul style="list-style-type: none"> →新規就農者にはヒアリング済み。子育て中の女性と高齢者が対象 <p><調査方法></p> <ul style="list-style-type: none"> ・アンケートとヒアリングの併用 <p><調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・町内の事業者 <ul style="list-style-type: none"> →事業内容、課題、繁忙期の状況、出したい業務等のニーズ ・町民 <ul style="list-style-type: none"> →働き方、場所、時間、時間帯、内容、収入等の希望

定例協議	協議の内容等
<p>第2回定例協議 (6月29日)</p> <p>【先進事例調査・ 調査設計】</p>	<p><調査実施体制></p> <ul style="list-style-type: none"> ・庁内連携や、シルバー人材センター及び社会福祉協議会との連携 <p>⇒調査設計に基づき、実際にヒアリングやアンケートを進めることとなった。</p>
<p>第3回定例協議 (7月26日)</p> <p>【ヒアリング結果等 分析①】</p>	<p>高取町より関係者に町民への調査結果が報告された。結果から、以下のニーズが明らかになった。</p> <p><ヒアリング概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ○対象：町民 ○内容：第2回定例会議のとおり <p><ヒアリング結果></p> <p>【町民の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの事情で、働くことの出来る時間が限られている。 ・町外で仕事をしてみたいので、町内につながりを持ちたい。 ・お金だけでなく、人の役に立ちたい、つながりが欲しい、気分転換したい、といったニーズがある。 ・パソコンを使う仕事をしたいが、町内にはない。 ・デザインや広報の仕事をしてみたいが、町内にはない。 <p>【地域の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢になって身の回りのことが出来なくなっている人が増えている。 ・田んぼや水路の維持管理をする人が高齢化、不足して来ている。 <p>⇒次回に向け町民が希望する仕事も踏まえながら事業者の調査を行うとともに、調査結果を踏まえた地域の課題解決につなげる仕組みを検討していくこととした。</p>
<p>第4回定例協議 (9月27日)</p> <p>【ヒアリング結果等 分析②】</p>	<p>高取町より関係者に事業者への調査結果が報告された。結果から、以下のニーズが明らかになった。</p> <p><ヒアリング概要></p> <ul style="list-style-type: none"> ○対象：町内の事業者 ○内容：第2回定例会議のとおり

定例協議	協議の内容等
<p>第4回定例協議 (9月27日)</p> <p>【ヒアリング結果等分析②】</p>	<p><ヒアリング結果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業者に対する調査から、人手不足の状況や、それに伴う事業への影響（事業拡大ができない、事業承継ができない）等の課題がある。 ・9割の事業者が、仕事を出したい（ニーズあり）と回答し、18事業者から、幅広い内容の71案件が挙げられた。 ・一方で、シルバー人材センターや社会福祉協議会には、担い手不足等の課題があり、連携することで、より進展した形で地域の課題解決につながると考えられる。 <p>⇒これらの調査結果を踏まえ、実施計画（案）の骨子を策定することとした</p>
<p>第5回定例協議 (12月16日)</p> <p>【事業構想】</p>	<p>調査結果を踏まえ、次の内容を含む実施計画（案）の骨子について関係者間で意見交換を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○町民、町内の事業者双方の仕事に関するニーズをマッチングさせるため、「しごとコンビニ®」に取り組むこと。 ○仕事を通じたコミュニティづくりという面からも取組を進め、既存のコミュニティに参加していない町民のフォローにもつなげることもまた、ヒアリングを通じて、子育て世帯が仕事だけでなく交流の場を求めていることがわかったため、遊休施設等を活用し、拠点を開設し、「交流・居場所」機能を、さらに促進すること。 ○これらをPRに用いて都市部との人の流れづくりに取り組むこと。 <p>⇒実施計画骨子と関係者から得た意見を踏まえ、次年度以降の方向性やスケジュール、今後の「生涯活躍のまち」づくりに向けた考え方をまとめ、実施計画の策定を進めることとなった。</p>
<p>第6回定例協議 (2月7日)</p> <p>【実施計画策定】</p>	<p>骨子で示された方向性を踏まえ、次のとおり、具体的な取組の方向性について示す実施計画を策定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決の仕組みとして、「しごとコンビニ®」に取り組む。 ・シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携し、高取町らしい仕組みを構築する。 ・「活躍・しごと」を通じたコミュニティづくりという面からも取組を進め、既存のコミュニティに参加していない町民のフォローにもつなげる。

定例協議	協議の内容等
第6回定例協議 (2月7日)	・合わせて、「しごとコンビニ®」を実施するに当たっては、リアルで集い、仕事をしたり、学んだり、交流したりできる拠点が有効であるため、その開設を検討し、「交流・居場所」機能を、さらに促進する。
【実施計画策定】	・「しごとコンビニ®」推進の財源確保のため、企業版ふるさと納税を募集・活用し、また、都市部の企業人材と協働して、「都市部との人材循環」の下で事業を進める。

○定例協議等における工夫点

- ・ 町民が町内で働ける仕組みとして、55歳以下も業務を受けられるシルバー人材センターのような取組を検討したが、派遣業法に関わる内容で資格の取得が必要になることから、役所では対応できないという課題があった。このため、構想段階から、本年度に業務委託方式を活用したアイデアを用いて事業を実現するまで約4年間かかったが、この間に、庁内の他部署に対してアイデアを積極的に共有し、連携しやすい体制づくりを行っており、それを活用して、庁内連携の強化を図った。

<検討結果の概要>

定例協議等を通じた検討の結果、下に記した新たな気づきを得て、「しごとコンビニ®」の導入と合わせてコミュニティづくりという面からも取組を進め、既存のコミュニティに参加していない町民のフォローにもつなげるよう、事業内容が発展した。これにより、コミュニティの活性化に活用するために集まって仕事や交流ができる拠点整備も進めることとなった。

新たな気づき：

- ① 子育て中の女性や高齢者のニーズ調査を通じて、仕事によってお金だけでなくつながりや気分転換なども求める意向があることを新たに把握した。
- ② 「しごとコンビニ®」の実施にあたり、リアルで集うための拠点の開設の検討も進んだことから「生涯活躍のまち」の要素のうち「活躍・しごと」だけでなく、「交流・居場所」についても機能を補完・強化する事業に発展することができた。

今後の取組の方向性等

(※参考資料8「高取町生涯活躍のコミュニティづくり実施計画」を参照)

項目	内容
取組の方向性	課題解決の仕組みとして、「しごとコンビニ®」に取り組み、シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携し、高取町らしい仕組みを構築することを目指す。 「活躍・しごと」を通じたコミュニティづくりという面からも取組を進め、既存のコミ

項目	内容
取組の方向性	<p>コミュニティに参加していない町民のフォローにもつなげる。</p> <p>これに合わせて、「しごとコンビニ®」を実施するに当たっては、リアルな場で集い、仕事をしたり、学んだり、交流したりできる拠点が有効であるため、その開設を検討し、「交流・居場所」機能を、さらに促進する。</p> <p>「しごとコンビニ®」推進の財源確保のため、企業版ふるさと納税を募集・活用し、また、都市部の企業人材と協働して、「都市部との人材循環」の下で事業を進めていく。</p>
スケジュール 今後の方向性等	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の取組を契機として、令和4年度以降、「住まい」「健康」の要素を含む、高取町全体での「生涯活躍のまち」づくりの検討を開始する。 ・その際には、地方創生推進交付金や地方創生拠点整備交付金等の活用も視野に入れ、計画内容の実現に向けて推進する。 ・こうした取組を通して、女性や高齢者等が活躍でき、全ての人の望む生き方を実現するまちづくりを進め、広く発信することで、高取町のファンを増やし、転出の抑制や転入の増加につなげる。 <p><令和4年度の実施予定内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業者及び町民向けの説明会や広報、訪問活動等により、仕事及び登録者を集めて、「しごとコンビニ®」事業を開始 ・コミュニティのコーディネートについては、役場担当者がその役割を担いながら、人員配置についても検討を進める。 ・公共施設の空きスペースを活用して事業を開始し、実施する中で、課題や利用者等の要望を踏まえ、遊休施設の活用も念頭に置きながら、拠点についての検討を行う。 ・地方創生推進交付金等の活用（令和5年度以降）についても検討 ・企業版ふるさと納税の募集や、都市部の企業人材との連携を、継続して進める。

第4部 令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウム

4.1 シンポジウムの開催概要

本調査研究で「生涯活躍のまち」づくりに取り組んだ4つのモデル地方公共団体の取組結果や「積み木アプローチ」の内容を共有することを通じ、「生涯活躍のまち」の取組を広く周知等することを目的として、下記のとおりシンポジウムを開催した。

令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウム

日時：令和4年3月11日（金）15:00～17:00

形式：Zoom ウェビナー（オンライン）

主催：内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局

事務局：株式会社 NTT データ経営研究所

参加者数（事前申込者）：81名（地方公共団体職員が中心）

プログラム：

時間	プログラム等	登壇者
15:00-15:05 (5分)	開会	内閣官房
15:05-15:10 (5分)	趣旨説明（シンポジウムの趣旨や進行について）	株式会社NTTデータ経営研究所
15:10-15:30 (20分)	モデル地方公共団体の取組説明	神奈川県横須賀市、新潟県長岡市、滋賀県長浜市、奈良県高取町
15:30-15:40 (10分)	積み木アプローチの説明	内閣官房
15:40-16:45 (65分)	座談会：「生涯活躍のまち」のはじめ方・取り組み方と＜積み木アプローチ＞の活用 (1) テーマ1：個別事業の構想方法 (2) テーマ2：庁内の巻き込み方 (3) 質疑応答	司会：五十嵐智嘉子 北海道総合研究調査会理事長 モデル地方公共団体：神奈川県横須賀市、新潟県長岡市、滋賀県長浜市、奈良県高取町 有識者：小泉秀樹 東京大学先端科学技術研究センター教授 領家誠 生駒市地域活力創生部長 内閣官房

時間	プログラム等	登壇者
16 : 45-17 : 00 (15分)	閉会（今後の取組方針についての案内）	内閣官房

告知用チラシ：

「生涯活躍のまち」の具体的な事業をご検討される皆さまへ

＜令和3年度地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた調査研究事業＞

令和3年度「生涯活躍のまち」シンポジウム

～モデル自治体の実践事例を通じた「生涯活躍のまち」の具体化モデル〈積み木アプローチ〉のご案内～

今年度の調査研究結果として、「生涯活躍のまち」づくりに一から取り組んだ4モデル自治体の取組結果と、それらを通じて策定した「生涯活躍のまち」の具体化モデル〈積み木アプローチ〉を共有することにより、「生涯活躍のまち」を具体化するためのプロセスについて解説します。本シンポジウムに参加いただくことで、「生涯活躍のまち」の具体化に関するノウハウ等の発見を期待できることが、メリットとして挙げられます。ふるってご参加ください。

日時 2022年3月11日（金）
15:00～17:00（14:30開場）

会場 ウェビナー（Zoom）

対象 ・「生涯活躍のまち」の取組意向はあるが、何から手を付けるべきか迷っている市区町村・都道府県
・地域のさまざまな課題を「生涯活躍のまち」を通して解決したいと考えている市区町村・都道府県
・既に「生涯活躍のまち」に取り組んでいるが、新たな事業を構想したい市区町村・都道府県
※ぜひ部署横断的な参加をお待ちしております。

時間	プログラム	内容（予定）
15:00-15:05	開会	内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局より挨拶
15:05-15:10	趣旨説明	シンポジウムの趣旨や進行について事務局より説明
15:10-15:30	モデル自治体の取組説明	神奈川県横須賀市、新潟県長岡市、滋賀県長浜市、奈良県高取町より、モデル事業で取り組んだそれぞれの地域の「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの調査結果や検討内容についてご説明
15:30-15:40	積み木アプローチの説明	「生涯活躍のまち」コミュニティを具体化するためのモデル〈積み木アプローチ〉についてご説明
15:40-16:45	座談会	<p>モデル自治体・有識者・事務局による座談会： 「生涯活躍のまち」のはじめ方・取り組み方と〈積み木アプローチ〉の活用</p> <p>司会：五十嵐智嘉子 北海道総合研究調査会理事長 モデル自治体：滋賀県長浜市、奈良県高取町 有識者：小泉秀樹 東京大学先端科学技術研究センター教授 領家誠 生駒市地域活力創生部長 事務局：内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 株式会社NTTデータ経営研究所</p> <p>(1) テーマ1：個別事業の構想方法 実際に事業を構想するきっかけ、苦労した点、工夫した点、得られたメリット、今後の展望などについて、〈積み木アプローチ〉を踏まえて議論</p> <p>(2) テーマ2：庁内の巻き込み方 検討体制構築にあたって、どのように庁内を巻き込み、拡大したか、苦労した点、工夫した点、得られたメリット、今後の展望などについて、〈積み木アプローチ〉を踏まえて議論</p> <p>(3) 参加者からの質疑応答</p>
16:45-17:00	閉会	内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局より 今後の取組方針に関する案内およびご挨拶

参加申込み締切
3/4（金）正午

お申込み 下記URLまたは右のQRコードよりお申込みください。
https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_2XZ7nPE9SWiCR-uvpYsLRg

お問合せ Mail : kojag@nttdata-strategy.com
担当：古謝、安生、久保（株式会社NTTデータ経営研究所）



主催：内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局 委託事業事務局：株式会社NTTデータ経営研究所

座談会の概要：

<個別事業の構想方法>

- 本日は取組のきっかけ、苦労・工夫した点、取組を進めているプロセスの中で感じているメリット、今後の展望について、まず横須賀市からお話いただきたい。（五十嵐氏）
- 当初認識していた「高齢者の孤立」という課題へ対応するための交流の場づくりにあたって、横須賀市は戸建てや商業施設がたくさんあるが、気軽に集まれる空きスペースや土地がないという現状があるため、既存の施設を活用する方向で検討を開始した。規模の大きな自治体ではよくあることだと思うが、横須賀市では、事業ごとに係が分かれており、今回の生涯活躍のコミュニティづくりを進めるためには、部を超えての連携も必要であった。連携といっても、それぞれに本来業務が多岐に渡るため、リスクヘッジや「できないこと探し」をしてしまうということもあり、話を持ち掛けることにも難しさを感じていた。
- そこで、まずは、ステークホルダーとなり得る支所との連携や高齢者の相談窓口である地域包括支援センターとの連携を考えた。支所等では、既に様々な事業を実施しているため、連携にあたっては、その点に考慮が必要であった。市民の実際の「声」を伝えることを意識した結果、少しずつ足並みがそろっていった印象がある。（以上、横須賀市）
- 新規就農者の声から事業を始めたという高取町に次にお話を伺いたい。大変興味深いきっかけだが、その後4年かかったといった苦労等に関する話をお願いしたい。（五十嵐氏）
- 住民や新規就農者とのワークショップで、地域に仕事があると良いという「声」が寄せられたのが事業に取り組むきっかけになった。町の実態を見ても、町内に事業者があるのに、町民は大阪に勤めに出ている状況であったため、町民が町内で働けると良いと考え、シルバー人材センターのような業務を年代問わずできれば面白いと感じていた。今年度の調査研究事業を通じて実現したが、実現まで4年かかった。その理由は、当初検討していた事業手法は派遣業法に関わる内容なので、資格の取得が必要であり、ニーズはあっても、行政が行うべき業務かどうか悶々とした気持ちでいた。そのような状況下で「しごとコンビニ®」の仕組み（業務委託方式）を知り、そこからはどんどうまく進んでいき、事業が具体化され、その運営を担う一般社団法人の設立までに至った。
- 町として法人格を得るまでに発展したきっかけは、シルバー人材センターが仕事の依頼はたくさんあっても人手が不足して対応しきれていなかったこと（シルバー人材センターの仕組みでは55歳以上でないと業務を受けられない。）。そこで派遣ではなく業務委託するという「しごとコンビニ®」の仕組みが解決手法となり、法人設立が実現した。これをきっかけに、企業のサポートや子育て世代のサポート、高齢者支援等全体を巻き込んだ動きになりつつある。（以上、高取町）
- 横須賀市の中核市としての状況はよく理解できる。「事業あって政策なし」といった状況はよくあるこ

と。中核市レベルの大きな組織になると個人の業務も細分化し、横のつながりが薄くなりがちである。予算段階でデマケをするため、本質的に他の部門・事業同士が交わることがない。その中で、多くの人が横の連携が必要だと気づいているとは思いますが、自分から動きを始める人がいない状況であると思う。なので、「生涯活躍のまち」に取り組むことが、接点のきっかけとなりうと思う。横須賀市は、コミュニティセンターを軸として、高齢男性を当初のターゲットとしつつ、若い世代まで広がりを持たせたというのがポイント。事業だけを粛々と進めるだけではうまくいかないで、コミュニティセンターのように色々な事業が乗っかることが可能な場所でフォーマルとインフォーマルの間の取組をすることでアイデアが生まれていくのだろうと感じた。

- 高取町については、逆に4年間の熟成期間が良かったと思う。一度風呂敷を広げた検討をしてきたことで事業の取捨選択ができていたのではないかと。その中で、「しごとコンビニ®」に出会ったときに一気に進めることができたのだと思う。（以上、領家氏）
- 大変興味深い報告だった。横須賀市はコミュニティに関する課題が多くあるが、同時に資源も多く可能性のある地方公共団体だと認識している。
- 行政マンはかなり適切な課題認識を既に持っている場合が多いと感じており、「課題認識に至るきっかけ」及び「課題に対するアプローチ方法」が重要で、各市町の報告は大変興味深い。
- 横須賀市では、インタビューをすると同時に、支所が役立ちそうだという仮説を持っていた。専門職や協力機関を特定して、その人たちの行動変容を促すための材料として、インタビューを通じた市民の声集めをしており、大変、戦略的だと感じる。多くの地方公共団体でも参考になる動き方だ。高取町では、4年間の熟成期間があったからこそ、庁内で課題や取り組むべき方向性が共有されていたので、そこに最適な解決策が現れたときに一気に進んだのだと思う。異なる立場の人たちの連携でプロジェクトが進んでおり、興味深かった。
- また、横須賀市のコミュニティセンター、長浜市の LOCO のように、地域の資源（ヒト・モノ等）に関する認識から課題に対するアプローチ方法を構想することが大事なのだとヒントをいただいた。（以上、小泉氏）
- 領家氏、小泉氏のコメントを踏まえ、まずは横須賀市に、世代的に広がりを持たせていくためにどうしたか、課題認識に至るきっかけ等伺いたい。（五十嵐氏）
- 私は高齢部門に関わる担当者だったので、高齢者に関する課題は認識していた。
- 今回は調査研究をひとつのきっかけとして他部署にご理解いただけたということが、新たな課題を発見し、事業内容を広げるきっかけとなった。通常業務の範疇を超えて、連携や協力をいただくことはなかなかハードルがあることだと思うが、調査研究事業を通じて協力を呼び掛けることにより連携が進んだと思う。具体には、地域住民の声をヒアリング調査していた際に、他部署から地域内に子育てサロンなどがあるといった情報を教えてもらったことによる。これを受け、サロンの経営者にヒアリングに行き、次の展開を考えていった。（以上、横須賀市）

- 地方の課題はどれも共通する内容が多いと思う。立地的に近くに先進的な取組を行う地方公共団体も多いので、施策や良い面・悪い面を見ることができていた。成功する、しないは別で、新しい取組をどんどん試していた。うまくいく取組は始めたときの周囲の反応が違うので、試していくことで町に合う、良い施策を考えることができ、それを全庁的に共有していくことで、新たな課題を把握することができた。（以上、高取町）
- 川口地域は市内でも飛び地という特徴がある。私自身は川口の担当者として、地域まちづくり団体「川口エンジン」という民間団体の皆さんと一緒に活動してきたので考えが良くわかる。長く寄り添って取り組んできたので、そうした連携の中で、課題を把握していた。また、「良いものは良い、悪いものは悪い」と言える関係性ができており、民間の視点だと行政の仕組みを十分に理解できていないこともあるので、できないことについてはできないと伝えた上で、別の切り口を伝えながらこれまでも事業構想を進めてきた。（以上、長岡市）
- 地域でがんばって活動している人の課題認識は適切だと感じる。LOCOさんは、「田舎だと高校卒業後はアルバイト等をしてきた女性も多く、コロナの影響もあり仕事に苦労している。」といった課題認識を持っており、それが事業構想のきっかけとなった。
- また、市内の事業者では人手不足という課題もあると感じていたが、外部の人たちと市役所メンバーと一緒に議論したところ、同じ課題認識を持っている人が多いことに気づいた。今回取り組んだ中で特に良かった点は、集まって話したことで共通の課題認識が生まれたことである。（以上、長浜市）

<庁内の巻き込み方>

- 「生涯活躍のまち」を進めようとする、他部署との連携が重要になる。各地方公共団体でどう進めたのかお伺いしたい。（五十嵐氏）
- 小さい町なので庁内でも廊下ですれ違う時等で話しかけるといったきっかけがあり、連携がとりやすかった。また課長会議等様々な場で事業構想について情報共有を図った。協力を求めると身構えられるので、やろうとしていることのみを伝えるようにしている。そうすると、何かのきっかけに声をかけてもらえることがある。先に情報を伝えることが大事だ。（以上、高取町）
- 話を進める上で、やりたいことを押し付けるだけではだめだと意識していた。他部署のそれぞれの取組について話を聞き、理解した上で、「こちらができることはないか。一緒にやりたい。」という形で話をした。地域の声を伝えるだけでなく、押し付けないような話の進め方が重要だと思う。（以上、横須賀市）
- 日々、「生涯活躍のまち」に関する相談を地方公共団体から受けているが、特に多い悩みは、「横

断的に連携する事業内容について、すでに別の部署が重点的に取り組んでいる場合があり、既に取り組んでいるからと、連携に応じてくれない」という内容だ。「生涯活躍のまち」を進めるためには、事業間連携をする方が良いが、どう連携するか悩んでいる地方公共団体も多い。どのように連携したのか詳細を教えてください。（内閣官房）

- ✓ 課題認識を全庁的に共有できるかが鍵だと思う。その上では、やる気のある人の課題認識を共有するのが有効な方法だ。私から庁内に伝えるのではなく LOCO の代表が認識する課題を伝えたからこそ伝わった。（以上、長浜市）
- ✓ 市内全域の事業とすると、関係部署が多くなり構えられてしまう場合は多くなるので、まずは川口地域での事業として連携体制を構築することにより、小さく育てるよう心掛けた。今後、川口地域をモデルとして、市内全域に広めていきたい。（以上、長岡市）

- ニーズや課題の共有が大事だ。役所の人は基本まじめなので、地域住民などの当事者から聞いた課題すべてに対応しなければならないと考える。従って、「解決できない課題は、聞かない」傾向がある。ただし、当事者が言っていることをいったんすべて聞く、ということが大事だ。ヒアリングしても役所側が自分のテリトリーに関わる課題の内容しか拾わない姿勢では横ぐしにならない。長浜市のように、関係者で集まって話す機会をつくと即興性がうまれて「それなら自分ができそう」という意見がどんどん出てくる。そうした即興性の積み重ねが地域性として評価されていくのだと思った。
- すでに熱心に取り組んでいる別事業とのバッティングについて、生駒市では地域コミュニティから仕掛けているので、すでにしっかりやっている地域包括や地域共生の部門で取り組まれている事業とはぶつかってしまう。話を持っていくと「よく似たことは、もうやっている」と言われてしまう。同じテリトリーではあるが、政策の領域が少し違うという理解が相互に必要。地域共生との違いでいえば、「生涯活躍のまち」は、仕事に結び付けるという点が異なるので、地域共生側にとっても一緒にやっていくうえで役立つ考え方だと思う。横須賀市は逆に地域包括側から話をもっていっているのが、どちらかというスムーズに連携できると思う。（以上、領家氏）
- 行政内部の横ぐしをうまく刺すためには、市民の声という行政にとって重みのあるものを集めることが有効だ。声があるから一緒にやろうと誘うことが大事だ。様々な主体と連携するスタイルが多いので、ステークホルダーを巻き込んだ結果、他の部門に「ステークホルダーが志向している」という働きかけ方もある。ただ、ボトムアップだけだとうまくいかない場合もあると思う。自分が過去にコミュニティづくりに携わった際は、「東大の先生がそう言っている」という理由で行政マンの仕事がしやすくなっているようだった。また首長の理解を得ることも大事で、何度も説明に行ったこともあった。制度が「錦の御旗」になることもあるので、先に国の予算を得るという方法もある。
- 「生涯活躍のまち」の普及には属人的な強みだけでなく、コーディネーションを支援する仕組みも必要なのだと感じた。今回の 4 地方公共団体の話も多様で大変役に立つ。今後は行政の悩みに対応するヒントやノウハウ等を得られるような機会があると、他部署の巻き込み方についても解決していけると思う。（以上、小泉氏）

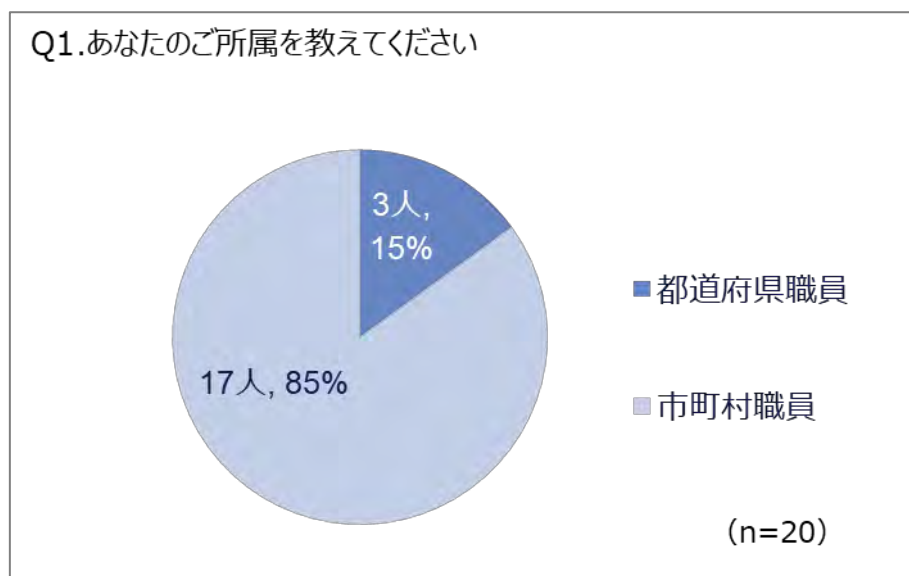
4.2 参加者アンケート結果

本シンポジウムでは、視聴者に対し事後アンケートを行った。参加者のうち、20名から回答が得られた。結果を下記に記載する。

(1) 回答者の属性等

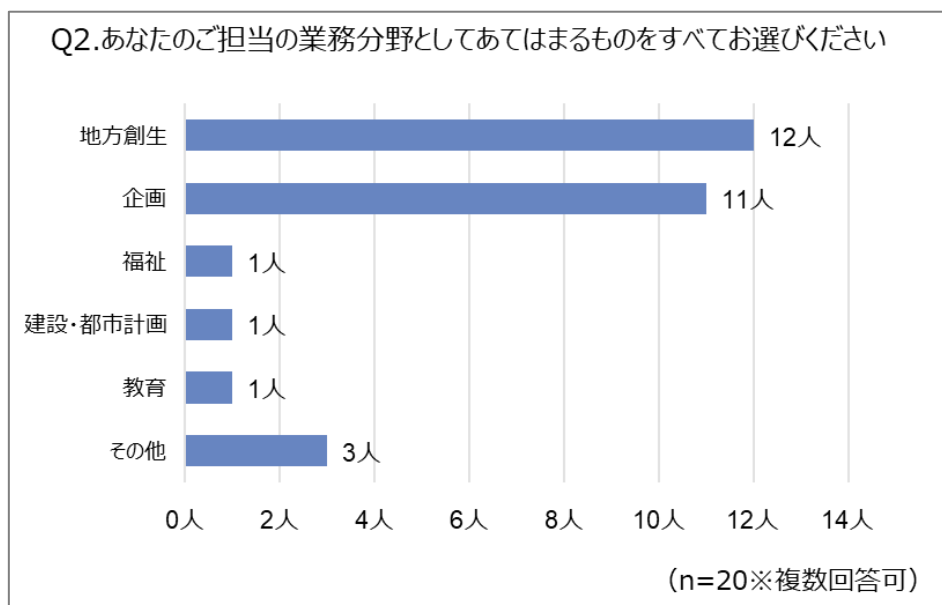
●回答者の所属

市町村職員と回答した人が最も多く、17人（85%）であった。



●回答者の担当業務

「地方創生」「企画」と回答した人がそれぞれ半数を上回った。

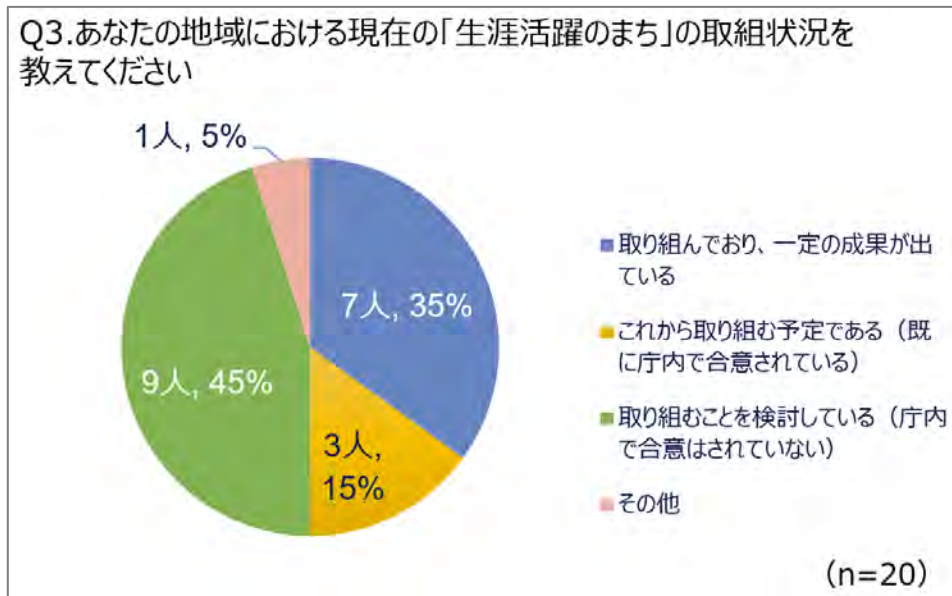


その他の回答内容：移住、中山間地域の支援、総務課建設事務所の研修業務等

●「生涯活躍のまち」の取組状況

「生涯活躍のまち」について、「取り組むことを検討している」が最も多く、9人（45%）であった。次いで「取り組んでおり、一定の成果が出ている」が7人（35%）が続いた。

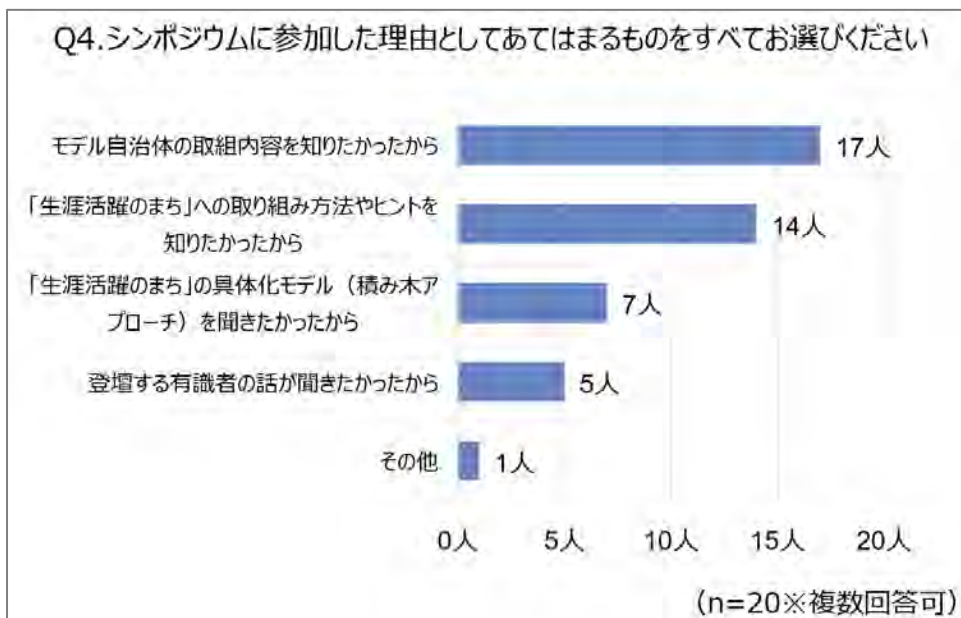
その他の回答内容：どう制度なのか勉強中



(2) シンポジウムの内容等

●シンポジウムの参加理由

シンポジウムの参加理由で最も多いのは「モデル地方公共団体の取組内容を知りたかったから」で 17 人、次いで「生涯活躍のまち」への取組方法やヒントを知りたかったから」で 14 人となり、この 2 つの回答は過半数の回答者から参加理由として挙げられた。



その他の回答内容：自分の仕事に活かせないか知りたかったから

●シンポジウムの満足度

シンポジウムの内容について、「生涯活躍のまち」の取組を進める上で「とても参考になった」が 5 人（25%）、「参考になった」が 15 人（75%）と回答者全員から参考になったという評価が得られた。



●満足度の設問の回答理由

Q5 の回答を選択した理由としては、具体的な事例が参考になったという内容が多数を占めた。

Q6.上記（Q5）の回答を選択した理由を教えてください。

【Q5 で「とても参考になった」と回答した人】

<具体的な事例に関する内容>

- 事例発表を生の声で聴くことができたため。
- 具体的な実例を交え、本音の話を聞くことができたから。
- モデル地方公共団体のプロセス等を拝聴でき、今後の業務の参考としたい。

<「生涯活躍のまち」の取組全般に関する内容>

- 取り組むにあたって、課題の想定等につながった。

【Q5 で「参考になった」と回答した人】

<具体的な事例に関する内容>

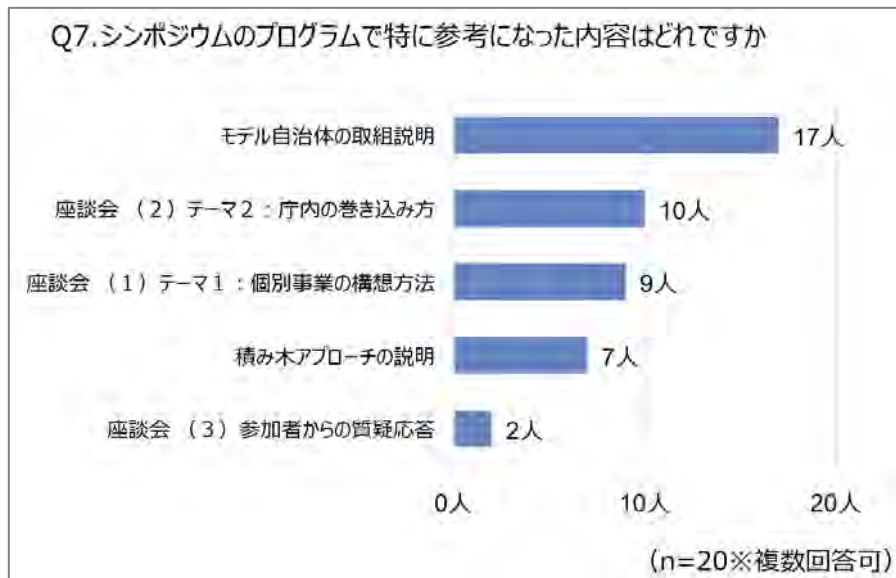
- 具体的な取組事例について話が聞けたため、どのように取り組んでいけばよいのか、イメージが持てるようになったから。
- 他地方公共団体の話が聞けたため。ありがとうございました。
- 大変参考になる事例が多かったため。
- 良い例をみることができました。意見が言える機会があったら言えるように勉強したいとおもっています。ありがとうございました。
- 令和3年度から取組を開始しており、先進事例を今後の展開の参考にしたい。構想段階の取組はすでに経過しているため、新たな収穫はそれほどなかった。

<「生涯活躍のまち」の取組全般に関する内容>

- 「生涯活躍のまち」の継続部分や、他事業での進め方で参考になったから。
- 歴史や土地柄に違いはあるものの、地域課題が同じで取り組み状況等で連携できると思ったから。

●特に参考になったプログラム内容

シンポジウムのプログラムで特に参考になった内容は、「モデル地方公共団体の取組説明」が17人と最も多かった。次いで座談会の「テーマ2：庁内の巻き込み方」が10人と回答者の半数が選択した。



●＜積み木アプローチ＞への意見

シンポジウムで照会した＜積み木アプローチ＞に関する意見として、以下の2つが寄せられた。

Q8. シンポジウムでご紹介した＜積み木アプローチ＞の内容についてご意見等があればお寄せください。

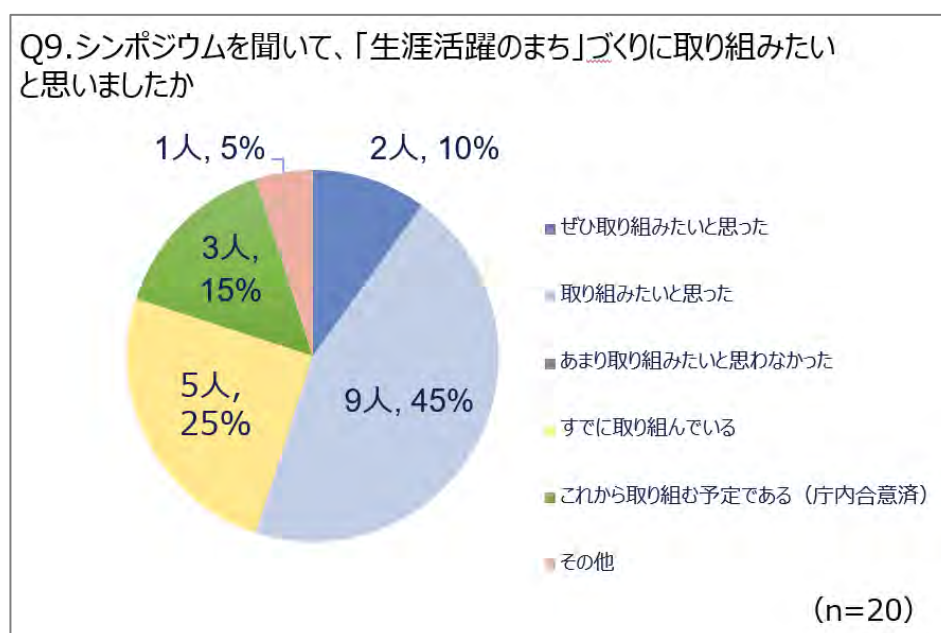
＜回答＞

- これからぜひ活用していきたい。
- これは、各パーツとしても使えるのかを知りたかった。

(3) 「生涯活躍のまち」の取組状況等

● シンポジウムを経ての「生涯活躍のまち」の取組推進意向

シンポジウムを聞いて、「生涯活躍のまち」づくりに「ぜひ取り組みたいと思った」は 2 人（10%）、「取り組みたいと思った」は 9 人（45%）であり、回答者の過半数がシンポジウムの参加により取組推進の意向が高まった。



その他の回答内容：一つの施策として選択肢の中に入るのか見極めたい

● 取組推進意向の回答の選択理由

Q9の回答を選択した理由について、自由記述欄で 2 人から回答があった。以下に記載する。（回答数：2 件）

Q10. 上記（Q9）の回答を選択した理由を教えてください。

<Q9 で「ぜひ取り組みたいと思った」を回答>

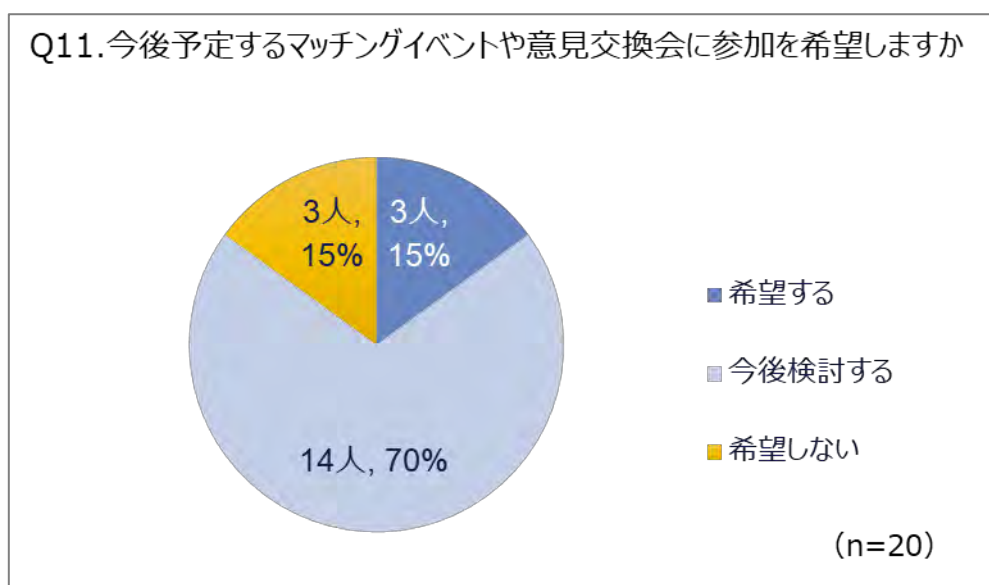
- 今後、地域交流をテーマとした公共施設の整備が決まっているため。

<Q9 で「取り組みたいと思った」を回答>

- 行政の縦割りに横ぐしを刺してできる総合的なまちづくりのテーマだと感じたから。

● マッチングイベント等への参加意向

マッチングイベントや意見交換会といった今後実施する「生涯活躍のまち」のイベントに対して、参加を「希望する」が3人（15%）、「今後検討する」が14人（70%）、「希望しない」が3人（15%）であった。



● マッチングイベント等への意見

Q11 で「希望する」「今後検討する」を選択した人に対し、マッチングイベント等に対する意見を募集したところ、1人から回答があった。以下に記載する。（回答数：1件）

Q12. 今後予定するマッチングイベントや意見交換会にご意見があればお寄せください。（ご希望に添えない場合もごさいます。）

- 官・民・ボランティア・一般人がインターネットを介してお互いの知恵を出し合い、現実に実行できる仕組みが創設されるとよい。

以上

参考資料

- 参考資料 1 第 1 回研究会議事概要及び資料
- 参考資料 2 第 2 回研究会議事概要及び資料
- 参考資料 3 第 3 回研究会議事概要及び資料
- 参考資料 4 第 4 回研究会議事概要及び資料
- 参考資料 5 横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画
- 参考資料 6 長岡市（川口地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画
- 参考資料 7 長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画
- 参考資料 8 高取町生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

※なお、各資料については株式会社 NTT データ経営研究所の主な説明資料を添付し、その他参加者の資料や参考資料については省略している。（参考資料 5 ～ 8 を除く）

参考資料 1 第 1 回研究会議事概要及び資料

地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業

会 議 体	第 1 回研究会
日 時	2021 年 5 月 26 日 (水) 10 時 00 分～12 時 00 分
場 所	Web 会議 (ZOOM)
出 席 者 (敬称略、順不同)	<p><コミュニティづくり具体化支援調査事業研究会委員> 五十嵐 智嘉子 (一般社団法人北海道総合研究調査会 理事長) 伊藤 淳司 (NPO法人ETIC.ローカル事業部長) 小泉 秀樹 (東京大学先端科学技術センター 教授) 島田 由香 (ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社 取締役 人事総務本部長) 矢田 明子 (Community Nurse Company株式会社代表取締役) 領家 誠 (生駒市地域活力創生部長)</p> <p><内閣官房> 原田 浩一 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官) 廣瀬 哲郎 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 大河原 竜 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 馬場 和弘 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 山口 涼 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局)</p> <p><事務局> 一般社団法人つながる地域づくり研究所 一井、林 株式会社NTTデータ経営研究所 (以下、NTT) 江井、古謝、安生、久保</p>
議 事 項 目	1 開会 2 委員紹介 3 座長挨拶 4 議事 (1) 事業概要 (2) 居場所と役割のあるコミュニティをつくるにあたって留意すべきこと ①「誰もが居場所と役割のある」コミュニティ“づくり”モデルのプロトタイプと今後の検討の方向性 ②視点の共有 ～各委員のオピニオン・事例 part1～ ③ディスカッション (3) モデル地方公共団体の支援とコミュニティ“づくり”モデルの検証について 5 今後のスケジュール 6 閉会
資 料	資料 0 第 1 回研究会議事次第 資料 1 出席者一覧 資料 2-1 「生涯活躍のまち」について 資料 2-2 生涯活躍のまちガイドライン 資料 3 コミュニティモデル事業説明資料 資料 4-1 島田委員発表資料 資料 4-2 矢田委員発表資料 資料 4-3 領家委員発表資料 資料 5 研究会委員名簿

※※※ 要 検 討 事 項 ※※※

<コミュニティモデルの在り方>

- ・ モデルについては規範的なものではなく、コミュニティをつくる“プロセス”について提示する形式とする
- ・ 何のために生涯活躍のコミュニティを目指すのか目的をはっきりさせることが重要であり、そのプロセスをモデルに入れる

<その他>

- ・ 本調査事業自体の目的や vision についての意見交換を検討する
- ・ モデル自治体支援への研究会委員の関わりについて検討する

議 事 内 容

1 開会（原田参事官）

- ・ それぞれの専門分野で著名な委員にお集まりいただき感謝申し上げる。
- ・ 「生涯活躍のまち」は、H26 の開始当初は中高年齢層の地方移住を主眼としたが R2 以降は全世代を対象にして、移住者だけでなく関係人口等も含め「誰もが居場所と役割がある」姿を目指してきた。
- ・ 「生涯活躍のまち」の推進意向があるという地方公共団体は H27 年 4 月時点で 202 団体だったが、直近の R2 年 10 月時点では 421 団体に増加した。しかし様々な事情や課題があり、構想の具体化に至っていない地方公共団体も多い。今年度はそのような「意向はあっても構想がない」という地方公共団体の構想策定を支援しつつ、得られた様々な知見を横展開し、「生涯活躍のまち」として、性別、年齢、障害の有無を問わず、希望に応じて能力を発揮して生きがいを感じられる地域コミュニティの実現につなげたいと考えている。
- ・ 委員の皆様には、それぞれの専門分野のご知見、ご経験を基に幅広い見地からご意見、アドバイスをいただきたい。

2 委員紹介

- ・ 各委員から自己紹介

3 座長挨拶（五十嵐座長）

- ・ みなさんのご挨拶を伺うと、幅広い分野ながら人づくりや地域づくりという面で交わる部分も多いと感じた。テーマとしては福祉、経済、関係人口等が「生涯活躍」のまちの中に埋め込まれていると思うので、一緒に取り組めることを楽しみに感じている。第一期の「まち・ひと・しごと総合戦略」ができたときに 2 年間で内閣官房に出向し、戦略策定に取り組んだ他、第二期総合戦略の策定でコンセプトを拡充する際の委員会の座長を務めるなど、「生涯活躍のまち」の推進にかかわってきたことから座長を拝命した。良い研究会にして、最後には良いアウトプットを出せるようにしたい。（五十嵐委員）

4 議事

（1）事業概要

- ・ 「生涯活躍のまち」について概要を説明する。現在の「生涯活躍のまち」は、対象者は全世代であり、「活躍・しごと」「交流・居場所」「住まい」「健康」及び「人の流れづくり」を要素としている。すべての地域ですべての要素を持つ必要はないが、それぞれの地域で課題への対応を検討する中でこれらの要素が含まれていると、全体として「生涯活躍のまち」として、住みやすく外から見ても魅力ある地域になると考えている。
- ・ 各施策を「生涯活躍のまち」というコンセプトでくることで、シナジー効果が生じると期待している。各地域での課題をどう解決するかということが出発点ではあるが、出来上がりとしては幅広い取組を総合する「生涯活躍のまち」づくりとなることと想定している。
- ・ 第一期の総合戦略では、高齢者の地方移住に重点を置いていたが、第二期総合戦略以降は対象者を広げ、政策についても整理して取り組んでいる。総合戦略でも基本目標は縦割りで個別分野となっているが、「生涯活躍のまち」は幅広いので横断的な目標と位置付けて、各地域の課題解決に向けて、子育て支援、健康づくり、農業、関係人口といったテーマも含まれる施策となることを想定している。
- ・ 国の支援としては、人的（組織）支援、財政支援及び情報支援を実施している。財政支援としては、地方公共団体で活用できる補助金、地方創生推進交付金の周知等を行っている。情報支援としては、昨年度「ガイドライン」を作成し、「生涯活躍

のまち」の基本的な考え方、留意点、行政以外の NPO や事業法人にも関わってもらうための連携手法やプロセスについて示したほか、調査研究成果や優良事例の情報提供を実施している。

- ・ R2 年 10 月時点で、「生涯活躍のまち」の推進意向はあっても構想策定に至らない地方公共団体が 289 団体あることから、今年度の事業として、構想策定支援に取り組むこととした。（以上内閣官房）
- ・ 「資料 3」のうち「1. 事業概要」について説明（NTT）

（2）居場所と役割のあるコミュニティをつくるにあたって留意すべきこと

①「誰もが居場所と役割のある」コミュニティ“づくり”モデルのプロトタイプと今後の検討の方向性

- ・ 「資料 3」のうち「2. コミュニティモデルの構築」について説明（NTT）

②視点の共有

「『誰もが居場所と役割を持つコミュニティ』を作るために必要なこと」（島田委員）

- ・ 前提として「誰もが居場所と役割を持つコミュニティ」とは何かという明確なビジョンをコアグループで共有していることが大変重要であり、この研究会でも明確にしたいと感じている。何のためにするのかという Purpose と、作り上げたい世界である Vision が明確になれば自ずと Mission が明らかになる。
- ・ 主催者の Being についても重要と考えている。モデルの展開や地域のサポートにあたり、私たちの在り方が外側に出るので、このミーティングも含めてなぜ今ここにいるのかを考えることが必要だ。
- ・ 具体的には真のコミュニケーションの重要性を組織でも伝えている。3つの鍵である「む・き・つ」、つまり「向く（相手にからだ・意識を向ける）」「聴く（耳と目、心を使って聴く、質問ではなく問う）」「伝える（思いと信念を届ける）」という意識が大切だ。好きな言葉で「Deep Listening, Loving Speech」というものがあり、相手に興味を持って、相手に感謝、肯定する、つまり Appreciating Inquiry があることが鍵となる。
- ・ それぞれが持っている強みが発揮されていると、人はパフォーマンスが高くなるので、それぞれのキャラクターや個性が認め合う場ができると思うので、この研究会の場でも体現したい。

「誰もが居場所と役割をもつコミュニティを作るために必要なこと」（矢田委員）

- ・ 地域のみんなが地域の担い手となる「地域おせっかい会議」を開催している。自分の強みを生かして、誰かの元気を応援する場所として手段を明確に据えているのが特徴だ。「誰もが誰かの心と体の元気を応援している」というビジョンを明確に伝えて構成員の参加を促し、ミッションを共有したコアメンバーで事務局をしている。健康分野の従事者は全体 140 人の中の約 10%で、残りはアウトリーチで発掘した郵便局やスーパーのオーナーなどこれまで健康分野の担い手として明確に機能していなかったが、地域の人の力になりたいという人だ。郵便局は組織として参加したので、市内全域で地域おせっかい会議に登録されている。
- ・ 運営の仕方は一人で頑張ってもできなかったという前提から、ネットワークを強化したほうが、勇気が湧き、ネットワークになるので、ビジョンを共有して何度も伝えた上で月に 1 回ギャザリングをしている。ギャザリングの場で登録メンバーがやりたいこと、できないことを発表し、残りの人が知恵や人脈を集合させ、協力している。ビジョンは市民レベルでは文章だけで示しても共感を生まないので、ギャザリングの場で写真として示し、「誰も取り残されずに得意なところで取り組んでいる」ということを示すビジュアルの共有にも力を入れている。
- ・ 郵便局のように固定の場所を持っているプレイヤーは毎月のように暮らしの保健室を開催するなどしており、場を持っていないプレイヤーは他の協力者の場所に行って活動している。どちらのパターンもコアの事務局が取り組んでいることは同じで、ビジョンを象徴的なビジュアルで出し、ゴールイメージの共感を得たメンバーで、コミュニティを大きくしている。事務局だけでなく、考え方が広がるようネットワークづくりもセットになっている場合、より大きく波及している。コアメンバーはやりたいことや不安などニーズをヒアリングする機能と、コーディネートやマッチングをする機能がある。また特定の場所に行かなければ参加できないという仕組みだけでなく、こちらから赴くと力を発揮できる人もいる。
- ・ 取組の入口時点で明確にあったのはビジョンと手段で、その後は走りながら効果的だった取組を増幅させた。

「誰もが居場所と役割をもつコミュニティについて」（領家委員）

- ・ 生駒市は京都と大阪の境目にある。ここ 50 年で郊外のベッドタウンとして発展したが、2013 年を境に人口減少している。生駒市の特徴は他のニュータウンのように公的デベロッパーが存在せず、ほとんどが民間の低層住宅地域となっている点なので、今後開発団地ごとが高齢化して今機能しているコミュニティが崩壊することで支援ニーズばかりが高まり、行政のサービスを手厚くしなければならなくなるという課題がある。また公的デベロッパーがいないことで、再生主体がおらず住民と市が直接対峙する必要も

ある。

- ・ 生駒市のコミュニティづくりの事業は自治会単位で進めている。生駒市は郊外に宅地がひろがっており、坂も多い地域なので、交通手段の確保が課題になってくる。高齢になっても身近な歩いて行ける自治会館や公園にまで行けば何かがある、という環境にできるよう取り組んでいる。すでに各自治会には、100歳体操、地域サロンはあるので、それにプラスした複合型の活動をお願いしている。全体としては地域課題や社会課題に対してやりたいことをみつけてもらって、やってもらっている。事例としては、萩の台住宅地で、日常のゴミ出し活動で交流を生み出す「こみすて」で、生ごみを集めて発酵装置にかけてガスを生み出しそのガスを使ってカフェでコーヒーふるまったり、生ごみからできた液肥は農家に渡して循環させるような取組を実施している。開催していると知らぬ間に小学生が放課後に当番を担って、「こみすて」で活動したりして、地元の高齢者との交流が生まれている。さつき台南自治会では集会所に図書室を設置し交流の場としている他、障がい者団体と連携して野菜販売などを行っている。
- ・ 行政サービスのアウトリーチが今後さらに重要になると考えている。今進めている、複合型コミュニティづくりの取組では、去年から市長をトップとした推進体制を組んでおり、ファシリテーターとしての職員、地域のプランに応じた担当職員が関わる仕組みをつくることで、知らぬ間にアウトリーチの場になっているようにしたい。
 昨年はコロナ禍で活動が難しく、複合型コミュニティの事業計画づくりに際して、自治会内の住民に対する問題意識を共有する取組ができなかった。今年は自治会への説明や住民アンケート、地域別のWSを開催したいと考えている。
- ・ 昨年度、複合型コミュニティづくりに、新たに若い世代を取り込むために、SDGsWSを開催した。面白そうだということで、その後、複合型コミュニティの4回のWSには参加してもらえたのだが、結論としては地縁組織に関わるということまでは持っていけなかった。若い層を動かすには、課題志向だけではだめで、楽しくないと続かない。そのモチベーションをフォーマルな課題に結び付けることは単純ではないということが昨年度の反省であった。そのため今年は好きなことをしばらくやらせてもらう形や、公益活動のグループや団体の育成事業などを実施しながら、つなげていくなど、いくつかのステップを実証的にやっていきたいと思っている。(領家委員)

③ディスカッション

- ・ 皆様に共通する点として問題意識、Purpose の話題があった。「誰もが居場所と役割のあるコミュニティ」はユニバーサルだからこそ曖昧さが残るので、目指すべき姿について全4回の中で明確にしたい。各地域の中でも「僕たちのまちではこれが一番重要だ」という意見が出ると思うので、意識的に目的の掘り起こしに取り組みたい。
- ・ 今回の大きなお題は、誰もが居場所と役割のあるコミュニティのモデルを作ることである。一般的な規範的なモデルを提示するのではなく、見つけ方、作り方、続け方といったプロセスに分けて整理したいと考えている。ただ、ある程度の部品がそろっても、部品をくっつけただけでは生き物にはならない。本日のディスカッションでは、モデルを本当に地域で使えるものとするためにご意見をいただきたい。(NTT)
- ・ 本事業ではモデルを作ることと、並行して各地で実験的に取り組むという両側から実施する形となるが、理念的にモデルを作り、各地に適合した上でそのモデルを修正するというアプローチが実際にどこまで可能なか検討したほうが良い。各地にある様々な類似の取組からモデル的なものを仮説として提示することは必要だと思う一方、事例ごとに状況やテーマ、地域資源が異なるので個別のアプローチとなる。そのため、実践の成果に応じてモデルに還元するなど、モデルと実践の関係をうまく整理しながら取り組むと良い。(小泉委員)
- ・ 今回は様々な課題やアプローチがあると思う。一般的なモデルを伝えて別の地域で真似をさせるということは避けた方が良い。最初に課題解決に向けた目的を決めないとだめだとモデル化のプロセスに明確に書き込むと良いのではないかと。地域で大学生のインターンシップを実施する際、まず目的を明確にしているように、本事業でも目的がないと次に進めないという点を強調できると良い。(伊藤委員)
- ・ 一般的なモデルよりも、考え方のモデルにおけるプロセスと地域の仕組み、体制、要素があるかを示すのが今回のモデルだと思う。いわば「プロセスモデル」である。その考え方について意見をいただきたい。(五十嵐委員)
- ・ 紹介したおせっかい会議以外にも様々な取組をする中で、決め方を支援することが多い。その際、正解モデルを提示するのではなく、自分たちが仮説をもって取り組みたいと思うことを選ぶことが正攻法なので、そのサポートをしている。単純に正解を示されるよりも担い手の考え方が違う。
 目的の作り方を支援することも多いが、目標設定が「みんなが本気でやっている」など曖昧になることが多々ある。いつどういう状態だったら「本気」なのか定義を第三者にも分かるように明確化すると、仮説が具体的に選択肢を持つことができる。最初から正解だと思わず、仮説による実験だと思うと失敗しても次に進みやすい。住民には習慣として仮説検証という思考がないので、最初は人材育成したメンバーを配置して支援する。(矢田委員)
- ・ すべてにフィットする1つのモデルはないので、理想的な状態として特定のコミュニティモデルを提示するのは無理だと思う。五十嵐

座長から指摘があった通り、コミュニティの形成は連続したプロセスなので、複数の例示的なコミュニティ形成のプロセスを整理して、方法として示すことが必要だ。

例えば、多くのコミュニティづくりやまちづくりの事例では目標の明確化を初期段階で行う。プロセスの中で目標は変わったり拡大したりするが、大きなビジョン自体は初期段階で共有しないと集合的な力が発揮できないといったことがある。

このような、コミュニティ形成“プロセス”をモデルとして提示して、実践で取り組むことは可能であるかもしれない。（小泉委員）

モデルと実践の関係の考え方については、みなさまのご意見もお伺いしながら進めていければと思う。

これまで行政として示してきたコミュニティモデルの好事例は、それぞれの市町村で課題解決に取り組んだ中でできた施策やコミュニティ像である。それぞれの解決までのプロセスには、課題意識や当事者の巻き込み方などの試行錯誤や回り道があったはずなので、こういったプロセスを含んだ知見を共有することでこれから新たに取組もうとする自治体の参考にできるのではと考えている。それぞれの事例で違いはあっても、関係者とのかわり方などについては類似するモデルとして示すことができるのではないかと思う。

本日 3 委員から発表いただいた内容について感想・意見を申し上げる。島田委員のご発表は非常に完成された形で、示唆に富むものであり、われわれに覚悟を問う内容で背筋が伸びる思いだった。お伺いしたいこととしては、各地方公共団体で今後「生涯活躍のまち」を検討していただくにあたって、purpose、vision の重要性について担当者やコアメンバーに意識していただくためにはどうしたらよいかという点。また、領家委員のお話を伺って、やはり領家委員のような方がいることでさまざまな活動が前に進むと思ったが、どうすれば領家委員のように積極的に取り組む人材が生まれるのかを教えていただきたい。あわせて、矢田委員についても同様に、コアメンバーとして活躍する人材がいかに生まれるのかを知りたい。地域におけるコミュニティづくりには両委員のような人材がいることが重要だが、偶然に期待することはできない。リーダー層の育成についても関心を持っている。（内閣官房）

一般的なモデルの提示ではなく、プロセスのモデルとすることは大賛成だ。そのポイントのひとつが自治体の中に本気でエネルギーをかけて取り組む「変態」がいることだと考えている。本事業は大変重要なテーマを扱っていると認識しており、まず何がどうなったら、やりたいと思ったことの実現につながるのか、についてこの研究会内でもイメージをビジュアルとして持てるようざっばらんに話したい。多様な人材が活躍しているとなんかおもしろいのか、おじいちゃんや孫が畑仕事をしているとか、具体的なビジョンを共有したい。

ご質問については、地域、コミュニティづくりにおいて、やらされ感がある人が関わってはいくまいか。ただ、最初はやらされ仕事だった人にも火をつけることは可能なので、地域や自治体の中から本気な人を見出し、育むことが大切だ。そのため研修やワークショップもかなりやっている。私たち委員やこの場にいる人がファシリテーターとなり、本気になる人を育てることができれば、本事業も良い結果を生むことができる。（島田委員）

私も「大阪のド変態」と紹介されたりしているが、「変態」は、私たちの活動仲間の中でも、最大の誉め言葉。

生駒市の経験では、今回提示いただいたコミュニティモデルより手前の“目的を決める 0 次プロセス”を明確にすることが一番重要だと感じてきた。目的や取組内容が決まった後の手法自体は、今の時代情報があふれており、インターネットで検索すればある程度分かる。

「変態＝本気の人材づくり」はなかなか難しい。自分自身としては、活動をフォーマルなものからインフォーマルに広げる中で気づきがあったと感じている。生駒市の若手はすぐ気が付くし、すぐ現場に行く人が多く可能性が高い。人材育成には回り道も大事で、失敗するだろうと思うことも部下にさせている。その経験の中で洗練されていくのではないかと思う。（領家委員）

どうしたら領家委員のような人物を再生産できるのか、という問題についてだが、私自身は自治体の研修プログラムの中で、一か所にとどまらない環境を通じてダイバーシティを与えてもらい、育った。一人の人が様々な立場を与えられることで、領家委員のような人材ができると考えているので、自治体の職員が自治体以外の立場を持てば人材を育てることは可能だと思う。ETIC さんはそういったことを仕掛けている。（矢田委員）

われわれも規範型ではなく、プロセス型としてレゴブロックのようなモデルができないかと考えている。レゴの組み立て方にストーリーや地域性が出てくることになる。レゴブロックを組み合わせただけでは生き物にならないが、本日のディスカッションで生き物にするための示唆をたくさんいただいた。

「誰もが居場所と役割のあるコミュニティ」に加えてモチベーションのあるコミュニティにする必要があると感じた。

今回はこういった委員会、検討会の形式で開催したが、実験的にイメージを語り合えるような方法も考えたいと思う。（NTT）

2 つお願いがある。この研究会はどうしても手を挙げて一人 1 分以内といった状況になってしまうが、語り合う場が必要ではないかと思うので検討いただきたい。また、4 か所の地域伴走支援についても、委員が継続的に関わることも面白いと思う。忙しい委員はできる限りで良いと思うが、関わりたいという地域を決めていただき日程調整に入れていただいたら良いと思う。（五十嵐委員）

(3) モデル地方公共団体の支援とコミュニティ“づくり”モデルの検証について

- ・ 4 団体において実施計画策定支援を実施していく。ご意見があったように、プロセスを重視し、この実践からコミュニティモデルに還元できるように進めていきたい。(NTT)

5 今後のスケジュール

- ・ 第二回は夏ごろを検討している。自治体の伴走も来月以降進行していく予定だ。(NTT)

6 閉会

- ・ 非常に示唆に富んだ議論で、この事業の中に限定するのはもったいないと感じるほどだった。今後とも色々な場面でお話を伺うこととしたい。(内閣官房)

以上

地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティ
づくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業
第1回調査研究会 説明資料

2021年5月26日 株式会社NTTデータ経営研究所

目次

1. 事業概要

(1)調査目的

(2)調査内容

(3)調査の進め方

①コミュニティモデルの構築

②モデル地方公共団体の実施計画策定支援

(4)研究会の開催

(5)スケジュール

2. コミュニティモデルの構築

(1)コミュニティづくりと自治体の役割の先行事例調査

(2)仮説モデルの設定の考え方

3. モデル地方公共団体の実施計画策定支援

(1)神奈川県横須賀市

(2)新潟県長岡市川口地区

(3)奈良県高取町

(4)滋賀県長浜市

1. 事業概要

1. 事業概要 (1) 調査目的

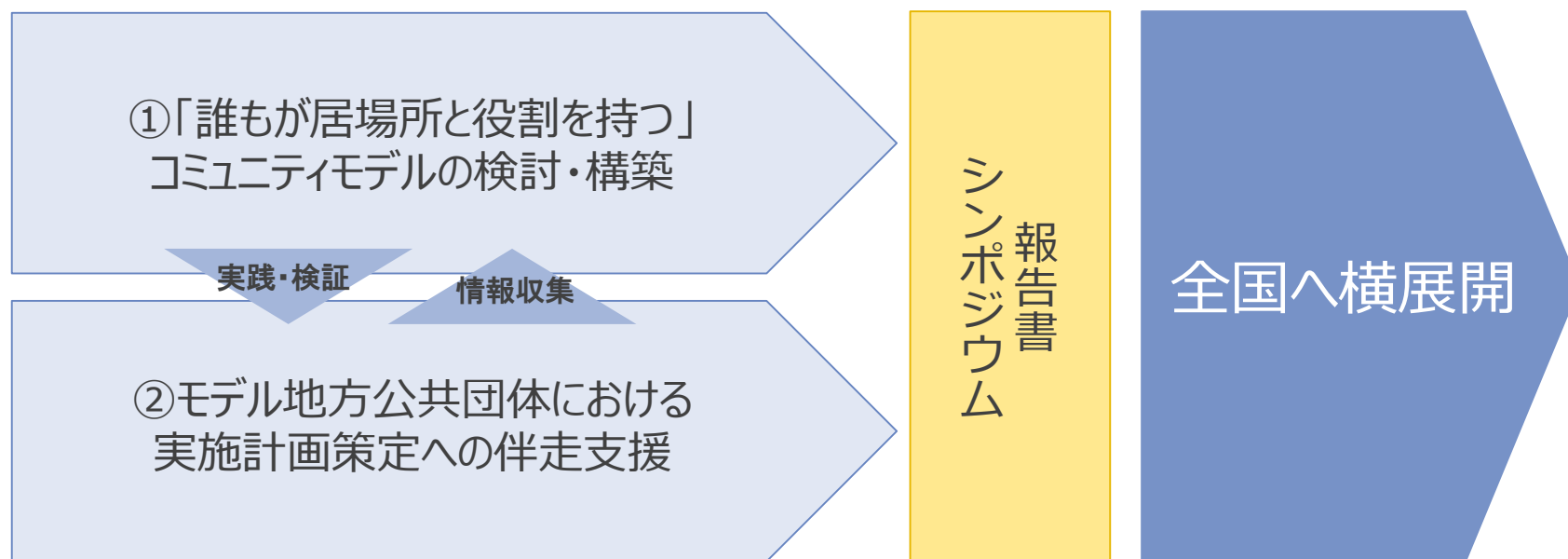
- 第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」では、「多様な人材の活躍を推進する」ことを横断的な目標の一つとして掲げており、**若者・女性等を含めた多様な人材の活躍を推進するためのコミュニティの実現を図る施策**として「生涯活躍のまち」が位置づけられている。
- 「生涯活躍のまち」の推進意向を示す地方公共団体は年々増加している一方で、具体化には至っていない団体も相当数存在している。（推進意向はあるが構想がない団体：289（R2.10.1.時点））
- そのため、多世代交流を通して活性化する**コミュニティのモデルの構築、その実践に向けた計画策定への支援といった取組手法等について調査研究を行い、その成果を横展開**することにより、「生涯活躍のまち」の取組を促進する。



「生涯活躍のまち」のイメージ

1. 事業概要 (2) 調査内容

- 誰もが居場所と役割を持つコミュニティをつくるためには、どのような人が居場所と役割を求めているのか、それらの方が参加するコミュニティをつくるためにはどうすればよいか、その取組をどのように継続するか、といったことが問題となっている。
- そのため本事業では、こうした**問題を解決するための仕組み（コミュニティモデル）を検討**する。
- あわせて、**モデル地方公共団体への伴走支援を通して計画策定の手法等について情報収集するとともに、コミュニティモデルの実践・検証を行う。**

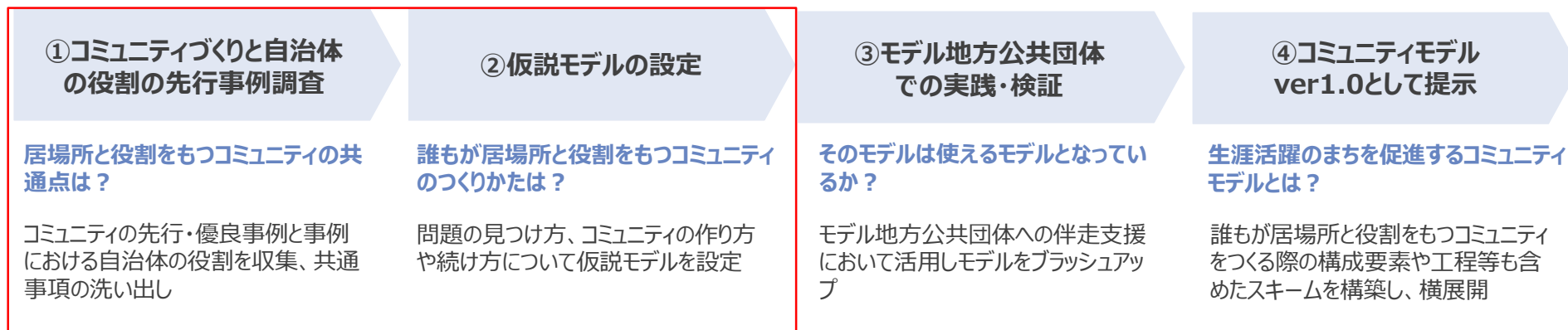


1. 事業概要

(3) 調査の進め方 ①コミュニティモデルの構築

- 生涯活躍のまちを推進する、誰もが居場所と役割のあるコミュニティモデルを導き出すため、**先行事例を収集し、「誰もが居場所と役割を持つ」コミュニティをつくるための要素についての仮説を設定する。**
- モデル地方公共団体での実践・検証や研究会における議論を踏まえてコミュニティモデルver1.0を提示し、全国への横展開を図る。

誰もが居場所と役割のあるコミュニティモデルの検討プロセス



本日は、①先行事例調査および②仮説モデルの設定の考え方について、後ほど提示します。また、研究会委員からご自身の経験も踏まえて「居場所と役割をもつコミュニティ」をつくるために重要なことについて発表いただき、本日の議論を踏まえて仮説モデルを設定する予定です。

1. 事業概要

(3) 調査の進め方 ②モデル地方公共団体の実施計画策定支援

- **テーマの汎用性や計画策定への意欲等を踏まえたモデル地方公共団体**を選定する。
- モデル地方公共団体に対しては、実効性の高い実施計画を策定するため、**現地訪問とオンラインの併用による毎月の定例協議**を実施する。
- 12月までに計画の骨子案を策定し、**地方公共団体における次年度予算への反映**を目指す。

モデル地方公共団体候補案

地方公共団体	解決すべきコミュニティの課題
神奈川県 横須賀市	退職後の高齢者が孤立しないよう地縁やテーマ性をもつコミュニティに参加し、居場所を持たせる仕組みの構築（健康×交流・居場所）
新潟県 長岡市 川口地区	十分に活用されていない空き家の状況を地域で把握し、若者や子育て世帯等に提供する仕組みの構築（住まい×交流・居場所）
奈良県 高取町	地域の困りごとや人手不足を、高齢者や農閑期の新規就農者等の活躍により解決する仕組みの構築（活躍・しごと×交流・居場所）
滋賀県 長浜市	時間的な制約やスキル等が課題となって「働きたいのに働く場がない」女性等が就労できる仕組みの構築（活躍・しごと×交流・居場所）

※京都府久御山町についても、伴走支援は実施しないが、町が主催する「みなるタウン」住街区整備アドバイザーボードへ参加し、住街区の建設前からのコミュニティづくりについて情報収集する。

計画策定に向けたプロセス

- 社会実装に向けた計画策定のためには、コミュニティの核となるチームの立ち上げ、現状や課題の把握、今後のコミュニティモデル構築に向けた5W1Hを丁寧に構築する必要がある。
- そのため、モデル地方公共団体選定後、オンラインを活用した月1回以上のミーティングを設定し、きめ細かな支援を実施する。

フェーズ1
検討チームの
立ち上げ

- コミュニティの中心となるメンバーを選定

フェーズ2
現状分析・
課題把握

- 現場を確認しながら現状と課題の認識を共有

フェーズ3
実施すべき
事項と主体の
検討

- 課題解決のための事項と取組主体を決定

フェーズ4
スケジュールの
共通認識
醸成

- 実装するための工程を行政・地域で決定し共有

フェーズ5
実施計画の
策定

- 共有した認識を実施計画に落とし込み



WSや現地調査により伴走型で支援を実施します



現地訪問とオンラインのハイブリッドで協議を重ねます

1. 事業概要 (4) 研究会の開催

- 研究会は、これまでの生涯活躍のまちづくりに熟知した委員に加えて、女性活躍に資する働き方の専門家、コミュニティづくりの実践者などの新たな視点を入れることで、**より具体的なコミュニティモデル構築**に繋げる。
- 早期にコミュニティモデルの考え方やモデル地方公共団体を提示し、**地方公共団体における具体的な実施計画の策定に繋がるよう議論**を進める。

研究会委員案

所属・氏名	選定理由
(一社)北海道総合研究調査会理事長 五十嵐 智嘉子	生涯活躍分野におけるこれまで実績・知見
NPO法人ETIC. ローカル事業部長 伊藤 淳司	人材育成・地域コミュニティづくりの実務家
東京大学先端科学技術研究センター教授 小泉 秀樹	コミュニティデザインの専門家
ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス(株) 取締役・人事総務本部長 島田 由香	女性活躍・働き方改革の専門家
Community Nurse Company(株) 代表 矢田 明子	全世代活躍型コミュニティづくりの実践者
生駒市地域活力創生部長 領家 誠	地方公共団体における官民連携、コミュニティづくりの実績

(五十音順)

各研究会の議題(案)

- 第1回研究会(令和3年5月26日開催)
テーマ: 先行事例調査と仮説モデル案の提示
 - 事業概要
 - コミュニティづくりの先行事例調査と仮説モデル(案)の提示
 - モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示
- 第2回研究会(令和3年7~8月頃開催予定)
テーマ: モデル地方公共団体における仮説モデルの検証状況
 - 仮説モデルの修正状況(第1回研究会及びモデル地方公共団体での検証内容の反映)
 - 計画策定に向けたモデル地方公共団体伴走支援の進捗
- 第3回研究会(令和3年10~11月頃開催予定)
テーマ: コミュニティモデルver1.0(案)の提示
 - コミュニティモデルver1.0(案)について
 - モデル地方公共団体での検証結果
 - モデル地方公共団体での計画策定促進方策
- 第4回研究会(令和4年2月頃開催予定)
テーマ: とりまとめ
 - 本年度の成果①; コミュニティモデルver1.0とその横展開の在り方
 - 本年度の成果②; モデル地方公共団体の計画策定報告

座長

1. 事業概要 (5) スケジュール

- ✓ 第1回研究会での議論も踏まえてコミュニティモデル案を作成しモデル地方公共団体への伴走支援で検証。
- ✓ 第1回研究会後に、モデル地方公共団体の伴走支援を開始。
- ✓ 伴走支援においても必要に応じて研究会委員の参加を依頼。

	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①コミュニティモデル検討	先行事例調査 仮説モデル設定		伴走支援を踏まえたブラッシュアップ							コミュニティモデル ver1.0提示		
②モデル地方公共団体伴走支援	実地調査	伴走支援（定例協議の実施）										
		★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	
		地方公共団体における 予算検討時期に骨子 案策定を目指す										
研究会等	第1回★			第2回★			第3回★			第4回★	★シンポジウム	

2. コミュニティモデルの構築

2. コミュニティモデルの構築

(1) コミュニティづくりと自治体の役割の先行事例調査

- これまでの調査経験や内閣官房等からの情報提供を踏まえ、自治体が関与している「誰もが居場所と役割のある」コミュニティづくりの事例を調査

※一部、自治体の関与については公知情報では不足するため要調査

- ①内閣官房アンケートにおいて、「生涯活躍のまち」に関する構想等に基づきコミュニティに関する取組を実施していると回答した地域

地域	取組主体	概要	自治体の関与	生涯活躍の機能	主体	HP
高知県 本山町	汗見川活性化 推進委員会	廃校を活用した体験型宿泊施設を運営。 住民同士や来訪者との交流拠点として、 道路・河川の清掃や、特産品開発実施。	自治体所有施設の活用（ほ か要確認）	活躍・しごと 交流・居場所	地元住民 交流人口	https://asemikawa.com/
京都府	京都府	高齢者宅に空き室に低廉な負担で若者が 同居・交流する次世代下宿「京都ソリ デール」事業を実施	マッチング事業者への業務 委託 大学等・高齢者団体等への 広報	交流・居場所 住まい	高齢者 大学生等若者	http://www.pref.kyoto.jp/jutaku/jiseidaigeshuku_kyoto_solaire.html
千葉県 旭市	みらいあさひ まちづくり協 議会	若い世代からシルバー世代まで健康生活 を楽しみながら仕事や遊びに生涯活躍で きるまちづくりを実践予定。	旭市、開発事業者グループ、 地域住民等による協議会を 立ち上げ 多世代交流ラウンジの整備 (予定)	住まい 交流・居場所 健康	こども シニア パパ・ママ	https://www.miraiasahi.jp/
岡山県 奈義町	奈義町社会福 祉協議会	「ちよいワルじいさんプロジェクト」と して、町の高齢男性による作戦会議を毎 月開催。「ちよいワルバンド」「ちよい ワル同窓会」などの企画を実施。	地方創生推進交付金による 支援	交流・居場所 活躍・しごと 健康	シニア世代	https://www.hotosena.com/article/14324658

2. コミュニティモデルの構築

(1) コミュニティづくりと自治体の役割の先行事例調査

②内閣官房アンケートにおいて「取組実施」とは回答していないが、参考となる取組を実施している地域

地域	取組主体	概要	自治体の関与	生涯活躍の機能	主体	HP
宮城県 石巻市	石巻市・ (一社)日本 カーシェアリ ング協会	東日本大震災後の仮設住宅において、コミュニティで車を所有し、ルールを決めてシェアリングするコミュニティ・カーシェアリングを実施	地域おこし協力隊の活用、 制度面でのバックアップ (要確認)	交流・居場所 住まい	高齢者 ボランティア ドライバー	https://www.japan-csa.org/action/carshare.php
鳥取県 伯耆町	伯耆町社会福 祉協議会	自治体の空き施設を改修し、フィットネス、事務、カフェスペース、高齢者の軽作業場などの複合施設を開設。	自治体所有施設の活用 民間スポーツクラブと提携 した事業支援	活躍・しごと 交流・居場所 健康	高齢者 子ども 地域住民	https://pal-plus-on.com/
岡山県 岡山市	岡山市・ 岡山市社会福 祉協議会	「公民館の職員」と「支え合い推進員 (生活支援コーディネーター)」が連携し、地域住民の困りごと相談や社会参加の場創出を実施	公民館職員と支え合い推進 員の連携 そのための計画レベルでの 連携の位置づけ	交流・居場所 健康	公民館職員 福祉関係者 地域住民	https://www.city.okayama.jp/shisei/cmsfiles/contents/0000020/20287/000399873.pdf
愛知県 豊明市	豊明市・藤田 医科大学・ UR	「高齢者が外出したくなるまちづくり」を掲げ、官民による公的保険外サービス創出・促進に関する協定を締結。住民同士が困りごとを支える仕組みなどを実装。	官民のプロジェクト会議の 運営 民間事業者等への協力要請 地域包括支援センター整備	交流・居場所 健康 住まい	高齢者 地域住民	https://www.city.toyoake.lg.jp/6438.htm
兵庫県 三木市	三木市 大和ハウス工 業ほか	継続して住み続けられ、若い世代を呼び込む住宅団地に再生するため、産官学が連携し、地域交流や移住・住み替え等を促進	産官学民協働の「郊外型住 宅団地ライフスタイル研究 会」を立ち上げ 多世代交流施設の設置	交流・居場所 住まい	多世代の住民	https://www.daiwahouse.com/about/community/case/midorigaoka/
埼玉県 幸手 市・杉 戸町	幸手市・杉戸 町・北葛北部 医師会	市内各地で「暮らしの保健室」を設置し、ちょっとした健康や暮らしの悩みを相談できる場づくりを実施。	自治体と医師会の委託による 相談窓口の設置	交流・居場所 健康	医療関係者 高齢者等地域 住民	https://satte-med.com/booklet/001.pdf
群馬県 太田市	NPO法人よろ づや余之助	地域社会の高齢化や町の衰退で起こる問題、困りごとをシニア世代の専門知識や技能を活かして解決する相談事業を中心に、喫茶事業や教育事業なども実施	相談内容に応じて市役所等 の支援に接続	交流・居場所 活躍・しごと 健康	シニア世代	http://www.yonosuke.or.jp/

2. コミュニティモデルの構築

(2) 仮説モデルの設定の考え方

- 全国の自治体が活用できる生涯活躍のまちの「コミュニティモデル」とは。
 - ✓ 多様な課題を抱える自治体が参照できるものがよいのではないか。
 - ✓ 収集した事例等から、「居場所と役割をつくる」ための工夫について、一般化して提示できるのではないか。
 - ✓ これから始めるところや、やってみたが続かないところなど、取組の状況もさまざまであることから、プロセスも考える必要があるのではないか。



本調査事業で提示するコミュニティモデルは、
「誰もが居場所と役割をもつコミュニティ」の
“作りかたと続けかた”のモデル
としてはどうか。

2. コミュニティモデルの構築

(2) 仮説モデルの設定の考え方

● 「誰もが居場所と役割のある」コミュニティ“づくり”モデル（案）

<事例等から一般化>



- さまざまな課題に対して、どのフェーズにおいても活用することができるため、幅広い地域に適用可能である。
- それぞれの自治体が、地域の実情に応じて、地域に適した手法を選択し、独自の“コミュニティモデル”を構築できる

2. コミュニティモデルの構築

(2) 仮説モデルの設定の考え方

● 全国各地域で使えるモデルとするために、下記の点を検討・充実したい。

- ① 各プロセスにおける手法を充実させ、豊かな選択肢とする
- ② 個性ある各地域において、どのように手法を選ぶべきか分かりやすく提示する
- ③ それぞれのブロックを有機的に連携させる繋ぎ方を提示する



2. コミュニティモデルの構築

(2) 仮説モデルの設定の考え方

(参考) 令和2年度生涯活躍のまち官民連携事業モデル調査事業成果物
官民連携事業HOWto事例集

- 今年度事業におけるコミュニティモデルの“続けかた”や自治体の関わり方においても下記のアプローチが活用できると考えている。

● 官民連携事業モデル 6つのアプローチと22のヒント		
6つのアプローチ		
22のヒント		
官 民 連 携	ヒト・スキル	<ul style="list-style-type: none">○官民協定や認証による利用者の増加○地域の人材・スキルの活用○地域おこし協力隊等の活用○教育機関の人材活用
	モノ	<ul style="list-style-type: none">○行政の認証制度による付加価値向上○設備・備品のシェアリング○交通事業や配送サービスの多目的活用
	空間	<ul style="list-style-type: none">○低未利用の行政財産（廃校等）の活用・シェアリング○空き店舗等の公共的活用○空き家・空き店舗の斡旋
	カネ	<ul style="list-style-type: none">○国等補助金の活用※○ふるさと納税（個人版、企業版）の活用○寄付・クラウドファンディングなどファンベースな資金調達○ソーシャルインパクトボンドの活用
	その他	<ul style="list-style-type: none">○サービス等の連携（事務委託、指定管理、PFI等）○規制緩和・特例制度の適用○産官学金の連携○域内調達や地域通貨による域内資金循環○外部プラットフォームの活用
プロジェクトの持続性向上		<ul style="list-style-type: none">○地域資源の発掘・付加価値向上○コストの利益への転換○社会的意義に対する共感の創出

3. モデル地方公共団体の 実施計画策定支援

3. モデル地方公共団体の実施計画策定支援

(1) 神奈川県横須賀市

●本事業で対象とする課題

退職後の高齢者（特に男性）が孤立しないよう、地縁やテーマ性をもつコミュニティにおいて居場所や役割を見つける仕組みの構築

- 各地域の民生委員等との話の中で、コミュニティやイベントに毎回同じ人が参加しており、**ほとんど参加していない高齢者がいるということが問題意識として提示**

●本事業で策定する実施計画とは

- ✓ **横須賀市が主体となり**、モデル地域を対象に居場所と役割づくりにおける問題や課題、解決策を検討するとともに、**来年度以降いつ、どこで、誰が、何をするのかをまとめる。**

※構想～実行計画レベルなど、策定する計画の熟度についても市が検討

支援内容	>プログラムデザイン、全体のコーディネート >各回のファシリテート、課題やソリューションの深堀支援 >各回のまとめと次回に向けてのtodo出し >出てきた課題に対するソリューションについての情報収集・アイデア提供 等
------	---

●スケジュール

※新型コロナウイルス感染症の状況等により現地／オンラインは臨機応変に対応

時期	5月	6月	7月	8月 オンライン	9月 オンライン	10月	11月 オンライン	12月 オンライン	1月 オンライン	2月
テーマ	フェーズ1 調査設計（実施地区、検討体制、スケジュール等具体化）			フェーズ2 現状・課題・ニーズの把握、地域資源の整理		フェーズ3～5 地域、行政の実施事項およびスケジュールの検討 実施計画の策定				
ゴール	調査設計ができていく（モデル地域選定、地域への入り方・巻き込み方、調べるべき項目、調べ方、手順・スケジュールなど）			孤立している高齢者の現状・課題・ニーズと地域資源を把握する		実施計画骨子案を策定する（地域ができること、行政が支援すべきことを整理し、次年度実施することを決める）		実施計画を策定する（次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを決める）		4月以降の動きを確認する
自治体の実施事項	どこを対象とするか、誰を巻き込むか、到達点をどう設計するかなど、調査の進め方を検討			地域の実情、ニーズや課題を調査	地域とともに地域資源を洗い出し	地域で現在提供できること、今後やりたいことを整理	横須賀市ができること、支援すること等を整理	5W1Hを整理し計画案を策定	実施計画の策定	今後の具体的な動き方を確認

3. モデル地方公共団体の実施計画策定支援 (2) 新潟県長岡市川口地区

※地元主体/自治体サポート型のモデルとして検討を進める予定

●本事業で対象とする課題

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現（川口地区での先行的な計画・実践・検証）

- 長岡市の社会移動をみると、依然10歳代後半から20歳代のマイナスが続いています。一方、30歳代以降では転入と転出がバランスするものの、川口地区など支所地域では、「戻ってきた地元出身者」を十分に受止めることが出来ていない状況です。具体的には、地域に空き家や求人等があるものの、それが可視化されておらず、Uターン希望者に十分に届いていない状況です。
- このため、「住まい」や「仕事」を中心に、子育てや介護等に係る情報を提供する仕組みの構築を目指します。

●本事業で策定する実施計画とは

- ✓ 「地域の団体が主体となり空き家や求人等の情報を収集・発信する方法」を検討するとともに、来年度以降、実サービスを進めるにあたっての、**自治体の役割、地域団体の役割、事業モデル**を計画（案）としてまとめる。

支援
内容

- プログラムデザイン、全体のコーディネート
- 各回のファシリテート、課題やソリューションの深堀
- 各回のまとめと次回に向けてのtodo出し
- 事業シミュレーション支援 等

●スケジュール

※新型コロナウイルス感染症の状況等により現地/オンラインは臨機応変に対応

時期	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
フェーズ	フェーズ1 調査設計		フェーズ2 現状分析・課題把握		フェーズ3 実施事項と主体の検討		フェーズ4 & 5 スケジュールと実施計画の策定			
テーマ	第1回ディスカッション 手順、スケジュール、体制	第2回 先進事例を学ぶ	第3回 データでみる川口	第4回 みんなで調べる	第5回 ロードマップ	第6回 骨子案	第7回 事業採算性	第8回 実施計画案	第9回 次年度に向けて	
ゴール	①調査手順とスケジュールの確定 ②推進体制の確定、キックオフ <想定> 地戦部、川口支所、地域団体	①ゴールのイメージを共有 (シェアリング、仕事コンビニ)	①人口動向、 ②住民意向の把握(アンケート結果)	①空き家の動向の把握 ②求人の状況	①「まず着手すべきこと」合意 ②中期的な見通しの合意	①役割分担 ②実施計画の骨子案(1枚もの)	①事業シミュレーションの共有 ②直近のスケジュール整理	①実施計画(案)の策定(5~10頁程度を想定)	①4月以降の動きの確認	
自治体の実施事項	・検討体制の準備	・庁内、地域内への声かけ	・情報提供(人口推計)	・情報収集についての協力	・市の役割の明確化	・次年度事業イメージ検討	・必要に応じて予算化の準備	・実施計画のとりまとめ	・今後の支援体制の検討	

3. モデル地方公共団体の実施計画策定支援 (3) 奈良県高取町

●本事業で対象とする課題

町内の人手不足や困りごとを、シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携し、高齢者や子育て中の女性、農閑期の新規就農者等の活躍により解決する、新たな仕組みの構築

- 町内の事業所等から、**人手が必要だが新規雇用は困難、人手不足のため事業拡大・継続が困難**、といった声がある
- シルバー人材センターや社会福祉協議会のボランティア活動の、**担い手が高齢化・固定化**してきている
- 高齢者や子育て中の女性、新規就農者等、**短時間なら働くことができ、社会や人とのつながりを求めている**層がある

●本事業で策定する実施計画とは

- ✓ **高取町が主体となり**、町内全域を対象に、「しごと」を通じた居場所と役割づくりにおける問題や課題、解決策を検討するとともに、**来年度以降いつ、どこで、誰が、何をするのかをまとめる。**

※実行計画を想定

支援内容	➢プログラムデザイン、全体のコーディネート ➢各回のファシリテート、課題やソリューションの深掘 ➢各回のまとめと次回に向けてのtodo出し ➢出てきた課題に対するソリューションについての情報収集・アイデア提供 等
------	---

●スケジュール

※原則として毎月協議を実施しながら進める。新型コロナウイルス感染症の状況等により現地／オンラインは臨機応変に対応

時期	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
テーマ	フェーズ1 調査設計（対象、検討体制、スケジュール等具体化）		フェーズ2 現状・課題・ニーズの把握、地域資源の整理			フェーズ3～5 地域、行政の実施事項およびスケジュールの検討 実施計画の策定					
ゴール	調査設計ができている（対象選定、連携先を含めた検討体制、調べるべき項目、調べ方、手順・スケジュール、など）		町内の事業所及びシルバー人材センターや社会福祉協議会、働き手と想定される層の、ニーズや課題は何か、どのくらいあるかを把握する			課題解決に資する地域資源を把握する		実施計画骨子案を策定する（実施主体ができること、行政が支援すべきことを整理し、次年度実施することを決める）		実施計画を策定する（次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを決める）	4月以降の動きを確認する
自治体の実施事項	庁内関係課や連携先を含めた体制を検討		地域の実情、ニーズや課題を調査			連携先と調査結果や課題・希望等を共有	連携及び実施の体制やあり方を検討	高取町ができること、支援すること等を整理	5W1Hを整理し計画案を策定	実施計画の策定	今後の具体的な動き方を確認

3. モデル地方公共団体の実施計画策定支援 (4) 滋賀県長浜市

●本事業で対象とする課題

時間的な制約やスキル等が課題となって「働きたいのに働く場がない」女性等への仕事の提供を核として、事業所や市民の交流を生み出す仕組みの構築

- 子育て支援等に取り組む団体が、多様な女性等の個別の状況に応じた就労の仕組みづくりの意向を持っている
- 同団体が入居しているスペースを、子どもや高齢者も含む、多くの人が訪れる交流・居場所とするよう取り組んでいる
- 市内事業所の人手不足解消や事業開発等による活性化を促進する必要がある

●本事業で策定する実施計画とは

- ✓ **長浜市が主体となり**、市内全域を対象に、「しごと」を通じた居場所と役割づくり・交流づくりにおける問題や課題、解決策を検討するとともに、**来年度以降いつ、どこで、誰が、何をするのかをまとめる。**

※構想～実行計画レベルなど、策定する計画の熟度についても市が検討

支援
内容

- プログラムデザイン、全体のコーディネート
- 各回のファシリテート、課題やソリューションの深堀
- 各回のまとめと次回に向けてのtodo出し
- 出てきた課題に対するソリューションについての情報収集・アイデア提供 等

●スケジュール

※原則として毎月協議を実施しながら進める。新型コロナウイルス感染症の状況等により現地／オンラインは臨機応変に対応

時期	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
テーマ	フェーズ1 調査設計（概要、検討体制、スケジュール等具体化）		フェーズ2 現状・課題・ニーズの把握、地域資源の整理			フェーズ3～5 地域、行政の実施事項およびスケジュールの検討 実施計画の策定				
ゴール	調査設計ができていく（連携先を含めた検討体制、調べるべき項目、調べ方、手順・スケジュール、など）		市内の事業所及び働き手と想定される層の、ニーズや課題は何か、どのくらいあるかを把握する		課題解決に資する地域資源を把握する	実施計画骨子案を策定する（実施主体や連携先ができること、行政が支援すべきことを整理し、次年度実施することを決める）		実施計画を策定する（次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを決める）		4月以降の動きを確認する
自治体の実施事項	庁内関係課や連携先を含めた体制を検討		メンバーの知っていること、行政の統計データ等の洗い出し	地域の実情、ニーズや課題を調査	連携先とともに地域資源を洗い出し	実施主体や連携先ができること、やりたいことを整理	長浜市ができること、支援すること等を整理	5W1Hを整理し計画案を策定	実施計画の策定	今後の具体的な動き方を確認

参考資料 2 第 2 回研究会議事概要及び資料

地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業

会 議 体	第 2 回研究会
日 時	2021 年 10 月 4 日 (月) 10 時 00 分～12 時 00 分
場 所	Web 会議 (ZOOM)
出席者 (敬称略、順不同)	<p><コミュニティづくり具体化支援調査事業研究会委員> 五十嵐 智嘉子 (一般社団法人北海道総合研究調査会 理事長) 伊藤 淳司 (NPO法人ETIC.ローカル事業部長) 小泉 秀樹 (東京大学教授) 島田 由香 (ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス合同会社 人事総務本部長) 矢田 明子 (Community Nurse Company株式会社代表取締役) 領家 誠 (生駒市地域活力創生部長)</p> <p><内閣官房> 原田 浩一 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官) 大河原 竜 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 岡 勇輝 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 馬場 和弘 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 山口 涼 (内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局)</p> <p><事務局> 一般社団法人つながる地域づくり研究所 一井、林 株式会社 N T T データ経営研究所 (以下、N T T) 江井、古謝、安生、久保</p>
議 事 項 目	1 開会 2 議事 (1) 第 1 回研究会及び意見交換会の振り返り (2) コミュニティモデルの構成について (3) コミュニティモデルの内容について ①生涯活躍のまちの ISSUE,VISION,PURPOSE ②コミュニティづくりの積み木モデル ③視点の共有 ～各委員のオピニオン・事例～ (4) モデル地方公共団体支援の進捗報告 3 今後のスケジュール 4 閉会
資 料	資料 1 第 2 回研究会出席者一覧 資料 2 第 2 回研究会説明資料 資料 3 研究会委員名簿

議 事 内 容

1 第1回研究会及び意見交換会の振り返り

- ・ 資料に基づき説明 (NTT)

2 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について

- ・ 資料に基づき説明 (NTT)
- ・ 「積み木モデル」は時間の流れとともに変わるニーズやコミュニティの参画者の変化に応じて、要素の出し入れが自由で発展的だと感じている。(五十嵐座長)
- ・ 「積み木モデル」は分かり易くて良いと感じた。ネーミングは非常に重要だ。状況に応じて組み替えられるといった柔軟性を示している点が良いと思った。プロセスについては、どう問題を見つけるか、コミュニティを作るか、続けるかが、覚えやすい。(島田委員)
- ・ 分かり易いモデルで良いと思った。また「問題の見つけ方」には、前回研究会で指摘した0次プロセスを反映していただき良かったと思う。後程詳細を何うタイミングで、続け方について誰がフローを主体的に運用するのか聞きたい。(領家委員)
- ・ 構成は分かり易く、初見でも頭に入りやすい。(伊藤委員)
- ・ 分かり易く整理していただいていると思う。
アメリカのコミュニティ政策では「building blocks」という言葉が出てくる。まさに積み木モデルのような考え方だ。アメリカの表現ではブロックの積み上げる方向が下から上なので、ここで示している積み木モデルと逆で、積み木を積んでいるイメージに近い。途中で1つくらいブロックが抜けていても積み替えたりできるようなイメージになると面白い。(小泉委員)
- ✓ 見せ方のイメージはとても重要なので小泉委員からご提案いただいたように工夫すると良い。(島田委員)

3 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の内容について

④「生涯活躍のまち」のISSUE、VISION、PURPOSE

- ・ 資料に基づき説明 (NTT)
- ・ 意見交換会で様々なキーワードが出た。孤独とか孤立といった問題に最終的には取り組むが、まずは「心の曇り」に寄り添うことが生涯活躍のまちの取組意義ではないかという意見があった。(五十嵐座長)
- ・ 写真があると目に見えてとても良い。
ひとつひとつの写真を見るとジェンダーバランスが取れていないものが多いと感じた。無理にジェンダーバランスをとる必要はないので、写真から何を伝えたいかをしっかり言えるのであれば良い。(島田委員)
- ✓ 子育てコミュニティの写真には男性が1人しか映っていないことをあえて見せつつ何らかに記載することによって、課題についても見て取れるかもしれない。(五十嵐座長)
- ✓ ダイバーシティにも配慮した写真をさがし、見つからなければ次の課題として表現できるよう工夫する。(NTT)
- ✓ ミスリードしてはいけないので、ご指摘を踏まえて最終的な写真選びをしたい。
事例の中にはジェンダー的な現実論としてあるという気付きもあったので、気づきを踏まえて気を付けながら発信したい。(NTT)
- ・ ISSUE、VISION、PURPOSEにはどのような相互関係があるか。また、それぞれの写真の分類状況と、網羅性を説明いただきたい。(原田参事官)
- ✓ ISSUE、VISION、PURPOSEは一対一ではなく多対多の関係だと認識している。
- ✓ 写真上部でガイドラインの基本コンセプトから引用している。現状のガイドラインのコンセプトは具体的な手立てが一回聞いただけでは分かり易いとは言にくい状況があると認識しており、写真によって感覚的な理解を助けるようなガイドラインの補足資料として使うイメージでいる。
- ✓ 「生涯活躍のまちづくり」において何を目的としているかをPURPOSEで、対象をISSUEで、解消された世界はどんな世界かをVISIONで示している。ご指摘いただいた通り「なぜPURPOSE、VISION、ISSUEが必要か」ということがわかる追加資料を用意する。カテゴライズについては明確に議論していないが、必要に応じて検討したい。視点として抜けているものは委員からのご指摘を反映させている。(NTT)
- ✓ (上段へ移動) ビジュアルで分かり易くするという意図はわかるが、ISSUEをどうやって発掘するかということ自体が問になる。本資料はあくまで例示だと思うので、写真で示されたような個別の課題を探すのではなく、「例えばこういった課題はありませんか」といった問いかけを示しながら、問題を発見するスタンスや気づきの重要性を伝えられると良い。
VISIONも同じで例示だ。また表現として下部に記載されている「住みたいまちはこんなところ」という部分が重要なので、上部の引用の繰り返しを省略して、下部の記載を強調するなど、工夫した方が良い。(小泉委員)

- ✓ ISSUE、VISION の中で個々に書かれている「コミュニティが希薄化しているとは？」、「住みたいまちとはこんなところ」の記述それぞれの相互関係は「多対多」かも知れないが、説明いただきたいのは、ISSUE、VISION、PURPOSE という概念自体の相互関係。また、地方公共団体が「生涯活躍のまち」又は地域課題の解決を検討する際に、何故、この3つの概念を検討、整理いただくことが有益とするのかの説明。さらに、個々に書かれている「コミュニティが希薄化しているとは？」、「住みたいまちとはこんなところ」は、特段言葉での説明なく写真だけでページが分かれているが、どういう思想で分類、カテゴライズされているのか。その分類を手掛かりに地方公共団体も問題の発見、把握につながると思う。警沢を言えばそのためには、いくら例示とはいえ、できれば、その分類、カテゴライズは、漏れなく重複なく、MECE であるとよい。カテゴライズについても工夫や資料の構成を考えていただきたい。(原田参事官)
- ✓ あくまで例示であるため完全に MECE にすることは難しいが、分類についてはタグをつけることで分かり易く示すことを検討したい。(NTT)
- ・ 網羅性の観点から抜けや新たに焦点を当てるべきポイントがあればご指摘いただきたい。(五十嵐座長)
 - ✓ 働く世代の地域コミュニティへの参加がオールドニュータウンの共通課題だ。子育て世代や働く世代など 30～40 代の地域参加は、課題を解消するためのコミュニティではなく、より前向きなコミュニティだと認識している。移住者向けの創業塾を運営していると、情報や課題の非対称性を感じる。働く世代の中には地域に入りたい人もいるが、何が地域の課題かわからずもやもやしているといった意見がある。PAIN だけをフックにせず、情報や課題の非対称性を抱える働く世代にむけてもアプローチできると良い。(領家委員)
 - ✓ ベッドタウンの働く世代は町内会や自治会は入りにくい、通勤時のちょっとした時間でも地域に関する意見を発信できる場があるような動きができています。働く世代がコミュニティにどうかかわろうとしているのかという観点についても検討できると良い。(五十嵐座長)
- ・ 自治体の職員が実際にアクションしようと思える資料でない限り、作っても自己満足で終わってしまう。ビジュアルや関係性を分かり易く見せることが大事だ。PURPOSE、ISSUE、VISION の中でも、ISSUE から取組を考え始めると視座が低くなる。どのような自治体にしたいのかを思い描いてもらえるようにすることが大事だ。資料を出して終わりではなく、自治体職員が継続してアクションできるようにする必要がある。(島田委員)
 - ✓ 手引きやガイドラインは作って終わりでは意味がない。住民や関係者に必要以上に課題に関する情報だけを植え付ける必要はないが、課題は認識した上でどのような街にしたいかを引き出すことが大事だ。地方公共団体は ISSUE からという順番が良いが、住民に対しては異なる見せ方が良いかもしれない。(五十嵐座長)
- ・ P29 の「PURPOSE：なぜ「生涯活躍のまち」に取り組むのか？」では、PAIN から新しい場所に行くのが目的に見えるが、実際は必ずしもそうではない。スタートポイントは「楽しい」から取り組み、結果として予防的に PAIN が生じない地域になることもある。実際の問題を抱えると一般的な地域活動だけでなく、社会福祉的な介入をしていくことになるが、コミュニティアプローチとしてはいかに PAIN の状態にならないように PURPOSE で書かれている内容に取り組むかということが大事になる。(小泉委員)
 - ✓ マイナスをゼロに戻すのではなくむしろプラスにしようとするのがポジティブ心理学の考えであり、「住民の心の曇りを何かで晴らす」というマイナスをゼロにするアプローチでは PURPOSE は下位に位置付けられてしまう。まずどう世界をつくりたいかという点にフォーカスを置くと、心の曇りもなくなっていく。(島田委員)
 - ✓ 自治体側としては、生涯活躍のまちの施策については、もっとしんどい課題がある中でなぜ取り組むのかという論点がよく出てくる。そういった意味でも、福祉的アプローチではなく、予防的なコミュニティアプローチであるという整理ができれば、自治体内部での合意形成が取りやすくなる。(領家委員)
 - ✓ 「生涯活躍のまち」の取組には、既に生じている個々の課題解決から始めるアプローチと、あるべきコミュニティ像を掲げてその実現に向けて取り組むアプローチと2つのアプローチがあると考えている。ただし、あるべきコミュニティ像を考えるとそもそも地域の課題を把握している必要がある。具体的に生涯活躍のまちの取組を進める際にはあまり大きな違いにはならないかも知れないが、考え方としては、両アプローチを考える必要がある。(原田参事官)

②コミュニティづくりの積み木モデルと事例紹介

- ・ 資料に基づき説明 (NTT)

③視点の共有 ～各委員のオピニオン・事例～

- ・ 伊藤委員から資料に基づき説明
- ・ 人材循環についてのご紹介をする。ETIC.は起業家的な人材の育成や挑戦の生態系(チャレンジ・コミュニティ)を全国に広げ

る活動をしている。自立的に課題解決ができるコミュニティづくりに向け、人材を絡めることが ETIC の武器である。


地域で新しいことをスムーズに生み出すために「地域コーディネーター」という人材を使うアプローチをしている。受け入れ地域側への良い影響を考え、循環人材としてインターンシップを大事にしている。

例えば地域ベンチャー留学では、新しいことに取り組みたいリーダーの下に、地域外からの参加者が中長期官滞任して課題に取り組む。重要な役割を果たすコーディネート機関が、地域内のプロジェクトに大学生を連れてくる。大学生はたとえば柑橘類の売り方を変えるお手伝いなどをしている。

参加した学生の持つ「地域の中小企業で働くイメージ」が向上する他、受け入れる地域側にとっても、外部人材と協働する経験値を獲得することができる。良い経験になること自体が地域の自信にもなる。また、自治体によっては課題はわかっているが取り組む人がいなかったり、何が課題か認識できていないこともあるため「地域課題の再編集」ができる。この取り組みは新聞で取り上げられやすく、記事化することで地元の人も改めて問題を認識することもある。（伊藤委員）

- ・ 積み木モデルの「コミュニティの作り方」で、誰が主体となるのかを認識するプロセスが大事だと思う。自治体の人達が積み木を動かしているのは自分たちだという認識を持つプロセス「being」が重要である。（島田委員）
 - ✓ なかなか住民主体の取組としてうまく回らないことが多いので、誰が主体かという認識を共有する機会が大事だ。コミュニティソーシャルワーカー事業に取り組んだ際は厚労省の社会的援護の報告書に記載された方策を大阪府にあてはめた。当事者、行政、支援者の課題という3軸でヒアリングや課題出しをして、制度のはざまに落ちている人への支援を誰がどう取り組むか議論した。ヒアリングは当事者だけに話を聞いて、ステークホルダーや行政の課題が見えないことがある。ヒアリングをする際には3つの視点を位置づけて聞くとも良い。それぞれの立場でどの場面で主体性を発揮するかが明確になるので、「見つけ方」のパートにおいても、ただヒアリングやワークショップをするだけでなく、分析的なアプローチがあると良い。（領家委員）
 - ・ コミュニティナースの取組をしている中で住民との関係が深まり、最近は生前贈与の依頼が来るようになった。集落の人に話聞くと疲弊した状況にあることがわかるので、数世代前のような状況に戻すことはできないが、今あるものを協力して使ってこうと話して取り組んでいる。自治体に対しては重層型支援事業になるよう相談している。行政はこれまでの重層型支援事業と違うかもしれないが、アウトカムは同じなので制度を応用してもらおうと依頼している。行政からの応援があると住民側の推進力が増す。（矢田委員）
 - ・ 基本的なフレームは良いが、それぞれのステップにおけるブロックはこれでいいのだろうかと思う。「見つけ方」は、会議形式というよりは会議を工夫する、などとなるかと思う。「作り方」はどうしてこの5つなのかは不思議に感じる。「続け方」は良いかと思う。「作り方」について、例えば居場所づくりであっても仕事や住まい、人材確保といった項目にもつながっていくのではないか。現状のラインナップが本当に良いのか議論の余地がある。また、この3つのフェーズはセオリーとしてはそうだが、順番もさまざまな可能性がある。たとえば、持っている地域資源から検討を始めることもよくある。取り組んでみると新しい資源に気づき、持続可能な運営につながるということもあると思うので、モデルの形もブロックのような積み上げではなく円環のように回るものかもしれない。行ったり来たりもするんだということを、補足でもいので説明が必要になるのではないか。（小泉委員）
 - ・ ISSUE や VISION、PURPOSE の検討が積み木モデルの中でどう位置づけられるのかわかるようになってきている必要がある。（原田参事官）
 - ・ メールなどでもご意見をいただきたい。（NTT）
4. モデル地方公共団体支援の進捗報告
- ・ 資料に基づき説明（NTT）

以上



地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティ
づくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業
第2回調査研究会

2021年10月4日 株式会社NTTデータ経営研究所

目次

1. 第1回研究会及び意見交換会の振り返り
2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について
3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の内容について
 - ①「生涯活躍のまち」のISSUE、VISION、PURPOSE
 - ②積み木モデル
4. モデル地方公共団体支援の進捗報告

1. 第1回研究会及び意見交換会の振り返り

1. 第1回研究会及び意見交換会の振り返り

第1回
(5/26)

テーマ：事例調査と仮説モデル案の提示

- 事業概要説明
- コミュニティモデルづくり先行事例調査と仮説モデル（案）提示
- モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示

【主な意見】

- 何のためのコミュニティづくりなのかpurposeやvisionを明確にすべき
- モデルはあくまでプロセスを示すべき
- 自治体職員や地域住民などの人材育成も重要な視点

意見交換
(8/18)

テーマ：居場所と役割を持つコミュニティのISSUEとVISION

- ISSUE・VISION・PURPOSE案の提示

【主な意見】

- 「孤独対策」の取組ではなく、自然と人が集まる仕組みが必要
- 交流の形として、静かな交流もある
- 1つの居場所がすべての価値を提供する必要はない

第2回
(10/4)

テーマ：コミュニティモデル構成案とモデル団体支援の中間報告

- コミュニティモデルの構成
- コミュニティモデルの内容案
- モデル地方公共団体支援の進捗報告

第3回でモデル案を示すため、今回モデルの構成および内容を議論

第3回
(12月頃
予定)

テーマ：コミュニティモデルver1.0（案）の提示

- コミュニティモデルver1.0（案）について
- モデル地方公共団体での取組とモデルへの還元
- モデル地方公共団体での計画策定促進方策

第4回
(2月頃
予定)

テーマ：とりまとめ

- 本年度の成果①：コミュニティモデルver1.0とその横展開の在り方
- 本年度の成果②：モデル地方公共団体の計画策定報告

1. 第1回研究会及び意見交換会の振り返り ①第1回研究会

第1回研究会（5月26日開催）での主なご意見

<コミュニティモデルの作り方>

① 何のためにコミュニティづくりをするのか**目的をはっきりさせるべき**

- purpose, visionを明確に。これができるとどういう世界になるのか共通認識を持つ（島田委員）
- 目的や大切にしたいことのビジュアルを共有する。（矢田委員）
- 何を目指してやるのかをプロセスに入れるべき（伊藤委員）
- 0次プロセスとして明確にする必要がある（領家委員）

② **モデルをつくるための“プロセス”について提示**すべき

- 支援に入る際はゴールモデルを提示するのではなく、自分たちがやりたいことの仮説を持たせて、何をやっていくかの「決め方」の支援をする（矢田委員）
- 理想的な状態の提示は無理がある。モデルに行きつくためのプロセスを提示し、複数の例示的な事例を見せるというやり方はある。（小泉委員）

<モデル地方公共団体支援との関係>

- ① 地域ごとに課題や地域資源が異なる中で、かちつとしたモデルを実践的に当てはめるというやりかたは難しい。**状況に応じて支援し、モデルに還元するようなやり方**が良い（小泉委員）

1. 第1回研究会及び意見交換会の振り返り ②意見交換会

意見交換会（8月18日開催）での主なご意見

発言者	ご意見
五十嵐座長	<p>（北海道当別町「ゆうゆう」の事例の写真を紹介。要介護2の男性高齢者と発達障害の子どもの囲碁の写真）</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 一般に多世代交流といういろんな世代が集まってみんなで笑顔というイメージだが、静かな交流もある。 ② 異なる質の者が交流することで、同質の者では生まれない役割が生まれ、新たな展開を生むきっかけにもなる。
島田委員	<p>3つの事例を紹介。</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 小さな地球プロジェクト@鴨川 棚田と里山と古民家 ② ばあちゃん食堂@うきは市 ばあちゃんに生きがいと収入を ③ こゆ財団@新富町 毎月定例のこゆ朝市
領家委員	<p>岸和田市の古民家カフェ「猿とモルターレ」でのまちライブラリーづくりを紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> • 各地域に古民家や農地など空間のストックと、地域の人々のストックがある。それをうまく繋げて取組が展開されていくことが重要。多様な人が集まる「場」も生涯活躍の目指すところではないか。
矢田委員	<p>2つの事例を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ① Share villageの中で、aeru satoyama@五城目の事例では、地元の高齢者に山を提供してもらい、共有財産として仮想村民が活用している。「寄り添い型」ではなく「山をよく知るじいちゃん」として寄ってくるので、おじいちゃんも出てきやすい。 ② 巻組@石巻は空き物件の活用だが、オーナーも貸して終わりではなく、建物にまつわるストーリーを教えたり、リノベに関わったりしている。地縁では作れなかった新しい出番を作っている。
五十嵐座長	<p>孤独探し・困りごと探しではなく、「価値探し」が重要。これまでの地縁型コミュニティだけでなく、テーマ型コミュニティや、異文化や多世代交流による新たな地縁型コミュニティもある。</p>
小泉委員	<ul style="list-style-type: none"> ① 居場所の中には「社会的居場所」と「個人的居場所」があり、ひとつの居場所がすべての価値をカバーする必要はない。 ② 各委員が提示された事例について、取組が誕生した経緯や、苦労した点について聞き取りをすることで今後の整理に生きるのではないかと。

2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の構成について

2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について

(1) モデルの目的

対象：地方公共団体

- 目的：①地方公共団体が、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりのために国が推進する「生涯活躍のまち」について理解し、取り組みたくなる
- ②「生涯活躍のまち」に取り組みたいと考えた団体が、実際に取組を始めるための実践的な手引きとして参照できる

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（R2.7内閣官房）が生涯活躍のまちのコンセプトや5つの機能、推進にあたっての留意点などを総合的、網羅的に示しており、本事業の成果物は「**実際に取組を進める**」ための手引きを目指す。

2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について

(2) モデルの構成

①モデルの構成パート

第1回研究会及び意見交換会における議論を踏まえて、まず生涯活躍のコミュニティづくりのISSUEとVISIONを提示する構成に変更

a.生涯活躍のまちのISSUE, VISION, PURPOSE

WHYのパート：
意見を踏まえて追加

b.生涯活躍のコミュニティづくりプロセスを示すモデル

HOWのパート：
第1回研究会で提示

c.具体的な先行事例

※最終的には、「生涯活躍のまち」のこれまでの経緯や考え方を解説する導入部分等も記載

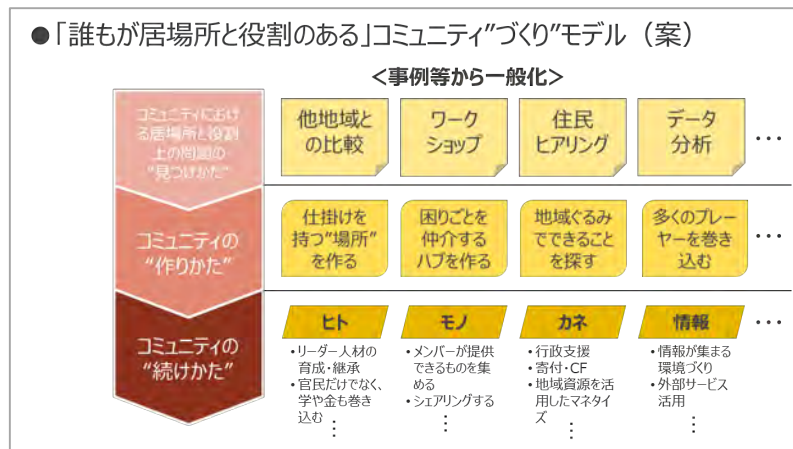
2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について

②生涯活躍のコミュニティづくりプロセスを示すモデル

- 定型のコミュニティを示すのではなく、プロセスごとにさまざまな手法を提示し、地域の状況に応じて選択することができるモデルとする
- 「問題の見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3ステップについては、それぞれ複数の大項目、小項目で構成し、一覧化するとともに、各項目については別途説明をもうける
- また、各プロセスにおける地方公共団体の果たすべき役割についても記載する
- これを「コミュニティづくりの積み木モデル」としたい

【第1回研究会提示資料】

【本日提示資料】※後ほど説明



2. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案)の構成について

【積み木モデルとする理由】

1) 地域によって異なる課題に対応可能

- 各地方公共団体、各地域によって、抱える問題や活用できるリソースは多様であることから、地域の実情に応じた手法を選択できる

2) コミュニティづくりの進捗に応じた対応が可能

- まだ課題もはっきりしていない地域、課題ははっきりしているが対応策が検討できていない地域、対応策まで検討したが持続性に問題がある地域など、フェーズに応じて活用が可能である

3) 自治体の役割を位置付け可能

- コミュニティづくりのプロセスに応じて、自治体がどのような役割を担うべきかを位置付けることができるため、自治体が参照しやすい

3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の内容について

① 生涯活躍のまちのISSUE, VISION, PURPOSE

3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の内容について

① 生涯活躍のまちのISSUE, VISION, PURPOSE ※モデルの第1章部分

【本パートの目的】

- 地方公共団体に対して、なぜ「生涯活躍のまち」に取り組むべきなのか理解していただく

【本パートの示し方】

- 生涯活躍のまちが解決したい問題 (ISSUE) 、目指すべき姿 (VISION) 、取り組む目的 (PURPOSE) について、写真を使って分かりやすく提示する
- 示しているものはあくまで例示であり、地域の状況によってISSUEもVISIONもさまざまであることを明記する

【意見交換会からの修正点】

- 意見交換会でのご意見を踏まえて、VISIONを2枚追加。
 - 1枚は、静かな交流や異なる性質の者の交流による新たな役割の付加について提示。
 - 1枚は、「孤独解決」ではなく、高齢者等が自然と参加するコミュニティについて提示。

3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の内容について

① 生涯活躍のまちのISSUE, VISION, PURPOSE

「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン



～新たな全世代・全員活躍型のコミュニティづくり～

令和2年7月
内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局

全国の地方公共団体に取り組む意義を理解していただくため、この基本コンセプトを”写真を使いながら”分かりやすく解説したい

「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン(2020)

○基本コンセプト

～「誰もが居場所と役割を持って活躍できるコミュニティづくり」～

「生涯活躍のまち」は女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すものです。

多くの地方公共団体において、人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、コミュニティの希薄化が課題として挙げられる中、「生涯活躍のまち」は立地や大小を問わず、コミュニティづくりを課題としている全ての地方公共団体にとって、活用可能な施策といえます。

○従前の「生涯活躍のまち」との違い

～「中高年齢者を対象とした移住を包含した新たな「生涯活躍のまち」～

第1期まち・ひと・しごと創生総合戦略における「生涯活躍のまち」は、①東京圏をはじめとした大都市の中高年齢者の地方への移住の希望を叶えるため、②地方へのひとの流れづくりの一環として取組を推進し、③東京圏の高齢化問題への対応を図るというコンセプトのもと、「中高年齢者が希望に応じて地方や「まちなか」に移り住み、地域の多世代の住民と交流しながら、生涯学習・就業・ボランティア等を通じて健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けることができるような地域づくりを目指す取組」とされ、「中高年齢者の住み替え・移住と活躍」を中心とした施策として位置づけられました。

しかし、成功事例といわれている各地の「生涯活躍のまち」の取組や類似の取組においては、多様な世代や人々がつながりを持ち、その中で役割をもって、生き生きと暮らしている地域コミュニティづくりを進めることにより、まちの魅力が向上し、結果として中高年齢者のみならず若者や子育て世代をはじめとした「ひと」を呼び込み、地域が活性化していることが、各種検討会等において報告されました。

**ISSUE:何が問題なのか？
何を解決したいのか？**

ISSUE : 何が問題なのか？何を解決したいのか？

人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、**コミュニティが希薄化**

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4○基本コンセプト から引用



コミュニティが希薄化しているとは？

- コミュニティから出ていく人がいる一方で入ってくる人がいない
- 住民が地域やコミュニティ内で活動しない
- 残る人も活性化を諦めている

ISSUE : 何が問題なのか？何を解決したいのか？

人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、**コミュニティが希薄化**

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



コミュニティが希薄化しているとは？

- 同世代のつながりはあるが縦のつながりがない
- 施設入所や子供の居住地への引っ越しなどにより孤立化する人がいる
- 支援者や家族との関係構築が困難

ISSUE : 何が問題なのか？何を解決したいのか？

人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、**コミュニティが希薄化**

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



コミュニティが希薄化しているとは？

- 子育て中の親の孤立
- 親同士のコミュニケーションの場や機会の不足
- 子育ての不安を相談・解消する仕組みがない

ISSUE : 何が問題なのか？何を解決したいのか？

人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、**コミュニティが希薄化**

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



コミュニティが希薄化しているとは？

- 老々介護世帯の孤立化
- 仏壇問題等により空き家活用が進まない
- 空き家や耕作放棄地に対する周辺住民の不安

VISION: 目指すべき「生涯活躍の まちづくり」とは？

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 中高年齢層が経験やスキルを活かせる場所がある
- これまで接点がなかった人・世代同士のつながりが生まれる
- 共働き世帯やシングルマザーが安心して子供を預けられる場所がある
- こどもにとって家、学校以外に気軽に立ち寄れるサードプレイスがある

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 高齢者が日常のちょっとしたことでも気軽に相談できる相手がいる
- 地域住民が空き時間を使って簡単なお手伝いができる
- 家族には頼みにくい雑事も少額でお願いできる仕組みがある

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの
※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 障がい者であることを意識せずに自然と交流できる
- 健常者と障がい者が互いに学び合っている
- 違う属性だと思い込んでいた人と接点を持てる

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 子育て世代が気軽に集まり、情報交換できる場所がある
- 先輩パパ・ママから新米パパ・ママに経験を繋げる環境がある
- 子育て中のママでも稼げる機会や仕組みがある

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 空き家を活用したい人を地域が前向きに手伝ってくれる
- 新しい人との出会いがある
- スキルがある人は、そのスキルを活かす機会がある
- スキルがなくても気軽に参加し、お手伝いができる仕掛けがある

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

意見交換会を
踏まえて追加

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 静かな交流を含めてそれぞれが心地よい居場所がある
- 世代や性別など異なる性質の者が交流することで新たな役割が生まれている
- 誰かの指示ではなく自然と交流が発生している

VISION : 目指すべき「生涯活躍のまちづくり」とは？

意見交換会を
踏まえて追加

女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すもの

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）p4〇基本コンセプト から引用



住みたいまちはこんなところ

- 高齢者が自発的に参加する場づくりができています
- 参加することで活躍の場が生まれてくる
- 支援する側・される側といった役割が固定化されていない

**PURPOSE:なぜ「生涯活躍のまち」
に取り組むのか？**

PURPOSE : なぜ「生涯活躍のまち」に取り組むのか？

PAIN

ISSUEからブレークダウンした「人」の痛み

- 相談できなく心細い
 - ひとりきりで寂しい
 - 張り合いがなくつまらない
 - 自分では役に立てない
 - 気遣いで疲れる
- などの**住民の心の曇り**

PURPOSE

住民の心の曇りを、居場所と役割のあるコミュニティの創出により晴らすこと

- 気軽に話ができる仕掛け・場所づくり
- 年齢などの属性を超えた交流
- 多様な生きがいの提案
- 誰でも活躍できる仕組み
- 自分らしくいることができる場所

3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の内容について

② コミュニティづくりの積み木モデルと事例紹介

3. 「コミュニティづくりの積み木モデル」(案) の内容について

② コミュニティづくりの積み木モデルと事例紹介 ※モデルの第2章部分

【本パートの目的】

- 地方公共団体に対して、**どのように**「誰もが居場所と役割のあるコミュニティ」づくりに取り組めばよいか理解していただく

【本パートの示し方】

- 「問題のを見つけ方」「コミュニティの作り方」「コミュニティの続け方」の3ステップについて、**それぞれ複数の大項目、小項目で構成し、一覧化するとともに、各項目について説明ページ**をもうける
- また、各プロセスにおける**地方公共団体の果たすべき役割**についても記載する

【第1回研究会からの修正点】

- モデル自治体支援や全国の先行事例から、各ステップの大項目・小項目を充実
- モデル自治体との意見交換を踏まえ、地方公共団体の果たすべき役割について記載

コミュニティづくりの積み木モデル（案）

- コミュニティづくりに正解はありません。地域ごとに異なる課題や状況に応じて、以下の手法（積み木）を活用し、地域オリジナルのコミュニティを積み上げ、独自の「生涯活躍のまち」を目指してください。
- 「生涯活躍のまち」は、中長期的に、Ⅱに記載する「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

ステップごとに活用できる手法



積み木の選び方・繋げ方 ※今後検討予定

コミュニティづくりの積み木モデル（案）

➤ モデル自治体支援を通して、積み木モデルにも手法を還元



構成要素の説明と事例紹介イメージ

Ⅱ .コミュニティ の“作りかた”

「交流・居場所」をつくる

- 気軽に寄れる場所をつくる
- 新たな賑わいをつくる
- 静かにただ居られる場所をつくる

● 気軽に寄れる場所をつくる

「支援する／されるための施設」ではなく、たとえば子連れにやさしいカフェづくりをすることにより、同じ悩みを抱えた子育て中の親が気軽に立ち寄れる仕掛けをもつ場所をつくる。

● 新たな賑わいをつくる

地域資源を活用した企画や、地域住民・企業による朝市などのイベントを通して、まちの新たな賑わいを創出し、地域内外の交流を活性化する。

構成要素の説明と事例紹介イメージ

● 静かにただ居られる場所をつくる

にぎやかに交流することを好む人がいる一方で、積極的な交流は望まない人もいることを踏まえ、あえて役割や交流を求めずに自由にいられる空間を提供する。

先行事例

子育て応援カフェ □□ (滋賀県長浜市)

取組概要

子育て中のママ・家族が気軽に集い、ホッとできる場所を目指して、実際に子育て中のママ目線でカフェを開設。

また、場所を活かして同じ境遇のママ・子ども同士のつながりを持てるような情報交換会やセミナー等を開催。加えて、ママのチャレンジを応援する教室開催や商品販売支援も実施。




ポイント

- ✓ 気軽に立ち寄ることができ、ママ同士のつながりが自然と生じる空間・機会を提供
- ✓ カフェという空間を活かし、イベント開催や、商品販売の場など、複数の目的に活用することで、多様な役割に発展する仕掛けを創出

合言葉は
Enjoy the mommy life!

思いっきり楽しんで子育てを。

- 合言葉に込めた想い -

 空間を提供	 こころのサポート	 ママの初めの一歩を応援
<ul style="list-style-type: none">◆ 子育て中のママが気軽に集える居る『おうち』のような空間を提供したい◆ もっと子育てがしやすい環境・より活気ある街を作りたい	<ul style="list-style-type: none">◆ 笑顔いっぱい楽しんで子育てをして、「ママ」であることの幸せをもっと感じて欲しい◆ 育児の不安やストレスを軽減させ、子育て家族の豊・引きこもり・虐待を少しでも防ぎたい	<ul style="list-style-type: none">◆ 夢に向かって頑張るママをサポートしたい◆ 妊娠中・出産後のどこかに外出したい！不安を誰かに相談したい！社会復帰したい！を応援したい

HP : <http://locoenjoythemommylife.com/>

自治体の役割説明イメージ

自治体の役割

地域との検討体制の構築

構想・計画の策定

● 地域との検討体制の構築

誰もが居場所と役割のあるコミュニティをつくるためには、現場の協力が不可欠である。問題を見つける段階から、自治体の支所、町内会、地域団体等、地域との協力体制を構築し、共に調査を進めていくことが重要である。

● 「生涯活躍のまち」構想・計画の策定

コミュニティの作り方を検討した後に、検討結果を「生涯活躍のまち」構想・計画に落とし込む必要がある。誰が、いつ、何をするのか、行政と民間との役割分担を含めて決めていくことで実効性が担保される。

地方公共団体における具体プロセス（例）

STEP1 庁内横断体制の構築（企画部門含む）

STEP2 「生涯活躍のまち」構成施策の立案

STEP3 庁内での意思決定

STEP4 「生涯活躍のまち」構想・計画の策定

STEP5 議会への報告・議論・パブリックコメント

計画をつくるなら...

支援措置の活用：地域再生計画について

地域再生制度の概要

地域再生法に基づき、地方公共団体が作成する「地域再生計画」を内閣総理大臣が認定し、認定計画に基づく措置を通じて、自主的・自立的な地域活力の再生に関する取組を支援。

<主な支援措置メニュー（抜粋）>

- ① 地方創生推進交付金
 - ② 地方創生拠点整備交付金
 - ③ 企業版ふるさと納税
 - ④ 「小さな拠点」形成に係る課税の特例
- 詳しくは、内閣官房・内閣府総合サイト参照

<https://www.chisou.go.jp/tiiki/tiikisaisei/index.html>

4. モデル地方公共団体支援の進捗報告

4. モデル地方公共団体の進捗報告

(1) 神奈川県横須賀市

●本事業で対象とする課題

退職後の高齢者（特に男性）が孤立しないよう、地縁やテーマ性をもつコミュニティにおいて居場所や役割を見つける仕組みの構築

●これまでの検討経緯

6/28、8/3、9/13協議実施

【課題仮説の設定】

- 浦賀地域の鴨居地区の住民を対象とし、地域のコミュニティセンターとともに調査を実施
- つながりを求めているがコミュニティには参加していない要因の仮説として以下を設定
 - ①そもそも知らない／きっかけがない
 - ②既存のコミュニティが、興味・関心と合わない
 - ③既存のコミュニティの活動時間が生活スタイルに合わない
 - ④既存のコミュニティに入りづらい

【これまでの調査と分かってきたこと】

- 町内会長・自治会長へのヒアリング
 - 町内会活動、地域活動の参加者は女性が多いが、会長のリーダーシップによって男性参加のコミュニティが形成されている例もある
- コミュニティセンターへのヒアリング
 - 各種講座の講師をできるだけ地元の人をお願いし、講座後の自主サークル化を促進している。その結果、料理講座から、男の料理教室（サークル）への発展などの事例がある。また、中途の参加者を増やすためには積極的な声掛けが必要。
- 地域SNSを活用したアンケート
 - 地域での趣味関連のコミュニティに対して、約8割が参加意向あり。

●今後の予定

	10月	11月	12月	1月	2月
フェーズ	問題を“見つける”フェーズ		コミュニティの“作りかた”“続けかた”を考え、決めるフェーズ		
実施事項	民生委員ヒアリング（孤立が懸念される方の現状）、活動中の自主グループヒアリング（きっかけ等）	調査結果を踏まえて、課題解決のために行政ができること、地域が出来ることを整理	実施計画策定（次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを定める）	4月以降の動きを確認	

4. モデル地方公共団体の進捗報告

(2) 新潟県長岡市川口地区

●本事業で対象とする課題

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現（川口地区での先行的な計画・実践・検証）

●これまでの検討経緯

7/29、8/26WG実施（事務局検討会9/9、9/16、10/1）

【課題の設定】

- 昨年度実施した地域の若者によるワークショップを踏まえ、以下の2つのテーマを検討
 - ① **空きスペースの活用** … 町内に空き家や空きスペースが増えてきているが十分に活用されていない
 - ② **町の人材を120%活用する仕組み** … 地域内のさまざまな仕事のニーズに対して地域内の人材を活用して経済循環

【これまでの検討事項】

- ① 空きスペースの活用に関して
 - 低未利用の土地・建物を活用する手法について、スペースシェアリングの事例を実践者からレクチャー
 - 地域内に空きスペースは多く、**一部のスペース、時間だけを貸す発想は可能性が広がることを確認**。
 - 今後、川口エンジン古民家部メンバーの人脈を活用し、どのような空き家・空きスペースが活用可能か調査を実施予定。
 - ② 町の人材を120%活用する仕組みに関して
 - 仕事をみんなで分け合う手法について、「しごとコンビニ®」の事例を実践者からレクチャー
 - 長岡市シルバー人材センター川口事務所が今年度末で事務員配置を廃止予定であり**新たな仕事マッチングのスキームが必要**
- ※コロナ禍や緊急性の観点から、**上記のうち②について重点的に検討を進める**。

●今後の予定

	10月	11月	12月	1月	2月
フェーズ	問題を“見つける”フェーズ		コミュニティの“作ricat”“続けricat”を考え、決めるフェーズ		
実施事項	①人材活用サービスのスキーム検討（現状把握、今後の動向把握、望ましいスキーム案を複数検討） ②エリア内の主要空きスペース調査	①「まず着手すべきこと」合意 ②中期的な見通しの合意 ③役割分担 ④実施計画の骨子案（1枚もの）	実施計画策定 （次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを決める）		4月以降の動きを確認

4. モデル地方公共団体の進捗報告

(3) 奈良県高取町

●本事業で対象とする課題

町内の人手不足や困りごとを、高齢者や子育て中の女性、農閑期の新規就農者等の活躍により解決する、新たな仕組みの構築

●これまでの検討経緯

6/29、7/26、9/27協議実施

【課題の設定】

- 町内の事業所や地域・地区： **人手不足・担い手不足**
- これまで担い手となってきたシルバー人材センターや社会福祉協議会ボランティア： **担い手の高齢化・固定化**
- 高齢者や子育て中の女性、新規就農者： **働きたいけど働けない**

【調査の結果】

- 町内事業所へのヒアリング
 - 小規模な事業所を中心に、新たな雇用ではなく、**必要な時に必要な分だけ手伝ってもらいたい、というニーズ**がある。軽作業や企画・広報をはじめとする仕事も出せる。働き手が希望する種類の仕事もある。
- シルバー人材センターや社会福祉協議会へのヒアリング
 - ニーズに十分に対応できていない。有償の方が頼みやすい、という声がある。「しごとコンビニ®」との連携に前向き。
- 町民へのヒアリング・アンケート
 - **短時間・都合のいい時間なら働きたいという人が一定数見込まれる**。お金だけでなく、人の役に立ちたい、つながりが欲しい、気分転換したい、といったニーズがある。事業所が出したい仕事を希望する人がいる。スキルアップのニーズがある。
 - コミュニティにつながりにくい層への**入口としての「しごと」の有効性**。人と一緒にいたい人も苦手な人も、参加でき、接点を持てる。

●今後の予定

	10月	11月	12月	1月	2月
フェーズ	コミュニティの“作りかた”“続けかた”を考え、決めるフェーズ				
実施事項	実施計画骨子案を策定する (実施主体・連携先ができること、行政が支援すべきことを整理し、次年度実施することを決める)		実施計画を策定する (次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするかを決める)		4月以降の動きを確認

4. モデル地方公共団体の進捗報告

(4) 滋賀県長浜市

●本事業で対象とする課題

「しごと」を通じて、女性が活躍でき、市外の人と市内の人や地域がつながる場と仕組みの、官民連携での構築

●これまでの検討経緯

6/29、7/16、9/22協議実施

【課題の設定】

- 民間の主体の取組の中からの課題意識を踏まえ、以下の2つのテーマを検討
 - ① 女性の活躍・しごとの応援 … 多様な女性の状況・ニーズに応じた支援策
 - ② サテライトオフィス・リモートワークを通じての都市部と地域の交流 … 副業人材と市内企業の連携、仕事を通じての市民との交流

【庁内横断・官民連携での検討から見えてきたもの】

- ① 女性の活躍・しごとの応援について
 - ▶ 各種支援の手前の意識改革が「ステップ・ゼロ」として必要。
 - ▶ 女性の非正規労働者が多く、要因分析の上、対策を検討する。
 - ▶ 保活応援等に参画する企業の業種の偏りがあり、ロールモデルづくりに取り組む。
 - ▶ 子育て支援カフェが身近な相談場所として、多くの女性の窓口としての役割を担っている。
- ② サテライトオフィス・リモートワークを通じての都市部と地域の交流について
 - ▶ 長浜市の魅力発掘を通じた、都市部のリモートワーカーと地域・市民との交流の推進方策の検討。
 - ▶ 市内企業が、これまで外注してきたものを、副業人材に依頼する、という意識転換を図る必要。
 - ▶ 市内の企業や人の意識改革を、取組の目的として打ち出さず、**地域と外部の交流を通じて気づきを得る形**で進められる可能性。

●今後の予定

	10月	11月	12月	1月	2月
フェーズ	コミュニティの“作りかた”“続けかた”を考え、決めるフェーズ				
実施事項	実施計画骨子案を策定する (実施主体や連携先ができること、行政が支援すべきことを整理し、今後、実施することを検討する)		実施計画を策定する (次年度以降、いつ、どこで、誰が、何をするのかを定める)		4月以降の動きを確認



NTT DATA

Trusted Global Innovator

参考資料3 第3回研究会議事概要及び資料

地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業

会 議 体	第3回研究会
日 時	2021年12月23日(木) 15時00分～17時00分
場 所	Web会議(ZOOM)
出 席 者 (敬称略、順不同)	<p><コミュニティづくり具体化支援調査事業研究会委員> 五十嵐 智嘉子(一般社団法人北海道総合研究調査会 理事長) 伊藤 淳司(NPO法人ETIC.ローカル事業部長) 小泉 秀樹(東京大学教授) 島田 由香(ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス合同会社 人事総務本部長) 矢田 明子(Community Nurse Company株式会社代表取締役) 領家 誠(生駒市地域活力創生部長)</p> <p><内閣官房> 原田 浩一(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官) 大河原 竜(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 馬場 和弘(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐) 山口 涼(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局)</p> <p><事務局> 一般社団法人つながる地域づくり研究所 一井、林 株式会社NTTデータ経営研究所(以下、NTT) 江井、古謝、安生、久保</p>
議 事 項 目	1 開会 2 議事 (1) これまでの振り返り (2) 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ 説明書」(案) について (3) モデル地方公共団体支援の進捗報告 3 今後のスケジュール 4 閉会
資 料	資料0 第3回議事次第 資料1 第3回研究会出席者 資料2 第3回研究会説明資料 資料3 生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ 説明書(案) 資料4 研究会委員名簿

議 事 内 容

1 これまでの振り返り

- ・ 資料に基づき説明（NTT）
- ・ これまでの意見を取り入れていただき、分かりやすくなったと思う。いくつかもっと良くなる点について意見したい。
Purpose の位置は 4 番目ではなく冒頭の方が良い。Why は Purpose と意味合いが近い。また Issue が先に来ていることも気になるので、Why→Purpose→Vision→Issue という流れにする方が良い。
これまでの研究会では、従来のアプローチと大幅に異なる流れだと自治体の職員も困ってしまうのではないかという意見もあり、Issue から始める検討もされた。しかし考え方やアプローチについても、パラダイムが変わる程のものでないと本当に生涯活躍のまちを実現させることはできないのではないか。Issue から始めないアプローチを通じて、自治体職員の仕事の仕方も変わっていくのではないか。
Issue は「What」でもある。What の中の望む未来像が Vision であり、Vision と現状のギャップが Issue になる。関係性を分かるように表現していただくと良い。（島田委員）
 - ✓ 流れは島田委員ご提案で良いと思う。
自治体職員がこのアプローチを使う際、議論をする中でどうしたら良いか悩むこともある。その際、Purpose に立ち戻るといいう手引がないと使いこなせないのではないか。（矢田委員）
 - ✓ この手引をどう使うか自体の説明書が 1 枚あったほうがわかりやすい。（五十嵐座長）
 - ✓ 島田委員ご提案の流れで良いと思う。
積み木アプローチは、個別の事業開始前の政策段階での議論に使うものなのか、事業段階の議論で使うものなのかのかわかりにくい。政策の議論であれば現状の流れでよいが、事業レベルでアプローチを使う場合、Why や Vision、Purpose は政策段階である程度方向性が固まった状態で、事業レベルの議論が始まる。（領家委員）
 - ✓ この資料そのものは、政策の議論を地域資源などに応じて事業レベルに落とす際に活用するものだ。具体的に、どのような段階にあてはめるかは、モデル自治体の取組を参照していただくという作りだ。
P 5 で第 2 章の流れが整理されている。最終的に Purpose と決めているというより、どこからスタートしても、Why、Issue、Vision、Purpose、How は必ず押さえる必要があるという表現がされている。どの段階においても、自治体の職員が悩んだり困った時は Purpose に立ち戻れることをここで記載しておけば良い。（五十嵐座長）
 - ✓ 位置づけは皆さんのご指摘の流れで良いと思う。（伊藤委員）
 - ✓ 第 2 章の目的が 2 つ混ざってしまっている。一つはなぜこの生涯活躍に取り組む必要があるのかという必要性を説明する目的、もう一つは実際にどうやって Visioning するのかという手引書の内容がそれぞれ 1 つの章にある。
必要性の説明は別の章に記載し、具体的な方法を 2 章で記載したほうが良い。Issue から発想することや、Purpose（到達したい目標像）から始まることもあると思うが、いずれにせよ全体が循環しながら Visioning していくと記載すると良い。（小泉委員）
 - ✓ Vision が無いと、コミュニティを作り、続けるのは難しいし、長続きしない。後々修正してもよいので、まずは Vision をつくる必要があることが、第 2 章で記載されると良い。（小泉委員）
- ・ 資料で Purpose を「意味」としているが英語として誤っているので修正したほうが良い。（小泉委員）
 - ✓ Purpose は大いなる目的や存在意義という意味だ。「意味」と記載するのであればもう少し説明があったほうが良い。（島田委員）
- ・ 「見つけ方」が Issue の見つけ方になっているので、その前にどのようなまちづくりにしたいのかという検討が必要だ。関係者で集まって話すといった段階を踏まえ、Issue が何かを考えられると良い。（島田委員）
- ・ 全体的に、Well-being というキーワードとつながると感じるので、資料にも文言を記載しても良いのではないか。（島田委員）
- ・ 積み木のデザインについて、四角いブロックが整然と積まれている。丸や三角など色々な形や色のブロックが積まれている方が、見る方もコミュニティづくりは楽しいものだという印象を受けると思う。（島田委員）
- ・ アプローチに基づき、検討しようとする、自治体の職員は「課題というほどではないか」と感じて躊躇する事があると思う。創造的に Vision を設定をして良いことを推奨すると明記されている方が良い。「課題」と言われると、職員は既存の課題を当てはめなければいけないと考えてしまうのではないか。（矢田委員）
 - ✓ 明確な課題ではないが、自治体を感じる疑問や悩み解決に使って良いと記載してはどうか。（五十嵐座長）
- ・ 「生涯活躍のまち」と「誰もが居場所と役割のあるコミュニティづくり」は若干異なる。積み木アプローチや事例では、「誰もが居場所と役割のあるコミュニティづくり」を入口としている。（領家委員）
- ・ 生涯活躍のまちの枠組みを使った事業としてコミュニティをづくりに取り組む際、前提として Vision などを考えておく方が良いと明確に記載しておかないと、総合計画などの全体の議論の中で既に記載されている課題を引っ張ってきてしまう。

自治体は「誰もが居場所と役割のあるコミュニティづくり」のために積み木モデルを使うということ自体は納得する。しかし1章、2章から読んでいくと、全庁で取り組む必要があるように思えるにも関わらず、事例を見ると担当課レベルの事業が記載されていて混乱と思う。体制づくりの項目を見ると全庁体制で組むのかと思い、総合計画のレベルで考える必要があるのかと認識してしまう。コミュニティづくりは自治体の取り組むことで、その前段として Vision などの議論があると記載したほうが良い。(領家委員)

- ✓ 最終的な生涯活躍のまちとしては5つの機能を持って庁内横断的に実施してもらいたい、最初はひとつの部署で個別の Vision をもって取り組んでもらう。その際、積み木アプローチを活用して検討してもらう必要がある。展開していく段階で、既存の計画なども活用してもらおうが、現状のとりまとめでは既存の計画と新規の検討が混ざってしまっているので、うまく説明したい。(NTT)
- ✓ どの自治体でも総合計画の議論の中で、人口減少によるコミュニティの脆弱化の話題は出ているはずだ。どこに焦点を当ててコミュニティの再生に取り組むかを考えていく際、実際に自分たちの取組や強みを踏まえ、課題を組み合わせて街づくりをしてもらう。その街づくりに生涯活躍のまちという概念が合うのであれば、予算を活用しながら取り組んでいただく。この流れをまとめて整理する必要がある。(五十嵐座長)

これをどう展開していくかという観点で、アプローチや考えを紙の資料で示すだけでなく、このアプローチを使った研修会やディスカッションの場を持ったり、動画で解説したできると良い。(伊藤委員)

- ✓ 使い方は大変重要だ。この資料をテキストとして、研修などを実施できると良い。モデル自治体にリード役を担っていただくと、資料が生きたテキストになる。(小泉委員)
- ✓ 伝え方として、地方自治体が地方自治体を回する方法が一番効果的だ。現状は国から県、県から地方自治体という流れで情報が降りてきている。(矢田委員)
- ✓ 地方公共団体に話を聞くと、生涯活躍のまちに意欲はあるのに具体的な構想策定や実行に至っていない。そういった地方公共団体の取組を後押ししたい。すでに実施している地方公共団体の取組をご紹介するといった取組は行ってきているので、地方公共団体同士で集まり、積み木アプローチもテキストとして活用しながら経験を共有する場づくりにも取り組みたい。(原田参事官)

P13 のフェーズ I 「コミュニティにおける居場所と役割上の問題の見つけ方」で、誰の何の問題を見つめるのがわかりにくい。紹介されている4つの事例では、誰の何を解決したいかがすでにとても明確なので、これをどのように見つめるのがモデルではわかりづらい。地域を目指す姿や課題を設定した上で、誰の何を解決するのかを明確にした方が良い。

どの自治体でも問題に関しては、高齢者や子育て中の母親、引きこもり、障害者などのキーワードが出尽くしている、量的、質的な状況や地域資源などを踏まえて、解決方法の検討に進むことになると思う。

自治体にとって「誰もが居場所と役割にあるコミュニティづくり」は分かり易いが、「生涯活躍のまち」は少しわかりづらい。生駒市の総合計画でも「誰もが輝けるステージ」を目指しているが、わかりづらいという指摘を受ける。取組への意欲があっても事例が不足していたり、組み合わせ方がわからなかったりする。また、コンテンツ化されている「しごとコンビニ®」などの活動をどう生かすのか、自分たちのオリジナリティをどう生かすのかという内容を集中的に記載できると良い。(領家委員)

矢田委員からも指摘があったように、議論を進める中で困った際に立ち戻れる場所を作ること重要だ。例えば子ども食堂では、開始時は貧困層の子供を対象にしたが、取り組んでみると違う層に対して居場所や役割を提供することが良くある。(領家委員)

- ✓ P13 の一番上の四角に「住民と行政が」と書いてあるが、地域の課題を把握している地域の NPO などについても言及しておいた方が良い。

また、子ども食堂の例では、当初は貧困の子供に対応しようとしたが、結果的に貧困以外の様々な状況下の子供が集まったということがある。これは効果でもあると思う。例えば両親が共働きで金銭的には困っていないが、いつも一人でご飯食べているという子供も来るようになったというケースもある。そういった思いがけない効果を共有していくことが大事だ。メインの対象者を決めることも大事だがそれ以外を排除せず、生涯活躍のまちのキーワード「ごちゃまぜ」で時間や空間をシェアすることも必要だ。(五十嵐座長)

構成に改善の余地がある。2章と3章のつながりが悪く、いきなり How が示されている印象だ。

さきほど意見した第2章の趣旨については、ここではあくまでなぜ取り組むのかのバックグラウンドとして掲載した方が良い。Visioning も含めて How to は3章にまとめる。対象を明確にすることも大事だ。

ワーディングとして「作りかた」という表現は物を作る印象なので「始めかた」といった表現に修正するのも良いかと思う。

ブロックの図で、左の「見つけかた・作りかた・続けかた」はプロセスだが、作りかたと続けかたは必ずしも階層になっていないと感じる。続け方は資源の話で、作り方は何を作るのかという対象の話で、どちらもプロセスの話ではない。対案があるわけではなく、こ

れでも十分整理されていると思うが、ほかにアイデアがあれば検討していただきたい。(小泉委員)

- ✓ 「見つけかた」については、これまでのご指摘の通り問題の見つけ方がメインのような記載となっているので、to be についても見つけていく段階であるということを知りやすく修正したい。(NTT)
- ✓ 「作りかた」のブロックについて、「交流・居場所」や「活動・しごと」、「人材循環」は紹介されている 4 事例でも使われていて腑に落ちるが、「住まい」と「健康」はレベル感が異なる。「住まい」は続け方の「空間」に含まれると思うし「健康」は効果だと感じる。タイトルを「交流」、「活躍・しごと」、「人材循環」と同じレベルになるように修正したらよいのではないか。(領家委員)

・ 議論を踏まえ Visioning についてももう少し詰める必要があると感じた。

第 2 章でアプローチ方法で整理した方が良いというのは同意する。Issue から Vision を見つけるアプローチと、Purpose から Vision を見つけるアプローチは実際の生涯活躍のまちの事例でも見られる。Issue から見つけるアプローチは、若者が 10 年間ひとりも戻ってこないで戻ってこれるようにしようというパターンだ。Purpose から見つけるアプローチは、まず時制的に人生 100 年時代といったテーマを設定し、高齢者や子供世代の居場所づくりなどを掲げるといったパターンだ。事例でもそれぞれのアプローチがあるので、それぞれ整理したら良いと思った。

島田委員よりご指摘をいただいた Why→Issue→Vision→Purpose の順番について、最終的に Issue を見つけた後も、更に Vision を明確化するために戻るといったことではないかと思った。(内閣官房)

- ✓ 何かを始める際は、必ず最初に目的や方向性の設定をする。最初は暫定的であっても、進めながら明確化して充実していくことはあり得ると思う。Why から Purpose への一方向のベクトルという単純なプロセスではない。Vision を共有することが、事業を進める中で立ち位置を確認したり、立ち戻ったり、進展する中で不要になった事業を終了する時の決断にも役立つ。(小泉委員)
- ✓ Issue は見つけて終わりではなく、それを基に Vision や Purpose をブラッシュアップしていく。Issue とは何かを考えると、明確に貧困や孤食などのネガティブな状況をゼロに戻すものもあれば、本来であればこうなりたいという夢を見るような考え方もある。これまでも「枠ではなくワクワクを考えよう」と言ってきた。思考の枠を外して本当は何がどうであれば良いのかを考へることがないと、生涯活躍のまちも枠の中での最大化にとどまってしまう。(島田委員)
- ✓ Issue や Vision を行き来しながらブラッシュアップするものだとして理解した。「続けかた」の人・モノ・金などは資源であることや、見つけ方、続け方をは積み上げではなく、同時並行で行う表現もあるかと思ひ、工夫したい。また、Why や Vision など考えることも見つけ方に含まれることも記載したい。(原田参事官)

・ 全体として参事官からお話があった通り、作業を進めていきたい。そのほかの各論として 4 点を認識した。

- 1 点目、地方創生や生涯活躍のまちという枠組みで検討を進めているので、居場所や役割を軸に Purpose について再度検討をしていきたい。レベルのばらつきについても領家委員からご指摘をいただいているので反映させたい。
- 2 点目、積み木モデルの不足している点として、始めかたや積み上げかたについて、今日の議論を踏まえて、資料を充実させていきたい。
- 3 点目、完成した資料の使い方について、官房と相談しながらアイデア出しをしてきたい。
- 4 点目、見つけ方について、誰の何を解決するのかを分かるようにする必要があることや、Visioning が大事だというご指摘をいただいた。ターゲットについても詳細を説明していく。(NTT)

2 モデル地方公共団体支援の進捗報告

- ・ 資料に基づき説明 (NTT)
- ・ 4 自治体それぞれの概要がわかるページを 1 枚付けていただけると良い。自治体の規模や進め方、課題などをまとめて記載いただきたい。(五十嵐座長)

3 今後のスケジュール


- ・ 2 月に第 4 回研究会を開催したい。本日頂戴したご意見を踏まえ、官房と座長にご相談して作成していく。作成した資料の使い方等の検討としてモデル自治体以外からも意見を伺う予定だ。(NTT)

4 閉会

- ・ 年末のご多忙中、お時間を頂戴し感謝申し上げます。生涯活躍のまちや地域課題の解決手法を示し、実際の取組につなげてい

ただために、本日まで議論いただいた積み木アプローチを役立てたい。今後ご指導をいただき、全国的に生涯活躍のまち、誰もが居場所と役割のあるコミュニティづくりを推進していきたい。（原田参事官）

以上



地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティ
づくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業
第3回調査研究会

2021年12月23日 株式会社NTTデータ経営研究所

目次

1. これまでの振り返り
2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について
3. モデル地方公共団体支援の進捗報告

1. これまでの振り返り

1. これまでの振り返り

第1回 (5/26)

テーマ：事例調査と仮説モデル案の提示

- 事業概要説明
- コミュニティモデルづくり先行事例調査と仮説モデル（案）提示
- モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示

【主な意見】

- 何のためのコミュニティづくりなのかpurposeやvisionを明確にすべき
- モデルはあくまでプロセスを示すべき
- 自治体職員や地域住民などの人材育成も重要な視点

意見交換 (8/18)

テーマ：居場所と役割を持つコミュニティのISSUEとVISION

- ISSUE・VISION・PURPOSE案の提示

【主な意見】

- 「孤独対策」の取組ではなく、自然と人が集まる仕組みが必要
- 交流の形として、静かな交流もある
- 1つの居場所がすべての価値を提供する必要はない

第2回 (10/4)

テーマ：コミュニティモデル構成案とモデル団体支援の中間報告

- コミュニティモデルの構成
- コミュニティモデルの内容案
- モデル地方公共団体支援の進捗報告

【主な意見】

- ISSUEやPAINから始まるだけでなく、ビジョンから入ることもある
- 積み木モデルは分かりやすく、かつ臨機応変な形で示すべき
- 誰がどう動くのかについても重要な視点として入れるべき

第3回 (12/23)

テーマ：コミュニティモデル（案）の提示

- コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書（案）について
- モデル地方公共団体での計画策定状況

第4回で最終成果物を報告するため、今回で全国に示すコミュニティモデル案を議論

第4回 (2月頃 予定)

テーマ：とりまとめ

- 本年度の成果①：コミュニティモデルとその横展開の在り方
- 本年度の成果②：モデル地方公共団体の計画策定報告

1. これまでの振り返り

第2回研究会（10月4日開催）での主なご意見

①生涯活躍のまちのISSUE,VISION,PURPOSE

発言委員	要旨
1 島田委員	ダイバーシティの視点でいえば、 ジェンダーバランスが取れていないものが多いと感じる 。無理にバランスを取る必要はないが、何を伝えたいのかはしっかり記載してほしい。
2 領家委員	課題を抱えている人のコミュニティに加えて、 働く世代の前向きな形での地域参加 もある。ベッドタウンなどで、働く世代が地域に関わりたいがそういった機会や場がなくてもややもやしているということもある。
3 原田参事官	ISSUE,VISION,PURPOSEという 概念自体の相互関係 や、地方公共団体が検討するにあたりなぜこれを考えなければいけないのかといった説明が必要。
4 原田参事官	ISSUE,VISIONそれぞれのページに書かれている「コミュニティが希薄化しているとは?」、「住みたいまちとはこんなところ」ついて、 何らかの思想による類型化、カテゴライズ が必要。その分類、カテゴライズは、漏れなく重複なく、MECEであるとい。
5 小泉委員	ここで示しているものは あくまで例示であることをしっかり提示 すべき。「例えば、、、」とする、地域にこうした多様な問題があるのではないかと問いかけるなど。各ページ上部のガイドライン引用の箱は冗長なので省略し、 下の文言を強調するなど工夫 したほうが良い。
6 島田委員	ISSUEから入るともったいない、視座が低くなる可能性 がある。こんなまち、こんなコミュニティをつくりたいというものをしっかりハイライトする必要があるのではないか。
7 小泉委員	PAINを解消することが目的、というのは違和感がある。スタートポイントとして、楽しいからやるんだということもあり、それが結果として心の曇りを予防することがある。 コミュニティアプローチとしていかにPAINの状態にならないよう、PURPOSEに書かれていることに取り組むかが重要 だ。
8 島田委員	ポジティブ心理学の視点では、マイナスをゼロにするということは下位の考え方。人間として本来どうあるべきか、ということ意識して記載すべき。
9 領家委員	自治体目線としても、この生涯活躍のまちの目的はよく問題になる。ほかにももっと大変な課題があるのに、なぜこれをやるの?となる。そういう意味でも、 課題解決よりも、予防的な領域なんだという整理ができれば、自治体内部での合意形成が取りやすくなる 。

1. これまでの振り返り

②コミュニティモデルの積み木モデル

発言委員	要旨
1 伊藤委員（発表）	地域コーディネータが間に入ることによってスムーズにコミュニティが形成されることもある。
2 小泉委員	アメリカのコミュニティ政策でも、building blocksの考え方がある。積み上げということでは、 上下が逆のほうがよい のではないか。
3 島田委員	作り方を考える際に、 誰が主体になるのか、beingをはっきりさせる 必要がある。誰がその場をholdするのかを決めないとその後動いていかない。
4 領家委員	コミュニティづくりは文脈として住民主体になりがちであるが、実態は自治体が裏で関係者の調整等のお膳立てをしているケースも多い。最初に 誰がどう動くのか、という部分は明確にしておいた方がよい のではないか。
5 領家委員	実際に動かしていくためには、問題の見つけ方のところで、分析にアプローチとして 当事者・支援者・自治体の3つの視点が重要 である。
6 小泉委員	基本的なフレームは異論ない。それぞれのブロックはこれでいいのだろうかと思う。見つけ方のところ、会議形式というよりは、会議を工夫する、ではないか。続け方のリソース切りは理解。作り方については、 なぜこの5つなのか不思議な感じ がする。たとえば「すまい」は、人材循環の下の概念かもしれない。ほかにもバリエーションがあるのではないか。
7 小泉委員	プロセスについてこの3つのフェーズはセオリーとしてはそうだが、いろいろな可能性はある。リソースから考えて何をするか決めようということもよくある。そういう意味では円環モデルとか、 行ったり来たりということ、捕捉説明でもよいので示す 必要がある。
8 原田参事官	ISSUEやVISION、PURPOSEの検討が 積み木モデルの中でどう位置づけられるのか がわかるようにする必要がある。
9 伊藤委員	コミュニティの「続け方」のところに入っている「ヒト」の思いを継承するリーダー人材を育成するは、この段階というより、「作り方」のところの人材循環に入れるか「作り方」のところ新たに、 「担い手を育む」というブロック を入れてもよいのかなと思いました。
10 伊藤委員	自治体のこういうのにお金が出る期間って、3年ぐらいが多いですが仮に1年目「見つけ方」、2年目「作りかた」、3年目「続けかた」みたいなことで行くと、2年目ぐらいから継続性を考えると 誰がやるのかというの は 見えてるとよいな 、とか思いました。

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木 アプローチ説明書」(案) について

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

(1) 本事業で策定するモデルの目的

対象：地方公共団体

目的：①地方公共団体が、誰もが居場所と役割を持つコミュニティづくりのために国が推進する「生涯活躍のまち」について理解し、取り組みたくなる

②「生涯活躍のまち」に組みたいと考えた団体が、実際に取組を始めるための実践的な手引きとして参照できる

※「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（R2.7内閣官房）が生涯活躍のまちのコンセプトや5つの機能、推進にあたっての留意点などを総合的、網羅的に示しており、本事業の成果物は「**実際に取組を進める**」ための手引きを目指す。

(2) 名称

生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書

理由：「モデル」では定型的なコミュニティの型があるかのように捉えられてしまう可能性があるため、積み木を用いてそれぞれの地域や状況に応じたコミュニティをつくる「アプローチ」とし、その説明書として地方公共団体に展開したい。

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

(3) 構成

第1章 はじめに

- 1 - 1 「生涯活躍のまち」とは
- 1 - 2 本書の目的・構成

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

- 2 - 1 なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要なのか？ (WHY)
- 2 - 2 何が問題なのか？何を解決したいのか？ (ISSUE)
- 2 - 3 目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？ (VISION)
- 2 - 4 「生涯活躍のまち」づくりの意味 (PURPOSE)

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

- 3 - 1 どのように「生涯活躍のまち」コミュニティをつくれればよいのか？ (HOW)
- 3 - 2 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ
- 3 - 3 積み木アプローチを用いた積み上げ例
- 3 - 4 それぞれの積み木の詳細及び事例紹介
- 3 - 5 自治体の役割
- 3 - 6 モデル自治体における取組事例

第4章 おわりに

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

(4) 第2回研究会を踏まえた修正の方向性

① 第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

1) 解説ページを追加

- 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの必要性について記載
- 「生涯活躍のまちのガイドライン」を引用し、基本コンセプトに掲げた課題や目指すべき姿についてビジュアルで分かりやすく示す旨を記載

2) ISSUE、VISIONのページの構成を修正

- ガイドライン引用のハコは省略し、写真をまとめたうえで各写真のメッセージを記載
- それぞれの地域で課題や目指すべき姿は異なっており、ここで示すのはあくまで例示であることを記載
- 各写真について生涯活躍の5機能との関連性を記載。
- 目指すべき姿については、多様な属性の人の交流となっているため、属性の掛け算を記載

3) PURPOSEのページを修正

- PAINを解決することに加えて、そうした状況になることを「防ぐ」意味もある旨を記載

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

②第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

1) 解説ページを追加

- 「生涯活躍のまち」コミュニティをつくるための方法として、積み木アプローチが有効である旨を提示
- 積み木アプローチでの3つのフェーズを説明し、必ずしもこの手順ではなく、臨機応変に活用することが必要であることを記載
- 加えて、「誰が」主体的に動き「どのように」積み木を組み合わせるのかを決めることも重要であることを記載

2) 積み木アプローチの表現等を修正

- 見せ方は下から上へ。立体で。(積み木らしい見せ方)
- 積み木をつかむ「手」のイメージを挿入し、積み木の選択・積み上げのイメージを想起
- 誰が選ぶのか(主体)、どう選ぶのかについて全体を囲う形で記載
- 第2章で示した「課題と将来像」との関係性を記載

3) 積み木アプローチを用いた積み上げ例、モデル自治体における取組事例のページを追加

説明書案については資料3のとおり

※地方自治体に説明するにあたっての分かりやすさを重視

本日は、この説明書案について、自治体担当者に分かりやすく、
使いやすくするためのご意見をいただきたい。

3. モデル地方公共団体支援の進捗報告

4. モデル地方公共団体の進捗報告

(1) 神奈川県横須賀市

<課題>

都市部のベッドタウンにおいて、退職後の高齢者（特に男性）が社会で孤立しがちとなっている。孤立を防ぐために、地縁のコミュニティに加えて、テーマ性をもつコミュニティを広めることで、高齢者の居場所や役割を見つける仕組みの構築を図る。

<検討主体>

横須賀市福祉部地域福祉課地域力推進係

横須賀市浦賀行政センター

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
町内会長・自治会長ヒアリング	地域活動の参加者は女性が多いが、会長のリーダーシップと勧誘によって男性参加のコミュニティ例もある
コミュニティセンターヒアリング	各種講座の講師をできるだけ地元の人をお願いし、講座後の自主サークル化を促進している。その結果、料理講座から、男の料理教室（サークル）への発展などの事例がある。また、中途の参加者を増やすためには積極的な声掛けが必要。
地域サークルへのヒアリング	公式な講座終了後にサークル化。初心者から経験者まで幅広い方が入りやすい場合と、初期メンバーである程度固定化されている例あり
民生委員児童委員ヒアリング	一人暮らし高齢者の多くは女性で、積極的に活動するなど元気な人が多い。むしろ夫婦で暮らす高齢者（特に男性）の方が活動に参加しないため認知機能が低下して認知症になりやすい。妻が積極的に後押しする必要がある。
地域SNSを活用したアンケート	地域での趣味関連のコミュニティに対して約8割が参加意向あり。関心テーマは世代により異なる。世代によらずSNSでの情報発信を希望。

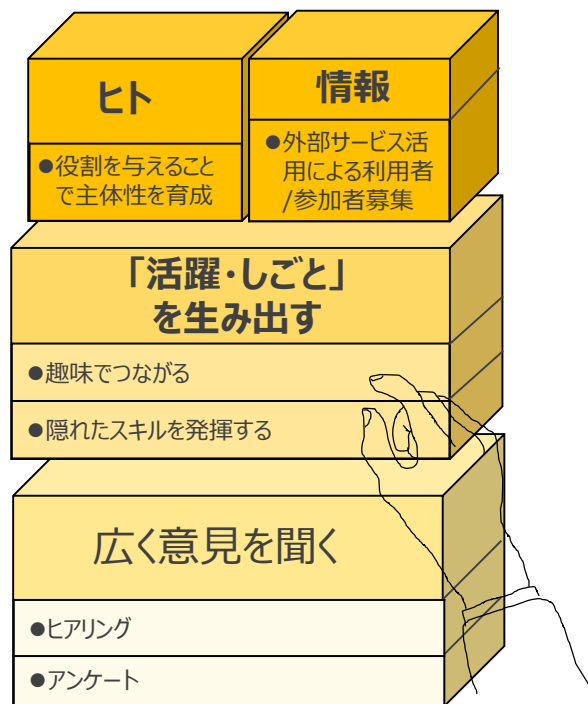
4. モデル地方公共団体の進捗報告

(1) 神奈川県横須賀市

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・地域のコミュニティセンターが核となりながら、住民の意向やスキルに沿った講座を企画し、自主サークル化をサポート。
- ・SNS等の新たな発信手法を用いて、継続的に多世代の参加を促進。

<積み木アプローチの使い方> ※今後具体化



I. 見つけた

- 町内会長・自治会長・コミュニティセンター職員などの地域のキーパーソンにヒアリング：

行政主導の講座から自主サークル化するパターンが多い。中途参加者増加のためには積極的な声掛けが必要

- 地域SNSを活用したアンケート：地域の趣味活動に参加したい意向8割。情報はSNS等で知りたいとの声7割、友人・知人からの誘い6割

II. 作りかた

- 住民の興味・関心をアンケートで発掘し、意向に合わせた講座をコミュニティセンターで企画
- 隠れたスキルが見つかった場合、講師としてお願いすることも検討
- 講座後の自主サークル化をサポート（空間の提供、情報発信支援等）

III. 続けかた

- 講座を受講した地域住民が中心となってサークル化を誘導
- 講座やサークル情報の発信は、これまでの回覧板等のアナログ手法に加えて、SNSやホームページを積極活用

4. モデル地方公共団体の進捗報告 (2) 新潟県長岡市川口地区

<課題>

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現（川口地区での先行的な計画・実践・検証）

- ①空きスペースの活用 … 町内に空き家や空きスペースが増えてきているが十分に活用されていない
- ②町の人材を120%活用する仕組み … 地域内のさまざまな仕事のニーズに対して地域内の人材を活用して経済循環

<検討主体>

長岡市地域振興戦略部

長岡市川口支所

川口エンジン古民家部（川口地区の若手住民主体の任意団体）

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
ワークショップ	地域の若者によるワークショップを踏まえ、「空きスペースの活用」と「町の人材を120%活用する仕組み」の2つの課題・テーマを決定
先進事例のヒアリング	①についてはシェアリングエコノミー協会からスペースシェアリングの事例を、②についてはつながる地域づくり研究所から「しごとコンビニ®」の事例をヒアリング
空き家・空きスペースの調査	川口エンジン古民家部メンバーがそれぞれのネットワークを活用して、川口地区の空き家・空きスペースを調査
シルバー人材センター川口事務所の現状調査	現在川口エリアでの仕事の発注等を担っているシルバー人材センター川口事務所について、令和3年度末で事務員配置を廃止し、本部（長岡市市街地）で事務処理を行うことを予定。今後の地域での円滑な人の手配（マッチング）のために川口地域の地域団体が担うスキームを検討

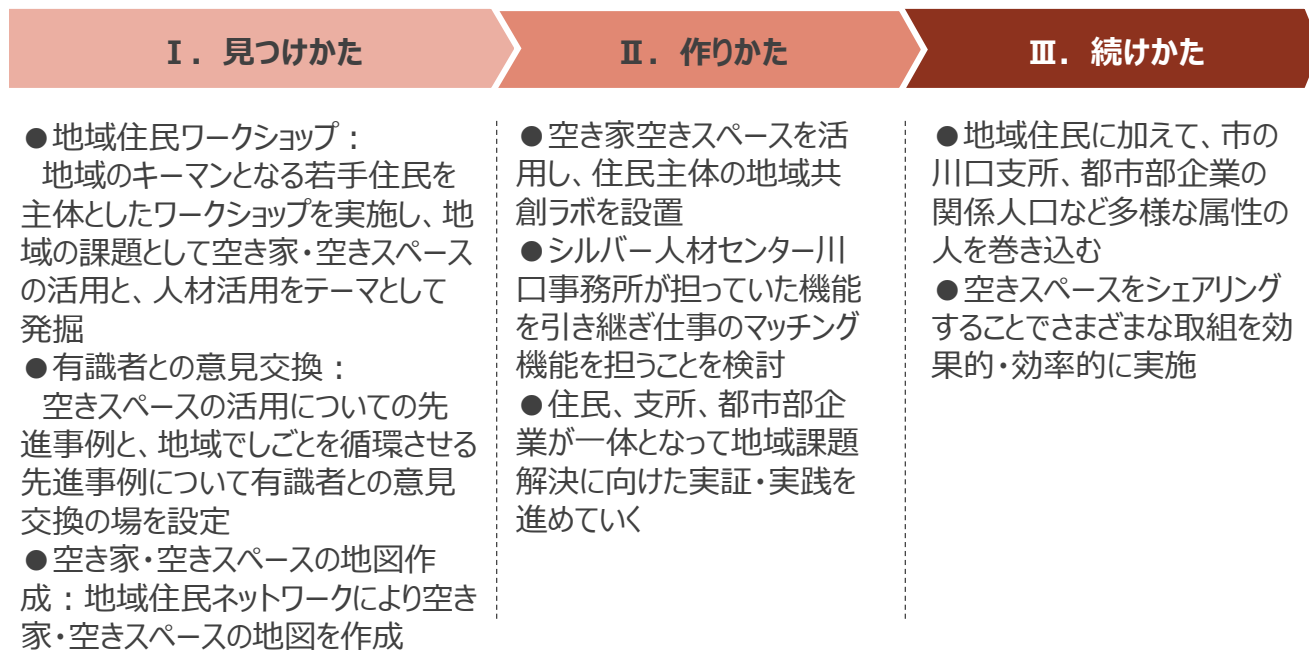
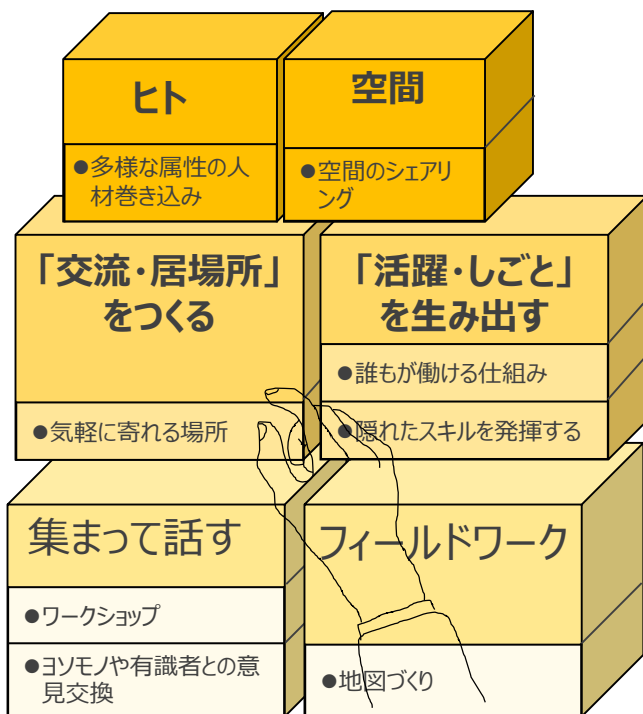
4. モデル地方公共団体の進捗報告

(2) 新潟県長岡市川口地区

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・川口地域において空き家・空きスペースを活用し、住民主体/公サポート型の地域共創ラボを設置
- ・「活躍・しごと」、「交流・居場所」、「住まい」、「健康」などの領域について、地域独自の問題・課題を抽出。
- ・住民、支所、都市部企業が一体となって、その解決手法を検討。実証実験や実事業化へと結び付けていく。
- ・令和3年度中に、運営組織を整えるとともに、「空きスペースの利活用」のテストを兼ねて、ラボをテスト的に開設（シェアリング）。

<積み木アプローチの使い方> ※今後具体化



4. モデル地方公共団体の進捗報告

(3) 滋賀県長浜市

<課題>

スキルがある女性の働く場づくりは一定進んでいるものの、スキルがない方、子育て等により短時間勤務を余儀なくされている方の活躍の場づくりが課題となっている。

また、サテライトオフィス整備等を進める中で、サテライトの利用者が関係人口として市内の人材や企業と連携できる仕組みを構築し、地域活性化につなげる取組が求められている。

<検討主体>

長浜市 総務部政策デザイン課、ふるさと移住交流室、市民協働部人権施策推進課、産業観光部商工振興課
合同会社LOCO、えきまち株式会社、長浜デザイン戦略室

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
ステークホルダー会議 参加者：長浜市各部署、合同会社LOCO、えきまち株式会社、長浜デザイン戦略室	以下の2つの柱で、今後の取組の方向性を見出した。 【女性の活躍・しごとの応援】 <ul style="list-style-type: none">・女性の参画についての意識変革「ステップゼロ」の取組・女性の非正規労働者が多いことの要因分析と対策・企業に対する啓発 【サテライトオフィス・リモートワークを通じての都市部と地域の交流】 <ul style="list-style-type: none">・長浜市らしい魅力の発掘を通じた、都市部のリモートワーカーと地域・市民との交流の推進・リモートワーカー（副業人材）と市内企業の連携の促進・事業の自立化に向けた検討
先進事例のヒアリング	「しごとコンビニ®」の事例をヒアリングし、LOCOの取組の参考とするとともに、特に、2つの柱に共通する課題である、企業の啓発について、業務の見直しや分解等の手法が有効と考えられる。
統計データによる現状把握	女性の就労は進んでおり、M字カーブの凹みも比較的緩やかだが、非正規労働者が多い。

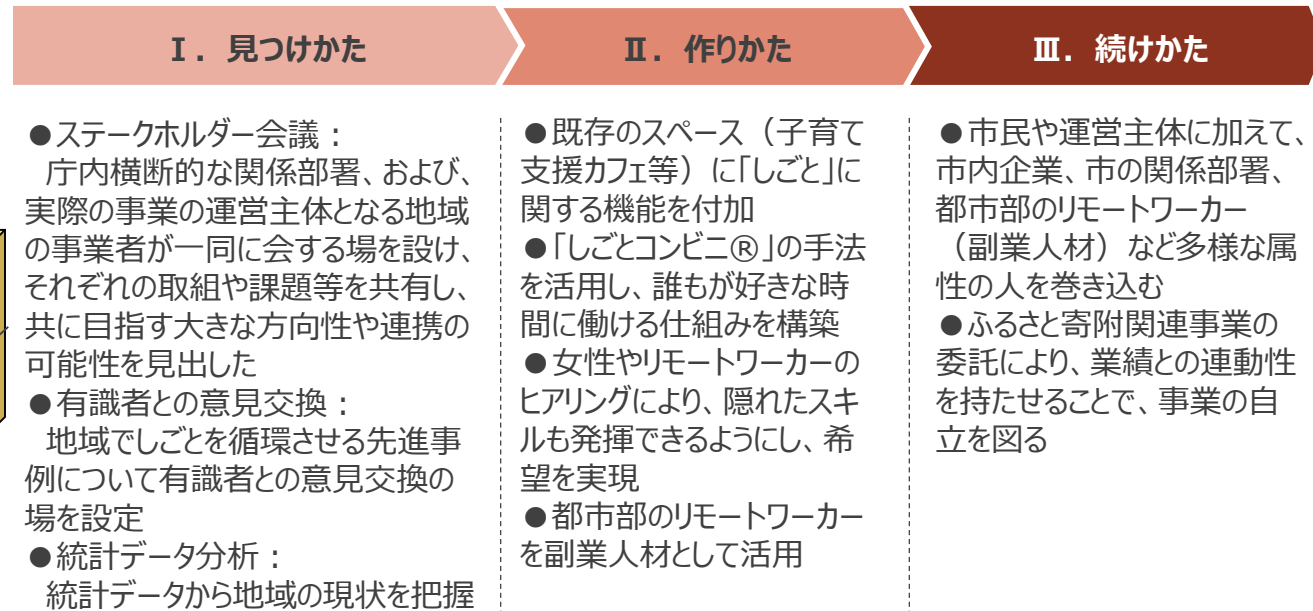
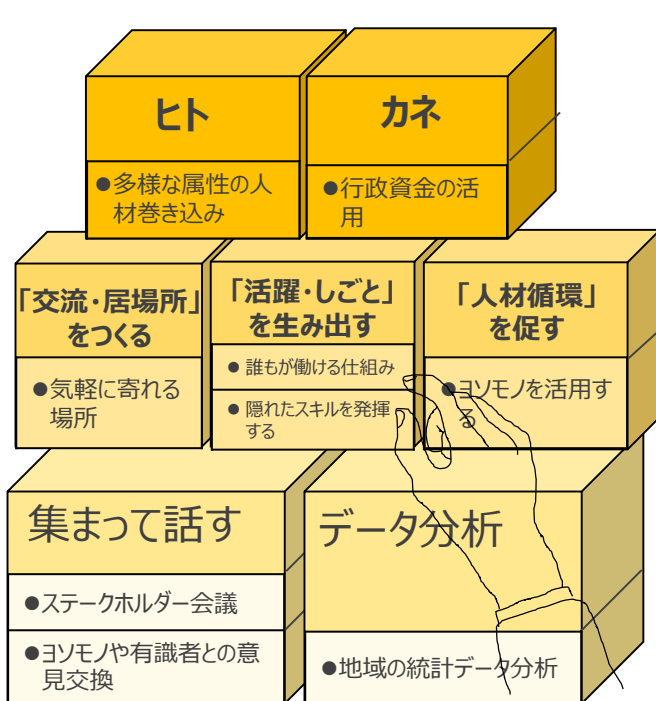
4. モデル地方公共団体の進捗報告

(3) 滋賀県長浜市

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・長浜市と合同会社LOCOが連携し、短時間就労が可能となる新たな場と仕組みを構築
- ・地元企業とリモートワーカーがつながる仕組み「SUKEDACHIプロジェクト」を、実証実験段階を踏まえ、自立可能なスキームを検討
- ・ふるさと納税の仕組みを活用し、女性・企業・リモートワーカーをつなぐ、地域内でのしごとの循環を創出

<積み木アプローチの使い方> ※今後具体化



4. モデル地方公共団体の進捗報告

(4) 奈良県高取町

<課題>

町内の事業所や地域・地区は、人手不足や担い手不足に悩んでおり、これまで担い手となってきたシルバー人材センターや社会福祉協議会ボランティアでは、メンバーの減少・高齢化・固定化が進んでいる。

一方で、高齢者や子育て中の女性、農閑期の新規就農者など、働きたいけど働けない町民がいることから、「しごとコンビニ®」により、双方の課題解決を図る。

<検討主体>

高取町総合政策課

高取町シルバー人材センター

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
町内事業所ヒアリング	人手不足の状況があり、それに伴う事業への影響（事業拡大ができない、事業承継ができない）も出てきている。雇用するまでのコストは負担できない、という課題も聞かれた。
高齢者・子育て中の女性ヒアリング	高齢者や子育て中の女性には、短時間、都合のいい時間に働きたい、というニーズがあるが、そういう働き方・仕事がないため、働けない。また、お金だけでなく、人の役に立ちたい、つながりが欲しい、気分転換したい、といったニーズがある。
シルバー人材センター・社会福祉協議会へのヒアリング	登録者の高齢化や固定化に伴う、担い手不足等の課題があり、新たな仕組みを構築する場合、これらと連携することで、より地域の課題解決につながると考えられる。
先進地視察	「しごとコンビニ®」の先進事例を視察し、実際の運営方法や課題等を把握した上で、高取町の実状に合わせた形を検討する参考にした。

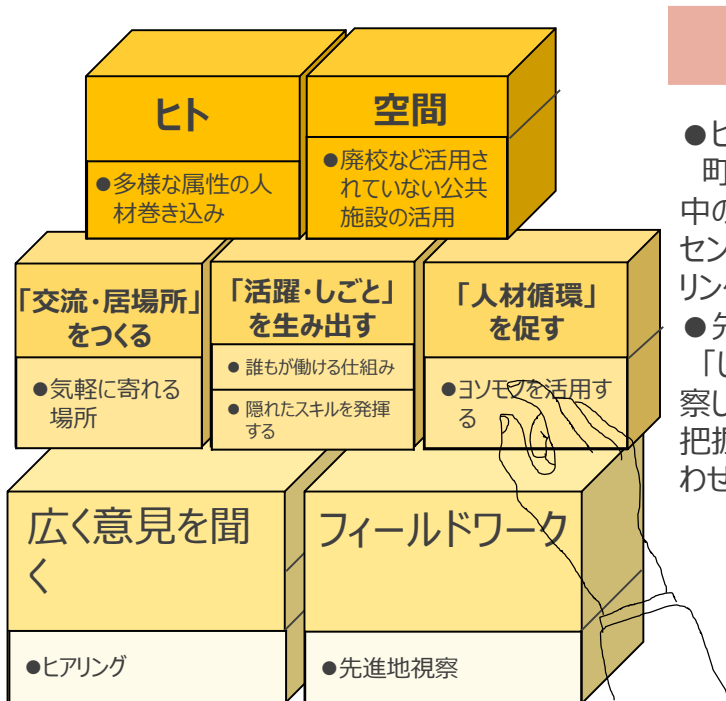
4. モデル地方公共団体の進捗報告

(4) 奈良県高取町

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携し、高取町らしい「しごとコンビニ®」を構築
- ・「活躍・しごと」を通じたコミュニティづくりという観点から、既存のコミュニティに参加していない町民もフォロー
- ・合わせて、「しごとコンビニ®」の実施場所であり地域の交流の核となる拠点を開設し、「交流・居場所」機能をさらに促進。
- ・企業版ふるさと納税の募集・活用及び都市部の企業人材との協働により「都市部との人材循環」の下で事業を推進

<積み木アプローチの使い方> ※今後具体化



I. 見つけた

- ヒアリング：
町内の事業所、高齢者や子育て中の女性等の町民、シルバー人材センターや社会福祉協議会へのヒアリングを行い、それぞれの課題を把握
- 先進地調査：
「しごとコンビニ®」の先進事例を視察し、実際の運営方法や課題等を把握した上で、高取町の実状に合わせた形を検討

II. 作りかた

- 拠点を開設し、人を配置することで、しごとを切り口にしながら、誰もが気軽に立ち寄れる場所を創出
- 「しごとコンビニ®」の手法を活用し、誰もが好きな時間に働ける仕組みを構築
- 高齢者や女性のヒアリングにより、隠れたスキルも発揮できるようにし、希望を実現する
- 企業版ふるさと納税の募集を通して、また既に連携している都市部企業の人材に、仕事獲得等の役割を担ってもらう

III. 続けた

- 町民に加えて、町内事業所、シルバー人材センター、社会福祉協議会、町の全部署、都市部企業の人材など多様な属性の人を巻き込む
- 拠点の開設に当たっては、遊休施設の活用を想定



NTT DATA

Trusted Global Innovator

生涯活躍のまち

コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書（案）



目次

第1章 はじめに

- 1 - 1 「生涯活躍のまち」とは
- 1 - 2 本書の目的・構成

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

- 2 - 1 なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要なのか？（WHY）
- 2 - 2 何が問題なのか？何を解決したいのか？（ISSUE）
- 2 - 3 目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？（VISION）
- 2 - 4 「生涯活躍のまち」づくりの意味（PURPOSE）

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

- 3 - 1 どのように「生涯活躍のまち」コミュニティをつくれればよいのか？（HOW）
- 3 - 2 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ
- 3 - 3 積み木アプローチを用いた積み上げ例
- 3 - 4 それぞれの積み木の詳細及び事例紹介
- 3 - 5 自治体の役割
- 3 - 6 モデル自治体における取組事例

第4章 おわりに

第1章 はじめに

第1章 はじめに

1-1. 「生涯活躍のまち」とは

急速な少子高齢化とともに、特に生産年齢人口の減少が進行する中、女性、高齢者、障がいのある方、ひきこもりの方など、一人ひとりの個性と多様性が尊重され、それぞれの希望に応じて役割や生きがいを持って、できる限り長く活躍できる地域コミュニティが実現されれば、地方における人口減少問題の改善、地域の消費需要の喚起や雇用の維持・創出、多世代との協働を通じた地域の活性化などの様々な効果が期待されます。

「生涯活躍のまち」は、あらゆる人々が、移住・定住、関係人口を問わず「居場所」と「役割」をもって「つながり」、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することで活性化するコミュニティづくりを目指す横断的な施策です。



安定的な事業運営基盤の確立

- 安定的・継続的にコミュニティの運営が図られるよう、これまでの調査研究事業の成果等を踏まえつつ、地域再生推進法人を含む「生涯活躍のまち」に関する事業運営を担う中核的な法人を支援

第1章 はじめに

1-1. 「生涯活躍のまち」とは

「生涯活躍のまち」（誰もが居場所と役割のあるコミュニティ）を実現するためには、「**交流・居場所**」、「**活躍・しごと**」、「**住まい**」、「**健康**」の機能を確保することが重要です。また、コミュニティを維持・発展させるために、人の流れづくりを促進し、**域外からコミュニティへの「人材循環」を進めること**が求められます。

各機能（4 + 1 = 5 機能）については、個々に対応するのではなく、「点から面へ」、エリア全体を視野に入れ、コミュニティ全体の魅力の向上を図る視点が必要不可欠です。

また、各機能の全てを新規に取り組む必要はなく、地域の特性や課題に応じて、既存の取組を生かしながら、中長期的にコミュニティ全体で各機能を満たしていくことが重要です。

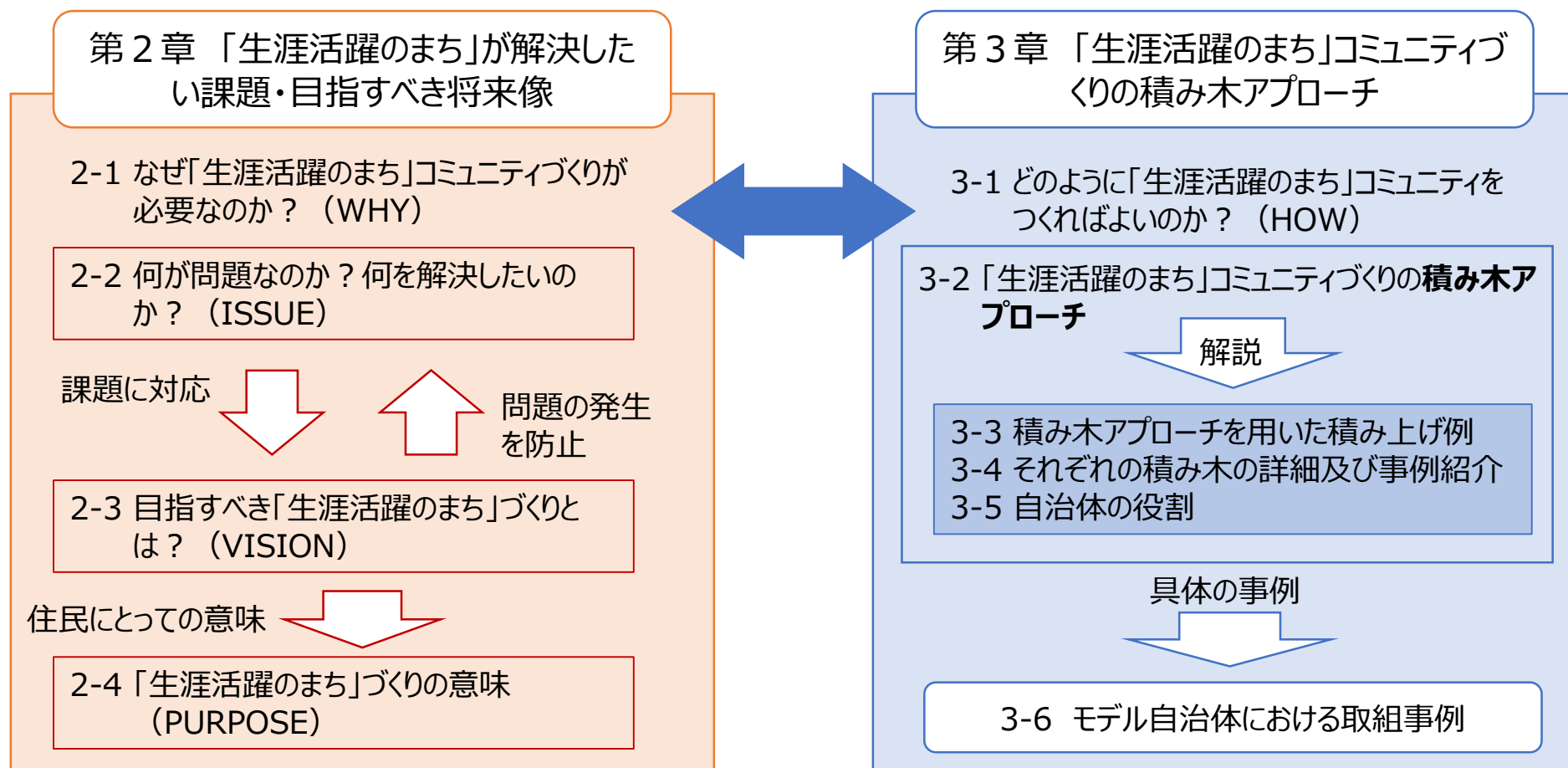
5つの機能	誰もが居場所と役割のあるコミュニティにおける意義
①交流・居場所	年齢や性別、障がいの有無を問わず、多世代、多属性の人が、それぞれの関わり方ができる機能と場（空間）が求められます。また、人と人をつなげるしかけ（工夫）により、さまざまな者同士の交流・協働が生まれます。
②活躍・しごと	コミュニティで「活躍」することは、あらゆる世代の多様な人々にとって生きがい、やりがいの支援につながります。雇用という形だけでなく、ボランティア等の社会参加的な活躍の場も重要です。あらゆる世代の多様な人々にとって「活躍」する場や機会があることで、主体的にコミュニティの担い手となることが期待されます。
③住まい	単身者や子育て世帯、高齢者、障がい者などあらゆる世代・世帯の希望に沿った暮らし方や住宅を選択できるようにすることで、長く、その地域で生活していけるようにすることが重要です。その際、ハード面だけではなく、居住者とコミュニティのエリア全体との関係性を重視したソフト面を勘案することが求められます。
④健康	心身両面における健康に加えて、人との関わりなどが充足されていることは、地域で生活していく上で重要です。そのため、地域包括ケアシステムとの連携をはじめ、全世代に対応した地域の実情に応じた疾病予防や健康づくりの推進が必要です。
⑤人材循環	地域に住む人々だけではなく、地域に必ずしも居住していない地域外の人々に対しても、地域のコミュニティに関わる担い手としての活躍を促すことで、コミュニティの活性化が期待できます。人の流れをより広義で捉え、都市部との人材循環など関係人口づくりを含めたコミュニティへの人の流れの取組が重要です。

第1章 はじめに

1-2. 本書の目的・構成

本説明書は、地方公共団体向けに、①「生涯活躍のまち」について理解し、取組の意識を高めるきっかけとなること、②実際に取組を始めるための実践的な手引きとなること、を目的としています。

そのため、「生涯活躍のまち」が目指す「誰もが居場所と役割のあるコミュニティ」がどのような課題を解決し、どのような姿を実現するのか、写真を示しながら解説したうえで、実際にコミュニティをつくるための「積み木アプローチ」を提示します。あわせて、積み木アプローチの使い方の実践例として、モデル自治体における取組事例をご紹介します。



第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい 課題・目指すべき将来像

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

2-1. なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要なのか？（WHY）

人口減少等に伴う地域コミュニティの希薄化、地域外の人々や企業と関わる機会の減少、まちの賑わいの喪失等へ対応するため、誰もが居場所と役割を持ち、生き生きと暮らせる社会の実現に向けて、「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要だと考えられます。

- 本章では、なぜ今「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが求められているのか、その背景と目的を解説します。
- 内閣官房が令和2年7月に公表した「『生涯活躍のまち』づくりに関するガイドライン」では、「生涯活躍のまち」の基本コンセプトについて、以下のとおり記載しています。

「生涯活躍のまち」は女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すものです。

多くの地方公共団体において、人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、コミュニティの希薄化が課題として挙げられる中、「生涯活躍のまち」は立地や大小を問わず、コミュニティづくりを課題としている全ての地方公共団体にとって、活用可能な施策といえます。

出所：「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）より抜粋
<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/shienmenu/index.html>

- ここでは、「生涯活躍のまち」が解決したい課題として「**人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、コミュニティが希薄化していること**」が提示されています。
- また、目指すべき姿については、「**女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくり**」としています。
- 次ページでは、より具体的なイメージを持っていただくため、写真を例示しながら、こうした「課題」と「目指すべき姿」について解説します。

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

2-2. 何が問題なのか？何を解決したいのか？（ISSUE）

「生涯活躍のまち」のガイドラインで示されている「コミュニティの希薄化」は、具体的にどのような問題となっているのでしょうか。ここで挙げているものはあくまで例示です。このような課題がみなさんのまちにも顕在化していませんか？

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
×	×			×



- コミュニティから出ていく人はいるが入ってくる人がいない
- 住民が地域やコミュニティ内で活動しない
- 残る人も活性化を諦めている

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
×	×			



- 子育て中の親の孤立
- 親同士のコミュニケーションの場や機会の不足
- 子育ての不安を相談・解消する仕組みがない

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
×	×		×	



- 同世代のつながりはあるが世代間のつながりがない
- 施設入所や子供の居住地への引っ越しなどにより孤立化する人がいる
- 支援者や家族との関係構築が困難

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
×		×		×



- 老々介護世帯の孤立化
- 仏壇問題等により空き家活用が進まない
- 空き家や耕作放棄地に対する周辺住民の不安

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

2-3. 目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？（VISION）

「生涯活躍のまち」のガイドラインで示されている「一人ひとりの個性と多様性が尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割をもってつながり、生涯を通じてアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくり」とは具体的にどのような姿でしょうか。ここで挙げているものはあくまで例示です。地域の課題や状況に応じたビジョンを描いてください。

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○



子ども×地域住民

- 中高年齢層が経験やスキルを活かせる場所がある
- これまで接点がなかった人・世代同士のつながりが生まれる
- 共働き世帯やシングルマザーが安心して子供を預けられる場所がある
- 子どもにとって家、学校以外に気軽に立ち寄れるサードプレイスがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○



健常者×障がい者

- 障がい者であることを意識せずに自然と交流できる
- 健常者と障がい者が互いに学び合っている
- 違う属性だと思い込んでいた人と接点を持てる

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○



高齢者×地域住民

- 高齢者が日常のちょっとしたことでも気軽に相談できる相手がいる
- 地域住民が空き時間を使って簡単なお手伝いができる
- 家族には頼みにくい雑事も少額でお願いできる仕組みがある

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

2-3. 目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？ (VISION)

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○			

先輩パパママ×後輩パパママ



- 子育て世代が気軽に集まり、情報交換できる場所がある
- 先輩パパ・ママから新米パパ・ママに経験を繋げる環境がある
- 子育て中のママでも稼げる機会や仕組がある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○		○

移住者×地元住民



- 空き家を活用したい人を地域が前向きに手伝ってくれる
- 新しい人との出会いがある
- スキルがある人は、そのスキルを活かす機会がある
- スキルがなくても気軽に参加し、お手伝いができる仕掛けがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○		○	

子ども×高齢者



- 静かな交流を含めてそれぞれが心地よい居場所がある
- 世代や性別など異なる性質の者が交流することで新たな役割が生まれている
- 誰かの指示ではなく自然と交流が発生している

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○		○	

高齢者×高齢者



- 高齢者が自発的に参加する場づくりができています
- 参加することで活躍の場が生まれてくる
- 支援する側・される側といった役割が固定化されていない

第2章 「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

2-4. 「生涯活躍のまち」づくりの意味（PURPOSE）

- 「生涯活躍のまち」づくりは、地域住民にとってどのような意味があるのでしょうか。
- これまで示した写真から見えてくるのは、**地域住民ひとりひとりの「心の曇り」**、これを「生涯活躍のまち」、すなわち誰もが居場所と役割のある**コミュニティの創出によって晴らすこと**や、またはそうしたコミュニティをつくることによって**心の曇りを防ぐこと**、これが「生涯活躍のまち」づくりの持つ意味だということです。
- 誰もが望む自分になれる“居場所”を提供することによって、**一人ひとりの心が曇ることなく、生き生きと暮らせる地域社会をつくる**ことが重要です。

住民の心の曇り

例えば、

- 相談できなく心細い
- ひとりきりで寂しい
- 張り合いがなくつまらない
- 自分では役に立てない
- 気遣いで疲れる

心の曇りを晴らす

心の曇りを防ぐ

「生涯活躍のまち」 コミュニティ

例えば、

- 気軽に話ができる仕掛け・場所
- 年齢などの属性を超えた交流
- 多様な生きがい・住まいの提案
- 誰でも活躍できる仕組み
- 自分らしくいることができる場所

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティ づくりの積み木アプローチ

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-1. どのように「生涯活躍のまち」コミュニティをつくれればよいのか（HOW）

「生涯活躍のまち」（誰もが居場所と役割のあるコミュニティ）をつくるためには、住民と行政が連携しながら地域の問題を見つけ、地域の課題や状況に応じたコミュニティをつくる「積み木アプローチ」が有効です。

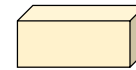
- 本章では、「誰もが居場所と役割のあるコミュニティ」をつくるための、「積み木アプローチ」を提示します。
- 積み木アプローチでは、**コミュニティづくりを3つのフェーズ（段階）に分けて、それぞれのフェーズで活用できる手法を一覧化**しています。

フェーズ	どのようなフェーズか
I. コミュニティにおける居場所と役割上の問題の“見つけた”	問題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決めるフェーズです（地域の課題と目指したい姿）
II. コミュニティの“作りかた”	誰が、いつ、何を、どのように実施するのかを決めるフェーズです
III. コミュニティの“続けかた”	コミュニティを続けるための資源をどう確保するのか計画するフェーズです

- 実際には、コミュニティづくりに正解はありません。
- **地域ごとに異なる多様な課題や状況に応じて、手法（積み木）を活用**し、地域オリジナルのコミュニティを積み上げ、独自の「「生涯活躍のまち」」を目指してください。
- また、3つのフェーズは時系列になっていますが、必ずしもこの順番に沿う必要もありません。地域で活用できる資源を調べながらどのようなコミュニティをつくるのかを考えることや、コミュニティの作り方を議論しながらあらためて地域の問題を把握するなど、臨機応変に活用してください。
- 加えて、「**誰が**」主体的に動き、「**どのように**」積み木を組み合わせるのか決めることも**重要**です。動き出す段階で、主体となる住民や団体を定めることができれば実行性が高まります。初期の段階で決まらない場合も、コミュニティづくりを進めうる上で常に主体を意識することが必要です。

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-2. 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

 活用できる積み木（手法）



第2章で提示した“なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要なのか？（WHY）” “何が問題なのか？何を解決したいのか？（ISSUE）” “目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？（VISION）” “「生涯活躍のまち」づくりの意味（PURPOSE）”の地域における仮説検討

コミュニティづくりを進めるにあたって：積み木アプローチを進めるにあたり、誰が主体的な役割を担うのか、そして積み木をどのように組み合わせるのかを決める必要がある。当初段階で決まらなくとも、コミュニティづくりを進めていく中で常に意識し、主体の発掘・育成を進めることが重要である。

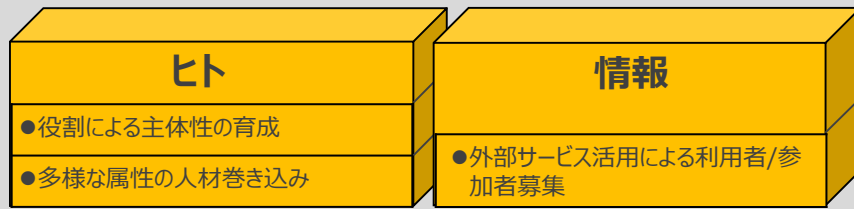
※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、Ⅱに記載する「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。 14

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

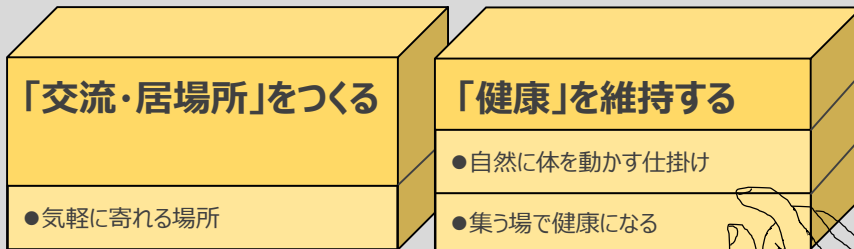
3-3. 積み木アプローチを用いた積み上げ例

例1) 3つのフェーズに沿って検討実施

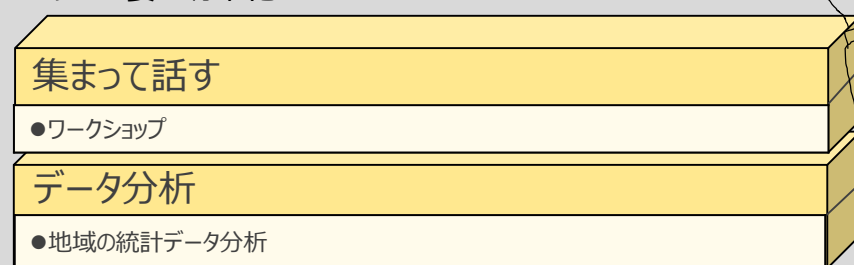
- ③取組のリーダーを交代で実施するなど役割を持たせるとともに、SNSを活用して幅広い年代にアプローチ



- ②高齢者向けの健康維持に関する取組を、気軽に立ち寄れる空間で実施

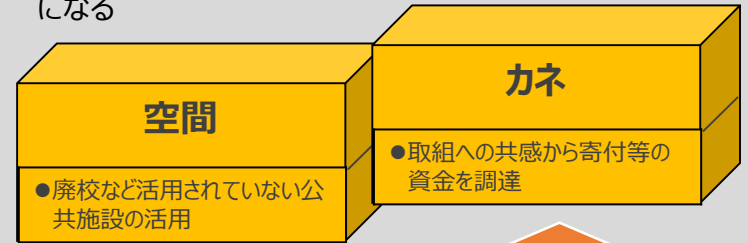


- ①統計データを踏まえて地域住民とワークショップを実施し、課題と目指すべき姿を明確化

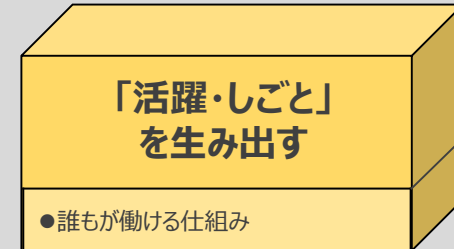


例2) 使える資源から検討実施

- ①廃校を無償で活用可能になる
④クラウドファンディングで改装資金を調達



- ③廃校を活用し、空いた時間に仕事ができる仕組みを創出



- ②廃校活用を前提として、どのような地域課題を解決する使い方ができるかをアンケート・ヒアリングで調査



Ⅲ 続けかた

Ⅱ 作りかた

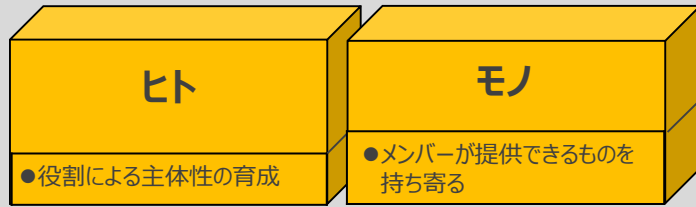
Ⅰ 見つけかた

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

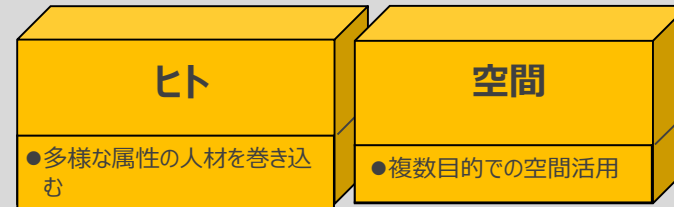
3-3. 積み木アプローチを用いた積み上げ例

例3) 臨機応変にフェーズを入れ替えながら検討実施 ※ I、II、IIIどのフェーズからの検討も可能

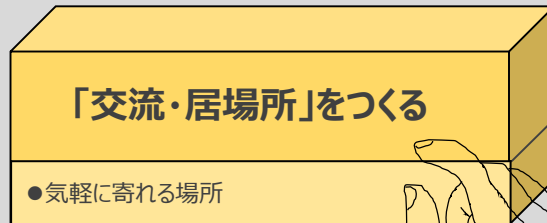
③いらなくなったおもちゃや子育てグッズのシェアリング、コミュニティ活動における役割明確化による主体性の育成



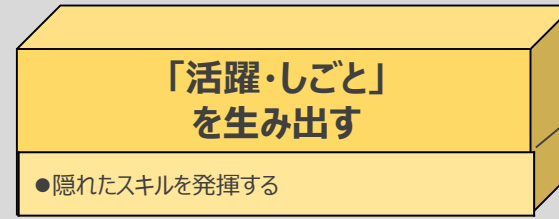
④活動を見た高齢者グループから連絡があり、カフェの利用と活動の連携について相談



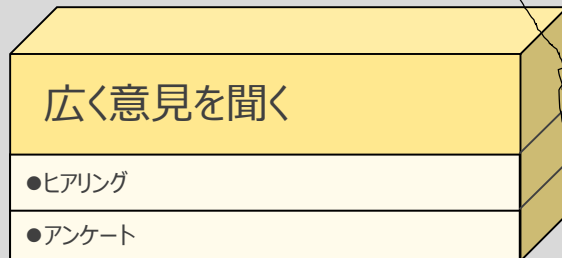
②地域のNPOと連携し、ママ友同士が気軽集まり、横のネットワークができるコミュニティカフェ・スペースを運営



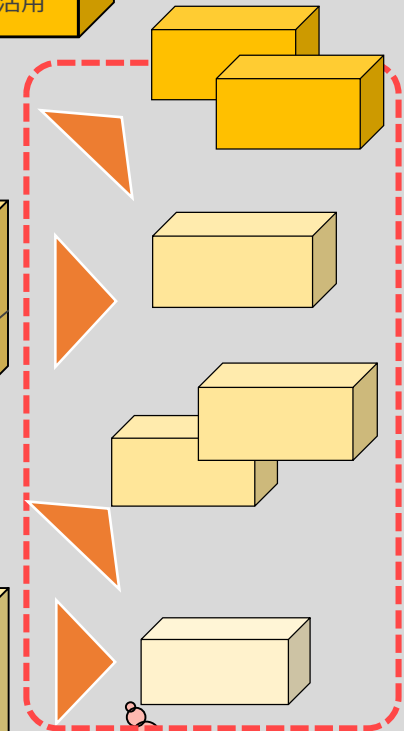
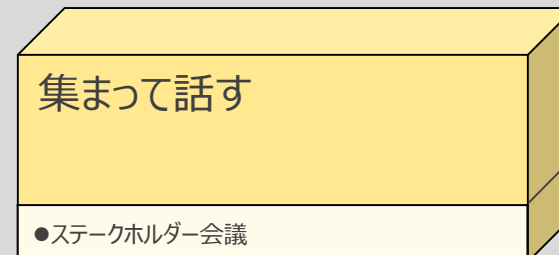
⑤高齢者グループによる子どもたちへの「昔のあそび」教室を開催



①保育所を通じたヒアリングやアンケートにより、子育て世帯が抱える課題を発見



⑥さらに、地域の会議においてコミュニティスペースの活用について意見を募集



さまざまな展開の可能性

III 続けかた

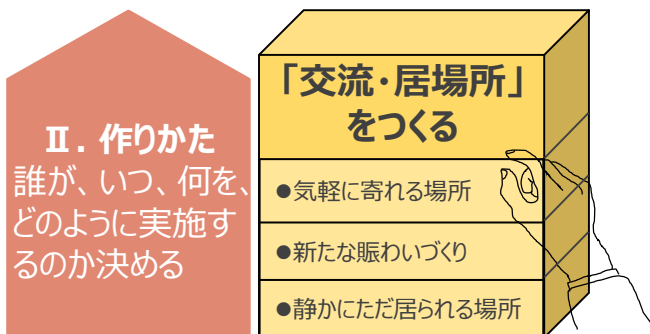
II 作りかた

I 見つけかた

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-4 各積み木の解説及び事例紹介

これが14ブロック×2枚で28ページ程度。



フェーズII. コミュニティの“作り方” 「交流・居場所」をつくる

●気軽に寄れる場所

- 「支援する／されるための施設」ではなく、気軽に立ち寄れる場所をつくる
- たとえば子供連れでも気兼ねなく入れるカフェづくりをすることにより、同じ悩みを抱えた子育て中の親が集える場所づくりができる。
- 敷居を感じさせないためには、初めてやってきた人でも交流できるようコーディネータ的な役割を担う人の配置も重要である。

●新たな賑わいづくり

- 地域資源を活用し、自然と人が集まる新たな賑わいをつくる
- たとえば、地域住民や地域の企業による朝市などのイベントを実施し、多様な人材が自然と集まり、交流する空間を生み出す。
- まちに新たな賑わいが生まれることで、地域外からの交流も期待される。

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-4 各積み木の解説及び事例紹介

● 静かにただ居られる場所

- にぎやかに交流することを好む人がいる一方で、積極的な交流を望まない人もいる。
- そうしたニーズを踏まえ、あえて役割や交流を求めずに、自由にいられる空間を提供する。
- 同じ空間の中でも、交流を促進するスペースと、一人でいられるスペースをつくることで、誰もが心地よい空間を生み出す。

先行事例

子育て応援カフェ □□ (滋賀県長浜市)

取組概要

子育て中のママ・家族が気軽に集い、ホッとできる場所を目指して、実際に子育て中のママ目線でカフェを開設。

また、場所を活かして同じ境遇のママ・子ども同士のつながりを持てるような情報交換会やセミナー等を開催。加えて、ママのチャレンジを応援する教室開催や商品販売支援も実施。




ポイント

- ✓ 気軽に立ち寄ることができ、ママ同士のつながりが自然と生じる空間・機会を提供
- ✓ カフェという空間を活かし、イベント開催や、商品販売の場など、複数の目的に活用することで、多様な役割に発展する仕掛けを創出

合言葉は
Enjoy the mommy life!

思いっきり楽しんで子育てを。

- 合言葉に込めた思い -

 空間を提供	 こころのサポート	 ママの初めの一歩を応援
<ul style="list-style-type: none">＊子供が気軽に集える居る『おうち』のような空間を提供したい＊もっと子育てがしやすい環境・より活気ある街を作りたい	<ul style="list-style-type: none">＊笑顔いっぱい楽しんで子育てをして、「ママ」であることの幸せをもっと感じて欲しい＊育児の不安やストレスを軽減させ、子育て家族の絆・引きこもり・虐待を少しでも防ぎたい	<ul style="list-style-type: none">＊夢に向かって頑張るママをサポートしたい＊妊娠中・出産後のどこかに逃出したい！不安を誰かに相談したい！社会復帰したい！を応援したい

HP : <http://locoenjoythemommylife.com/>

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-5 自治体の役割

- 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりにおいて、自治体は大きな役割を担っています。
- 自治体主導型であっても、地域住民主導型であっても、各フェーズにおいて以下のような自治体の役割があります。

I. 見つけかた

地域が抱えている課題やニーズ、地域の特性や地域資源等を把握します。

- 地域との検討体制の構築
- 各種統計データの提供
- ワークショップ、ヒアリング、アンケート等の実施

II. 作りかた

他部署説明を通じた庁内での意思決定、担当者整理を実施し、「生涯活躍のまち」づくりを具体化します。
また、議会や地域住民等対外的な説明を実施するほか、必要に応じて財源の手当てを検討します。

- 企画部門等を含む庁内横断の検討体制づくり
- 首長含む庁内での意思決定
- 「生涯活躍のまち」構想・計画の策定
- 予算要求
- 議会への説明

III. 続けかた

国等への財政補助申請、事業運営を担う民間事業者の外部人材登用を実施し、事業を支援します。

- 国庫補助等申請（カネ）
- 外部人材登用（ヒト）
- 遊休施設や広報媒体など、行政ツールの活用（空間、情報）
- 継続的な相談体制の維持

※地方公共団体の実情に合わせて、この順番にとらわれず、臨機応変に対応いただくことが重要です。例えば、外部人材を登用した際に、再度地域でのヒアリングを実施し、結果、新たな事業構想が生まれ、事業実施部署を庁内横断チームに巻き込む等循環型の発展も考えられます。

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-5 自治体の役割

こちらは3, 4枚程度

II. 作りかた

- 「生涯活躍のまち」コミュニティを行政主導で作る場合はもちろん、住民主導で作る場合であっても自治体が寄り添いながら取組を進めることは非常に大きな意味があります。
- このフェーズにおいて決めた「誰が、いつ、何を、どのように実施するのか」については、自治体の「生涯活躍のまち」構想・計画に落とし込むことによって、その後の実効性が担保されます。
- その際、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

地方公共団体における具体プロセス（例）

STEP1 庁内横断体制の構築（企画部門含む）

STEP2 「生涯活躍のまち」構成施策の立案

STEP3 庁内での意思決定

STEP4 「生涯活躍のまち」構想・計画の策定

STEP5 議会への報告・議論・パブリックコメント

計画をつくるなら...

支援措置の活用：地域再生計画について

地域再生制度の概要

地域再生法に基づき、地方公共団体が作成する「地域再生計画」を内閣総理大臣が認定し、認定計画に基づく措置を通じて、自主的・自立的な地域活力の再生に関する取組を支援。

<主な支援措置メニュー（抜粋）>

- ① 地方創生推進交付金
 - ② 地方創生拠点整備交付金
 - ③ 企業版ふるさと納税
 - ④ 「小さな拠点」形成に係る課税の特例
- 詳しくは、内閣官房・内閣府総合サイト参照

<https://www.chisou.go.jp/tiiki/tiikisaisei/index.html>

※「生涯活躍のまち」構想・計画については、ガイドライン掲載のひな形を参考にしてください。

https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/shienmenu/pdf/202007_shougai_guideline.pdf

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

3-6 モデル自治体における取組事例

4自治体分作成

①神奈川県横須賀市

<課題>

都市部のベッドタウンにおいて、退職後の高齢者（特に男性）が社会で孤立しがちとなっている。孤立を防ぐために、地縁のコミュニティに加えて、テーマ性をもつコミュニティを広めることで、高齢者の居場所や役割を見つめる仕組みの構築を図る。

<検討主体>

横須賀市福祉部地域福祉課地域力推進係
横須賀市浦賀行政センター

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
町内会長・自治会長ヒアリング	地域活動の参加者は女性が多いが、会長のリーダーシップと勧誘によって男性参加のコミュニティ例もある
コミュニティセンターヒアリング	各種講座の講師をできるだけ地元の人をお願いし、講座後の自主サークル化を促進している。その結果、料理講座から、男の料理教室（サークル）への発展などの事例がある。また、中途の参加者を増やすためには積極的な声掛けが必要。
地域サークルへのヒアリング	公式な講座終了後にサークル化。初心者から経験者まで幅広い方が入りやすい場合と、初期メンバーである程度固定化されている例あり
民生委員児童委員ヒアリング	一人暮らし高齢者の多くは女性で、積極的に活動するなど元気な人が多い。むしろ夫婦で暮らす高齢者（特に男性）の方が活動に参加しないため認知機能が低下して認知症になりやすい。妻が積極的に後押しする必要がある。
地域SNSを活用したアンケート	地域での趣味関連のコミュニティに対して約8割が参加意向あり。関心テーマは世代により異なる。世代によらずSNSでの情報発信を希望。

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

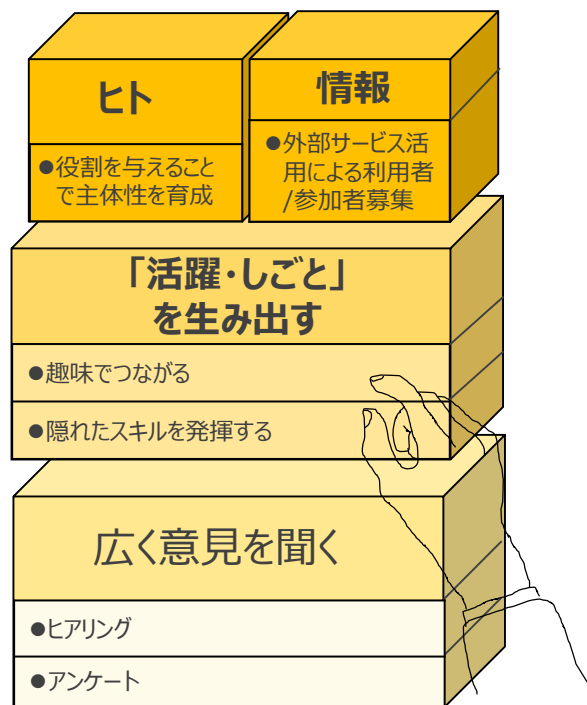
3-6 モデル自治体における取組事例

①神奈川県横須賀市

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・地域のコミュニティセンターが核となりながら、住民の意向やスキルに沿った講座を企画し、自主サークル化をサポート。
- ・SNS等の新たな発信手法を用いて、継続的に多世代の参加を促進。

<積み木アプローチの使い方> ※今後具体化



I. 見つけた

- 町内会長・自治会長・コミュニティセンター職員などの地域のキーパーソンにヒアリング：
行政主導の講座から自主サークル化するパターンが多い。中途参加者増加のためには積極的な声掛けが必要
- 地域SNSを活用したアンケート：
地域の趣味活動に参加したい意向8割。情報はSNS等で知りたいとの声7割、友人・知人からの誘い6割

II. 作りかた

- 住民の興味・関心をアンケートで発掘し、意向に合わせた講座をコミュニティセンターで企画
- 隠れたスキルが見つかった場合、講師としてお願いすることも検討
- 講座後の自主サークル化をサポート（空間の提供、情報発信支援等）

III. 続けかた

- 講座を受講した地域住民が中心となってサークル化を誘導
- 講座やサークル情報の発信は、これまでの回覧板等のアナログ手法に加えて、SNSやホームページを積極活用

第4章 おわりに

第4章 おわりに

メモ（地方公共団体でご利用ください。）

何が問題なのか？何を解決したいのか？ (ISSUE)	仮説を記載
目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？ (VISION)	仮説を記載

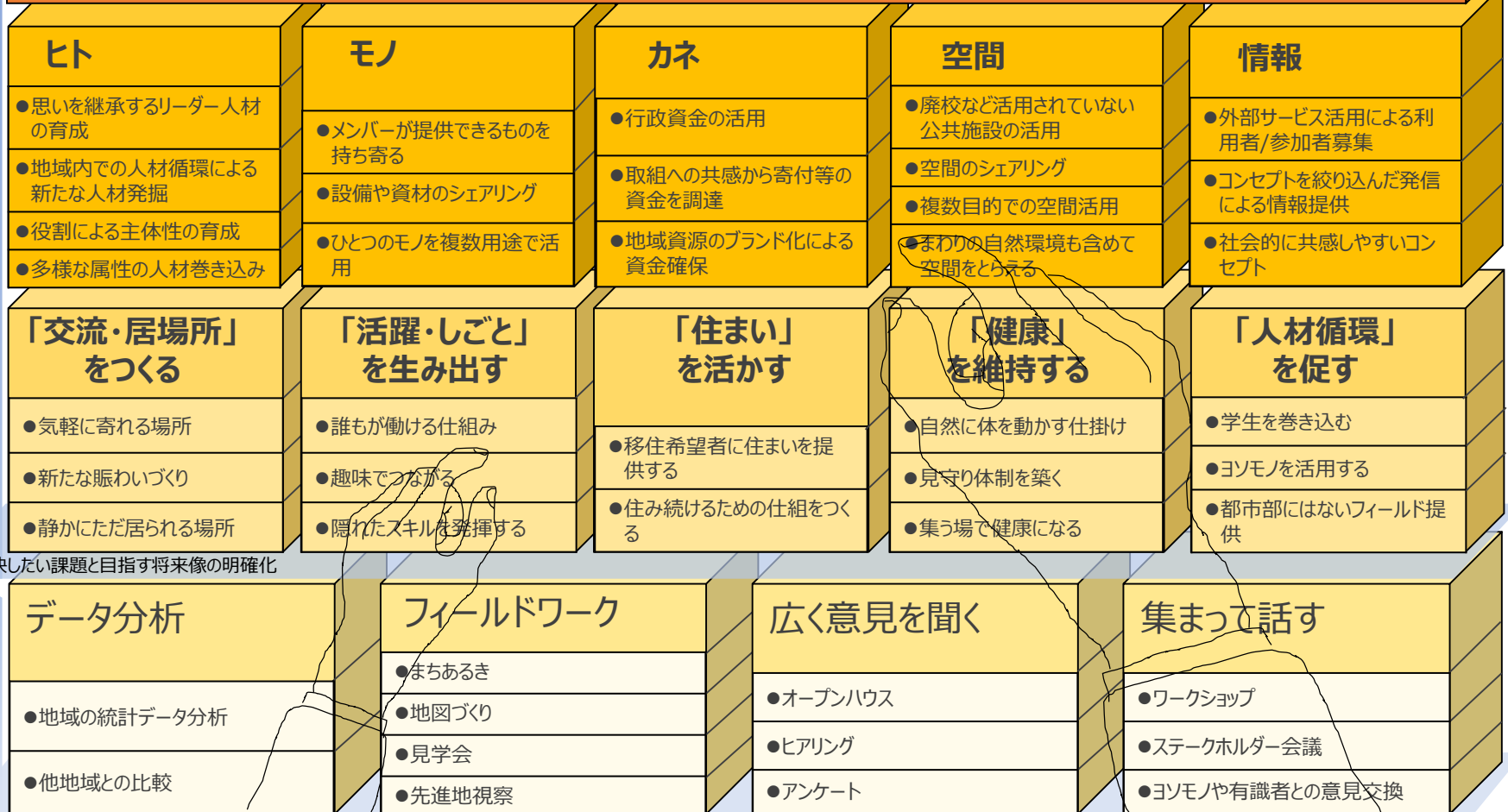
I.見つけかたのフェーズを経て明確化

フェーズ	積み木の種類	実施予定内容
I.見つけかた	データ分析	
	フィールドワーク	
	広く意見を聞く	
	集まって話す	

これより下は、I.見つけかたのフェーズで得られた結果に応じて記載してください。

II.作りかた	「交流・居場所」をつくる	
	「活躍・しごと」を生み出す	
	「住まい」を活かす	
	「健康」を維持する	
	「人材循環」を促す	
III.続けかた	ヒト	
	モノ	
	カネ	
	空間	
	情報	

「生涯活躍のまち」



課題解決・将来像の実現に向けた取組

解決したい課題と目指す将来像の明確化

仮説検証・具体化

第2章で提示した“なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが必要なのか？（WHY）” “何が問題なのか？何を解決したいのか？（ISSUE）” “目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？（VISION）” “「生涯活躍のまち」づくりの意味（PURPOSE）”の地域における仮説検討

Ⅲ. 続けかた
続けるための資源をどう確保するのか計画する

Ⅱ. 作りかた
誰が、いつ、何を、どのように実施するのか決める

Ⅰ. 見つけた問題がどこにあり、
どういう地域社会を実現したいのかを決める

コミュニティづくりを進めるにあたって：積み木アプローチを進めるにあたり、誰が主体的な役割を担うのか、そして積み木をどのように組み合わせるのかを決める必要がある。当初段階で決まらなくとも、コミュニティづくりを進めていく中で常に意識し、主体の発掘・育成を進めることが重要である。

※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、Ⅱに記載する「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

参考資料 4 第4回研究会議事概要及び資料

地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティづくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業

会 議 体	第4回研究会
日 時	2022年2月24日(木) 15時30分～17時15分
場 所	Web会議(ZOOM)
出 席 者 (敬称略、順不同)	<p><コミュニティづくり具体化支援調査事業研究会委員> 五十嵐 智嘉子(一般社団法人北海道総合研究調査会 理事長) 伊藤 淳司(NPO法人ETIC.ローカル事業部長) 小泉 秀樹(東京大学教授) 矢田 明子(Community Nurse Company株式会社代表取締役) 領家 誠(生駒市地域活力創生部長)</p> <p><内閣官房> 原田 浩一(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 内閣参事官) 大河原 竜(内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局 参事官補佐)</p> <p><事務局> 一般社団法人つながる地域づくり研究所 一井、林 株式会社NTTデータ経営研究所(以下、NTT) 古謝、安生、久保</p>
議 事 項 目	1 開会 2 議事 (1) これまでの振り返り (2) 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案)について (3) モデル地方公共団体支援報告 (4) 説明書の全国への展開について 3 閉会
資 料	資料1 第4回研究会出席者 資料2 第4回研究会説明資料 資料3 生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書(案) 資料4-1 横須賀市実施計画案 資料4-2 長岡市川口地域実施計画案 資料4-3 長浜市実施計画案 資料4-4 高取町実施計画案 資料5 研究会委員名簿

議 事 内 容

1 これまでの振り返り

- 資料に基づき説明（NTT）

2 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」（案）について

- 資料に基づき説明（NTT）

- 第3章の内容を2つに分けて章立てする変更を行った。生涯活躍のまちづくりを進める際、コンセプトから出発するパターンと、地域の課題から出発して取り組むパターンがある。これまでの研究会でも2つのパターンがあることをご指摘いただき、先行的に生涯活躍のまちづくりに取り組む事例も2つのパターンに分類できると考えた。

資料3 P13以降については、先行事例を掘り下げながら一般化した内容である。（大河原様）

- 大変よくできていると思う。問題点はない。どう活用できるのかがこれからの課題だと思う。（小泉委員）
- とても分かり易くなった。（矢田委員）
- 修正点はない。

資料3 P16のスライド内「目指すべき将来像」で書かれている内容はマスに関わる課題だが、生涯活躍のまちはミクロを積み上げる取組であり、結果がマスの課題にどう影響したのかが説明しづらい。マスの課題への影響は見えなくても、生涯活躍のまちづくりに取り組むことで「住みやすさの追求」など、地域や住民にメリットがあるということを示せると良い。（領家委員）

- まとめ方や構成は理解しやすくなったと思う。（伊藤委員）
- ビジョンを立ち返る場所だと明記したこと、ビジョン策定の方法が例示されている点が良い。課題を将来像に転換することが難しいと感じる地域も多い。ビジョンのとらえ方が例としてわかると、どうプロセスが役立つかわかる。自治体への説明時にもコメントとして伝えていただけると良い。（五十嵐座長）
- 領家委員ご指摘の通り、生涯活躍のまちに取り組んでも、人口減少が止まる、といった効果を得るのは難しい。マクロのデータと生涯活躍のまちな効果は示されないが、ミクロで見ると孤立していた人が地域のコミュニティに加わることができるようになったといった効果があるので、そうした効果がわかるように整理すると良い。（五十嵐座長）

3 モデル地方公共団体支援報告

- 資料に基づき説明（NTT）

- モデル団体は生涯活躍のまちな意向がある自治体から選んでいるのか。（五十嵐座長）

✓ 意向はあるが、実際の計画はないという団体を選んだ。4団体でも違いがあり、長岡、横須賀は個別の課題から入り、長浜、高取はコンセプトから入っていると思う。（NTT）

✓ 入り方によって違いはあったか。（五十嵐座長）

✓ 実施計画の策定という段階では、どちらの入り方であっても同じであった。横須賀市は個別の課題に個別の地域で取り組んでおり、当初担当者は今回の地域だけを対象に考えていた。今回の取組を横に広げていくという合意形成をしながら全体の実施計画にしていた。（NTT）

✓ 個別の課題から入って、広い範囲のコミュニティづくりに至っているというのは良いことだ。（五十嵐座長）

- 長岡、横須賀は課題から、長浜、高取はコンセプトからという違いは興味深い。別の視点で見ると、長岡と長浜は地域にいるプレイヤーを軸に取り組み、横須賀と高取はプレイヤーがおらず自治体中心に実施したという類型にもなる。実際には両方のパターンの自治体があるので、4件はバランスの良い事例だった。（領家委員）

✓ 高取もコーディネーターや事業主体が出てきているか。（五十嵐座長）

✓ 連携先としては社協やシルバー人材センターとは話をしているが、「しごとコンビニ®」の主体が無かったので法人を立ち上げた。（NTT）

✓ ヒアリングでニーズのある住民に話を聞きながら事業を進める中で、住民が主体的になっていった。（一井）

✓ 自治体は意欲があっても仕組みを作っても、住民にバトンタッチができずに困ることが多い。横展開の話になるが、仕組みの譲渡までのプロセスや出会いは多くの自治体が興味があると思う。真似してできるかは別だが、参考になる。（領家委員）

✓ 説明書だけだと行間にあるプロセスがわからないが、重要な点だ。だからこそ資料の展開の仕方が大切になる。（五十嵐座長）

- 資料4と資料3、それぞれで事例が紹介されている。資料3の5章にはケーススタディから読み取れたことのエッセンスとして、モデル自治体として取り組んだ成果のポイントが記載されていると良い。（小泉委員）

✓ 4つのモデル自治体から得た類似点や事業継続のためのポイントを一枚にまとめるのではいかがか。（五十嵐座長）

✓ 章立てを事前に知っていたので、説明を聞きながら積み木の関連を想像できていたが、初めて見た人には何がどうつながっているかわからないと思う。1枚にポイントをまとめるよりも、資料の中で視覚的に紐づけられているほうが資料として使い

易いのではないか。(矢田委員)

- ✓ それぞれの要点について考えたい。4つをまとめるのか、それぞれを示すのかは検討したい。(NTT)
- ✓ 体制や主体の作り方は行政の課題でもあるので、記載があると行政も分かり易い。(五十嵐座長)
- ✓ 4自治体すべてが主体づくりまで取り組んでいる状況ではないので、自治体によって記載する内容は変わると考えている。(NTT)

4 説明書の全国への展開について

・ 資料に基づき説明 (NTT)

- ・ そもそも論や啓発は①②で良いが、実際に実施したい、取り組んでいるという地域や主体に対しては③+aで実践編となるようレベルを分けると良いのではないか。実践編がより重要なので、手厚くした方が良い。(伊藤委員)
 - ✓ 議論いただいた積み木アプローチの全国展開の方法としてとして①②③の整理しており、積み木アプローチは各自治体がコミュニティを形成する際のツールとして活用したいと考えている。自治体の要望や検討状況を伺う機会もあるので、地域に応じて必要な助言していきたい。また来年度も、今年4自治体で行ったような伴走支援を実施したいと思っている。これまでの経験を地方公共団体のお役に立てるよう、取り組み続けたい。(原田参事官)
- ・ 対話する仕組みが無いと、「難しい教科書をもたらたが使えない」という状況になる。時間をかけて参加者が成長していける環境が大事だ。ネットラジオで「積み木アプローチチャンネル」などを作り、五十嵐座長が話し続けるといった形も参考になるとおもうので、情報発信していけると良い。(矢田委員)
- ・ 横展開は取り組もうとしている団体の背中を押すことと、まだ取り組んでいない潜在層の掘り起こしという2つの目的がある。掘り起こしには①や②が有効で、背中を押すための③は色々なタイプの開催形式の検討が必要だ。生涯活躍のまちという交付金の枠で横展開していくことだけを考えると、金の切れ目が縁の切れ目になりかねないが、横軸として「空き家」「しごと」、プロセスとしては「若手の活動を生かす」「地縁組織からプレイヤーをみつめる」など、様々なポイントがある。交付金がなくなっても、各テーマで研究部会を作ると、積み木アプローチの各段階やパートで悩んだ自治体が参考にしやすい。自治体の職員だけでなく、長浜の合同会社 LOCO の代表や、川口の若手など、カウンターパートとなってくれたコミュニティのキーパーソンが活動していても、行政がキャッチアップできていなかったり日の目を見ていないこともある。

生駒市のコミュニティの中で1つメディアの取材が殺到している活動があり、そのコミュニティの代表者の話を生駒のほかのコミュニティの関係者に聞いてもらったが近すぎるためか素直に参考にしてもらえない。別の地域で若い女性が取り組むコミュニティの話聞いてもらった際には、自治会長が涙を流していた。遠い地域でやっているからこそ素直に参考にできるといったポイントもあるので、役所だけでなく、関わった人の話も広く聞いてもらえると良いのではないか。(領家委員)
- ・ 色々な展開の方法があるので、ツールとして積み木アプローチを活用できると良い。取組を始めている自治体同士のネットワークは大事で、方法は様々な可能性があるので試行錯誤すると良い。

啓発活動の実施主体はだれになるのか。(小泉委員)

 - ✓ 内閣官房が主幹になるが、ゆるやかな研究会のような形があっても良い。生涯活躍のまちの意向はあるがまだ取り組めていない自治体をターゲットと明確化し、ゆるやかな勉強の場を持つと良いのではないか。研究会などのゆるやかな勉強の場への参加は、自治体だけでなく地域のプレイヤーにも呼びかけると良い。オンラインで実施すればあまり予算も必要ではなくなる。(五十嵐座長)
 - ✓ 内閣府のかかわりラボ (関係人口創出・拡大官民連携全国協議会 <https://www.chisou.go.jp/sousei/about/kankei/kakawari-lab.html>) の活動がイメージに近いのではないか。関係人口に関心のある自治体と、社員を地域に出していきたい民間企業、人材を自治体に取り次ぎたい会社がフラットに活動を進めている。コミュニティモデルの事業同様に、フォーラムもモデル事業も説明動画もある。補助金の制度もあるが、今後どのように活動を自立させるかが課題になっており、やはり継続の方法は難しいテーマだ。自治体の担当者は異動で定期的に変っても、長浜の合同会社 LOCO など中心となる取組主体はかわらないので、そうした主体に参加してもらえると良い。また内容がためになる活動であれば参加にお金を払ってもらうことも可能だ。(伊藤委員)
 - ✓ 「ゆるやかな」という性質のコミュニティはコントロールしづらいなどの難しさもある。ずっと政策として続けるのだとしたら、大きな予算が無くてもできる範囲で進めるようになると良い。(五十嵐座長)
 - ✓ 国を起点とした自治体のネットワークの例では、積極的な自治体が持ち回りで幹事となり勉強会を開催している。コロナ以前は近場の自治体同士でオフラインのイベント開催などもしていた。実際に誰がどの役割を担うかは難しい問題だが、ネットワークを立ち上げてみないとわからない部分もある。

slackやFacebookのグループなどのコミュニケーションツールうまく活用すると、よりアクティブなコミュニケーションを取れる。

自治体 DX に関して総務省が立ち上げた自治体同士の slack は非常にアクティブなようだ。

またネットワークに関心がある大学の先生と連携するという方法もある。

内閣官房が最初は取り組みを引っ張っていく必要があると思うが、可能な限り自立運営していきような戦略を持てると良い。(小泉委員)

- ・ 研究会に若い人がたくさん参加すると活性化と思う。若手が面白いと思いつながりながら地域で積み木アプローチを使っていると、レバレッジが効いてくる。慶応の若新雄純氏などは適任なのではないかと思う。(矢田委員)
 - ✓ 若い人が研究会に入ると、実際に関心を持って地域に足を運ぶといった動きも出てくると思う。若い人をつなぐ役割として、確かに若新雄純氏などは適任かもしれないと思うので、自治体担当者と五十嵐座長、若新氏の3人のラジオによる情報発信なども面白いと感じる。最近、地方創生の中身自体に大学生が関心を持っていると感じている。(伊藤委員)
 - ✓ 「オンライン市役所」などのオンラインコミュニティも増えており、そこで若手が活動している。若手がオンライン市役所で話をききたがる理由は、関心を持っている若手が希望する部署に配属されていないことがあり、職場では話を聞けないからだ。そういう活動をしている若者にはとても響くと思う。希望と配属のミスマッチが構造としてあるので、実際の担当者が参加したがない可能性もあり、前提として頭に置いておく必要がある。(領家委員)
- ・ 長い目で見ると研究会的なネットワークが効果を生みそうだ。研究会の内容自体が面白くないと参加者も時間を割かないので、面白くする工夫が大事だ。(矢田委員)
- ・ 今後の浸透策を具体化する必要があると思っていた中で、様々なアイデアをいただいた。取組も1回限りではなく何度も行いたいと考えている。先進的な取組をしている地方公共団体に経験を紹介いただいて、取組もうとしている自治体の参考にしてもらいたい。ご指摘いただいた通り、地方公共団体の中でも先進的に取り組んでいるところから、これからという団体まで様々な段階があるので、それぞれ適した策を検討したい。呼びかけ先も地方公共団体だけでなく民間団体なども含めたいと思う。研究会についてもアイデアをいただいた。生涯活躍のまちの5つの機能、それぞれに取り組んでいる団体や取り組みたい団体向けに、テーマ別の研究会を設けるのも良い。方法も、オンラインなど予算をかけず、幅広い方に参加していただけるように、slackなどのオンラインのコミュニケーションツールの活用なども検討していきたい。(原田参事官)


5 今後の進め方

- ・ 一部修正を進めるが、本研究会が最終回なので、修正内容は内閣官房と五十嵐座長と確認してとりまとめる。最終的な説明書や報告書は後日メール等でご案内したい。(NTT)

6 今後の進め方

- ・ 毎回分かりやすくご意見をいただき、感謝している。委員から、引き続きお知恵を拝借したい。(原田参事官)

以上



地方公共団体における多世代交流を通して活性化するコミュニティ
づくりの具体化に向けた支援に関する調査研究事業
第4回調査研究会

2022年2月24日 株式会社NTTデータ経営研究所

目次

1. これまでの振り返り
2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について
3. モデル地方公共団体支援の報告
4. 自治体への展開について

1. これまでの振り返り

1. これまでの振り返り

第1回 (5/26)

テーマ：事例調査と仮説モデル案の提示

- 事業概要説明
- コミュニティモデルづくり先行事例調査と仮説モデル（案）提示
- モデル地方公共団体の伴走支援計画の提示

【主な意見】

- 何のためのコミュニティづくりなのかpurposeやvisionを明確にすべき
- モデルはあくまでプロセスを示すべき
- 自治体職員や地域住民などの人材育成も重要な視点

意見交換 (8/18)

テーマ：居場所と役割を持つコミュニティのISSUEとVISION

- ISSUE・VISION・PURPOSE案の提示

【主な意見】

- 「孤独対策」の取組ではなく、自然と人が集まる仕組みが必要
- 交流の形として、静かな交流もある
- 1つの居場所がすべての価値を提供する必要はない

第2回 (10/4)

テーマ：コミュニティモデル構成案とモデル団体支援の中間報告

- コミュニティモデルの構成
- コミュニティモデルの内容案
- モデル地方公共団体支援の進捗報告

【主な意見】

- ISSUEやPAINから始まるだけでなく、ビジョンから入ることもある
- 積み木モデルは分かりやすく、かつ臨機応変な形で示すべき
- 誰がどう動くのかについても重要な視点として入れるべき

第3回 (12/23)

テーマ：コミュニティモデル（案）の提示

- コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書（案）について
- モデル地方公共団体での計画策定状況

【主な意見】

- 見せ方は、目的→ビジョン→課題の順番とすべき
- 地域のビジョニングの重要性を記載すべき
- 自治体への研修などモデルの展開方策を検討すべき

第4回 (2/24)

テーマ：とりまとめ

- 本年度の成果①：コミュニティモデルとその横展開の在り方
- 本年度の成果②：モデル地方公共団体の計画策定報告

成果物のとりまとめと、横展開の在り方について議論

1. これまでの振り返り

第3回研究会（12月23日開催）での主なご意見

①第2章「生涯活躍のまち」が解決したい課題・目指すべき将来像

発言委員	要旨
1 島田委員	PURPOSEの位置は最初であり、WHY→PURPOSE→VISION→ISSUE（→VISION）の順番とすべき。また、最終的にはWell-Beingにつながる話であり、その表現があってもよいのではないかと。
2 小泉委員	第2章になぜこの取組を実施すべきなのかという話と個別の地域のビジョニングが混在している。各地域の政策立案の検討に役立つよう、個別のビジョニングの手法が提示できると良い。また、PURPOSEは「意味」ではない。

②第3章「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ

発言委員	要旨
1 五十嵐座長	主体として住民と行政に加えて、NPO等の団体も重要になるので追記すべき
2 領家委員	レベル感の記載が異なっている。自治体全体の政策の話なのか、個別の事業の話なのか、具体例は事業レベルだが、自治体の役割のところなどは全庁横断的な話となっている。説明が必要である。
3 島田委員	「見つけかた」が課題の見つけ方になっているように見える。まずはどんなまちにしたいのか、将来像を決める必要がある。
4 小泉委員	積み上げる前に暫定であったとしても目標を共有しなければはじまらない。
5 領家委員	見つけかたでは、誰の何を解決したいのか、誰の居場所をつくるのかを考える必要がある。
6 矢田委員	自治体職員が議論を進める中で、悩んだときは立ち戻る先としてここで検討した目的や将来像があるということを説明したほうがよい
7 小泉委員	「作りかた」と「続けかた」はプロセスではなく、実際は同時に考えるべき話。見せ方としてはこれでもよいかもしれないが、積み木が一体一対応に見えてしまう。
8 五十嵐座長	4自治体については、一枚でまとめたページを冒頭に入れてほしい。自治体の規模や課題、誰が主体となったのかなどを一覧化できるとよいのではないかと。

1. これまでの振り返り

③成果物の自治体への展開

発言委員	要旨
1 伊藤委員	紙での配布だけでは限界があるので、研修会やディスカッションの場、動画での解説などもっとアクティブに使っていく方法を検討してはどうか。
2 小泉委員	自治体向けの研修でモデル自治体が登壇するなど、教え合うとよいのではないか。
3 矢田委員	伝え方としては自治体が自治体を回る方法が一番効果的ではないか。

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木 アプローチ説明書」(案) について

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

(1) 第3回研究会を踏まえた修正の方向性

①全体構成

I. 章構成の変更

- 第2章は、「なぜ今生涯活躍が求められているか」の説明に特化し、個別の地域におけるビジョニングの話は記載しない。
- そのうえで、新たな章を挿入（第3章）し、個別の地域におけるビジョニングの重要性を説明。「生涯活躍のまち」から出発する場合と、地域の課題対応から始まる場合を提示。
- モデル自治体における取組事例を第5章として独立

II. デザインを全体的に修正

②第2章 なぜいま「生涯活躍のまち」が求められているか

I. 内容及び順番の修正

- 冒頭では、ガイドラインで示している「目指すべき姿」と「課題」について、具体的なイメージを持っていたくために写真を例示することのみを説明
- 提示の順番は、目指すべき姿→課題に修正

II. 個別地域のビジョニングの記載省略

- 「あなたのまちでは…」のような個別地域のビジョニングに対する言及は省略

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

③第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりに向けて～将来像 (VISION) の検討～

I. 2パターンのビジョニングを提示

- それぞれの地域でのビジョニングの重要性について述べたうえで、そのプロセスとして「『生涯活躍のまち』から出発する場合」と「地域の課題対応から出発する場合」を提示
- それぞれのパターンについて、ビジョン策定までのプロセスを提示

④第4章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉

I. 用語の変更と説明の充実

- それぞれのプロセスは実際には並行して検討すること、また臨機応変に行ったり来たりすることから、「課題発見」「事業構想」「資源活用」に修正
- 各プロセスの説明を充実化
 - I 課題発見：地域の目指す姿を決めることを明記、議論を進めていく中で疑問や対立が生じた時はここに立ち返ることを説明
 - II 事業構想：中長期的には5機能を満たすことが重要だが、最初はできるところからはじめる（事業レベル）ことを明記
 - III 資源活用：実際にはIIと同時並行で資源確保策を検討することを追記

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

④第4章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの積み木アプローチ (続き)

Ⅱ. 各積み木の紹介及び事例紹介ページの作成

- 積み木の紹介については、説明及びポイントと、「たとえば」で具体例を出すことで統一化
- 事例紹介については、既存の生涯活躍のまち推進自治体から優良事例をピックアップ（内閣官房と相談のうえ、7団体を選定）

Ⅲ. 自治体の役割

- 「課題発見」、「資源確保」ページの作成
- 「事業構想」について、全庁横断ステップのタイトルとして「個別の取組から「生涯活躍のまち」全体の施策へ展開する場合」と追記

⑤第5章 モデル自治体における取組事例

I. 冒頭に1枚追加し、この章の説明と4自治体の一覧表を記載

2. 「生涯活躍のまち コミュニティづくりの積み木アプローチ説明書」(案) について

説明書案については資料 3 のとおり

3. モデル地方公共団体支援の報告

3. モデル地方公共団体支援の報告

- 今年度のモデル地方公共団体4団体については、各自治体5～6回の協議を経て、それぞれの地域における生涯活躍のまちの実施計画を策定した。
- 実施計画案は資料4のとおりである。

地域	①神奈川県横須賀市	②新潟県長岡市川口地区	③滋賀県長浜市	④奈良県高取町
人口規模 (R2国調)	388,078人 (対象とした浦賀地域は約 44,000人)	4,087人 (長岡市全体は266,936人)	113,636人	6,729人
検討主体	横須賀市福祉部地域福祉課 横須賀市浦賀行政センター	長岡市地域振興戦略部 長岡市川口支所 川口エンジン古民家部(地域団 体)	長浜市政策デザイン課、ふるさと と移住交流室、人権施策推進課、 商工振興課 合同会社LOCO、えきまち株式 会社、長浜デザイン戦略室	高取町総合政策課 高取町シルバー人材センター
課題	退職後の高齢者(特に男性)の 地域社会での孤立防止	いつでも戻ってくることの出来 るまちの実現	子育て等により短時間勤務の制 約がある女性の活躍の場づくり、 サテライト利用者と市内人材・ 企業の連携	町内事業所等の人手不足、高齢 者や子育て中の女性等「働く 場」の需要
方向性	<ul style="list-style-type: none"> • コミュニティセンターと住民 が連携した講座企画・サーク ル化促進 • SNS等の新たな発信による多 世代参加促進 	<ul style="list-style-type: none"> • 住民主体/公サポート型の地 域共創ラボの設置 • 地域のしごとのマッチング、 空きスペースの利活用を実証 	<ul style="list-style-type: none"> • 市と民間企業が連携した短時 間就労可能な場と仕組の構築 • 地元企業とリモートワーカー がつながる仕組み 	<ul style="list-style-type: none"> • シルバー人材センターや社会 福祉協議会と連携した「しご とコンビニ®」の構築 • 地域交流の核となる拠点の開 設

4. 説明書の全国への展開について

4. 説明書の全国への展開について

全国への展開方法案

紙での配布では限界があるので、研修会やディスカッションの場、自治体同士で教え合う機会の創出が効果的ではないか。

第3回研究会
委員意見

【今年度】

関心のある自治体へ一斉周知

- ◆ 自治体向けシンポジウムを開催し、興味・関心のある自治体担当者向けに積み木アプローチ説明書を案内
- ◆ あわせて、モデル自治体に登壇いただき、施策構築プロセス等について紹介していただく
(詳細は次ページ)

【2022年度】

3つの手法で全国の自治体へ浸透

① 動画コンテンツ

紙だけでは内容が伝わりにくいため、シンポジウムの録画等を活用して動的コンテンツで普及

② 全国での説明会

全国で説明会を開催。ワークショップ等も活用し、普及啓発。

③ 自治体同士で教え合う場の創出

これから取り組む団体と、すでに実践している団体等をネットワーク化し、ノウハウ共有の関係を構築

委員と連携

委員にも積み木アプローチ伝道師となっていただき、普及・展開にご協力いただけないか。

- 個人活動
- 説明会の講師
- 関係のある自治体や企業への呼びかけ

4. 説明書の全国への展開について

<生涯活躍のまち シンポジウム（案）>

【目的】

「生涯活躍のまち」はどんな自治体であっても地域の課題に応じて活用可能な施策であることを理解していただき、事業の具体化プロセスを積み木アプローチで示すことにより、自治体職員が「生涯活躍のまち」の事業を具体化するきっかけをつくる。

【対象】 全国の地方公共団体職員

【日時】 3月11日（金）15：00～17：00

【開催方式】 オンライン（ZOOMウェビナー）

【プログラム案】 司会：事務局

1. 開会
2. モデル自治体における「生涯活躍のまち」の取組結果（4自治体）
3. 「生涯活躍のまち」具体化モデル<積み木アプローチ>について（事務局）
4. 座談会 ～「生涯活躍のまち」のはじめ方・取り組み方と<積み木アプローチ>の活用～
五十嵐座長による進行にて、有識者（小泉委員、領家委員）、モデル自治体、内閣官房、事務局による座談会を実施。自治体からの問い合わせが多い「事業の構想方法」「庁内の巻き込み方」を中心にディスカッション予定。
5. 閉会



NTT DATA

Trusted Global Innovator

「生涯活躍のまち」コミュニティづくり の積み木アプローチ説明書（案）

資料3



目次

第1章 はじめに

- 1-1 「生涯活躍のまち」とは
- 1-2 「生涯活躍のまち」の5機能について
- 1-3 本書の目的・構成

第2章 なぜいま「生涯活躍のまち」が求められているか

- 2-1 「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドラインの記載
- 2-2 目指すべき「生涯活躍のまち」づくりとは？
- 2-3 何が問題なのか？何を解決したいのか？

第3章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりに向けて～将来像（VISION）の検討～

- 3-1 本章について
- 3-2 検討プロセス①「生涯活躍のまち」から出発する場合〈全体像〉
- 3-3 検討プロセス①「生涯活躍のまち」から出発する場合〈詳細〉
- 3-4 検討プロセス②地域の課題対応から出発する場合〈全体像〉
- 3-5 検討プロセス②地域の課題対応から出発する場合〈詳細〉

第4章 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉

- 4-1 本章について
- 4-2 〈積み木アプローチ〉の各プロセスについて
- 4-3 基本的な考え方
- 4-4 〈積み木アプローチ〉のご案内
- 4-5 積み木アプローチを用いた積み上げ例
- 4-6 各積み木の解説及び事例紹介
- 4-7 地方公共団体の役割

第5章 モデル自治体における取組事例

- 5-1 本章について
- 5-2 神奈川県横須賀市
- 5-3 新潟県長岡市
- 5-4 滋賀県長浜市
- 5-5 奈良県高取町

第6章 おわりに

第1章

はじめに

急速な少子高齢化とともに、特に生産年齢人口の減少が進行する中、女性、高齢者、障がいのある方、ひきこもりの方など、一人ひとりの個性と多様性が尊重され、それぞれの希望に応じて役割や生きがいを持って、できる限り長く活躍できる地域コミュニティが実現できれば、地方における人口減少問題の改善、地域の消費需要の喚起や雇用の維持・創出、多世代との協働を通じた地域の活性化などの様々な効果が期待されます。

「生涯活躍のまち」は、**あらゆる人々が、移住・定住、関係人口を問わず「居場所」と「役割」をもって「つながり」、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することで活性化**するコミュニティづくりを目指す横断的な施策です。



安定的な事業運営基盤の確立

- 安定的・継続的にコミュニティの運営が図られるよう、これまでの調査研究事業の成果等を踏まえつつ、地域再生推進法人を含む「生涯活躍のまち」に関する事業運営を担う中核的な法人を支援

「生涯活躍のまち」（誰もが居場所と役割のあるコミュニティ）を実現するためには、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」の機能を確保することが重要です。また、コミュニティを維持・発展させるために、人の流れづくりを促進し、域外からコミュニティへの「人材循環を進めることが求められます。

各機能（4 + 1 = 5機能）については、個々に対応するのではなく、「点から面へ」、エリア全体を視野に入れ、コミュニティ全体の魅力の向上を図る視点が必要不可欠です。

また、各機能の全てを新規に取り組む必要はなく、地域の特性や課題に応じて、既存の取組を生かしながら、中長期的にコミュニティ全体で各機能を満たしていくことが重要です。

5つの機能	内容
①交流・居場所	年齢や性別、障がいの有無を問わず、多世代、多属性の人が、それぞれの関わり方ができる機能と場（空間）が求められます。また、人と人をつなげるしかけ（工夫）により、さまざまな者同士の交流・協働が生まれます。
②活躍・しごと	コミュニティで「活躍」することは、あらゆる世代の多様な人々にとって生きがい、やりがいの支援につながります。雇用という形だけでなく、ボランティア等の社会参加的な活躍の場も重要です。あらゆる世代の多様な人々にとって「活躍」する場や機会があることで、主体的にコミュニティの担い手となることが期待されます。
③住まい	単身者や子育て世帯、高齢者、障がい者などあらゆる世代・世帯の希望に沿った暮らし方や住宅を選択できるようにすることで、長く、その地域で生活していけるようにすることが重要です。その際、ハード面だけではなく、居住者とコミュニティのエリア全体との関係性を重視したソフト面を勘案することが求められます。
④健康	心身両面における健康に加えて、人との関わりなどが充足されていることは、地域で生活していく上で重要です。そのため、地域包括ケアシステムとの連携をはじめ、全世代に対応した地域の実情に応じた疾病予防や健康づくりの推進が必要です。
⑤人材循環	地域に住む人々だけではなく、地域に必ずしも居住していない地域外の人々に対しても、地域のコミュニティに関わる担い手としての活躍を促すことで、コミュニティの活性化が期待できます。人の流れをより広義で捉え、都市部との人材循環など関係人口づくりを含めたコミュニティへの人の流れの取組が重要です。

本書は、地方公共団体向けに、①「生涯活躍のまち」について理解し、取組の意識を高めるきっかけとなること、②実際に取組を始めるための実践的な手引きとなること、を目的としています。

そのため、なぜいま「生涯活躍のまち」コミュニティが求められているかについて触れたうえで、実際に「生涯活躍のまち」コミュニティをつくるため、将来像の検討方法及び具体化のための〈積み木アプローチ〉について解説します。あわせて、〈積み木アプローチ〉の使い方の実践例として、モデル自治体における取組事例をご紹介します。

本書の構成と各章の関係性

なぜいま「生涯活躍のまち」が求められているか（第2章）

実践

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（vision）の検討（第3章）

将来像の明確化・事業の具体化・将来像の検証

課題や将来像等の再検討

「生涯活躍のまち」コミュニティづくり〈積み木アプローチ〉（第4章）

事例研究

事例の活用

モデル自治体における取組事例（第5章）

第2章

なぜいま「生涯活躍のまち」が求められているか

内閣官房は、令和2年7月に公表した「『生涯活躍のまち』づくりに関するガイドライン」において、「生涯活躍のまち」の基本コンセプトについて、以下のとおり記載しています。

「生涯活躍のまち」は女性、高齢者、障がい者など誰もが、一人ひとりの個性と多様性を尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割を持ってつながり、生涯を通じて健康でアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくりを目指すものです。

多くの地方公共団体において、人口減少や急速な少子高齢化等に伴い、コミュニティの希薄化が課題として挙げられる中、「生涯活躍のまち」は立地や大小を問わず、コミュニティづくりを課題としている全ての地方公共団体にとって、活用可能な施策といえます。

出所：「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン（令和2年7月内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局）より抜粋
<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/shienmenu/index.html>



人口減少等に伴う地域コミュニティの希薄化、地域外の人々や企業と関わる機会の減少、まちの賑わいの喪失等へ対応するため、誰もが居場所と役割を持ち、生き生きと暮らせる社会の実現に向けて、「生涯活躍のまち」コミュニティづくりが求められています。

本章では、より具体的なイメージを持っていただくため、こうした「目指すべき姿」と「課題」について写真を例示します。

「生涯活躍のまち」のガイドラインで示されている「一人ひとりの個性と多様性が尊重され、それぞれの希望に応じて能力を発揮することで、居場所と役割をもってつながり、生涯を通じてアクティブに活躍することによって、活性化するコミュニティづくり」とは具体的にどのような姿でしょうか。その具体的なイメージとポイントを例示します。

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○

こども×地域住民

出展：宮崎日日新聞社掲載

- 中高年齢層が経験やスキルを活かせる場所がある
- これまで接点がなかった人・世代同士のつながりが生まれる
- 共働き世帯やシングルマザーが安心して子供を預けられる場所がある
- こどもにとって家、学校以外に気軽に立ち寄れるサードプレイスがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○

健常者×障がい者

- 障がい者であることを意識せずに自然と交流できる
- 健常者と障がい者が互いに学び合っている
- 違う属性だと思い込んでいた人と接点を持つ

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○	○	○

高齢者×地域住民

出展：Community Nurse Company

- 高齢者が日常のちょっとしたことでも気軽に相談できる相手がいる
- 地域住民が空き時間を使って簡単なお手伝いができる
- 家族には頼みにくい雑事も少額でお願いできる仕組みがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○			

先輩パパママ×後輩パパママ



- 子育て世代が気軽に集まり、情報交換できる場所がある
- 先輩パパ・ママから新米パパ・ママに経験を繋げる環境がある
- 子育て中のママでも稼げる機会や仕組みがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○	○		○

移住者×地元住民



出展：南砺市

- 空き家を活用したい人を地域が前向きに手伝ってくれる
- 新しい人との出会いがある
- スキルがある人は、そのスキルを活かす機会がある
- スキルがなくても気軽に参加し、お手伝いができる仕掛けがある

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○		○	

子ども×高齢者



出展：社会福祉法人 ゆうゆう

- 静かな交流を含めてそれぞれが心地よい居場所がある
- 世代や性別など異なる性質の者が交流することで新たな役割が生まれている
- 誰かの指示ではなく自然と交流が発生している

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
○	○		○	

高齢者×現役世代



出展：おもちゃ病院協会

- 高齢者が自発的に参加する場づくりができています
- 参加することで活躍の場が生まれてくる
- 支援する側・される側といった役割が固定化されていない

「生涯活躍のまち」のガイドラインで示されている「コミュニティの希薄化」は、具体的にどのような問題となっているのでしょうか。その具体的なイメージとポイントを例示します。

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
x	x			x



- コミュニティから出ていく人はいるが入ってくる人がいない
- 住民が地域やコミュニティ内で活動しない
- 残る人も活性化を諦めている

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
x	x			



- 子育て中の親の孤立
- 親同士のコミュニケーションの場や機会の不足
- 子育ての不安を相談・解消する仕組みがない

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
x	x		x	



- 同世代のつながりはあるが世代間のつながりがない
- 施設入所や子供の居住地への引っ越しなどにより孤立化する人がいる
- 支援者や家族との関係構築が困難

交流・居場所	活躍・しごと	住まい	健康	人材循環
x		x		x



- 老々介護世帯の孤立化
- 仏壇問題等により空き家活用が進まない
- 空き家や耕作放棄地に対する周辺住民の不安

第3章

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりに向けて
～将来像（VISION）の検討～

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりを進めるためには、「生涯活躍のまち」を通じて実現したい地域の将来像について、大まかな方向性をあらかじめ検討することが重要です。将来像は、関係者で共有することにより、関係者が同じ方向性を持つための指針となるほか、事業を実現する過程で立ち戻るポイントとなります。

本章では、「生涯活躍のまち」コミュニティづくりに向けた第一歩として、将来像（Vision）の検討プロセスについて、2つのパターンに場合分けしてご案内します。

本章の構成と各章との関係性

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（vision）の検討

① 「生涯活躍のまち」から出発する場合

「生涯活躍のまち」をあるべきコミュニティの将来像として設定し、その実現のために個別の施策を検討していく場合を指します。例えば、「交流・居場所」、「活躍・しごと」等を内容とする「生涯活躍のまち」の実現を中長期的に目指すという方向性が総合戦略等で決定している場合に、その将来像の具体化に向けて、交流の場づくりや誰もが活躍できる環境の整備等の個別の施策を検討していく場合が考えられます。

② 地域の課題対応から出発する場合

人口減少、地域コミュニティの希薄化、まちのにぎわい減少等といった地域の個別課題の解決策を検討していく中で、当該個別の課題解決だけでなく、より広く、コミュニティ全体の活性化を目指すまちづくりの将来像として「生涯活躍のまち」を設定し、個別の具体的施策を検討していく場合を指します。例えば、深刻化する空き家の増加対策を検討する過程で、地域住民の孤立化防止や関係人口づくり等を含む「生涯活躍のまち」づくりを推進することとし、そのための個別施策を検討していく場合が考えられます。

将来像の明確化・事業の具体化・将来像の検証



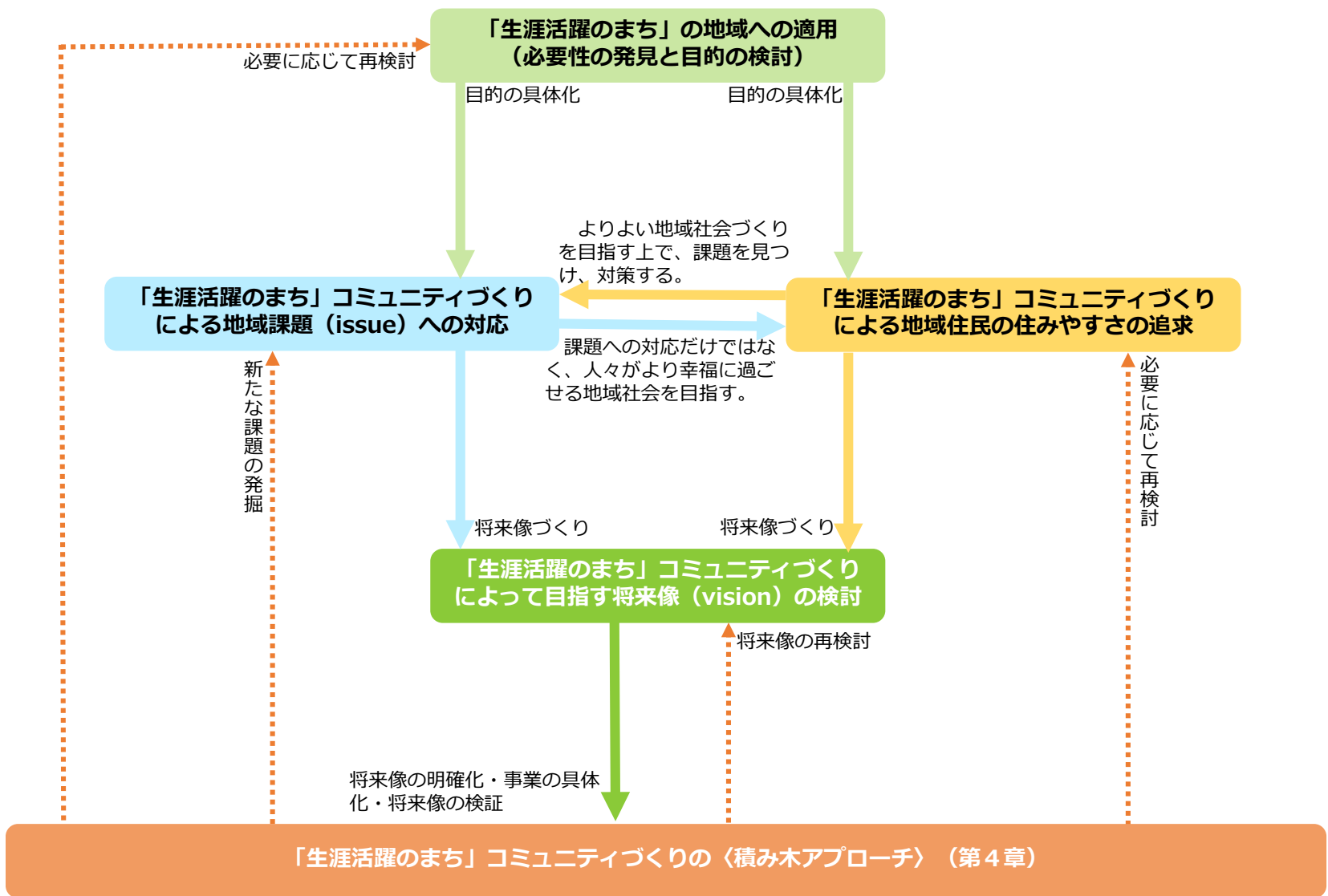
課題や将来像等の再検討



「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉（第4章）

各項目の詳細は次ページ以降を参照。

①「生涯活躍のまち」から出発する場合の全体像（イメージ）



「生涯活躍のまち」の地域への適用

「生涯活躍のまち」を地域で実現するためには、その地域で実現したい「生涯活躍のまち」の必要性と目的を整理することが重要です。

必要性 なぜ「生涯活躍のまち」コミュニティづくりをする必要があるか？

「生涯活躍のまち」は、誰もが居場所と役割を持ち、生き生きと暮らせる社会の実現を目指すものですが、その中身は、地域の実情に応じて様々な事業が想定され、一体的に推進することが可能となるため、次のような取り組む意義やメリットが考えられます。

- 地方創生施策の効果として、「多世代交流を通じた地域の活性化」、「雇用の維持・創出」「まちの魅力向上を通じた関係人口づくり」、「多世代が健康で安心して住めるまちづくり」等地域の実情に応じて様々なものが期待できること。
- 事業の一体推進の効果として、「庁内・民間事業者との連携強化」、「他部署や外部機関等による新たな課題、地域資源、事業等に関するアイデアの発見」、「事業間連携による相乗効果の発揮」等が期待できること。

これらは、多くの地方公共団体において実現したい内容を含んでいると考えられ、地域の実情に応じて、「生涯活躍まち」に取り組む必要性を見出すことができます。

目的 地域で「生涯活躍のまち」コミュニティづくりをする目的とは？

「生涯活躍のまち」に取り組む必要性を勘案し、目的を検討します。その際は、「生涯活躍のまち」の構成する要素として示す「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」、「人材循環」の5機能の観点を参考にしてください。

- 例) ・ **誰もが活躍できる機会がある地域を関連事業を連携させながら実現する。**
 ・ **地域の賑わいをつくり、誰もが魅力を感じるまちを官民連携で実現する。**

ここで検討した目的は、地域課題への対応または地域住民の住みやすさの追求といった観点を踏まえ、将来像となります。

必要に応じて再検討

必要に応じて再検討

目的の具体化

目的の具体化

地域課題 (issue) への対応

- 例)
- ・若者の都市部への流出
 - ・空き家の増加
 - ・地域住民の孤立化
 - ・地域産業の衰退
 - ・まちなかの賑わい減少
- 等への対応

課題への対応だけではなく、人々がより幸福に過ごせる地域社会を目指す。

よりよい地域社会づくりを目指す上で、課題を見つけ、対策する。

地域住民の住みやすさの追求

- 例)
- ・人生100年時代、デジタル活用等社会変化に対応した地域づくり
 - ・地域住民の「あったらいい、やってみたい」を叶える仕組みづくり
 - ・地域住民のwell-beingの追求
- 等

将来像づくり

将来像づくり

目指す将来像 (vision) の検討

目的を踏まえ、地域課題への対応、住みやすさの追求といった観点を総合的に勘案し、地方公共団体において「生涯活躍のまち」に取り組むことで目指す将来像を構想します。

例) **誰もが活躍し希望を叶えて暮らすことができる地域の実現により、地域産業の衰退や地域住民の孤立化といった課題に対応し、地域住民の「あったらいい」が叶えられるよう、遊休施設を活用した住民交流・子育て支援・就業支援事業に連携して取り組んでいく。**

※この時点では、大まかな方向性を検討します。4章で事業を具体化する過程で、将来像は明確となります。

将来像の明確化・事業の具体化・将来像の検証

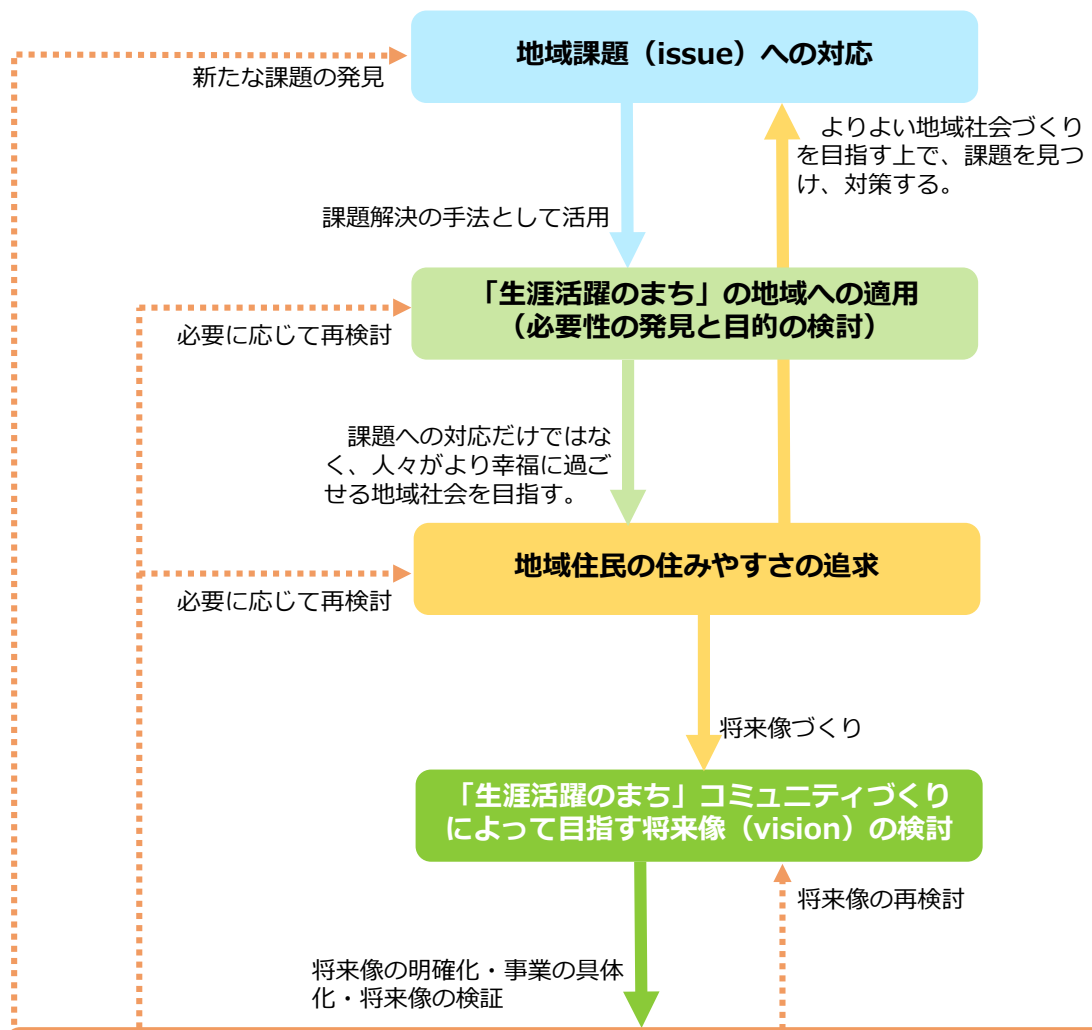
将来像の再検討

新たな課題の発掘

必要に応じて再検討

各項目の詳細は次ページ以降を参照。

②地域の課題対応から出発する場合の全体像（イメージ）



「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉 (第4章)

地域課題 (issue) への対応

例) 若者の都市部への流出、空き家の増加、地域住民の孤立化、地域産業の衰退、まちなかの賑わい減少 等への対応

よりよい地域社会づくりを目指す上で、課題を見つけ、対策する。

課題解決の手法として活用

「生涯活躍のまち」の地域への適用

課題解決の手法として、地域で「生涯活躍のまち」を実現するために、その地域で実現したい「生涯活躍のまち」の必要性と目的を整理することが重要です。

必要性 なぜ課題解決のため「生涯活躍のまち」コミュニティづくりをする必要があるか？

「生涯活躍のまち」は、誰もが居場所と役割を持ち、生き生きと暮らせる社会の実現を目指すものですが、その中身は、地域の実情に応じて様々な事業が想定され、一体的に推進することが可能となるため、次のような取り組む意義やメリットが考えられます。

- 地方創生施策の効果として、「多世代交流を通じた地域の活性化」、「雇用の維持・創出」「まちの魅力向上を通じた関係人口づくり」、「多世代が健康で安心して住めるまちづくり」等地域の実情に応じて様々なものが期待できること。
- 事業の一体推進の効果として、「庁内・民間事業者との連携強化」、「他部署や外部機関等による新たな課題、地域資源、事業等に関するアイディアの発見」、「事業間連携による相乗効果の発揮」等が期待できること。

「生涯活躍のまち」を通じ、地域課題解決に向けた事業の実施が期待できることから、地域の実情・課題に応じて、「生涯活躍のまち」に取り組む必要性を見出すことができます。

新たな課題の発見・課題の明確化

必要に応じて再検討

目的 地域で「生涯活躍のまち」コミュニティづくりをする目的とは？

地域課題解決のために「生涯活躍のまち」に取り組む必要性を勘案し、目的を検討します。その際は、「生涯活躍のまち」の構成する要素として示す「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」、「人材循環」の5機能の観点を参考にしてください。

例) 若者の都市部への流出といった課題に対応するため、地域の賑わいをつくり、誰もが魅力を感じるまちを官民連携で実現する。

課題対応だけを目的とするのではなく、地域住民の住みやすさの追求といった観点を踏まえ、将来像となります。

課題への対応だけではなく、人々がより幸福に過ごせる地域社会を目指す。

地域住民の住みやすさの追求

例) ・人生100年時代、デジタル活用等社会変化に対応した地域づくり、地域住民の「あったらいい、やってみたい」を叶える仕組みづくり、地域住民のwell-beingの追求 等

将来像づくり

目指す将来像 (vision) の検討

目的を踏まえ、地域課題への対応、住みやすさの追求といった観点を総合的に勘案し、地方公共団体において「生涯活躍のまち」に取り組むことで目指す将来像を構想します。

例) 若者の都市部への流出といった課題に対応するため、デジタル技術を活用した生活支援サービスや移動手段等を導入しながら、地域の賑わいをつくり、誰もが利便性のある生活を送ることにより魅力を感じるまちを官民連携で実現する。

※この時点では、大まかな方向性を検討します。4章で事業を具体化する過程で、将来像は明確となります。

将来像の明確化・事業の具体化・将来像の検証

将来像の再検討

第4章

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの
〈積み木アプローチ〉

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりにより、地域が目指す将来像を実現するためには、住民、NPO等の団体、行政が連携しながら地域の課題を見つけ、地域の実情に応じた事業を具体化する〈積み木アプローチ〉が有効です。

本章では、「生涯活躍のまち」コミュニティを具体化するための〈積み木アプローチ〉を提示します。〈積み木アプローチ〉では、次の3つのプロセスに分けて、それぞれのプロセスで活用できる手法を一覧化し、地域の実情に合わせて積み木を組み立てる方法を提示しています。

本章の構成と各章との関係性

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（vision）の検討（第3章）

将来像の明確化・事業の具体化・将来像の検証

課題や将来像等の再検討

「生涯活躍のまち」コミュニティづくり〈積み木アプローチ〉

I. 課題発見

課題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決める。

II. 事業構想

誰が、いつ、何を、どのように実施するのか決める。

III. 資源活用

事業を具体化するために資源を活用する。

各プロセスで活用できる手法を提示したうえで、地域の実情に合わせた手法の選び方について、積み木に見立て解説

事例研究

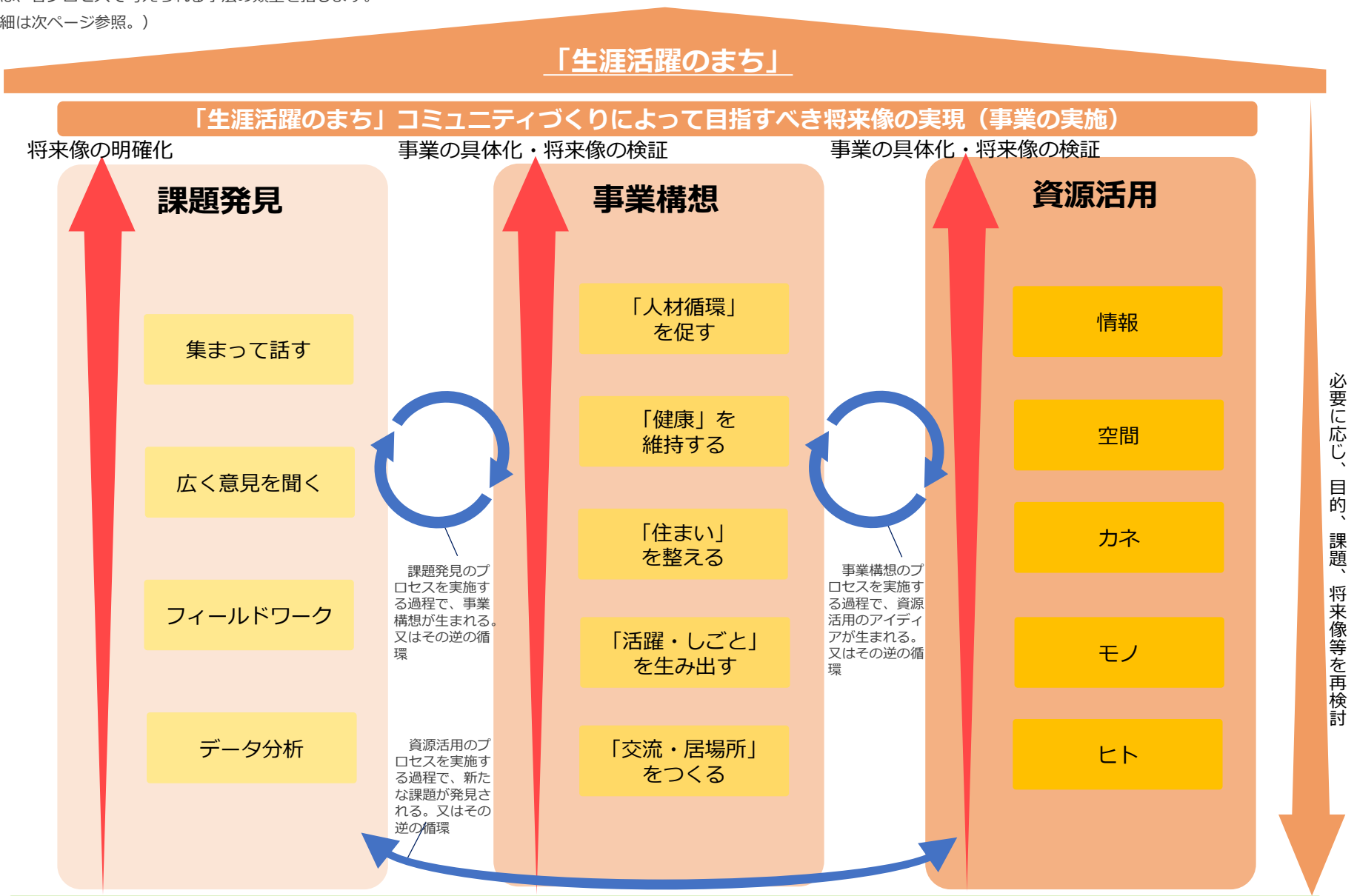
事例の活用

モデル自治体における取組事例（第5章）

プロセス	内 容
I. 課題発見 課題がどこにあり、どのような地域社会を実現したいのかを決める。	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 課題がどこにあり、どのような地域社会を実現したいのかを決めます（地域の目指す姿と課題）。 ➤ 検討を始める前に、地域の目指す姿と課題の仮説を設定します。暫定であっても目指す姿を関係者で共有することが重要です。 ➤ 実際に調査検討・協議等を進めていながら、仮説を検証し、目指す姿を明確にしていきます。誰のどのような課題を解決し、どんな居場所を作るのかを考えます。 ➤ 議論を進めていく中で疑問や意見の対立が起きた際は、ここで決めた「目指す姿」を振り返り、なぜ取組を進めるのかという目的に立ち戻ることができます。
II. 事業構想 誰が、いつ、何を、どのように実施するのか決める。	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「生涯活躍のまち」コミュニティを実現するには、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要ですが、最初からすべてを網羅する必要はありません。 ➤ 「目指す姿」を実現するために、まずはできるところから取組を構築します。 ➤ そして、誰が、いつ、何を、どのように実施するのかを決めます。
III. 資源活用 事業を具体化するために資源を活用する	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 事業を具体化するために資源をどう活用するか検討します。 ➤ 実際には、事業内容を考えながら資源の活用方法等を検討することが重要です。 ➤ できるだけ地域にある資源を活用しながら、行政と連携した資源の確保や、外部からの調達を検討します。

- 実際には、コミュニティづくりに正解はありません。
- **地域ごとに異なる多様な課題や状況に応じて、手法（積み木）を活用し、地域オリジナルのコミュニティを積み上げ、独自の「生涯活躍のまち」を目指してください。**
- また、3つのプロセスは必ずしもこの順番に沿う必要もありません。地域で活用できる資源を調べながらどのようなコミュニティをつくるのかを考えることや、コミュニティの作り方を議論しながらあらためて地域の課題を把握するなど、臨機応変に活用してください。4-5では具体的に積み木アプローチを用いた積み上げ例を提示しています。
- 加えて、「**誰が**」主体的に動き、「**どのように**」積み木を組み合わせるのか決めることも重要です。動き出す段階で、主体となる住民や団体を定めることができれば実行性が高まります。初期の段階で決まらない場合も、コミュニティづくりを進めうる上で常に主体を意識することが必要です。

▶ は、各プロセスで考えられる手法の類型を指します。
(手法の詳細は次ページ参照。)



「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指すべき将来像の実現（事業の実施）

将来像の明確化

事業の具体化・将来像の検証

事業の具体化・将来像の検証

課題発見

集まって話す

広く意見を聞く

フィールドワーク

データ分析

事業構想

「人材循環」を促す

「健康」を維持する

「住まい」を整える

「活躍・しごと」を生み出す

「交流・居場所」をつくる

資源活用

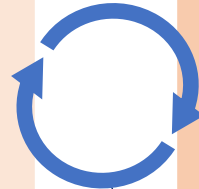
情報

空間

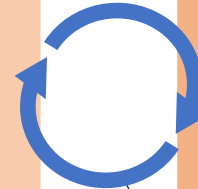
カネ

モノ

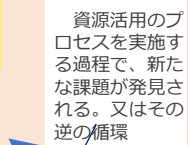
ヒト



課題発見のプロセスを実施する過程で、事業構想が生まれる。又はその逆の循環



事業構想のプロセスを実施する過程で、資源活用のアイデアが生まれる。又はその逆の循環



資源活用プロセスを実施する過程で、新たな課題が発見される。又はその逆の循環

必要に応じ、目的、課題、将来像等を再検討

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像 (vision) の検討 (第3章)

▶地域の実情に合わせて、各プロセスの積み木（手法）を積んでいきます。

資源活用
事業を具体化するために資源を活用する

事業構想
誰が、いつ、何を、どのように実施するのか決める

課題発見
課題がどこにあり、どういった地域社会を実現したいのかを決める

「生涯活躍のまち」

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指すべき将来像の実現（事業の実施）

ヒト	モノ	カネ	空間	情報
<ul style="list-style-type: none"> ● 思いを継承するリーダー人材の育成 ● 地域内での人材循環による新たな人材発掘 ● 役割による主体性の育成 ● 多様な属性の人材巻き込み 	<ul style="list-style-type: none"> ● メンバーが提供できるものを持ち寄る ● 設備や資材のシェアリング ● ひとつのモノを複数用途で活用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 行政資金の活用 ● 取組への共感から寄付等の資金を調達 ● 地域資源のブランド化による資金確保 	<ul style="list-style-type: none"> ● 廃校など活用されていない施設の活用 ● 空間のシェアリング ● 複数目的での空間活用 ● まわりの自然環境も含めて空間をとらえる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外部サービス活用による利用者/参加者募集 ● コンセプトを絞込んだ発信による情報提供 ● 社会的に共感しやすいコンセプト
「交流・居場所」をつくる	「活躍・しごと」を生み出す	「住まい」を整える	「健康」を維持する	「人材循環」を促す
<ul style="list-style-type: none"> ● 気軽に寄れる場所 ● 新たな賑わいづくり ● 静かにただ居られる場所 	<ul style="list-style-type: none"> ● 誰もが働ける仕組み ● 趣味でつながる ● 隠れたスキルを発揮する 	<ul style="list-style-type: none"> ● 移住希望者に住まいを提供する ● 住み続けるための仕組みをつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に体を動かす仕掛け ● 見守り体制を築く ● 集う場で健康になる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生を巻き込む ● 地域外の人を呼び込む ● 都市部にはないフィールド提供

将来像の明確化（3章参照）

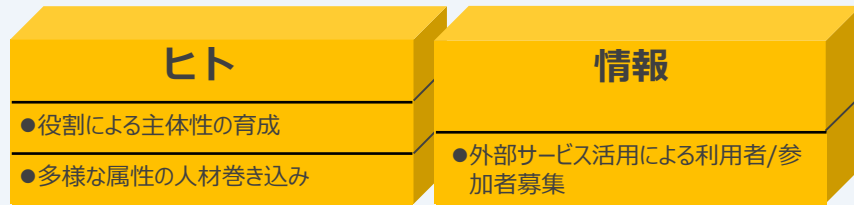
データ分析	フィールドワーク	広く意見を聞く	集まって話す
<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の統計データ分析 ● 他地域との比較 	<ul style="list-style-type: none"> ● まちあるき ● 地図づくり ● 見学会 ● 先進地視察 	<ul style="list-style-type: none"> ● オープンハウス ● ヒアリング ● アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ● ワークショップ ● ステークホルダー会議 ● 移住者や有識者との意見交換

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（3章参照）

積み木アプローチを進めるにあたり、誰が主体的な役割を担うのか、そして積み木をどのように組み合わせるのかを決める。当初段階で決まらなくとも、コミュニティづくりを進めていく中で常に意識し、主体の発掘・育成を進めることが重要です。また、「生涯活躍のまち」は、中長期的に、事業構想に記載する「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

例1) 3つのプロセスに沿って検討実施

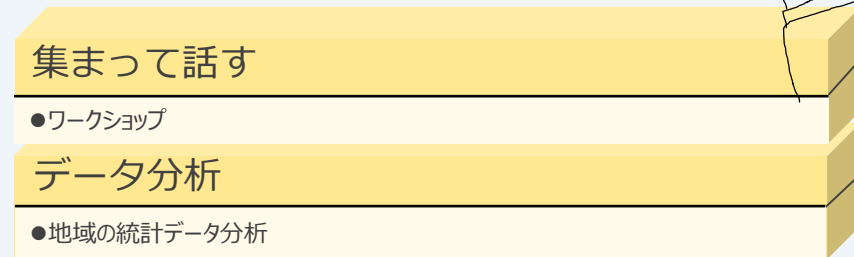
③取組のリーダーを交代で実施するなど役割を持たせるとともに、SNSを活用して幅広い年代にアプローチ



②高齢者向けの健康維持に関する取組を、気軽に立ち寄れる空間で実施

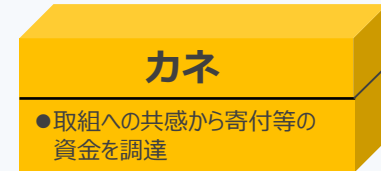


①統計データを踏まえて地域住民とワークショップを実施し、課題と目指すべき姿を明確化

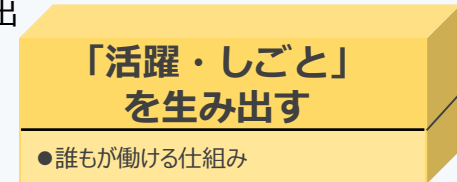


例2) 使える資源から検討実施

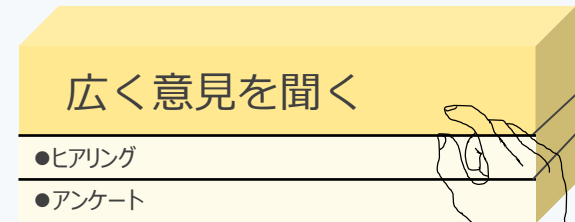
④クラウドファンディングで改装資金を調達



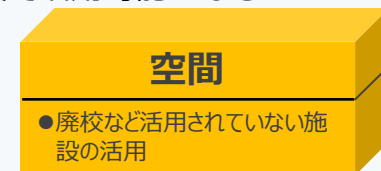
③廃校を活用し、空いた時間に仕事ができる仕組みを創出



②廃校を活用し、どのような地域課題を解決する使い方ができるかをアンケート・ヒアリングで調査

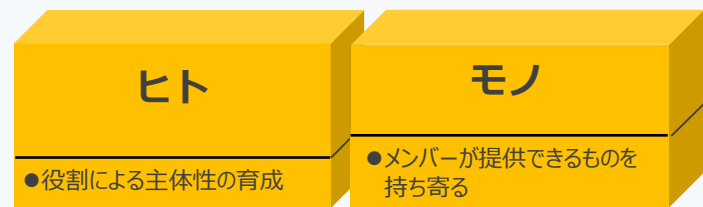


①廃校を無償で活用可能になる

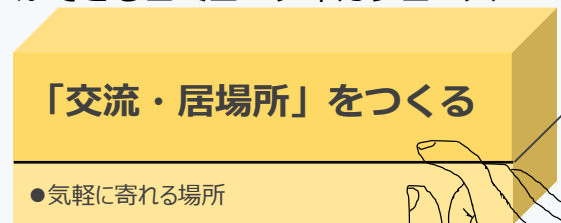


例3) 臨機応変にプロセスを入れ替えながら検討実施 ※どのプロセスからの検討も可能

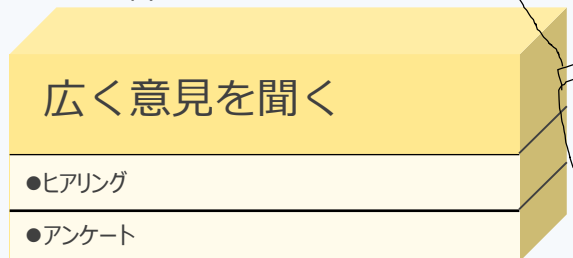
③いらなくなったおもちゃや子育てグッズのシェアリング、コミュニティ活動における役割明確化による主体性の育成



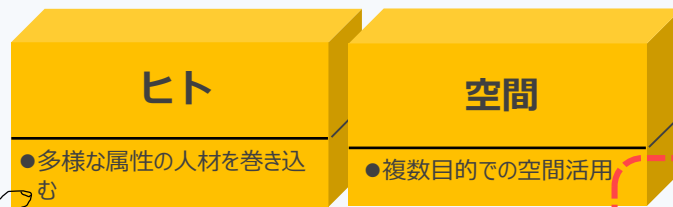
②地域のNPOと連携し、ママ友同士が気軽集まり、横のネットワークができるコミュニティカフェ・スペースを運営



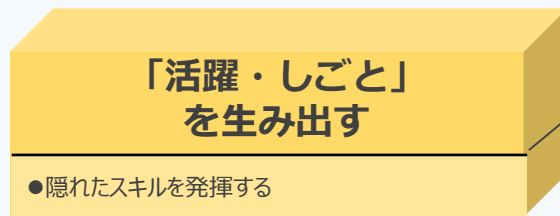
①保育所を通じたヒアリングやアンケートにより、子育て世帯が抱える課題を発見



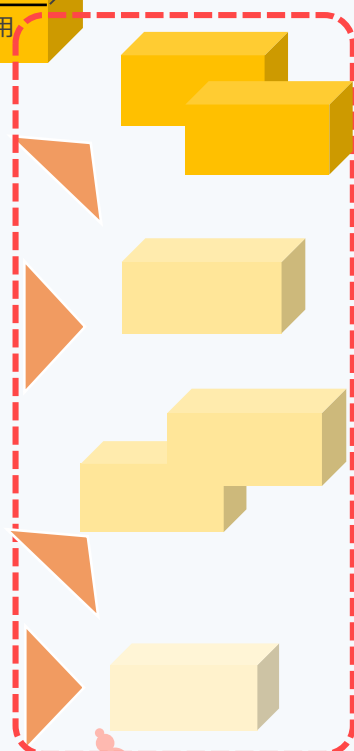
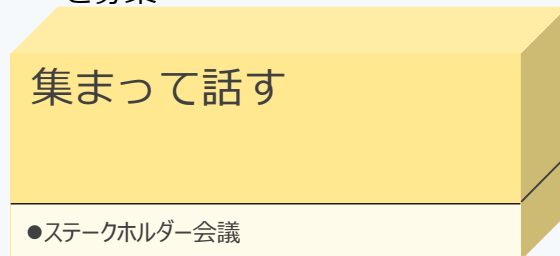
④活動を見た高齢者グループから連絡があり、カフェの利用と活動の連携について相談



⑤高齢者グループによる子どもたちへの「昔のあそび」教室を開催



⑥さらに、地域の会議においてコミュニティスペースの活用について意見を募集



さまざまな展開の可能性

I. コミュニティの“課題発見” データ分析

●地域の統計データ分析

- 対象とする地域の人口、年齢構成、町内会等の地域コミュニティの加入状況、小中学校の児童・生徒数、公民館や体育館などの利用状況、生活保護や要介護などの福祉分野のデータなどを調査するとともに、その経年変化を把握することで地域の課題を見つけます。

たとえば…

少子高齢化が具体的にどのように進んでいるのか、国勢調査によって5年おきの地域の人口・年齢構成を調べることによって把握できます。地域の公民館を活用するサークルの数や人数を経年で把握することによって、コミュニティ活動がどの程度活発に実施されているのか、またどういった活動が人気なのかを調査します。

●他地域との比較

- 上述の地域の統計データを、同じ自治体内の他地域や、他の自治体と比較します。
- 比較することで、相対的な地域の課題を見つけることができます。少子化、高齢化の状況は他地区と比べてどうか、コミュニティ活動の多寡についてはどうかなど、相対的な位置づけを把握することで、他地域の事例を参照しやすくなります。

たとえば…

全国的に町内会の加入率は下がってきているが、当該地区は他地区に比べると加入率は高いのか低いのかを調べ、その理由を調査することでどういったコミュニティづくりを目指すべきなのか検討する重要な要素となります。

課題発見

課題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決める

データ分析

- 地域の統計データ分析
- 他地域との比較



I. コミュニティの“課題発見” フィールドワーク

●まちあるき

- ▶ まちの特性を把握し、共有するためには、まちあるきによって実際にまちを体感することも重要です。
- ▶ 公園や広場などの利用状況、自然と交流が生まれる場所の有無、空き家の現状、商店街の賑わいなど、地域の実際の状況を関係者の視点で捉え、共有することで、課題がどこにあるのかを見つけることができます。

たとえば…

書き込めるような地図を関係者ひとりひとりが持ち、まちあるきをしながら気になった点を書き込みます。まちあるき終了後にそれぞれの書き込んだ地図を持ち寄り、まちの具体的な問題点について確認・共有する時間を設けます。

●地図づくり

- ▶ 地域の課題は、その地域の地図に具体的に落とし込むことによって、さらに視覚化・共有化され、次のコミュニティづくりにつなげることができます。
- ▶ まちあるきの結果として、交流拠点や空き家など具体的なテーマに沿った地図をつくることも考えられます。

たとえば…

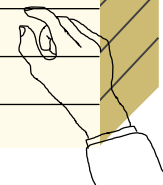
地域の空き家の状況について、関係者ひとりひとりの知識を持ち寄り空き家マップを作成します。その分布や地域的特性を踏まえて、空き家活用方をより具体的に検討することができます。

課題発見

課題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決める

フィールドワーク

- まちあるき
- 地図づくり
- 見学会
- 先進地視察



●見学会

- 同じ地域の中でも、より活発になる活動、衰退する活動など、さまざまなコミュニティがあります。そうしたコミュニティや場の見学会を開催することで、関係者のみならず、別のコミュニティのメンバーに対しても課題や目指す姿をイメージさせる効果があります。

たとえば…

公民館やコミュニティセンターの活動について、活動の広がりが生まれているコミュニティの見学会を開催し、コミュニティの作りかたや続けかたについて学ぶことで、他のコミュニティの活性化や新たなコミュニティの作りかたに繋げることができます。

●先進地視察

- 取組の先進地を体験することで、目指すべき姿をより具体的にイメージすることができます。
- 漠然とした課題感で実施するのではなく、具体的な課題やビジョンのテーマを設定して、その先進地を選定・視察することによって自らの地域への落とし込みにつながる。

たとえば…

国等が公表しているさまざまな先進事例集から、自らの地域の課題に即した先進地を選び訪問・視察します。その際、あらかじめ関係者で相談し、取組を進めるために解決すべき課題等について整理することで、単に見るだけでなく疑問点を聞くことによって自らの地域に置き換えて考えることができます。

(参考) 「生涯活躍のまち」の取組事例については、次のURLからご確認ください。

<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/index.html#jireimap>

I. コミュニティの“課題発見”

広く意見を聞く

● オープンハウス

- オープンハウスとは、検討課題や情報をパネルやリーフレットによってオープンにし、その場で誰でもスタッフに対して質問や意見をすることができる場です。対象となる地域で、オープンハウスを実施することで、幅広い住民から意見を募ることができます。

たとえば…

図書館や公民館など一般利用者の多い行政施設、人の多く集まる商業施設や駅といった場所において、フリップボードなど気軽に意見を提出できる仕掛けを実施し、地域住民の幅広い意見の把握に取り組みます。

● ヒアリング

- 地域の主要な人物に対し、面談や電話、インターネットを活用したヒアリング／インタビューを実施し、地域の実情・経緯を踏まえた課題を、その背景とともに把握します。

たとえば…

地域団体の長（町内会長等）、コミュニティのリーダー、民生委員などにヒアリングを実施し、その地域の具体的な課題や、その解決のためにこれまで実施してきた活動等について知ることができます。

● アンケート

- 地域住民から被験者を抽出し、対面あるいは書面やインターネットを介してアンケートを実施します。
- 地域住民の意見の傾向を効率的に把握できますが、その際、調査範囲の適正性、設問の恣意性などについては十分に留意する必要があります。

たとえば…

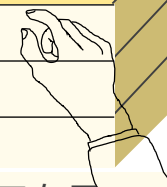
行政が提供するSNSを活用してインターネットアンケートを実施し、地域の課題やニーズについて把握します。

課題発見

課題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決める

広く意見を聞く

- オープンハウス
- ヒアリング
- アンケート



I. コミュニティの“課題発見”

集まって話す

●ワークショップ

- 特定のテーマを設定し、関心の高い人や地域のキーパーソンが集まり、少人数のグループで議論や作業を実施します。
- 課題や目的抽出の段階だけでなく、その後の事業構想、資源活用の検討の際にも活用することができます。

たとえば…

地域活動へ参加することが少ない若者や移住者から参加者を募り、中長期的なコミュニティづくりのための課題やニーズについてのワークショップを実施します。参加者はその後のコミュニティづくりの中核としても期待できます。

●ステークホルダー会議

- 主要な関係者を集めて、課題やニーズ、事業内容について具体的な検討を実施します。
- 地域の主要な関係者が協議し、課題やビジョンを共有することで、その後の調整が進みやすくなります。

たとえば…

行政、町内会長、青年団体の長、商店街組合長などが集まる場を設定し、それぞれのステークホルダーが抱える課題やニーズを共有することでさまざまな視点での課題を把握することができます。

●移住者や有識者との意見交換

- 地元出身者では見えにくい課題であっても、移住者や有識者の目から見た課題を把握するとともに、その知見を活かした解決の方向性を見出すことができます。

たとえば…

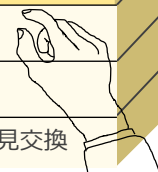
先進地視察の代わりに、先進地から実践者を招いて会議に参加していただき、その地域の具体的課題に対して意見をいただくことで課題解決の方向性の参考にすることができます。

課題発見

課題がどこにあり、どういう地域社会を実現したいのかを決める

集まって話す

- ワークショップ
- ステークホルダー会議
- 移住者や有識者との意見交換



I. コミュニティの“課題発見”

先行事例

まちづくり住民アンケートとヒアリング（北海道東川町）

取組概要

- 過去に実施した「まちづくり住民アンケート」の結果を基に、各担当課職員および住民へのヒアリングを実施し、生涯活躍のまちのニーズ・課題等の把握を実施。
- その結果、「生涯活躍のまち」を構成する事業が構想され、地域再生推進法人を活用した官民連携による多文化・多世代のまちづくりを推進。

ポイント

- ✓ まちづくり住民アンケートを活用。
- ✓ アンケートに加えて、ヒアリングを実施し、課題やニーズをより具体化。
- ✓ 課題発見プロセスを基に、コミュニティセンターの充実、「しごとコンビニ®」（ワークシェアリング事業）の整備、健康ポイント制度の充実等に繋がっている。



〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ

広く意見を聞く

- ヒアリング
- アンケート



事業構想



先行事例

移住者や地域外の人々の意見を聞くワークショップ（長野県駒ヶ根市）

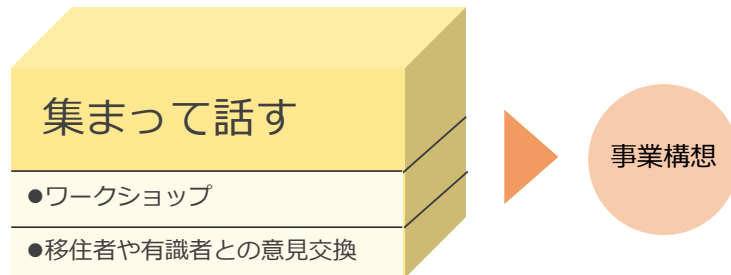
取組概要

- 市では、各種計画策定時に、移住者や地域外の企業人材などによる、「外からの目線」も取り入れるためのワークショップを開催することがあった。
- 「生涯活躍のまち」構想を策定する際にも、移住者や市内に本部移転したJOCA（公益社団法人 青年海外協力協会）も含む地域内外の団体や企業とワークショップを開催。
- その結果、多様な人材の地域での活躍や、まちなかでの交流や活性化に係る事業を一体的に推進することで地域課題へアプローチするといったアイデア・視点が発見され、事業連携を基軸とした事業構想の基礎となった。

ポイント

- ✓ 構想策定にあたって、市役所内部だけでなく、市内外の様々な意見を積極的に収集。
- ✓ 事業検討の際に、当初から民間との事業連携を前提にした構築を実施し、持続的な事業となるよう検討実施。

〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



定期的に移住者を集め交流しながら意見を集める「こまがね移住者交流会」



事業連携を基軸とした生涯活躍のまちづくり構想

HP :

<https://www.city.komagane.nagano.jp/soshikiichiran/kikakushinkoka/chiikishinkogakari/2/2/4347.html>

Ⅱ. コミュニティの“事業構想”

「交流・居場所」をつくる

● 気軽に寄れる場所

- 「支援する／されるための施設」ではなく、気軽に立ち寄れる場所をつくります。
- 敷居を感じさせないためには、初めてやってきた人でも交流が図れるようコーディネーターの役割を担う人の配置も重要となります。

たとえば…

子供連れでも気兼ねなく入れるよう遊べるスペースや託児機能を備えたカフェづくりをすることにより、同じ悩みを抱えた子育て中の親が集える場所づくりができます。

● 新たな賑わいづくり

- 地域資源を活用し、自然と人が集まる新たな賑わいをつくります。
- 地域交流拠点を開設することで、さまざまな世代、属性の人の交流を生み出す場を生み出します。

たとえば…

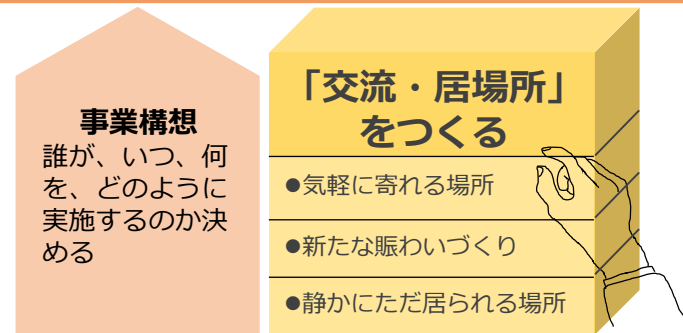
商店街の空き店舗を開放し地域交流拠点とすることや、地域住民や地域の企業による朝市などのイベントを実施し、多様な人材が自然と集まり、交流する空間を創出します。

● 静かにただ居られる場所

- 賑やかに交流することを好む人がいる一方で、積極的な交流を望まない人もいます。
- そうしたニーズを踏まえ、あえて役割や交流を求めずに、自由にいられる空間を提供します。

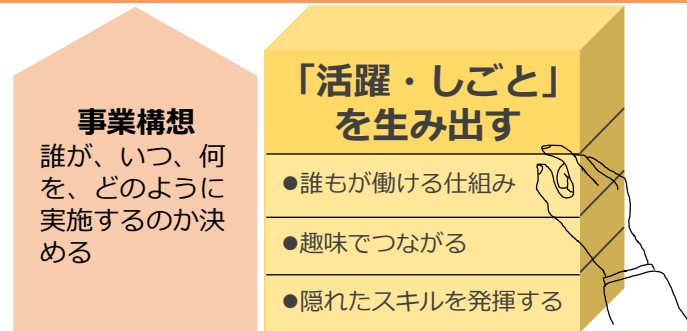
たとえば…

同じ空間内でも、交流を促進するスペースと、一人でいられるスペースをつくることで、誰もが心地よい空間を生み出すことができます。その際、どのようにスペースを配置にするか等、設計から工夫することが重要です。



Ⅱ. コミュニティの“事業構想”

「活躍・しごと」を生み出す



●誰もが働ける仕組み

- 高齢者や子育て主婦・主夫など、労働条件に制約がある人でも働ける仕組みをつくりまます。
- 様々な立場の人が、どういう仕事ができるのか、したいのかを踏まえた仕組みとすることが重要です。

たとえば…

時間や作業内容に制約がある人が働けるようにするために、大きな仕事の一部を切り出して担当できるようにしたり、労働者のチーム作りなどの工夫で、誰もが働ける仕組みを構築します。

●趣味でつながる

- 「やらされる」のではなく、趣味を通じて活動することで、積極的な活躍の場を生み出します。
- 地縁だけでなく、地域内外の人々が本人の関心に基づき広域のつながりづくりができるよう支援します。

たとえば…

住民の興味関心をアンケート等で把握したうえで、地域交流拠点が主催してスポーツや文化活動などのサークル活動を実施します。はじめは講師を呼んで講座形式で開催し、徐々にメンバー同士でのサークル活動とすることが考えられます。

●隠れたスキルを発揮する

- 仕事や子育て、趣味などで得たスキルを発揮できるようにします
- 本人がスキルと自覚していないスキルについても、周囲がその活かし方を教えることも重要です

たとえば…

個人的に利用していたSNSで、写真撮影や編集のスキルを発揮している場合、新たな仕事に結び付けたり、地域活動でのスキル発揮に繋げることができます。

Ⅱ. コミュニティの“事業構想”

「住まい」を整える

●移住希望者に住まいを提供する

- 特に地方では信頼関係に基づいて物件のやり取りが行われており、不動産情報がウェブサイトなどで把握しづらい状況となっているケースがあるため、移住者でも住宅情報にアクセスできる環境を整備します。
- 移住希望者や地方でのテレワーク希望者向けに、地域の生活を体験できるお試し居住用住宅を整備します。

たとえば…

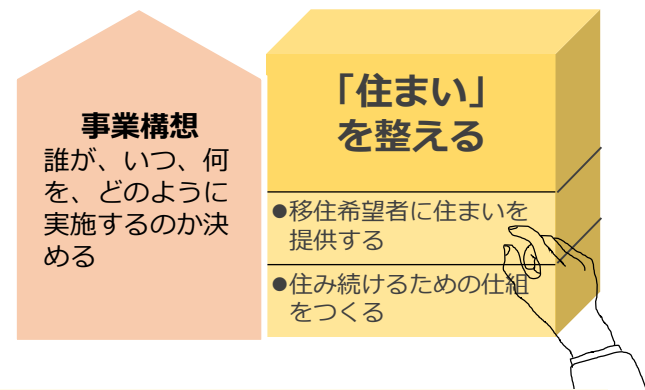
一般の賃貸や住宅売買情報の提供のほか、地域への聞き取り情報や空き家バンクの情報に基づく空き家を活用できる仕組みや窓口を整備します。

●住み続けるための仕組みをつくる

- 住民が高齢化しても住み続けられるよう、既存住宅の管理や新たな住宅エリアの整備、交通インフラの整備などを進め、地域住民の住まいに関するニーズ（住替えやリフォーム、交通利便性のある暮らしなど）を満たすまちをつくります。
- 子育て世代、現役世代も地域内に住み続けられるよう、仕事や活躍などと一体化した仕組みづくりも重要となります。

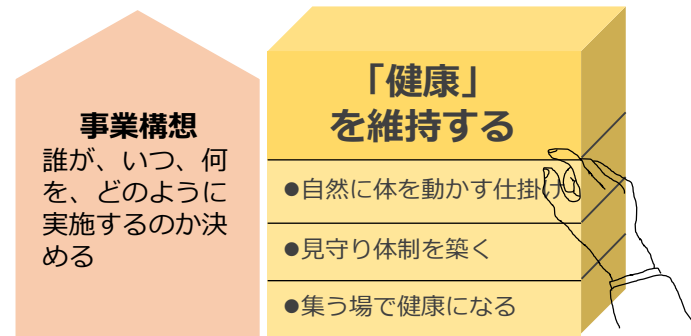
たとえば…

雪が積もる地域において、住まいの整備・提供と雪下ろしボランティアとのマッチング支援を同時に行うなど、地域の実情に応じて、住まいとコミュニティとが関連した取り組みを行うことにより、コミュニティを活性化させることができます。



Ⅱ. コミュニティの“事業構想”

「健康」を維持する



●自然に体を動かす仕掛け

➤ 出かけたくなる場所づくりや、交流の機会づくりなどを通じて、家を出るきっかけをつくります。

たとえば…

おいしいものを食べられる、楽しい経験ができる、といった「参加したくなる」イベントを企画すると、家にこもりがちな高齢者なども外出する機会を得ることができます。

●見守り体制を築く

➤ 地域で生活しながらも、これまで接点のなかった人同士を結び付けることで、悩みや不安を持つ住民や孤立しがちな住民を支える見守り体制を築きます。

たとえば…

商店街など人が集まる場所で、各店主に地域で活動する高齢者の集いや子育て世代のコミュニティを紹介することで、自然と声掛けなどの交流を促し、見守り体制の構築につなげます。

●集う場で健康になる

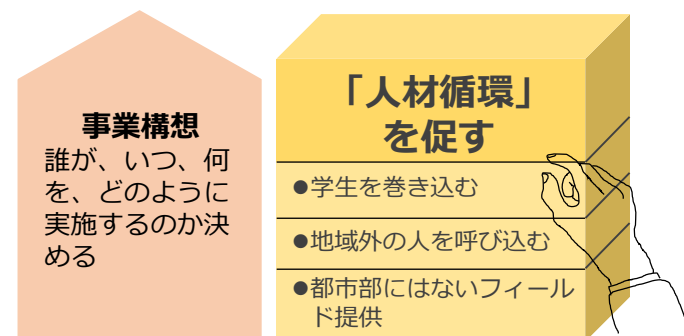
- 定期的集まるサークルや子供向け健康教室などの活動を通じて、誰もが健康で暮らすことができるコミュニティをつくります。
- 高齢者を対象に集まって運動する機会を提供することで、心身の健康を維持しフレイル対策等につなげます。

たとえば…

地域で体操教室などを開催し、定期的集まる場所をつくります。体を動かすだけでなく、教室の開催前後でのおしゃべりなども楽しめるようにし、継続的な健康づくりを促します。

Ⅱ. コミュニティの“事業構想”

「人材循環」を促す



●学生を巻き込む

- 将来的な担い手や関係人口創出のために、地域のプロジェクトや課題解決に学生を巻き込んで取り組みます。

たとえば…

経営や地方創生などに関心のある学生に向けた経営者体験プログラムとして、地域の商店や企業などで短期間インターンシップを実施することで、双方に新しい視点を提供することができます。

●地域外の人を呼び込む

- サテライトオフィスの整備など地域外の人を呼び込む体制を整備することにより、人の流れを生み出します。
- 外部の視点による地域の課題や潜在的な価値の再発見により、地域住民自身の新しい刺激や気づきが期待できます。

たとえば…

地域外の人がワーケーションなど移住未満の気軽さで滞在できる体制・環境を構築し、週末など空いた時間で地域の活動に参加してもらうことで、持続可能な人材循環を生み出します。

●都市部にはないフィールドを提供する

- 農地や里山など、都市部にはないフィールドでの活動の機会を提供することで、人材の循環を促します。

たとえば…

農地と農業の指導者を都市部の希望者に提供し、初心者でも取り組みやすい農業の機会を提供します。耕作放棄地の解消だけでなく、指導者として活動する地域の人々にとっても居場所と役割を得るきっかけづくりができます。

II. コミュニティの“事業構想”

先行事例

楽しく気軽に集うサロン コミュニティ・マルシェ (埼玉県鳩山町)

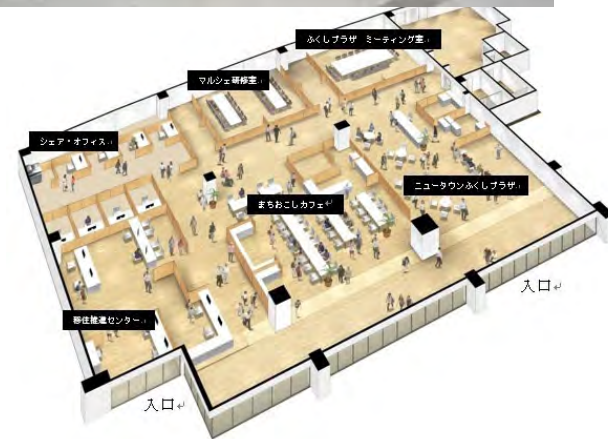
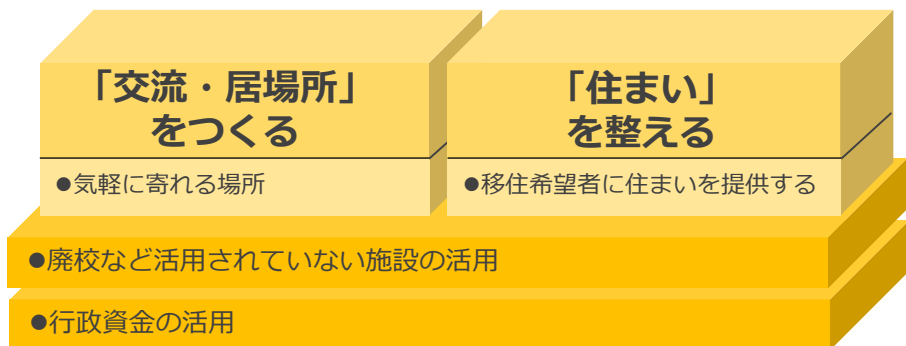
取組概要

- 高齢化するニュータウン地区における商業施設（又は店舗）跡地に、楽しく気軽に集い交流できるサロン、物づくりや販売にチャレンジできる生涯活躍の場としてコミュニティ・マルシェを整備。
- 館内には、特産品の販売も行う「まちおこしカフェ」、空き家バンクを活用した情報提供を行う「移住推進センター」、地域福祉の推進や相談支援窓口である「ニュータウンふくしプラザ」、起業を支援する「シェア・オフィス」が入っている。

ポイント

- ✓ 商業施設の跡地を活用し、地方創生拠点整備交付金等を活用し複合施設を整備。
- ✓ 福祉や移住に関する相談窓口に加えて、物販やカフェ機能を備えることによって、気軽に集える空間づくりを実施。
- ✓ 施設は民間（指定管理者）が運営し、空き家カフェ（相談会）を開催。
- ✓ まちおこしカフェでは起業支援も実施。

〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



HP : <https://hatoyamacm.tumblr.com/>

先行事例

かみしほろ人材センター（北海道上士幌町）

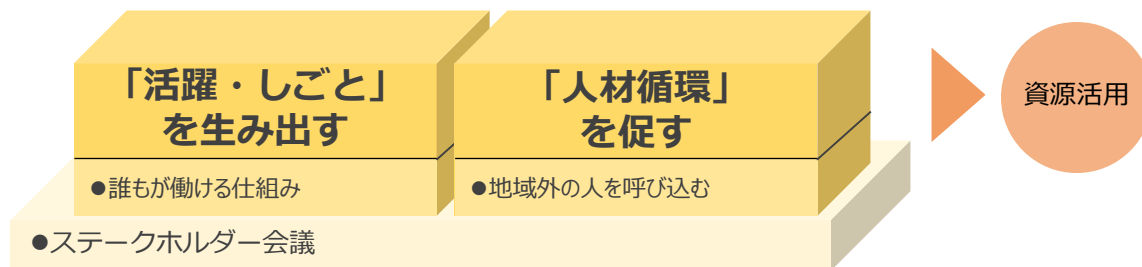
取組概要

- 上士幌町は、「町民が生き生きと生涯活躍できるコミュニティづくり」を経営理念とする(株)生涯活躍のまち かみしほろを設立し、同社を中心に、町民全員が得意を活かして活躍したり、やりたいことへのチャレンジができるような環境づくりを実施。
- その活動の一環として、「かみしほろ人材センター（まちジョブハレタ）」を設置し、町内の困りごとを町民が解決する仕組みの中で、短期で簡単な業務を子育て世代やシニア世代を中心とした人材が会員として担う、町民の活躍の場を提供。

ポイント

- ✓ 官民連携で活躍・しごとのマッチングを実施。
- ✓ プラットフォームを整備し、町内人材だけでなく、町外のサポーター会員なども活用し、町内外のスキルと町内個人・企業の困りごとをマッチングするシステムを導入。
- ✓ しごとの掘り起こしや人材育成、コミュニティづくりをめざすシェアリングエコノミー構想を展開する予定。

〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



HP : <https://www.machijob.net/>

先行事例

100の複合型コミュニティづくり（奈良県生駒市）

取組概要

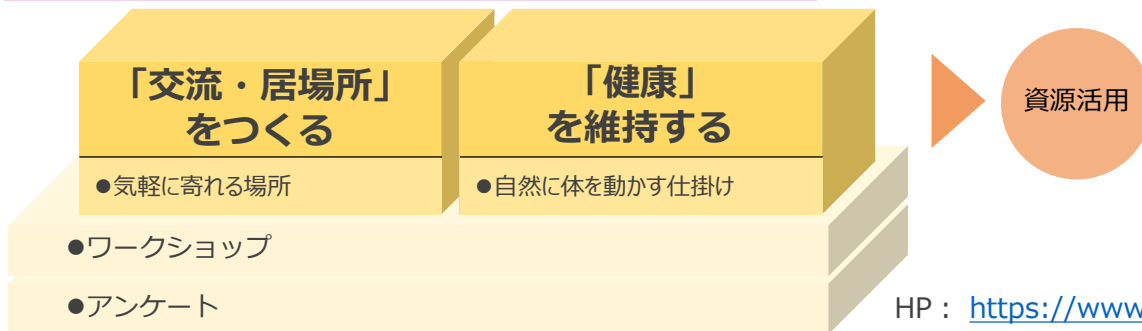
- 人口減少期におけるポスト・ベッドタウンの街の姿として、身近な地域において、生涯にわたり住民の誰もが居場所と役割のある、「暮らし、学び、はたらく」ことのできる街「自分らしく輝けるステージ・生駒」の実現をめざす
- その中核として、様々な地域活動が複合的に実施されることで、あらゆる世代の人が気軽に参加し、地域内外の人々の接点となる「複合型コミュニティ」を推進
- 家から歩いて行ける範囲で多様な機能を備えた複合型コミュニティ拠点を整備



ポイント

- ✓ 「家から歩いて行ける範囲」で機能を整備することで、互いに顔の見える関係を構築し、相互扶助を強化
- ✓ 気軽に歩いて行けることから、徒歩による外出機会を増やし、健康増進につなげる
- ✓ 市役所内で横断的な推進会議を設け、複合型コミュニティを政策や事業のアウトリーチの場とする視点を共有

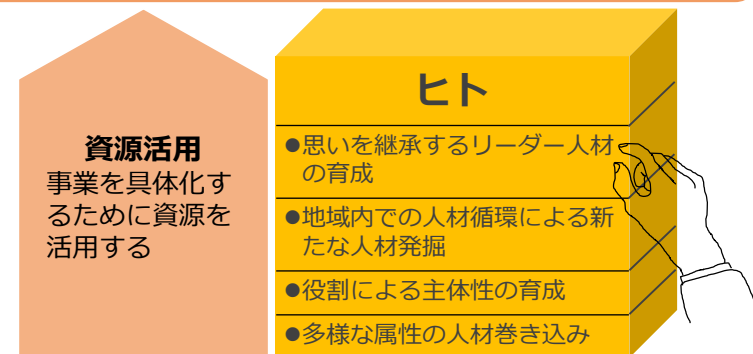
〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



HP : <https://www.city.ikoma.lg.jp/category/28-3-0-0-0-0-0-0-0-0-0.html>

Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

取組継続のための資源：ヒト



● 思いを継承するリーダー人材の育成

- 地域の取組に対する熱意（思い）を持った次期リーダーを組織内で育成します。
- 次期リーダーの育成により、長期的な目線でのコミュニティ活動の継続や周辺地域等を巻き込んだコミュニティのさらなる発展にもつながります。

たとえば…

リーダー人材に必要な要素（リーダーシップ等）をレクチャーする育成プログラムを作り、コミュニティ内の比較的若いメンバーにノウハウを伝授することで、彼らが主体となったコミュニティの継続や新たな取り組みへの発展にもつながります。

● 地域内での人材循環による新たな人材発掘

- 地域内の様々な属性や年代の人が繋がる/交流する場面や場所をつくります。
- 様々な人が交流することで、新たなサービスや課題解決の機会を生むことにつながります。

たとえば…

地域内で課題を抱える人と解決できる人をつなぐための検討の場（地域の色々な属性の人が一同に介する会議体など）を地域内で開催することで、思わぬ課題の解決策やスキルを持っている地域内の人材を発掘することができます。

●役割による主体性の育成

- コミュニティのメンバーに責任ある役割を与えることで、取組に主体的に参加する可能性が高まります。
- 主体的に取り組むメンバーが増えることで、コミュニティ活動の発展・継続に向けた議論や活動が活発化します。

たとえば…

コミュニティの参加メンバーに自分の得意な領域（趣味のようなものでも可）の講義や出し物を依頼します。コミュニティ活動のサービスを“受ける”側から“提供する”立場になることで、その後のコミュニティ活動への積極的な参加につながります。

●多様な属性の人材巻き込み

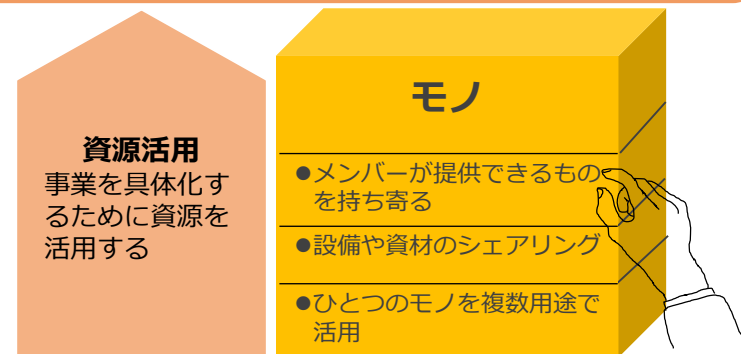
- 地域外やこれまでコミュニティ活動に参加してこなかった地域住民を巻き込みます。
- コミュニティ内部の中心メンバーだけでは思いつかなかったアイデアやコネクションの活用につながります。

たとえば…

地域おこし協力隊など外部人材を巻き込み、外部の視点での事業へのアイデア出しやサービス開発への参画を積極的に促す仕組みを構築することで、新たな視点をコミュニティの運営に取り入れます。

Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

取組継続のための資源：モノ



●メンバーが提供できるものを持ち寄る

- コミュニティのメンバー同士で提供できるものを持ち寄ることで、資源や資金が不足している中でもサービスを継続することができます。

たとえば…

図書館が近くにない地域で、空き家・空きスペースがある人と読まなくなった本がある人がそれぞれのモノ（空き家・空きスペースと読まなくなった本）を提供することで、コミュニティ図書館を作ることができます。

●設備や資材のシェアリング

- コミュニティ内で車など比較的高価な設備や資材を共有して活用することで、資源の有効活用と無駄なコストの削減を図ります。

たとえば…

公共交通の少ない地域では、車をコミュニティの共有財産とし、乗り合いの仕組みとすることで、住民の車の維持管理コストの削減を図りつつ、乗り合いによるコミュニティの活性化にもつなげることができます。

●ひとつのモノを複数用途で活用

- 単一の用途ではなく、モノの持つ機能や役割に着目して、ほかに活用できる用途がないかを考えます。
- 複数の用途でモノを活用することで、無駄を減らしつつ稼働率の向上にもつながります。

たとえば…

過疎地域等で空席が目立つ路線バスの空き席を荷置きスペースとすることで、バスの空きスペースを活用しつつ、地域への荷物の運送コスト削減にもつながります。

Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

取組継続のための資源：カネ

●行政資金の活用

- 事業開始や制度導入時には資金負担軽減のために、行政の各種補助金を活用することは有効です。
- 一方で、事業の発展・継続に取り組む段階では、自主的な資金確保策についても検討する必要があります。

たとえば…

デジタル技術を活用して地域の課題解決等に取り組む「デジタル田園都市国家構想推進交付金」や、地域の観光振興や住民所得の向上等の基盤となる先導的な取組を支援する「地方創生推進交付金」などを活用します。

●取組への共感から寄付等の資金を調達

- 社会的な要請が強い活動や環境配慮の取り組みなど、個人や企業から共感を得られやすい取組を実施する際に、積極的な情報発信を行い、共感を得られた人たちから寄付等を集め、活動資金として活用します。

たとえば…

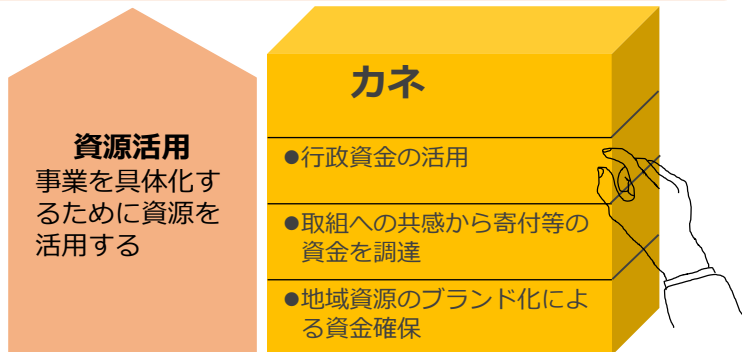
クラウドファンディングの仕組みを活用し、活動内容の社会性や必要性等を訴求します。活動の目的に共感した企業や個人から広く資金を集めることができ、これを運営資金や新たな活動のための資金として活用します。

●地域資源のブランド化による資金確保

- 地域の特産品等をブランド化し、市場価値を高めて販売します。
- 地域の歴史等を踏まえストーリー性を持たせることで、付加価値を向上させます。

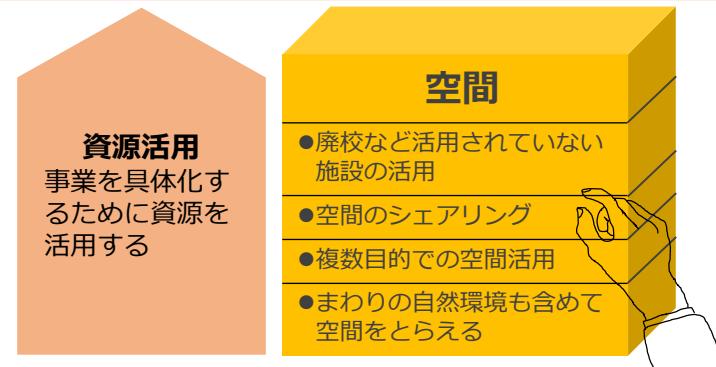
たとえば…

社会・環境課題と絡めて地域の特性・特徴を反映したストーリーづくりを行うことで、農作物をブランド化。ストーリーに共感した消費者に販売することで、地域活動の運営資金を確保します。



Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

取組継続のための資源：空間



●廃校など活用されていない施設の活用

- 行政の遊休施設は比較的安価で借りることができることがあり、民間事業者が活用しやすい可能性があります。
- 遊休施設やまちの空き店舗等をコミュニティの活動拠点等として活用することで、地域コミュニティの運営コストを抑えることができます。

たとえば…

地域内の使われなくなった廃校で、教室をリフォームして地域コミュニティの活動拠点としたり、体育館をイベントスペースとして活用することができます。

●空間のシェアリング

- 住民が持つ空きスペースを共有することで、遊休スペースの稼働率を上げつつコミュニティ活動ができる場所を増やしていきます
- 空きスペースを活用することで、通常の貸し会場予約・使用よりもコストを抑えることにつながります

たとえば…

事業所の空き会議室や空き駐車場、民家の空き部屋など、地域内で空いているスペースを共有し、予約・利用できる仕組みを構築することで、コミュニティ活動の集まる場やイベントスペース不足といった課題に対処します。

●複数目的での空間活用

- 複数の目的（高齢者福祉と子供の放課後支援など）を一緒に実現できる空間づくりを行います。
- より多くの人に参加を促しつつ、単一目的で複数の施設や空間を借りるよりも効率的に運営ができます。

たとえば…

子ども、高齢者、障がい者など地域の様々な利用者や用途を想定した複合的な空間づくりをすることで、様々な利用者や支援者が集まりやすくなります。また、利用者同士互いに助け合う風土づくりにつながったり、単一のサービスでは思いつかなかった新たなサービスの創出にもつながる可能性があります。

●まわりの自然環境も含めて空間をとらえる

- 都市部にはない豊かな自然環境がその空間の価値を高めることにつながる可能性があります。
- 自然環境を生かした空間づくりにより、地域外から人を呼び込むことにつながります。

たとえば…

自然豊かな地域で、SDGsやサーキュラーエコノミーを実現する暮らしなどの社会的なニーズや潮流に沿ったコンセプトを打ち出し、古民家の改修やリフォームを行うことで、社会的意義への関心が高い層へPRし、彼らを地域に呼び込むことにつながります。

Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

取組継続のための資源：情報

資源活用
事業を具体化するために資源を活用する

情報

- 外部サービス活用による利用者/参加者募集
- コンセプトを絞り込んだ発信による情報提供
- 社会的に共感しやすいコンセプト

●外部サービス活用による利用者/参加者募集

- SNS等のサービスを活用し地域内外から利用者や参加者を広く募集します
- 活用するサービスは呼び込みたい利用者や参加者の属性を踏まえて決定します。

たとえば…

地域内の利用者が主だったコワーキングスペース・テレワークスペース等を、全国的なプラットフォームサービスを活用して発信することで、全国各地から利用者を募集します。その際、地域の特徴や魅力も合わせて発信できます。

●コンセプトを絞り込んだ発信による情報提供

- ありきたりな情報発信をしても、同様の取組を行っている地域やコミュニティの中で埋没してしまいます。
- そこで、自分たちの目指す方向性を絞り込んだ情報発信をすることで、効果的な参加者募集につながります。

たとえば…

コミュニティで目指すコンセプト・欲しい人材を明確にし、ターゲットとなる人材とつながりやすいプラットフォームを活用して発信することで、コンセプトに共感する人が集まりやすく、コミュニティの発展につながります。

●社会的に共感しやすいコンセプト

- より多くの人から共感を得られやすいコンセプトを設定することで、参加や支援につながります。
- 地域の特性を踏まえたコンセプト設定とすることで、地域住民からも理解を得られやすくなります。

たとえば…

SDGsなど社会的に共感を得られやすい内容と地域で行っている取組を関連付けてコンセプトを整理し、情報発信をすることで、共感した人を呼び込むことにつながる。

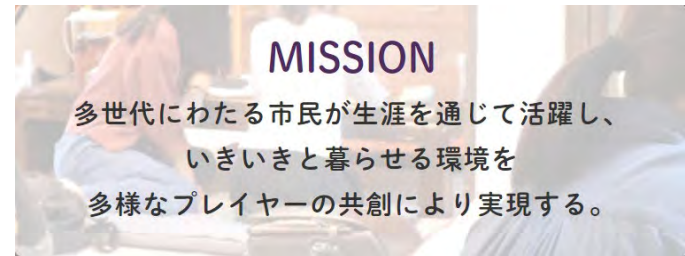
Ⅲ. コミュニティの“資源活用”

先行事例

一般社団法人まちのtoolbox（山梨県都留市）

取組概要

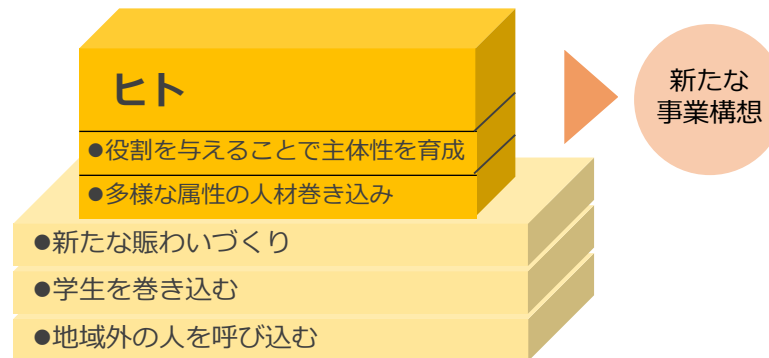
- 人口3万人規模の市に3つの高等教育機関が立地するという強みを活かし、学生・高齢者・若者・子どもが活躍する「市民全体の豊かな暮らし」を目指している
- 「生涯活躍のまち」を実現するために、官民共同のまちづくり組織として一般社団法人「まちのtoolbox」を設立
- 4つのテーマで事業を創出するほか、民間企業や個人など多様なプレイヤーのコミュニティを構築し、まちづくりに関する提案を随時受付、事業化を積極的に支援



ポイント

- ✓ 担い手となる一般社団法人を設立し、主体性を育成
- ✓ 多様なプレイヤーからなるコミュニティを構築し、まちづくりに関するハブとなることで、官民共同のまちづくりを促進

〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



先行事例

キナルなんぶ（鳥取県南部町）

取組概要

- 「あなたのいきかたをデザインできるまち」をコンセプトに、誰もが居場所と役割をもつコミュニティづくりにより、町民が生涯にわたって活躍し、誇りをもって住み続けたいと思えるまちづくりを進める。
- その一環として、町立図書館が入った複合施設を整備し、パン屋、多目的ルーム、ワークスペース等の機能を併設。
- 「学び」「交流」「情報」の3つの柱を軸に社会教育施設としての機能だけでなく、多世代が多目的に交流できる場を整備することで、新たな活動や価値を創出。

ポイント

- ✓ 図書館機能を含む多機能を整備することにより、多世代、多様な属性の利用者を誘引。
- ✓ 施設整備にあたっては、地方創生拠点整備交付金を活用。

〈積み木アプローチ〉を用いたイメージ



CONCEPT コンセプト

「学び」「交流」「情報」の3つの柱を軸に社会教育施設としての機能だけでなく、多世代が多目的に交流できる場を整備することにより、新たな活動や価値を生み出し、生涯に渡り活躍できる場となる施設。



HP : <https://kinaru-nanbu.com/>

- 「生涯活躍のまち」コミュニティづくりにおいて、地方公共団体は大きな役割を担っています。
- 地方公共団体主導型であっても、地域住民主導型であっても、各プロセスにおいて以下のような地方公共団体の役割があります。

I. 課題発見

地域が抱えている課題やニーズ、地域の特性や地域資源等を把握し、目指す姿を明確化します。

- 地域との検討体制の構築
- 各種統計データの提供
- ワークショップ、ヒアリング、アンケート等の実施

II. 事業構想

他部署説明を通じた庁内での意思決定、担当者整理を実施し、「生涯活躍のまち」づくりを具体化します。また、議会や地域住民等対外的な説明を実施するほか、必要に応じて財源の手当てを検討します。

- 企画部門等を含む庁内横断の検討体制づくり
- 首長含む庁内での意思決定
- 「生涯活躍のまち」構想・計画の策定
- 予算要求
- 議会への説明

III. 資源活用

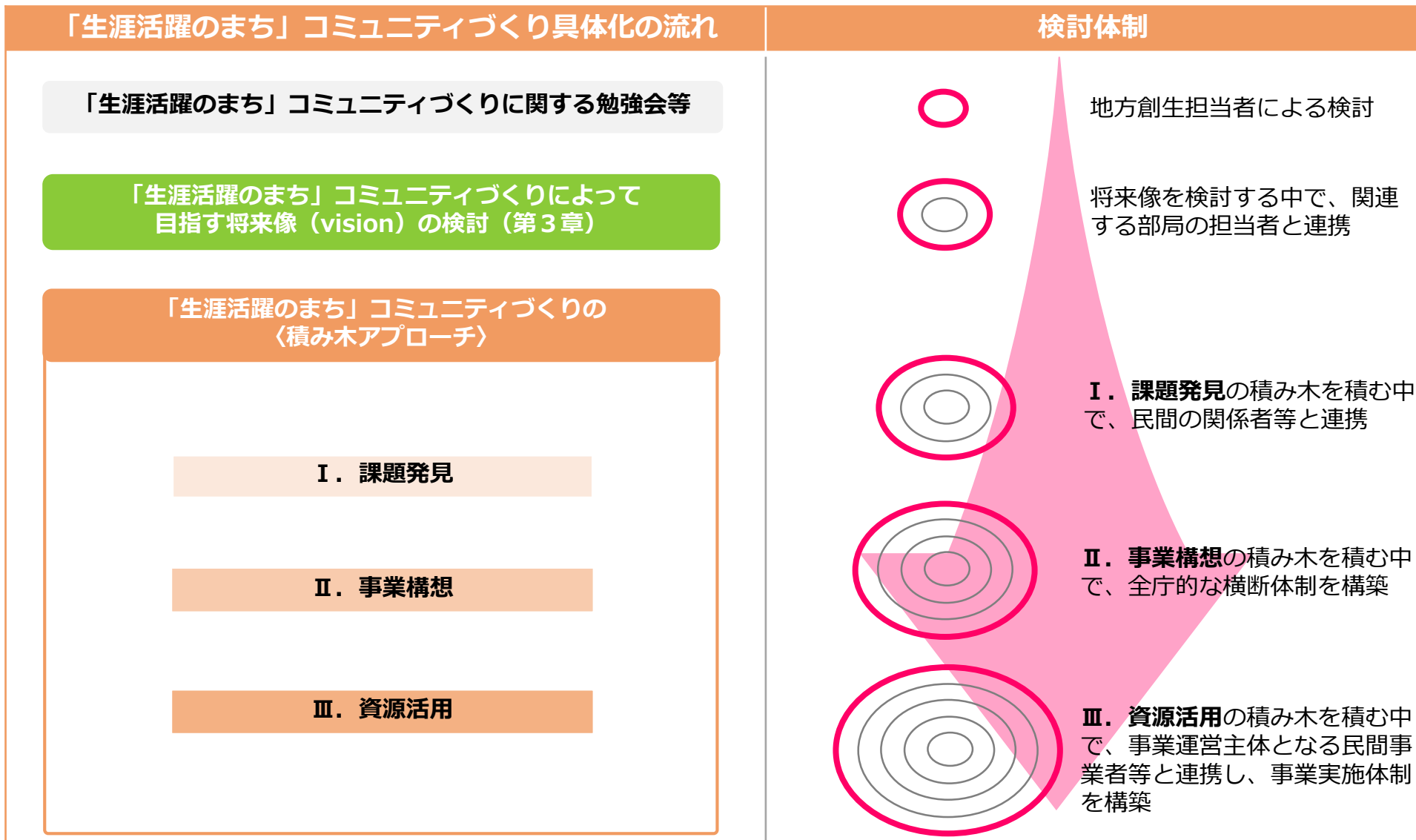
国等への財政補助申請、事業運営を担う民間事業者の外部人材登用を実施し、事業を支援します。

- 国庫補助等申請（カネ）
- 外部人材登用（ヒト）
- 遊休施設や広報媒体など、行政ツールの活用（空間、情報）
- 継続的な相談体制の維持

※ 地方公共団体の実情に合わせて、この順番にとらわれず、臨機応変に対応いただくことが重要です。例えば、外部人材を登用した際に、再度地域でのヒアリングを実施し、結果、新たな事業構想が生まれ、事業実施部署を庁内横断チームに巻き込む等循環型の発展も考えられます。

庁内横断の検討体制は、「生涯活躍のまち」を具体化する過程で構築します。必ずしも検討当初から庁内横断の検討体制を構築して議論を進める必要はありません。

なお、既存の庁内横断の会議体等がある場合は、それを活用することが重要です。



I. 課題発見

- 地域社会における居場所と役割上の問題は、地域住民や団体が詳しく知っている場合であっても、最初の動きは地元地方公共団体が生み出すことが重要です。
- 地方公共団体が保有する統計データの提供だけでなく、フィールドワーク、広く意見を聞くためのヒアリングやアンケート、地域住民によるワークショップなど、積極的に仕掛けながら地域で主体的に動くことのできる団体やキーパーソンを発掘することが大切です。
- その際、既にある資産（アンケート結果、既存事業の計画、部局横断の会議体等）をできるだけ活用します。

行政が保有する統計データ等（例）

調査等	活用できるデータ
国勢調査	人口推移、地区別の人口及び内訳等
経済センサス	地方公共団体内の事業所数・従業員数の推移及び内訳
総合計画策定時の各種調査	地域住民のニーズアンケート 等
学校基本調査	各学校の児童・生徒数の推移 等
公営施設の各所管部署	コミュニティセンターや体育館等の利用者数 等
福祉サービスの各所管部署	高齢化率、介護保険の状況（保険料、要介護認定率、受給率、介護給付費）等

ワークショップで活用できる手法例

- **ブレインストーミング** … 参加者の多様性を活かして多数のアイデアを出す手法。目的にあった設問に対して、少人数（3～7名程度）のグループを作り、思いついた回答を付箋紙に書いて模造紙などに貼る。提出された意見に否定的な意見を言わない。
- **KJ法（親和図法）** … 多数の情報を集め、意味の近さ（親和性）に基づいて情報をグループ分けする。グループごとに特徴や本質を表す名前をつける。
- **ビジョニング法** … 現在の状況や課題を把握したうえで望ましい未来について議論し、長期目標や戦略的目標を共有する。望ましい未来の実現に向けた道筋を合わせて検討することにより、バックキャストとしての手法となる。



II. 事業構想

- 「生涯活躍のまち」コミュニティを行政主導で作る場合はもちろん、住民主導で作る場合であっても地方公共団体が寄り添いながら取組を進めることは非常に大きな意味があります。
- このプロセスにおいて決めた「誰が、いつ、何を、どのように実施するのか」については、地方公共団体の「生涯活躍のまち」構想・計画に落とし込むことによって、その後の実効性が担保されます。
- その際、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

地方公共団体における具体プロセス（例）

個別の取組から、「生涯活躍のまち」全体の
施策へ展開する場合

STEP1

庁内横断体制の構築（企画部門含む）

STEP2

「生涯活躍のまち」構成施策の立案

STEP3

庁内での意思決定

STEP4

「生涯活躍のまち」構想・計画の策定

STEP5

議会への報告・議論・パブリックコメント

※「生涯活躍のまち」構想・計画については、ガイドライン掲載のひな形を参考にしてください。

https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/shienmenu/pdf/202007_shougai_guideline.pdf

計画をつくるなら…

支援措置の活用：地域再生計画について

地域再生制度の概要

地域再生法に基づき、地方公共団体が作成する「地域再生計画」を内閣総理大臣が認定し、認定計画に基づく措置を通じて、自主的・自立的な地域活力の再生に関する取組を支援。

＜主な支援措置メニュー（抜粋）＞

- ①地方創生推進交付金 ②地方創生拠点整備交付金
③企業版ふるさと納税 ④「小さな拠点」形成に係る課税の特例

詳しくは、内閣官房・内閣府総合サイト参照

<https://www.chisou.go.jp/tiiki/tiikisaisei/index.html>

Ⅲ. 資源活用

- 持続的な運営を実現するための資源を潤沢に持っているコミュニティは少ないため、地方公共団体がさまざまなサポートを実施することが重要です。
- 直接的な委託事業だけでなく、ヒト・モノ・カネ・空間・情報において支援し、主体となる団体・個人に寄り添うことで中長期的に持続可能なコミュニティとなります。

各資源における地方公共団体のサポート例

ヒト

地域おこし協力隊

都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が「地域おこし協力隊員」として委嘱。一定期間、地域に居住して、地域おこしの支援や、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組。国から特別交付税措置あり。



https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html

空間

廃校の活用

地域の人口減少に伴い統合・廃止された小中学校施設を活かし、地域の交流拠点や子育て支援施設として活用。文部科学省調査によると、現存する廃校施設等のうち約75%がさまざまな用途に活用されている。

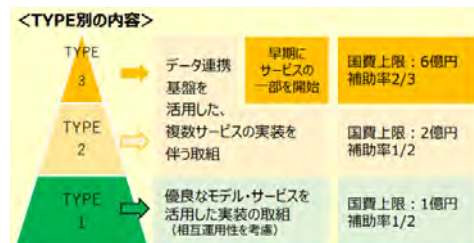


https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyosei/1414740.htm

カネ

デジタル田園都市国家構想推進交付金

デジタル技術を活用した意欲ある地域による自主的な取組を応援し、「デジタル田園都市国家構想」を推進するため、デジタルを活用した地域の課題解決や魅力向上の実現に向けた地方公共団体の取組を支援。

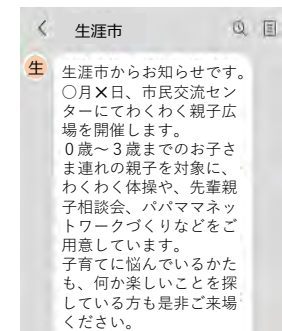


<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/mirai/policy/policy1.html>

情報

広報誌・地域SNSの活用

多世代の幅広い交流を生み出すために、地方公共団体の広報誌やHP、地方公共団体が活用している地域SNS等を活用し、情報面でのサポートを実施。



第5章

モデル自治体における取組事例

実際に「生涯活躍のまち」コミュニティづくりに取り組んだ4つの地域について、〈積み木アプローチ〉を活用しながら、取組結果を紹介します。

それぞれの地域で異なる課題や状況に応じて、「課題発見」「事業構想」「資源活用」を工夫しながら検討を進めた事例であり、全国の「生涯活躍のまち」の取組意向のある地域の参考になるものと考えています。

本章の構成と各章との関係性

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりの〈積み木アプローチ〉（第4章）

事例研究

事例の活用

モデル自治体における取組事例

地域	①神奈川県横須賀市	②新潟県長岡市川口地区	③滋賀県長浜市	④奈良県高取町
人口規模 (R2国調)	388,078人 (対象とした浦賀地域は約 44,000人)	4,087人 (長岡市全体は266,936人)	113,636人	6,729人
検討主体	横須賀市福祉部地域福祉課 横須賀市浦賀行政センター	長岡市地域振興戦略部 長岡市川口支所 川口エンジン古民家部（地域団体）	長浜市政策デザイン課、ふるさと移住交流室、人権施策推進課、商工振興課 合同会社LOCO、えきまち株式会社、長浜デザイン戦略室	高取町総合政策課 高取町シルバー人材センター
課題	退職後の高齢者（特に男性）の地域社会での孤立防止	いつでも戻ってこられることの出来るまちの実現	子育て等により短時間勤務の制約がある女性の活躍の場づくり、サテライト利用者と市内人材・企業の連携	町内事業所等の人手不足、高齢者や子育て中の女性等「働く場」の需要
方向性	<ul style="list-style-type: none"> コミュニティセンターと住民が連携した講座企画・サークル化促進 SNS等の新たな発信による多世代参加促進 	<ul style="list-style-type: none"> 住民主体／公サポート型の地域共創ラボの設置 地域のしごとのマッチング、空きスペースの利活用を実証 	<ul style="list-style-type: none"> 市と民間企業が連携した短時間就労可能な場と仕組の構築 地元企業とリモートワーカーがつながる仕組み 	<ul style="list-style-type: none"> シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携した「しごとコンビニ®」の構築 地域交流の核となる拠点の開設

<課題>

都市部のベッドタウンにおいて、退職後の高齢者（特に男性）が社会で孤立しがちとなっている。孤立を防ぐために、地縁のコミュニティに加えて、テーマ性をもつコミュニティを広めることで、高齢者の居場所や役割を見つける仕組みの構築を図る。

<検討主体>

横須賀市福祉部地域福祉課地域力推進係
横須賀市浦賀行政センター

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
町内会長・自治会長ヒアリング	地域活動の参加者は女性が多いが、会長のリーダーシップと勧誘によって男性参加のコミュニティ例もある
コミュニティセンターヒアリング	各種講座の講師をできるだけ地元の人をお願いし、講座後の自主サークル化を促進している。その結果、料理講座から、男の料理教室（サークル）への発展などの事例がある。また、中途の参加者を増やすためには積極的な声掛けが必要。
地域サークルへのヒアリング	公式な講座終了後にサークル化。初心者から経験者まで幅広い方が入りやすい場合と、初期メンバーである程度固定化されている例あり
民生委員児童委員ヒアリング	一人暮らし高齢者の多くは女性で、積極的に活動するなど元気な人が多い。むしろ夫婦で暮らす高齢者（特に男性）の方が活動に参加しないため認知機能が低下して認知症になりやすい。妻が積極的に後押しする必要がある。
地域SNSを活用したアンケート	地域での趣味関連のコミュニティに対して約8割が参加意向あり。関心テーマは世代により異なる。世代によらずSNSでの情報発信を希望。

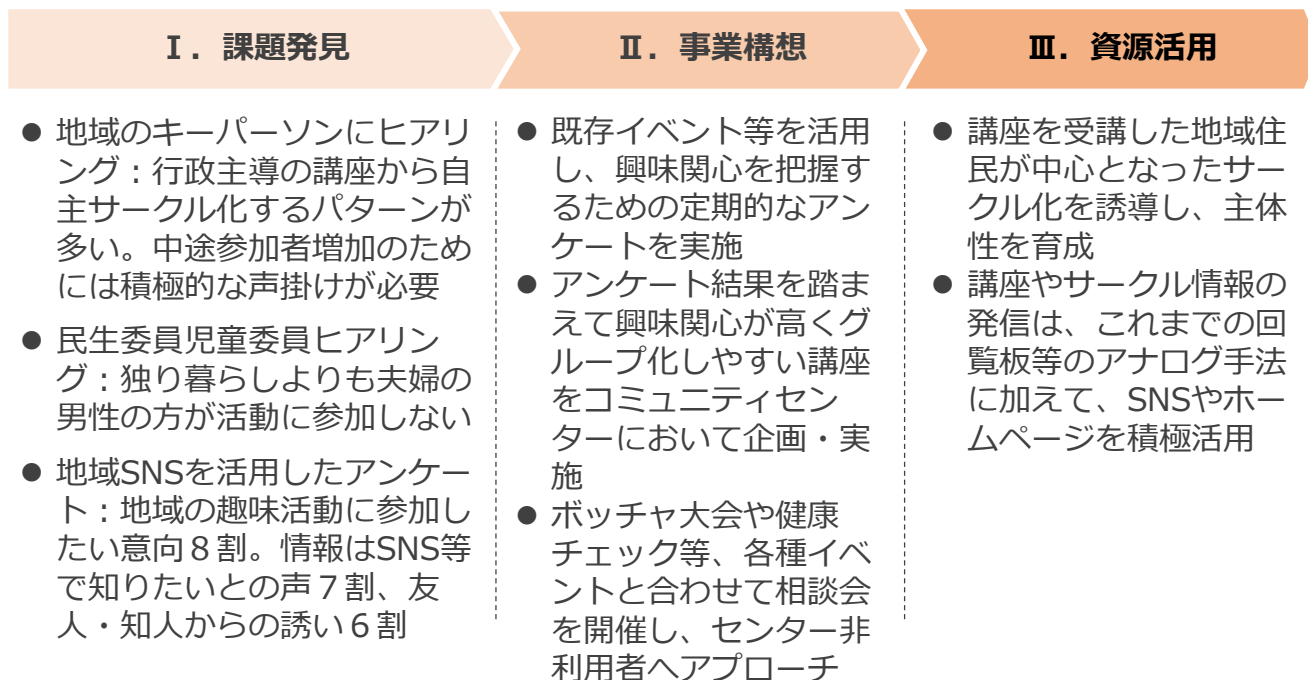
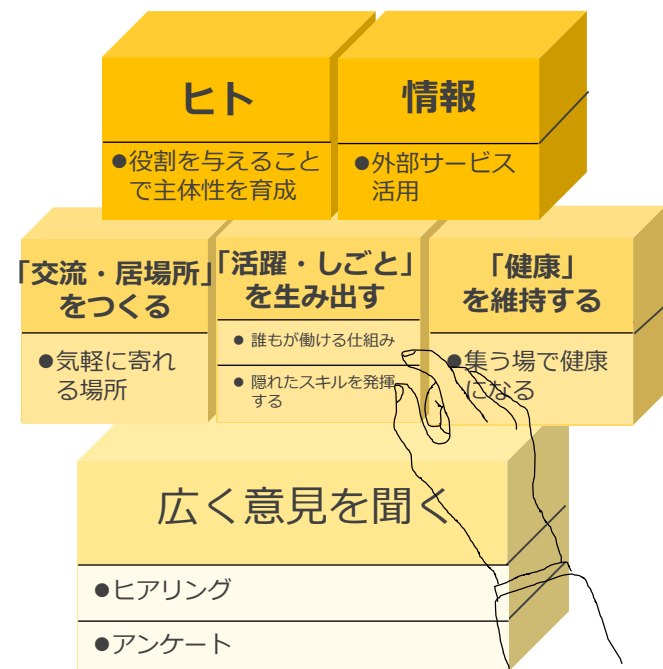
<将来像>

- ◆ コミュニティセンターが核となりながら、社会的に孤立しやすい高齢男性や心身のストレスがたまりやすい子育て世代が、気軽に立ち寄り、参加できる多様なコミュニティ

<コミュニティづくりの方向性>

- 住民のニーズを踏まえた講座開催等によるサークル化の促進
- 居場所・役割を見つけない人がコミュニティに参加する道筋をサポート
- SNS等の新たな発信手法を用いて、継続的に多世代の参加を促進

<積み木アプローチの使い方>



※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。本事例では、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「健康」の機能を満たす事業構想となりました。

<課題>

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現（川口地区での先行的な計画・実践・検証）

- ①空きスペースの活用 … 町内に空き家や空きスペースが増えてきているが十分に活用されていない
- ②町の人材を120%活用する仕組み … 地域内のさまざまな仕事のニーズに対して地域内の人材を活用して経済循環

<検討主体>

長岡市地域振興戦略部

長岡市川口支所

川口エンジン古民家部（川口地区の若手住民主体の任意団体）

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
ワークショップ	地域の若者によるワークショップを踏まえ、「空きスペースの活用」と「町の人材を120%活用する仕組み」の2つの課題・テーマを決定
先進事例のヒアリング	①についてはシェアリングエコノミー協会からスペースシェアリングの事例を、②についてはつながる地域づくり研究所から「しごとコンビニ®」の事例をヒアリング
空き家・空きスペースの調査	川口エンジン古民家部メンバーがそれぞれのネットワークを活用して、川口地区の空き家・空きスペースを調査
シルバー人材センター川口事務所の現状調査	現在川口エリアでの仕事の発注等を担っているシルバー人材センター川口事務所について、令和3年度末で事務員配置を廃止し、本部（長岡市市街地）で事務処理を行うことを予定。今後の地域での円滑な人の手配（マッチング）のために川口地域の地域団体が担うスキームを検討

<将来像>

- ◆ 地域の人的・物的・空間資源をフル活用し、地域出身者がいつでも戻って来ることの出来るまちの実現

<コミュニティづくりの方向性> ※今後具体化

- ・川口地域において空き家・空きスペースを活用し、住民主体/公サポート型の地域共創ラボを設置
- ・「活躍・しごと」、「交流・居場所」、「住まい」、「健康」などの領域について、地域独自の問題・課題を抽出。
- ・住民、支所、都市部企業が一体となって、その解決手法を検討。実証実験や実事業化へと繋げる。
- ・運営組織を整えるとともに、「空きスペースの利活用」のテストを兼ねて、ラボをテスト的に開設（シェアリング）。

<積み木アプローチの使い方>



I. 課題発見

- 地域住民ワークショップ：地域のキーマンとなる若手住民を主体としたワークショップを実施し、地域の課題として空き家・空きスペースの活用と、人材活用をテーマとして発掘
- 有識者との意見交換：空きスペースの活用についての先進事例と、地域でしごとを循環させる先進事例について有識者との意見交換の場を設定
- 空き家・空きスペースの地図作成：地域住民ネットワークにより空き家・空きスペースの地図を作成

II. 事業構想

- 空き家空きスペースを活用し、住民主体の地域共創ラボを設置
- シルバー人材センター川口事務所が担っていた機能を引き継ぎ仕事のマッチング機能を担うことを検討
- 住民、支所、都市部企業が一体となって地域課題解決に向けた実証・実践を進めていく

III. 資源活用

- 地域住民に加えて、市の川口支所、都市部企業の関係人口など多様な属性の人を巻き込む
- 空きスペースをシェアリングすることでさまざまな取組を効果的・効率的に実施

※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。本事例では、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「人材循環」の機能を満たす事業構想となりました。

<課題>

スキルがある女性の働く場づくりは一定進んでいるものの、スキルがない方、子育て等により短時間勤務を余儀なくされている方の活躍の場づくりが課題となっている。

また、サテライトオフィス整備等を進める中で、サテライトの利用者が関係人口として市内の人材や企業と連携できる仕組みを構築し、地域活性化につなげる取組が求められている。

<検討主体>

長浜市 総務部政策デザイン課、ふるさと移住交流室、市民協働部人権施策推進課、産業観光部商工振興課

合同会社LOCO、えきまち株式会社、長浜デザイン戦略室

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
ステークホルダー会議 参加者：長浜市各部署、合同会社LOCO、えきまち株式会社、長浜デザイン戦略室	以下の2つの柱で、今後の取組の方向性を見出した。 【女性の活躍・しごとの応援】 <ul style="list-style-type: none"> ・女性の参画についての意識変革「ステップゼロ」の取組 ・女性の非正規労働者が多いことの要因分析と対策 ・企業に対する啓発 【サテライトオフィス・リモートワークを通じての都市部と地域の交流】 <ul style="list-style-type: none"> ・長浜市らしい魅力の発掘を通じた、都市部のリモートワーカーと地域・市民との交流の推進 ・リモートワーカー（副業人材）と市内企業の連携の促進 ・事業の自立化に向けた検討
先進事例のヒアリング	「しごとコンビニ®」の事例をヒアリングし、LOCOの取組の参考とするとともに、特に、2つの柱に共通する課題である、企業の啓発について、業務の見直しや分解等の手法が有効と考えられる。
統計データによる現状把握	女性の就労は進んでおり、M字カーブの凹みも比較的緩やかだが、非正規労働者が多い。

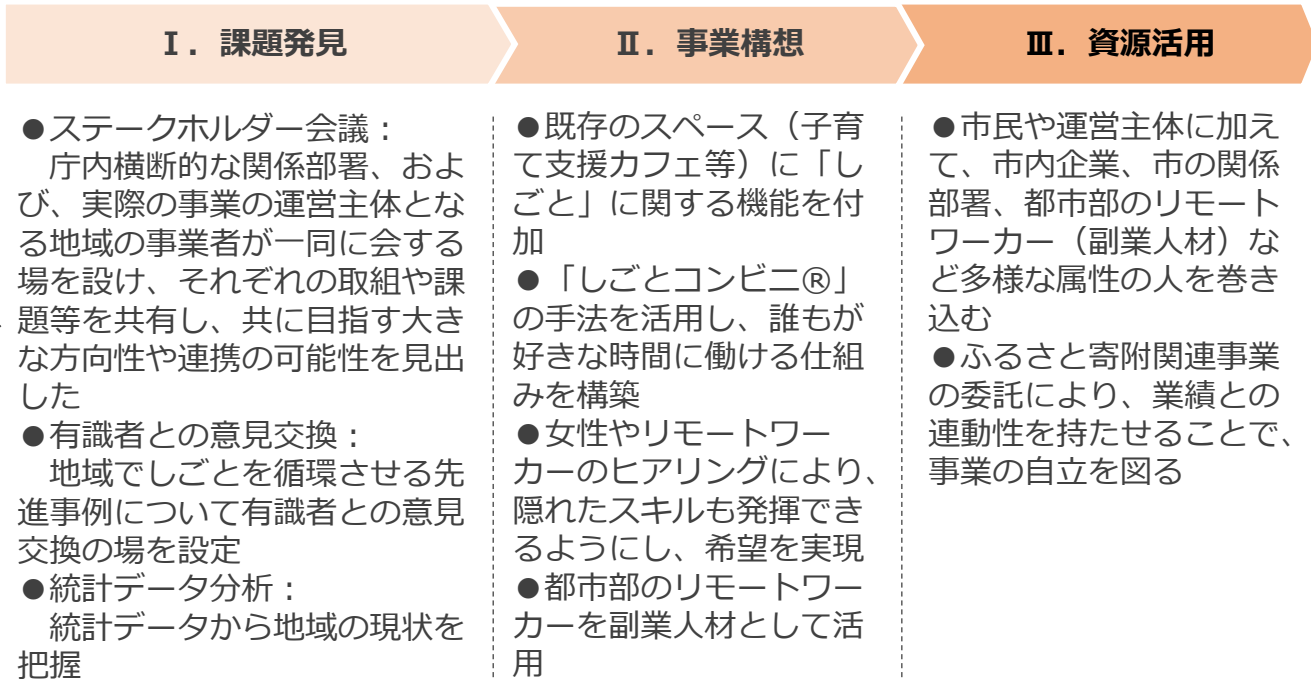
<将来像>

- ◆ 女性や高齢者、サテライトオフィスや都市部で働く関係人口など、誰もが活躍でき、その仕事や活動を通じて、市内企業や地域も活性化する、交流と循環のまちづくり

<コミュニティづくりの方向性>

- ・ 長浜市と合同会社LOCOが連携し、短時間でも就労でき、地域の仕事を地域で回すことが可能となる新たな場と仕組みを構築
- ・ 地元企業とリモートワーカーがつながる仕組み「長浜ワークロケーション事業」に取り組み、地元企業のやりたいことや課題と、スキルや経験を活かして関わるワーカーのマッチングを図る
- ・ ふるさと納税の仕組みを活用し、女性・企業・リモートワーカーをつなぎ、安定した仕事づくりと魅力ある返礼品開発を実現する「地域共創型ふるさと寄附」に取り組み

<積み木アプローチの使い方>



※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。本事例では、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「人材循環」の機能を満たす事業構想となりました。

<課題>

町内の事業所や地域・地区は、人手不足や担い手不足に悩んでおり、これまで担い手となってきたシルバー人材センターや社会福祉協議会ボランティアでは、メンバーの減少・高齢化・固定化が進んでいる。一方で、高齢者や子育て中の女性、農閑期の新規就農者など、働きたいけど働けない町民がいることから、「しごとコンビニ®」により、双方の課題解決を図る。

<検討主体>

高取町総合政策課

高取町シルバー人材センター

<主な調査概要>

調査項目	調査結果
町内事業所ヒアリング	人手不足の状況があり、それに伴う事業への影響（事業拡大ができない、事業承継ができない）も出てきている。雇用するまでのコストは負担できない、という課題も聞かれた。
高齢者・子育て中の女性ヒアリング	高齢者や子育て中の女性には、短時間、都合のいい時間に働きたい、というニーズがあるが、そういう働き方・仕事がないため、働けない。また、お金だけでなく、人の役に立ちたい、つながりが欲しい、気分転換したい、といったニーズがある。
シルバー人材センター・社会福祉協議会へのヒアリング	登録者の高齢化や固定化に伴う、担い手不足等の課題があり、新たな仕組みを構築する場合、これらと連携することで、より地域の課題解決につながると考えられる。
先進地視察	「しごとコンビニ®」の先進事例を視察し、実際の運営方法や課題等を把握した上で、高取町の実状に合わせた形を検討する参考にした。

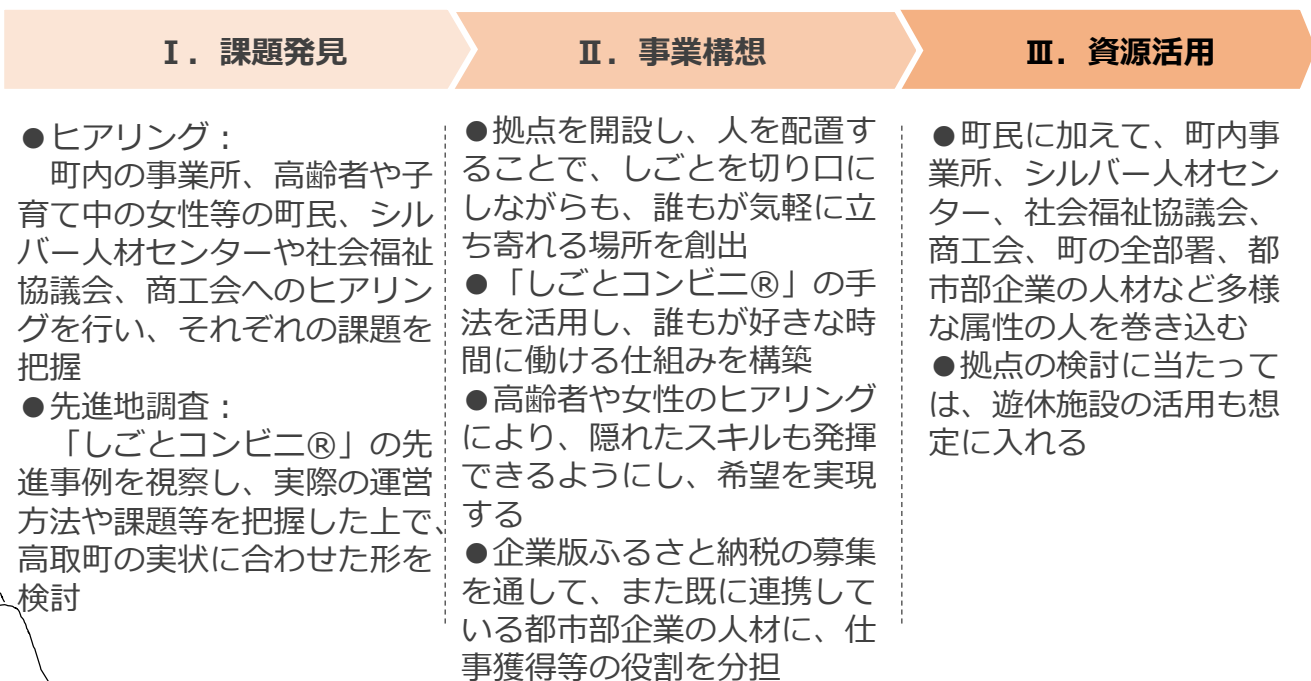
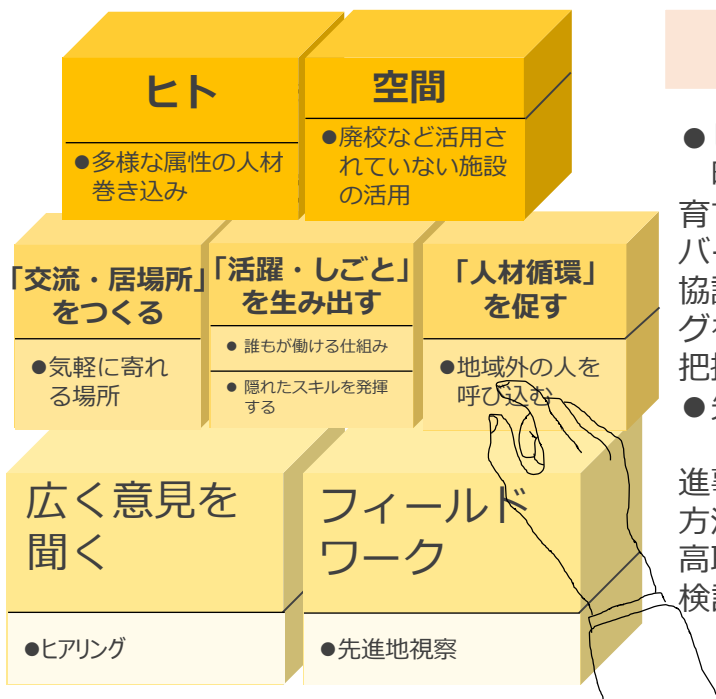
<将来像>

- ◆ 高齢者や子育て中の女性、介護をしている人等が活躍でき、全ての人の望む生き方を実現するまちづくり

<コミュニティづくりの方向性>

- ・シルバー人材センターや社会福祉協議会、商工会と連携し、高取町らしい「しごとコンビニ®」を構築
- ・「活躍・しごと」を通じたコミュニティづくりという観点から、既存のコミュニティに参加していない町民もフォロー
- ・合わせて、「しごとコンビニ」の実施場所であり地域の交流の核となる拠点を検討し、「交流・居場所」機能をさらに促進
- ・企業版ふるさと納税の募集・活用及び都市部企業人材との協働により「都市部との人材循環」の下で推進

<積み木アプローチの使い方>



※「生涯活躍のまち」は、中長期的に、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。本事例では、「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「人材循環」の機能を満たす事業構想となりました。

第6章

おわりに

2020年の国勢調査によると、2020年10月1日現在の日本の人口は1億2614万6千人となっており、2015年に比べ、94万9千人の減少となりました。日本の人口は2010年をピークに減少局面を迎えており、2015年の前回調査に引き続きの人口減少となっています。一方で、2015年～2020年に人口が増加した都道府県は8都県であり、東京都（3.9%増）をはじめ、都市部への集中が続いています。新型コロナウイルスの流行拡大に伴う働き方改革や、国民の意識の変化によって、東京の転入超過は緩和されていますが、日本の多くの地方部では、引き続き人口減少が続いていくものと考えられます。

そうした中で、住民一人ひとりの個性と多様性が尊重され、誰もが長く活躍できる地域コミュニティづくりはますます重要なものとなってきています。子ども、高齢者、女性、障がいのある方など、多様で多世代の住民が協働することで、地域の活力が生まれ、さまざまな地域課題、社会課題の解決につながります。

本説明書では、そうした「生涯活躍のまち」コミュニティをつくるために、どのように地域の目指すべき姿を描き、どのようにコミュニティをつくるのかをお示ししました。あわせて、コミュニティづくりにおける様々な手法や、先進的な事例も掲載しました。これらの手法・事例は、その結果に焦点を当てるのではなく、どのようなプロセスで、場づくり、仕組づくり、仕掛けづくりを実行してきたかを学び、それを自らの地域で実践することが重要です。

内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局では、いつでもご相談を受け付けています。本説明書が「生涯活躍のまち」を進めたい方々の一助になることを願っています。

? 困ったときは以下の資料をご参照ください !



「生涯活躍のまち」の基本的な考え方を知りたい。



「生涯活躍のまち」づくりに関するガイドライン
<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/shienmenu/index.html>



全国の事例が知りたい。



「生涯活躍のまち」の取組・検討事例
<https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/index.html#jireimap>



官民連携の手法、評価の方法、企業とのマッチングなどさまざまな手法が知りたい。



「生涯活躍のまち」づくりに関する各種研究調査事業
https://www.chisou.go.jp/sousei/about/ccrc/etc/chousakenkyu_r01/index.html#R02

【相談連絡先】

内閣官房デジタル田園都市国家構想実現会議事務局

生涯活躍のまち 担当

電話：

メール：

メモ（地方公共団体でご自由に活用ください。）

「生涯活躍のまち」づくりで目指す将来像
(VISION)

仮説を記載

I.課題発見 のプロセス
を経て明確化

プロセス	積み木の種類	実施予定内容
I.課題発見	データ分析	
	フィールドワーク	
	広く意見を聞く	
	集まって話す	

これより下は、I.課題発見のプロセスで得られた結果に応じて記載してください。ただし、下記から始めていただいても構いません。

II. 事業構想	「交流・居場所」 をつくる	
	「活躍・しごと」 を生み出す	
	「住まい」 を整える	
	「健康」 を維持する	
	「人材循環」 を促す	
III. 資源活用	ヒト	
	モノ	
	カネ	
	空間	
	情報	

「生涯活躍のまち」

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指すべき将来像の実現（事業の実施）

ヒト	モノ	カネ	空間	情報
<ul style="list-style-type: none"> ● 思いを継承するリーダー人材の育成 ● 地域内での人材循環による新たな人材発掘 ● 役割による主体性の育成 ● 多様な属性の人材巻き込み 	<ul style="list-style-type: none"> ● メンバーが提供できるものを持ち寄る ● 設備や資材のシェアリング ● ひとつのモノを複数用途で活用 	<ul style="list-style-type: none"> ● 行政資金の活用 ● 取組への共感から寄付等の資金を調達 ● 地域資源のブランド化による資金確保 	<ul style="list-style-type: none"> ● 廃校など活用されていない施設の活用 ● 空間のシェアリング ● 複数目的での空間活用 ● まわりの自然環境も含めて空間をとらえる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 外部サービス活用による利用者/参加者募集 ● コンセプトを絞り込んだ発信による情報提供 ● 社会的に共感しやすいコンセプト
「交流・居場所」をつくる	「活躍・しごと」を生み出す	「住まい」を整える	「健康」を維持する	「人材循環」を促す
<ul style="list-style-type: none"> ● 気軽に寄れる場所 ● 新たな賑わいづくり ● 静かにただ居られる場所 	<ul style="list-style-type: none"> ● 誰もが働ける仕組み ● 趣味でつながる ● 隠れたスキルを発揮する 	<ul style="list-style-type: none"> ● 移住希望者に住まいを提供する ● 住み続けるための仕組みをつくる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自然に体を動かす仕掛け ● 見守り体制を築く ● 集う場で健康になる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生を巻き込む ● 地域外の人を呼び込む ● 都市部にはないフィールド提供

将来像の明確化（3章参照）

データ分析	フィールドワーク	広く意見を聞く	集まって話す
<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の統計データ分析 ● 他地域との比較 	<ul style="list-style-type: none"> ● まちあるき ● 地図づくり ● 見学会 ● 先進地視察 	<ul style="list-style-type: none"> ● オープンハウス ● ヒアリング ● アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ● ワークショップ ● ステークホルダー会議 ● 移住者や有識者との意見交換

「生涯活躍のまち」コミュニティづくりによって目指す将来像（3章参照）

資源活用
事業を具体化するために資源を活用する

事業構想
誰が、いつ、何を、どのように実施するのか決める

課題発見
課題がどこにあり、どういった地域社会を実現したいのかを決める

積み木アプローチを進めるにあたり、誰が主体的な役割を担うのか、そして積み木をどのように組み合わせるのかを決める。当初段階で決まらなくとも、コミュニティづくりを進めていく中で常に意識し、主体の発掘・育成を進めることが重要です。また、「生涯活躍のまち」は、中長期的に、事業構想に記載する「交流・居場所」、「活躍・しごと」、「住まい」、「健康」及び「人材循環」の5つの機能を満たすことが重要です。

横須賀市（鴨居地域）
生涯活躍のコミュニティづくり
実施計画

令和4年2月

横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

1. 本計画の趣旨

本市の現状

2021年10月1日現在	
総人口	394,226人
高齢化率	32.05%
ひとり暮らし 高齢者の数	10,251人

- ・若い世代の人口流出や急速な少子高齢化により**高齢化率が上昇**
- ・ひとり暮らし高齢者も**増加傾向**
- ・町内会・自治会の**加入率は全市的に低下傾向**
- ・グループやサークル活動等へ**参加していない割合は70%**
- ・高齢者の社会参加では、女性が多く、**男性の参加者が少ない印象**

地域におけるつながりの希薄化と住民の社会的孤立による
健康リスクが懸念

本計画の目的

「世代を問わず誰もが役割と居場所があるコミュニティづくり」の実現に向けては、地域活動への参加の現状と課題を把握するとともに、必要な支援を検討することが重要と捉え、市内「鴨居地域」をモデル地区とし、実証を進め、本市が掲げる「すべての“ひと”が自分らしく輝けるまち」に向け、将来的に市全域で展開していくことを目指します。



横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

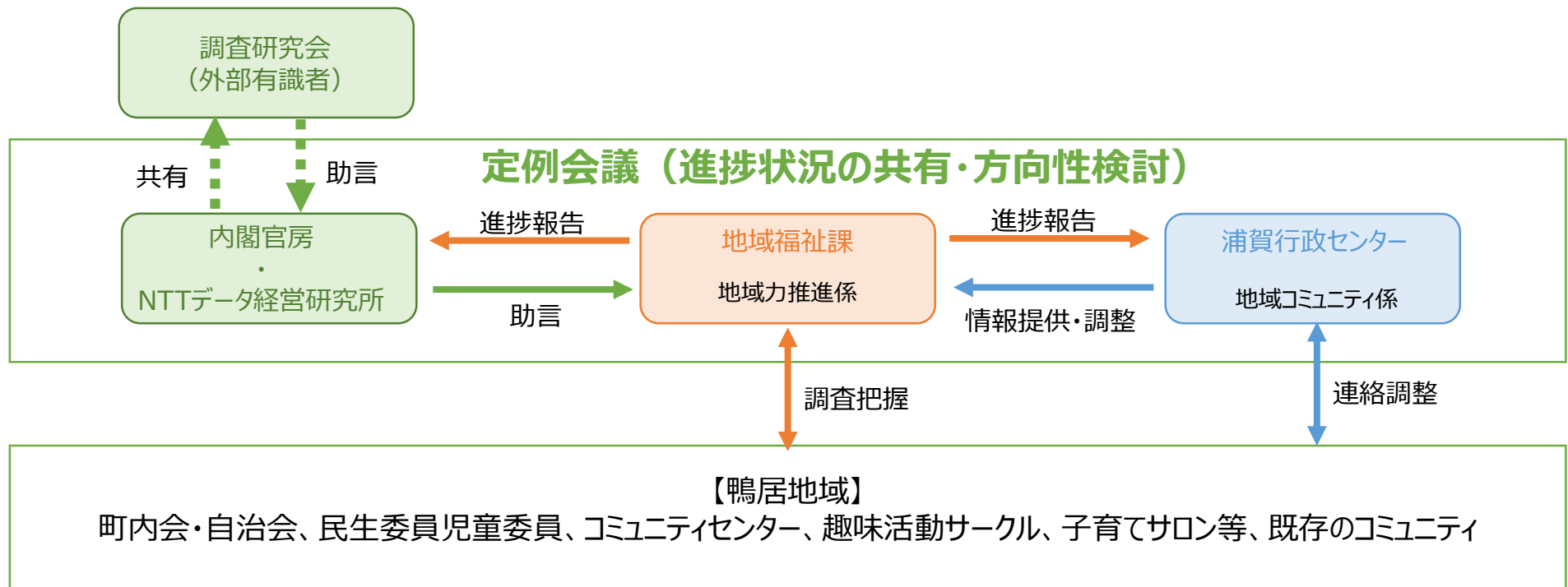
2. 検討課題

横須賀市鴨居地域（人口18,736人、高齢化率39.7%）を対象に以下①・②を検討

- ①社会的に孤立しやすい対象者像とニーズ把握
- ②コミュニティ機能の現状と課題、取り組む方策の検討

3. 検討体制

- 計画の検討にあたり、民生局福祉部地域福祉課と市民部浦賀行政センターの協働で調査検討を実施
- 学識経験者からの助言を内閣官房およびNTTデータ経営研究所を通じて受ける定例会議を開催



横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

4. 調査実施の目的

定性調査と定量調査の組み合わせで課題を把握

Step	調査により明らかにしたいこと	調査対象（人数）	手法
現状把握 地域の	地域の特徴、町内会・自治会の取組状況と住民の参加状況	町内会・自治会長 (9)	半構造化面接
	ひとり暮らし高齢者および夫婦のみ世帯、子育て世帯の状況	民生委員児童委員 (6)	※対象者の特性別に ヒアリング項目を作成
	コミュニティセンター※1の役割と利用状況	コミュニティセンター職員 (4)	※所要時間 1～2時間/1人
ニーズ調査 (対象者別)	コミュニティセンターの利用やサークル参加に至ったきっかけからみる高齢男性のニーズ	コミュニティセンター利用者 (12) ・トレーニングルーム利用者 ・男性の料理教室 ・囲碁サークル	※コミセンを利用する男性は 1～2時間/グループ
	育児を行う子育て世代のニーズ	未就学児対象の親子サロン (1)	
	参加を促すアプローチ方法と参加意向に関する世代別ニーズ	地域情報交流アプリ利用者 (120)	無記名によるアンケート ※SNS「PIAZZA」内で実施
	自立支援が効果的な対象者と相談支援のニーズ	地域包括支援センター (3)	グループインタビュー法
取組の実施に向けた調査	コミュニティづくりにおける高齢者の活躍の可能性の有無	スマホ教室参加者 (26名)	一部記名によるアンケート ※講座参加者へ配布 ※講師が可能な人は記名

※1 コミュニティセンター（略称：コミセン）

住民や各種団体が身近に手軽に利用できる地域コミュニティづくりの場

多目的に利用できる部屋の貸出や各種講座・イベントを通じてコミュニティづくりを支援

横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

5. 調査結果

Step①【地域の特徴と活動参加の現状把握】

地域の現状把握

調査方法		ヒアリング		
調査対象		町内会・自治会会長（9名）	民生委員 児童委員（6名）	コミュニティセンター職員（4名）
区分		町内会活動	地域活動	コミセン講座・サークル・個人利用者
高齢男性	参加率	町内会活動やサークル活動等、 女性より男性の方が少ない。	ひとり暮らしよりも 夫婦二人暮らしの男性の方が地域活動に参加しない印象。	・高齢者が多いサークル：体操系、音楽系 ・女性と比較して男性の参加が少ない。
	傾向	・居場所や役割、目的がある集まりを好む。 ・役割や居場所を自ら見つけられる人は少ない。 ・きっかけが必要。妻の後押しも一つの方法。 ・ひとり暮らしよりも 夫婦二人暮らしの高齢男性の方が参加が低く、認知症になりやすい印象。		・経験があるものや興味関心のある講座やサークルは参加しやすい。 ・参加者のレベルが同程度な程、参加しやすくサークル化しやすい。（はじめての〇〇講座等） ・既存サークルの場合、誘ってくれる人がいると参加がしやすい。 ・健康維持への興味関心は高い。
若い世代	幼児・児童・学生	・子ども会が閉会傾向 ・役員等の負担が懸念 ・対応策で町内会で育成部を設置している場合有	習い事等がない 児童は放課後1人になりやすい。 居場所があるとよい。	・夏休み子ども講座は多世代交流の場になる。 ・若い世代は平日の夕方以降や休日に利用する傾向 ・若者が多いサークルはダンス
	子育て世代		専業主婦や育休中の引きこもりや孤立は傍からみても分かりづらい	・育児ママのオンライン交流会があるが、 オンラインではリアルなつながりが作りづらい印象。
その他		多世代が参加する場では、 高齢者が活躍できるフィールドを意図的につくる必要がある。	高齢者に ポッチャが人気	・卓球、バレーボールは幅広い世代が参加 ・地域のイベントや大会に向けた練習が多い
		お茶やお弁当等、メリットがないと参加が低い	デジタルの発達で 幼児・児童の興味関心も多様化している印象。	・コミセンの 周知は紙媒体が中心 ・周知内容は講座が主で利用方法の周知はない ・サークル化にあたっては連絡網や予算書の作り方を支援 ・浦賀全体のサークル数は20年で1/2減少

- コミュニティセンターで講座をきっかけとしたサークル化を支援。しかし、サークル連合体への加入は1/2減少（20年前と比較）
- コミュニティセンターの講座周知は回覧と市報等、紙媒体の周知が主で、コミュニティセンター自体の周知はしていない
- サークルを探したいという相談に、サークルの登録情報を紹介することもあるが、誘ってくれる人がいる方が参加につながる

横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

Step②【対象者別ニーズ調査】

高齢男性のニーズ（参加に至ったきっかけより）

<調査①> コミュニティセンターのトレーニングルーム利用者（3名）

- ▶ 高齢になりケガの予防やリハビリのために利用を始めた人が多い。（ヒアリング時、最高齢83歳）
- ▶ 利用者の大半は定期利用者で顔なじみの関係ができ、**会話や互いの頑張りがモチベーション**
- ▶ 施設の有料化やコロナの影響で利用者が減少。
- ▶ 有料化は、施設維持のために必要だと思うが、その分コミセンの**周知をしてはどうか**。
- ▶ ケガをするまで、このような施設があることを知らなかった。**知らない人に教えてあげたい**。
- ▶ 友人と来た時、別の部屋で卓球をしているグループがあり、**卓球グループを立ち上げるに至った**こともある。



<調査②> コミュニティセンターのサークル参加者（男の料理教室3名、囲碁サークル6名）

- ▶ 初心者向けの**講座がサークル化のきっかけ**。最終回にコミセン職員からサークル化の提案があり発足。
- ▶ 「初心者向け」の記載が良かった。**同じレベル感だと分かる**ことが**参加の安心**につながっていたと思う。
- ▶ 定年後、時間が有り余っていた。興味関心から講座に参加し、地域に仲間ができた。
- ▶ メインの活動だけでなく、**仲間との交流が楽しみ**で参加を続けている。
- ▶ 講座は、市の広報紙や浦賀コミセンが発行している情報誌で見つけた。
- ▶ 最近の**広報紙は、講座の詳細がのっていないので不便**では。
- ▶ 後からサークルに参加したが、きっかけは、友人からの誘いやコミセン職員からの紹介。
- ▶ 既存のサークルに**後から一人で参加するのは、ハードル**を感じる。
- ▶ **誘いや紹介がなければ参加できなかった**。



横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

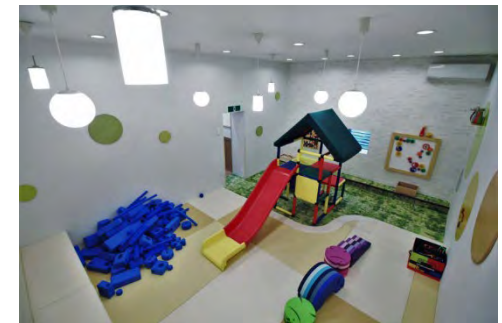
Step②【対象者別ニーズ調査】

ニーズ調査（対象者別）

育児を行う子育て世代のニーズ（親子サロン経営者より）

<調査③> 育児経験があり、保育士資格をもつ女性がスタッフとして活躍する未就学児を対象とした親子サロン

- ▶ ボーネルンドプロデュースの室内遊具が設置されたプレイルームとカフェスペースが併設されたサロン。
- ▶ 親子向けのワークショップやイベントも多数。
- ▶ 乳幼児がプレイルーム利用の際は、スタッフが遊びをサポート。
- ▶ 保護者は**自分の時間を確保**したり、スタッフに**話を聞いてもらう時間**をつくるのが可能。
- ▶ 孤独やマイナス思考になりやすい育児中においては、**気軽に立ち寄り**、**思いを受け止めてくれる場**が必要。
- ▶ 鴨居地域外（市外含む）に住まう方からも利用され、スタッフによる一時預かりも可能な**リフレッシュの場**
- ▶ 子育て世代にとって、「行政に頼るのはよっぽどのこと」という印象があると思う。
- ▶ **行政に頼るほどではないが**、「**ちょっと誰かの手を頼りたい**」「**ちょっと誰かに話しを聞いて欲しい**」というニーズがあると思う。
- ▶ 指摘や助言ではなく、気持ちに寄り添う場所でありたいと思っている。
- ▶ 開設時は、クラウドファンディングを活用。鴨居地域の住民からの寄付も多く、地域の理解を得られている。
- ▶ 夏の天体観測のイベントでは、天体に詳しい地域のシニア住民が講師になるなど、地域交流もある。



横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

Step②【対象者別ニーズ調査】

参加を促すアプローチ方法と参加意向に関する世代別ニーズ

<調査④> 地域情報交流アプリPIAZZAの利用者120人
(60代：6人、50代：23人、40代：33人、30代：52人、20代：6人)

調査結果	調査方法		地域交流SNS「PIAZZA」によるアンケート				
	調査対象 (N=120)		60代 (6人)	50代 (23人)	40代 (33人)	30代 (52人)	20代 (6人)
	回答者の割合		5%	19%	28%	43%	5%
趣味・好きなことを教えてください	読書・映画・漫画	50%	56.5%	60.6%	30.8%	16.7%	
	グルメ・カフェ・スイーツ	33.3%	21.7%	54.5%	65.4%	66.7%	
	旅行・街歩き	66.7%	17.4%	54.5%	48.1%	50%	
	音楽・芸術・写真	66.7%	43.5%	42.4%	36.5%	50%	

ニーズ調査（対象者別）

- ▶ 「趣味・好きなこと」は世代によって興味関心が異なる可能性が示唆された。
- ▶ 地域で趣味や好きなことに関する集まりがあった場合、**30代、50代、60代で参加への意向**がみられた。
- ▶ 40代では「参加したくない」という回答が他の年代よりも高い傾向にあった。
- ▶ サークルへの参加は、SNSが約7割、友人・知人からの誘いが6割、40代以上で見学会・体験会の有無がきっかけになると回答

あなたの情報が誰かの役に立ちます！
この街を楽しみたい人は今すぐ登録！

登録は超簡単 3ステップ！

- Step 1 メールアドレスかFacebookアカウントで登録
- Step 2 「横須賀市エリア」を選択！
- Step 3 ニックネームや出身地などを入力

グループに参加しよう！
「おすすめランチ」や「ママ交流会」、「飲み歩き好き」など、興味のあるグループに参加して、よりダイバーシクな情報交換を楽しみましょう！

地域SNS「PIAZZA」
～横須賀市エリアの情報交換～

PIAZZA 株式会社 | 東京都中央区日本橋本町1-10-8 | 03-5531-5151 | info@piazza-life.com

「PIAZZA」は個人情報・行政情報や地域情報などを安心安全に交換しあえるSNSアプリです。
「PIAZZA」と横須賀市・公益社団法人横須賀教育青年会連合は連携して地域の情報を発信しています。

横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

Step②【対象者別ニーズ調査】

ニーズ調査（対象者別）

自立支援が効果的な対象者と相談支援のニーズ

<調査⑤> 浦賀地域包括支援センター職員（3名）

- ▶ 外出や機能改善への意欲が高いのは事業対象者および要支援1の方々
- ▶ リハビリや運動を求む場合や、友人と同様にデイサービスで気分転換や気晴らしをしたいという相談がある。
- ▶ お元気な方へはデイサービスではなく、地域の楽しいサークル活動等、**社会資源を紹介したいが社会資源の把握が困難。**
- ▶ 地区社協の活動、町内会活動、高齢者サロン、老人クラブ、コミュニティセンターのサークル等、活動は様々なので、全把握は難しいことだと思うが、何か**一覧化**されていたり、大学のサークル勧誘のように**年に数回参加者を募集する取組**があれば、紹介することができると感じている。
- ▶ 介護予防サポーター、フレイルサポーター等、**地域で活躍したいという方の活躍の場**があるとよいと思う。



Step②【取り組みの実施に向けた調査（試行）】

取組の実施に向けた調査

高齢者の活躍可能性の有無

<対象> スマホ教室に参加した高齢者（26名）

- ▶ 現在、地域活動に参加していない人の**40%が「趣味や好きなことに関する集まりに参加してもよい」**と回答
- ▶ 参加していない理由として半数が「興味の活動がないから」「きっかけがないから」を選択
- ▶ 「他の人に教えることができる特技や趣味を持っている」と4人が回答



横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

総括

- ☑ 高齢男性は参加の意欲がないわけではなく、きっかけがつかめない
- ☑ 子育て世代は気軽に立ち寄れる場・ほっとできる居場所を求めている
- ☑ サークルへの参加は、**SNSが7割、友人・知人からの誘いが6割**
40代以上の場合、**見学会・体験会の有無**がきっかけになると回答
- ☑ デイサービスに行きたいと相談にくる高齢者の中には、お元気な方も多く
運動やリハビリ、気分転換や気晴らしになる地域活動を紹介できるとよい
- ☑ **活躍したい高齢者が役割や居場所を見つけられる仕組み**があるとよい
- ☑ **コミュニティセンターの機能や何ができるかが知られていない**



居場所・役割を見つけない人がコミュニティに参加する道筋をサポート

コミュニティセンターを起点とした「つながりの場づくり」

6. 取組の方向性

居場所・役割を見つけない人がコミュニティに参加する道筋をサポート



高齢男性等、居場所や役割を見つけない人

情報に触れる

コミュニティセンターの役割（地域のつながりを支援する、等）を明確化し、さまざまな仕掛け・仕組で情報を届ける

【具体案】

- 町内会と連携した全戸回覧板
- 地域の商業施設など人が集まる場所との連携
- SNSなどインターネットを活用した発信
- 既存の活動サークル等を通じた口コミ

センターと関わりを持つ

低いハードルでコミュニティセンターと関わりを持つ多様な場を用意する

【具体案】

- 各種イベント・大会（ボッチャ大会／鴨居老連演芸大会／観音崎フェスタ／桜まつり）
- 相談会
- 健康チェック
- 民間企業のイベントとの連携

サークルや講座を探す

① 既存活動の情報整理を実施し、それぞれの興味関心に合わせた既存のサークル活動があれば案内する。

② イベント等でのアンケート・ヒアリングにより、地域住民の関心の高いテーマを把握し、新たな講座開催に繋げる。

コミュニティに参加する

① 既存のサークル活動に入りやすいように活動者とサークル活動を繋ぐ。

② 講座からサークル活動に繋がるように、グループ化に向けたサポートを実施する。

コミュニティセンターを起点にした地域と協力した仕掛けづくり

「生涯活躍のまち」が目指す機能との関連性

交流・居場所



コミュニティセンターが地域の人にとって気軽に寄れる場所になる

活躍・しごと



サークル活動に参加することで、役割が生まれる
講座の講師として活躍したり、イベントに参画することで、知見やスキルを活かす

健康を維持する



コミュニティに参加することが社会参加や介護予防につながり健康維持につながる

横須賀市（鴨居地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

7. スケジュール

令和4年4月

6月

8月

10月～

地域への報告と意見収集

情報収集・把握

イベント兼相談会の準備

イベント兼相談会の開催

コミュニティ化の支援

- ①課題の共有
- ②地域活動把握への意見伺い
- ③協力可能な内容確認

<対象>
町内会・自治会
民生委員児童委員
地区社協
支え合い協議会
地域包括支援センター
生活支援コーディネーター

参加者／活動者を募集する
コミュニティの把握

<対象>
コミセンサークル
市民活動グループ
各町内エリアの活動
地区社協力の活動
ボランティアセンターの活動
地域運営協議会の活動 等

活躍したい人
イベントに携わる人の把握

<対象>
まなびかんの講師情報
健康長寿課の健康チェック
介護予防サポーター
フレイルサポーター
商工会議所
青年会議所
NPO法人 等

- ①年間スケジュールの把握
- ②イベント主催者との調整
- ③冊子／チラシの準備
- ④地域への周知

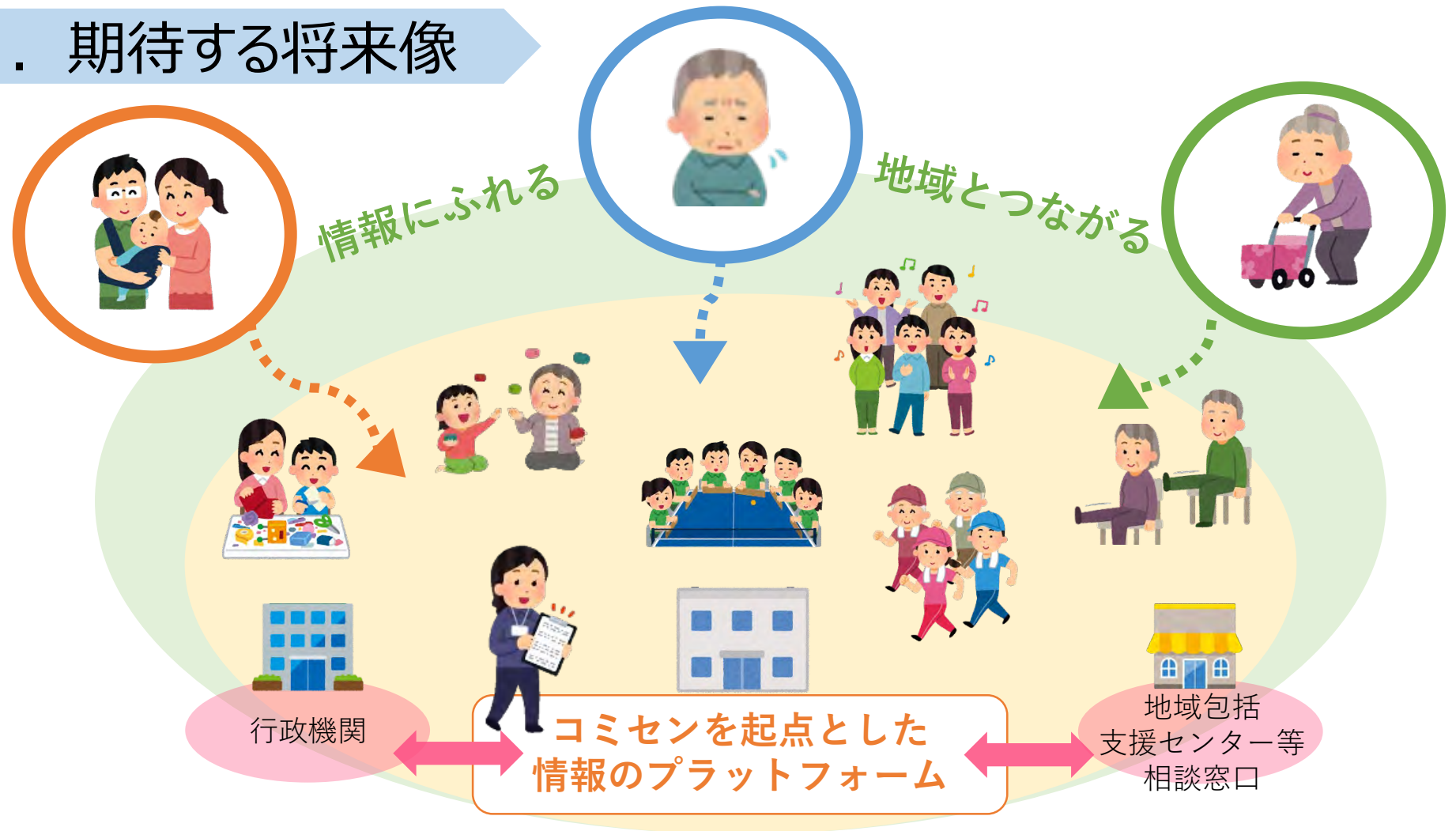
相談と活動紹介

サークル等
活動への参加

興味関心の把握

講座への参加で
新規サークル化

8. 期待する将来像



誰もがどこかにつながることで

「誰もひとりにさせない」「誰もが自分らしく輝ける」まちの実現

9. 今後に向けて

今回の取組を契機として、まずは鴨居地域においてコミュニティセンターを核とした全世代・全員活躍型の生涯活躍のコミュニティづくりを推進する。そのうえで、令和5年度以降、他地区を含む横須賀市全体での生涯活躍のまちづくりの検討を開始する。



長岡市（川口地域） 生涯活躍のコミュニティづくり 実施計画

（案）

令和4年3月

長岡市

目次

1. 本計画の趣旨	P3
2. 検討体制	P4
3. 検討課題	P5
4. 川口地域の現状（仕事編）	P6
5. 川口地域の現状（空きスペース編）	P8
6. 取組の方向性	P9
7. スケジュール	P18
8. 今後に向けて	P18

1. 本計画の趣旨

- 長岡市は、将来の人口減、活力減が見込まれる今日の社会状況において、その将来を実際に担っていく「若者」を地方創生の主役に据え、長期的な視点に立った第2期長岡市まち・ひと・しごと創生総合戦略／人口ビジョン～長岡リジューネーション（長岡若返り戦略）～」を令和2年3月に策定した。
- 「若者」が、持っている様々な個性と力を活かし、伸ばし、いきいきと活躍するためには、その「志」を大切にし、長岡人の心に息づく「米百俵」の精神で、10年20年先の未来を担う次の世代に投資する政策が求められる。
- 一方、長岡市の社会移動をみると、10歳代後半から20歳代のマイナスが続いている。市全体では、30歳代以降では転入と転出がほぼバランスするものの、支所地域では、転入人口を十分に受止めることが出来ていない状況が続いている。
- こうした状況から、令和2年度に長岡市では（公財）山の暮らし再生機構との連携のもと、内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局「新たな全世代・全員活躍型「生涯活躍のまち」の官民連携による事業モデルの構築に関する調査研究事業」において、川口地域をモデルとして地域の若者が中心となったまちづくりのあり方について幅広く意見交換を進めた。
- 以上の流れを踏まえ、本計画では、引き続き川口地域をモデルスタディ地域としながら、全世代・全員活躍型の地方創生の具体的な方向性について検討する。
- また、モデルスタディの結果をにらみつつ、支所地域を始めとした市内全域における「生涯活躍のまち」展開の可能性についても検討を行う。

2. 検討体制

- 長岡市（川口地域）生涯活躍のコミュニティづくり実施計画の検討にあたっては、これまで若者が中心となった地域づくりを検討してきた経緯から、地元の若手の地域まちづくり団体と長岡市とが連携した検討体「いつもでも戻って来ることの出来るまち長岡・川口 検討WG」を設置した。同WGでは計6回の討議を行い、計画案等についての意見交換を行い、計画案のとりまとめを行った。

いつもでも戻って来ることの出来るまち 長岡・川口検討WG メンバー

長岡市 地域振興戦略部
地域振興戦略担当課長補佐 桜井秀樹
中山間地域集落支援担当係長 菊地裕紀
中山間地域集落支援班 稲川美沙子
中山間地域集落支援班 関佑一郎

長岡市 川口支所
地域振興課 総務担当係長 水落達也

川口エンジン 古民家部
代表 青柳拓
副代表 田中彩貴
中村英樹
渡辺正幸
関達夫
喜多村茜

オブザーバー
内閣官房 まち・ひと・しごと創生本部事務局

いつもでも戻って来ることの出来るまち 長岡・川口検討WG 検討の流れ

第1回WG 2021年7月29日

- ・先進事例① 低未利用の土地・建物を活用する手法を学ぶ
- ・先進事例② 仕事をみんなで分かち合う手法を学ぶ

第2回WG 2021年8月26日

- ・川口地域の概況について ・長岡市シルバー人材センター川口事務所の動向

第3回WG 2021年10月6日

- ・「かわぐち人材センター（仮）」の構想について ・空きスペースの利活用について（現地情報の共有）

第4回WG 2021年11月11日

- ・計画案の方向について

第5回WG 2021年12月27日

- ・計画案骨子について ・空きスペースの利活用について（現地情報の共有）

第6回WG 2022年2月25日

- ・計画案について ・空きスペースの利活用について（現地情報の共有）

第7回WG 2022年3月（予定）

- ・計画について ・今後の活動について

現地確認・ディスカッション 10月20日、12月8日

- ・市地域戦略部、川口支所とのディスカッション ・空きスペースの現地確認等を実施

3. 検討課題

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現

- 長岡市の社会移動をみると、10歳代後半から20歳代の社会減が続く一方、30歳代以降では転入と転出がほぼバランスする傾向にある。一方、川口地域など支所地域では、「戻ってきた地元出身者」を十分に受止めることが出来ていない状況にある。
- 令和2年度内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局「新たな全世代・全員活躍型「生涯活躍のまち」の官民連携による事業モデルの構築に関する調査研究事業」では、川口地域において「わかものまちづくり組織を考えるワークショップ」などを実施し、今後のまちづくりの方向性として「**いつでも戻って来ることの出来るまち**」を掲げ、下記の2つのテーマを検討課題として設定した。

「いつでも戻って来ることの出来るまち」の実現に向けた 2つの主要課題

① 町の人材を120%活用する仕組み

…重機が扱える人やインターネットに強い人など、町のさまざまなスキルを持つ人を繋げることで町内で経済を循環させる。そのためには、人・スキルのリストアップや、マッチングの仕掛けが必要。一方で障壁として考えられる、個人情報収集、報酬の有無、マッチングができる人材育成をどう図るかが課題

② 空き家/空きスペース再生

…町内に空き家が増えているが十分に活用されていない。Uターンや移住者などを呼ぶために空き家の再生・活用が重要である。そのためには、それぞれの空き家の状況を個別に調査して整理することが必要であり、地域おこし協力隊の活用も検討。

4. 川口地域の現状（仕事編）

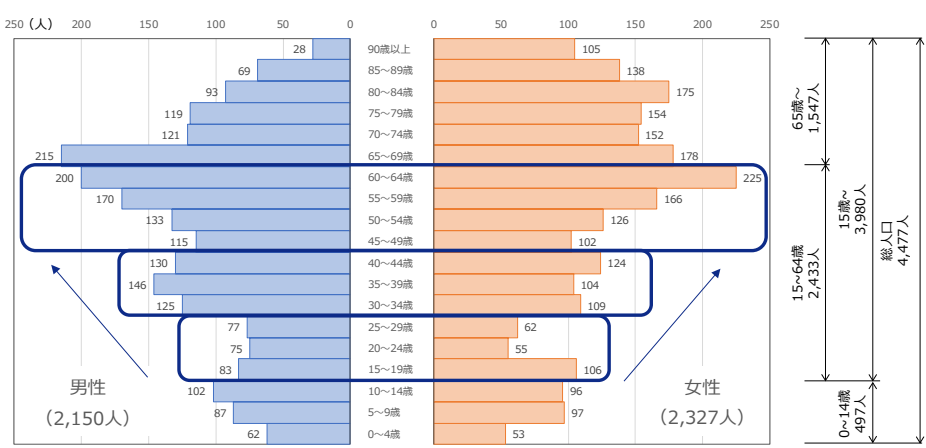
川口地域では、高齢化が進展し、20代等の若年層が占める割合が少なくなっている。また市外仕事や教育の場を求めながら暮らす人が約半数程度いる。

統計データから

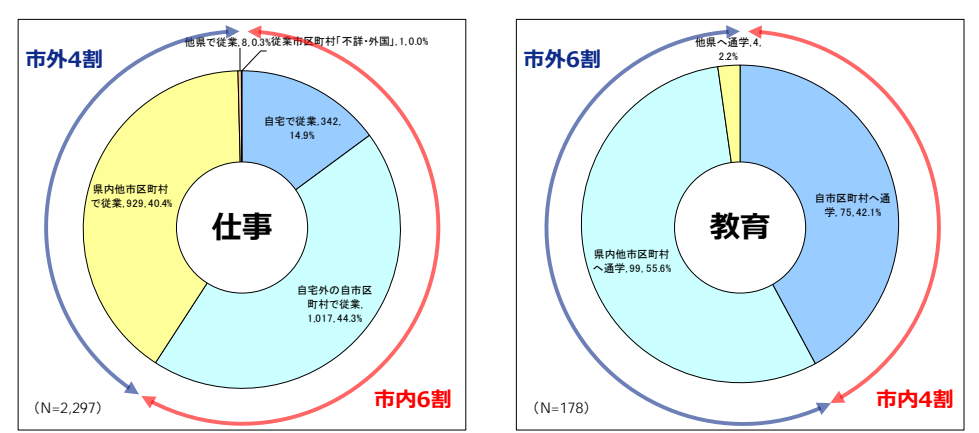
川口地域における総人口の推移
 人口ピラミッドからみる川口地域の全貌
 5年前にどこに住んでいたのか
 どこに通勤・通学しているのか
 独身の方が多地域なのか
 どんな家庭が多く暮らすのか
 どんな業種の従業者が多いのか

- ⇒ 川口地域は、毎年57人ずつ人が減っている。
- ⇒ 平均年齢は平均年齢は53.5歳、20代の総数が少なく、若い働き手の確保が難しい。
- ⇒ 川口地域は人の流動性が低く、新しい出会いが少ない地域と考えられる。
- ⇒ 長岡市の外に仕事や教育を求めながら、暮らす人々が半数程度いる。
- ⇒ 川口地域は、まだ未婚率は低いものの、近年は未婚の男性が増加傾向にある。
- ⇒ 川口地域には、長岡市よりも親と同居する世帯が多く暮らし、独り暮らしは少ない。
- ⇒ 製造業・建設業・卸売小売業・農林漁業が、川口地域の雇用を担っている。

川口地域の人口ピラミッド（H27年）



従業地別従業者数・通学地別通学者数の割合（15歳以上）



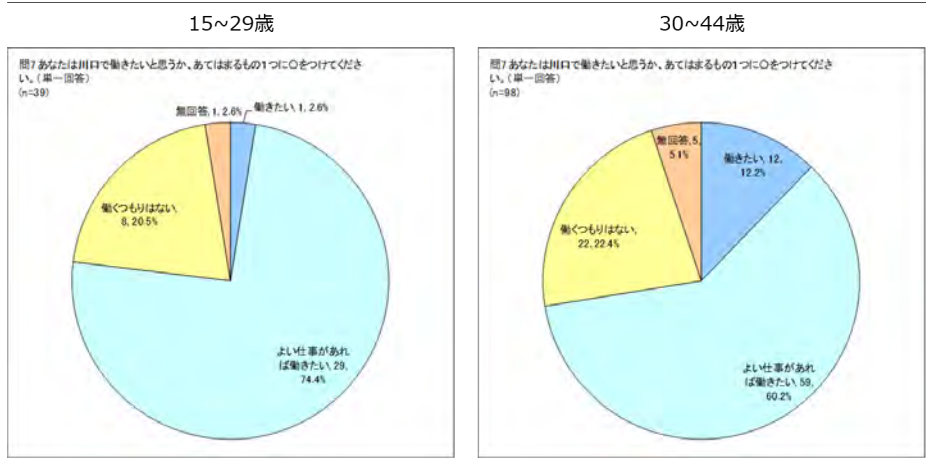
4. 川口地域の現状（仕事編）

若者層の多くが「よい仕事があれば川口で働きたい」と回答。一方、川口の仕事の情報は、若年層に十分には伝わっていない。

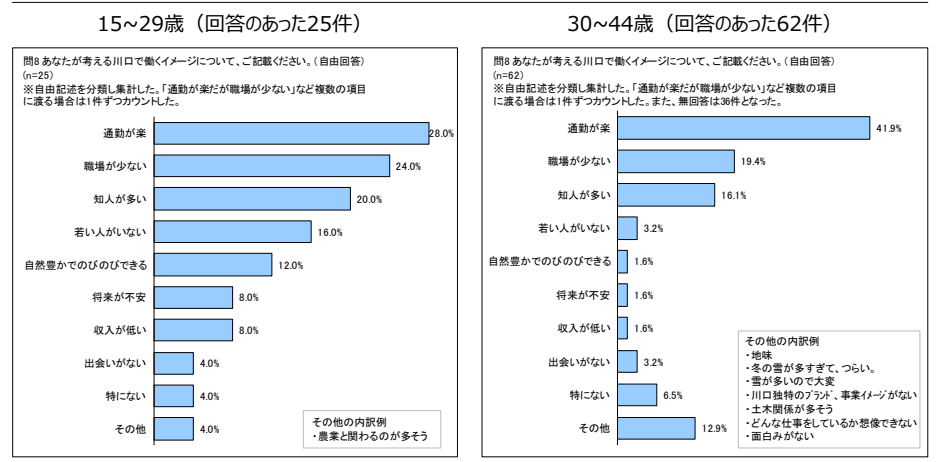
アンケート調査から

- 職場を選ぶ際に重視するポイント ⇒ 15～29歳は「収入」と「仕事内容」、30～44歳は「仕事内容」と「通勤の便」を重視
- 川口で働く意向 ⇒ 仕事があれば、若い人は川口地域で働きたいと考えている。
- 「川口で働くイメージ」 ⇒ 「通勤が楽」、「職場が少ない」、「知人が多い」ことが川口で働くイメージとなっている。
- よく利用するSNS ⇒ 若者への情報発信にはSNSを使うことが効果的と考えられる。
- 「仕事」の情報配信サービスの需要 ⇒ 情報配信サービスを希望しない方は3割程度、「どちらとも思わない」が半数

川口で働く意向



川口で働くイメージ



5. 川口地域の現状（空きスペース編）

市の空き家バンクへの登録されている物件は限定的である一方、地元に住まう「いつでも戻って来ることの出来るまち長岡・川口検討WG」メンバーが情報収集したところ、不動産情報としては流通していない空き家・空きスペースが多く賦存していることがわかった。



空き家・空きスペースの持ち主は治安への懸念やプライバシー等の関係から、空き家情報等の登録をためらうケースもみられることから、情報収集にあたっては地域のマンパワーを活用することも有効な手段だと考えられる。



● WGメンバー調査による空き家・空きスペース

6. 取組の方向性

川口地域での生涯活躍のコミュニティづくりの方針

- 川口地域では、地域まちづくり団体「川口エンジン」などを中心に、地域の若者を中心としたまちづくり活動が継続的に実施されている。これらの活動は、行政と連携を図りながらも、住民・事業者としての位置づけからなされており、行政面に係る制約等が少ないことから、自由な発想や様々な主体との連携、事業実施に至るスピード等において特徴がある。
- こうした力を地域づくりに活かし、様々な課題解決につなげていくため、川口地域では「住民主体・公サポート型」の公民連携まちづくりを引き続き推進する。具体的には、地域活性化など地域まちづくり団体が発意する課題解決型の取組を、その内容に応じて、川口支所、地域振興戦略部とが連携して、情報面等でサポートする体制を検討する。
- なお、川口地域では、コミュニティセンターを中心とした地域づくりが令和3年度からスタートし、現在今後の活動の方向について検討を進めているところである。今後、これらの地域づくりに係る主体が、それぞれの特徴を生かし相互に補完しあう関係を構築していく。

6. 取組の方向性

地域まちづくり団体の役割

- 生涯活躍のコミュニティづくりを担う地域まちづくり団体「川口エンジン」では、課題解決ビジネスを通じて、機動的な地域活性化を担うことを想定し、川口支所や地域振興戦略部では、情報面等においてその支援を実施する。
- 地域まちづくり団体では、地域ニーズを踏まえ、下記の3事業を通じて、R4年度以降自主財源の確保等を図り、持続可能な地域活性化活動の推進体制を構築する。

A.地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営）

B.空き家・空きスペース活用事業

C.しごとと人材マッチング事業

※B.空き家・空きスペース活用事業、C.しごとと人材マッチング事業は、
A.地域活性化事業の、早期着手プロジェクトとしての位置づけ

6. 取組の方向性

A. 地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営）

<背景>

- 新潟県中越地震の震央地である川口地域では、その復旧・復興の過程において、多くの住民活動が生まれてきた。加えてボランティア等との多層的なつながりも育み、これらが現在も、地域のまちづくりを支える重要な基盤となっている。
- 反面、震災から17年以上が経過し、高齢化など、まちづくり活動の担い手を取り巻く環境が変化するとともに、被災地域の創造的復興を支えてきた公益財団法人山の暮らし再生機構が令和2年度をもって解散するなど、川口地域のまちづくりは大きな変曲点を迎えている。
- 人口減少の傾向は当分の間続くことが想定されるなか、地域内では、極端な高齢化が進む集落等が見られ、持続可能なまちづくりを支える担い手の確保が喫緊の課題となっている。
- このようななか、川口地域では商工会青年部やまちづくり団体など、地域の若者を核とした活動の萌芽が芽生えつつある。また、令和2年度、3年度と、内閣官房のモデル検討事業を通して、全世代・全員活躍型のまちづくりのあり方を検討することなどにより、市内外とのさまざまなつながりを構築しつつある。

6. 取組の方向性

A. 地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営）

<背景（つづき）>

- 昨年度、本年度と、新型コロナウイルスの爆発的な流行を受け、新潟県内においても、まん延防止等重点措置や緊急事態宣言等の発令がなされてきた。これに伴い、これまで地域で行われてきた観光等の人的交流が減少した一方、新しい生活様式の定着も進んでおり、川口地域においても、オンラインを通じた市内外との交流が増加している。
- また、価値観が急激に変化する中で、地方都市圏や郊外への人口の流れも顕在化するなど、地方創生は新たな転換期を迎えている。
- 川口地域では、こうした時代状況の変化をチャンスととらえ、地域の若者を中心とした持続的なまちづくりの仕組みを推進していく。
- 具体的には、全世代・全員活躍型の地域づくりモデルを構築するとともに、長岡市内・市外の交流人口・関係人口を取り込み、地域活性化の原動力の一つとする「越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）」を公民連携型で進めていく。

6. 取組の方向性

A. 地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営）

<方向性>

- 地域まちづくり団体「川口エンジン」が中心となって、地域住民主体/公サポート型の地域共創ラボを設置し、関係人口拡大に向けた地域課題を抽出し、その解決を図っていくこととする。
- 具体的には、住民、市、都市部企業が一体となって、関係人口の拡大とそれを地域活性化に結び付ける手法を検討する。また、実証事業の受託や実事業化を通して、地域課題解決を持続的に運用する体制を整える。

「いつもでも戻って来ることの出来るまち長岡・川口検討WG」での声

- 自治体が相談窓口を置くことに加え、「地域の本音」を拾うことができる仕組みが必要。住民団体が「本音」を行政に伝え、行政のサポートを引き出す、あるいは住民団体自らの事業で地域課題の解決を図る。ーそのような流れを生みだせないか。
- 川口は沢山の地域団体がある。これらを一つにするのではなく、その個性を生かしながら、つながり合える基盤があると良い。
- 地域内の力だけでは難しいテーマもある。長岡市内の他の地域や全国の、学や企業、住民と連携できる仕掛けが必要。

<今後の課題>

- 運営主体となる地域まちづくり団体「川口エンジン」については、現在、地域住民や企業、事業者、ボランティア団体等が参加した任意団体となっている。
- 今後、継続的なラボの運営に向け、法人化に向けた検討を進めることが必要である。また法人化にあたっては、株式会社、一般社団法人、非営利活動法人等の法人形態の中から、設置目的や市との協働などの観点を踏まえつつ、法人格の検討を地域協働型で進めていく。

6. 取組の方向性

A. 地域活性化事業（越後かわぐち関係人口共創ラボ（仮）の運営）



6. 取組の方向性

B. 空き家・空きスペース活用事業の方向性

<背景>

- 現在、川口地域においては、不動産仲介業の事業者が存在せず、不動産物件の仲介等について地域外の事業者や人づて等に頼らざるを得ない状況である。
- また高齢化等に伴い、空き家・空きスペースも地域内に存在しているが、防犯への懸念やプライバシー等の関係から、家主等が不動産仲介事業者や市の空き家バンクへの登録をためらうケースもみられる。

<方向性>

- 地域活性化にあたっては、住まい、活動拠点、交流の場等の観点から、既存の建物施設の利活用を図る視点が重要となる。特に川口地域においては、Uターン人材や交流人口受け入れの受け皿としての役割が、空き家・空きスペースには期待される。
- こうした状況を踏まえ、地域まちづくり団体「川口エンジン」が公と連携しながら、下記のような取組を令和4年度以降実施していくこととする。

- 「川口エンジン」による空き家・空きスペースの状況把握と利活用に係る意向把握（地域ネットワークに基づいたきめ細かな状況把握が可能）
- 空き家バンクなど、市との情報連携
- 空き家・空きスペースの利用提案と利活用事業の実施



長岡花火・川口まつり大花火大会での宿泊・滞在



夏休み等を活用した田舎滞在

6. 取組の方向性

B. 空き家・空きスペース活用事業の方向性

＜今後の課題＞

① 事業スキームの構築

- 必ずしも十分に利活用されていない空き家・空きスペースの活用は地域の活性化に好影響をもたらすものである。一方、不動産に係る取引仲介については、宅地建物取引業を営む者について免許制度があることを踏まえ、地域側で出来る事項、専門業者と連携すべき事項の整理が必要である。
- 具体的に川口地域では、全国の自治体等で導入が進んでいるシェアリングエコノミー手法を活用し、空き家・空きスペースの利活用を始めるとともに、長期的には地域に根差した不動産仲介等が可能な体制づくりを検討していく。

② 個人情報への配慮

- 住宅、建物等に係る情報は、個人の財産に係るものであり、個人情報保護の観点から、その取扱い等に十分な配慮が必要であり、事例等をもとに、規約の準備等をすすめ、その遵守を図っていく。
- また家主等の地権者の意思を尊重した、空き家・空きスペースの利活用を進めていくこととする。

③ 地域まちづくり団体「川口エンジン」と市との連携

- 市の空き家バンク制度は「空き家等の有効活用を通して、定住の促進及び地域の活性化を図るために実施する」とされている。川口地域での空き家・空きスペース事業は地元ならでのネットワーク力で市の空き家バンク制度を情報収集面で補完するものであり、「川口エンジン」は、市と連携を図りながら、空間の有効活用を通じた地域活性化を進めていく。

6. 取組の方向性

C.しごとと人材マッチング事業

<背景>

- 川口地域においては、「よい仕事があれば川口で働きたい」という住民の意向が多い反面、求人や人材に係る情報が、各個人や事業者にも必ずしも十分に届いていない状況がある。
- 長岡市シルバー人材センターについては60歳以上を対象とするとともに、令和4年度以降、川口地域における運営体制の見直しを行う予定である（川口事務所を縮小し、事務処理等を本部を行う見込み）。

<方向性>

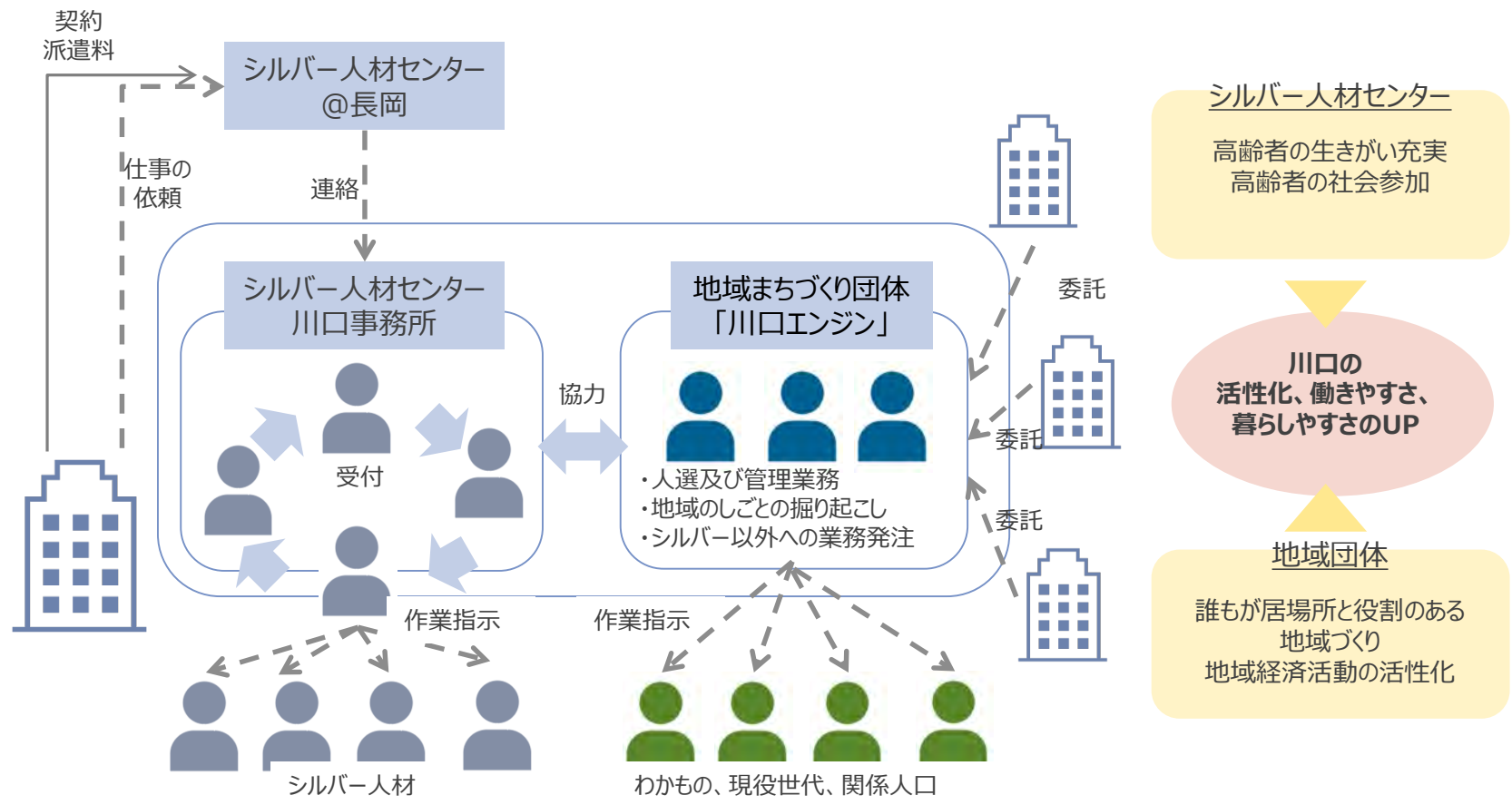
- 地域の事業者や住民からの仕事ニーズ、並びに就業希望者の情報については、地域まちづくり団体「川口エンジン」がその把握を行う仕組みを構築する。
- 「川口エンジン」では、仕事が必要とされるタイミング、仕事に必要なスキル、適した人材などについて、地元ならではのきめ細かな情報収集を行い、60歳以上の人材に関してはシルバー人材センターと情報共有を図るとともに、シルバー人材センターが対象としない世代については、独自のマッチング等を行う。

<今後の課題>

- 空き家・空きスペース活用事業と同様に、コンプライアンスを確保した事業スキームの構築、個人情報への配慮、「川口エンジン」と市との連携を図っていく。

6. 取組の方向性

C.しごとと人材マッチング事業



7. スケジュール

令和4年度：

- ① テスト事業の実施（A.地域活性化事業、B.空き家・空きスペース活用事業、C.しごとと人材マッチング事業）、
- ② 補助事業等への参画
- ③ 生涯活躍のまちづくりメニューの詳細検討

令和5年度：地域まちづくり団体「川口エンジン」の本格運用開始、地域再生計画の検討

8. 今後に向けて

- 令和3年度においてトライアル事業を実施（A.地域活性化事業、B.空き家・空きスペース活用事業の小規模トライアルを令和4年2月、3月で実施。）
- また令和3年度中において、令和4年度の実施する補助事業等の準備（「川口エンジン」など地域まちづくり団体を事務局とした地域協議会の設置等）
- 「川口エンジン」の法人化の検討と登記
- 令和4年度において、川口地域の経験をベースに、支所地域を始めとした長岡市全域で横展開可能な「生涯活躍のコミュニティづくり」のあり方を検討

長岡市（川口地域）
生涯活躍のコミュニティづくり
実施計画

令和4年3月

滋賀県長浜市
生涯活躍のコミュニティづくり
実施計画（案）

令和4年3月

長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

1. 本計画の趣旨

長浜市では、人口減少や急速な少子高齢化に伴い、「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、横断的な施策を推進しているが、人口ビジョンの目標どおり人口構造の若返りが達成されたとしても、高齢者一人を現役世代が約1.68人で支えるという厳しい状況や、15～64歳の総人口に対する割合が減少し、労働力不足に陥るおそれがある。

そのため、人口減少対策のみではなく、女性やアクティブシニアが活躍できる全世代・全員活躍型の長浜市の実現に向けて、「交流・居場所」「活躍・しごと」といった機能を有したコミュニティづくりを推進するため、本計画を策定する。



長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

2. 検討課題

現状

- 子育て支援等に取り組む団体（＝合同会社LOCO）が、多様な女性等の個別の状況に応じた就労の仕組みづくりの意向を持っている
- 同団体が入居しているスペース（＝えきまちテラス長浜）を、子どもや高齢者も含む、多くの人を訪れる交流・居場所とするよう取り組んでいる（LOCO、チャレンジスペース、クリエイションセンター等）
- 市内事業所の人手不足解消や事業開発等による活性化を促進する必要がある



検討課題

時間的な制約やスキル等が課題となって「働きたいのに働く場がない」女性等への仕事の提供を核として、事業所や市民の交流を生み出す仕組みを構築する。

しかし、特に時間的な制約やスキルが不足する女性には仕事が少なく、事業所や地域は人手が不足している現状・・・

3. 検討体制

• 庁内体制については、政策デザイン課（市の企画調整担当）を中心に、「仕事・活躍」をテーマに業務を行う人権施策推進課（女性活躍）、商工振興課（働く女性応援）、市民活躍課（地域における活躍）が連携し施策の検討。

• ふるさと移住交流室（交流・関係・移住人口との連携、ふるさと寄附の活用）は、関係人口との連携やベースとなる仕事づくりにおいて、連携。

• 合同会社LOCO（子育て・働く・暮らしの応援）を中心に、えきまち長浜株式会社（交流・居場所）、長浜デザイン戦略室（クリエイションセンターの運営、関係人口・移住者との連携）と市が一同に会して意見交換を実施。官民連携の推進基盤を構築する。

庁内をやる気にさせるのは難しい課題。LOCOさんにお世話になっている人に声をかけ、LOCOさんの悩みを一緒に考える会からSTART。

R3から組織化されたふるさと移住交流室は、移住者との地元企業の連携や、ふるさと寄附の返礼品充実を課題としており、一緒にできないか声かけ。うまくニーズが一致しました！

外部会議は、活躍する業界が異なるメンバーも多かったですが、意外と同じ方向性（市内事業所と誰かを仕事でマッチングすること、まちの好循環を目指していることetc）で活動していることが分かりました。

大きな化学反応は今はまだないですが、「とりあえず集まってみる」のは、小さくても新たな発見があるはずです。

4. 調査結果

- 庁内横断かつ民間参画により「生涯活躍のまち」を検討することで、施策のすき間や連携の可能性等に気づきがあった。
- 「仕事」をキーワードとして、女性（時間に制約ある方）や移住者等（サテライトオフィスの整備に伴い訪れる人、長浜に関わりたいと思ってくれるリモートワーカー等）の関係性を整理することで、労働力や専門的スキルが不足し困っている地域内事業者とのマッチングが可能となり、地域内での好循環を検討することができる。（5～12頁のとおり）
- ストーリー性がある商品開発が必要となる「ふるさと寄附」の運営を核に、地域の仕事・人の交流や循環を検討できる。（13頁のとおり）

・旧来の「政策」の枠組みを超えて、庁内外の課題（今回は仕事づくり）に目を向けると、今までとは違った人と人の交流が生まれ、新たな気づき（女性×移住者、仕事×ふるさと寄附 etc）が生まれるかもしれません。

・事業の構築は流されるまま。やる気がある人が、やりたいと思っていることを応援する気持ちで、それを実現するにはどうすればよいか、誰とつなげればよいかを手助けすることができれば、それだけで市の課題解決につながります。上手くつながれば、化学変化で市の大きな課題解決が進むかも、という気持ちで色々関わっています。

・誰かにやる気を出させるのも大事ですが、やる気がある人を応援する方が、気持ちよく仕事できるのではないのでしょうか。今回は、LOCOさんやふるさと交流室のメンバーの「やる気」で取組が進んでいます。

子育て応援カフェLOCOの取組

子育て応援カフェLOCO New concept!!

みんなの暮らし「あったらいいなあをカタチに・・・」

学生、子育て世代～高齢者まで
「子育て」「働く」「暮らし」を応援する場所として、
長浜の暮らしに なくてはならない存在を目指し
生活にPLUS+となるような各種事業を展開しています

子育てを応援



働くを応援



暮らしの応援



自分らしい暮らしができ、住み続けたいなる“まち”をめざして

LOCO Living

～LIFE PLUS+自分らしい暮らしを～

OPEN
【LOCO Living】
月曜～金曜（祝休）
9：30～17：30



- 再就職支援
- 起業支援+女性活躍啓発
- 育休支援
- ハローワーク+滋賀マザーズジョブステーション連携
- リモートワーク+短時間就労
- シェアスペース+まちBASE
- えきまちテラス総合窓口

短時間就労 * スキルを活かす

企業さんから外注のお仕事を受けLOCOの中で短時間勤務できる女性に就労してもらう仕組み。
働きたい女性の問題を地域で仕事をまわす解決する一歩になれば。

■ TEAM WORK

■ 専門的スキルを持った方がチームを組んで
企業、行政の仕事に関わる仕組み

- ・チラシ、冊子作成
- ・HP作成
- ・取材+記事作成
- ・動画編集
- ・SNS更新代行 など



短時間就労＊地域で仕事をまわす



簡単 スマホ LINE 教室

参加費 無料

地域で子育て中のお母さんスタッフがサポートします！

利用者8000万人突破のLINE！
LOCOのスタッフが寄り添って丁寧に説明します。
ご家族、趣味の仲間どうしてLINEでのトーク、写真の交換に挑戦しませんか？

	第4回目	第5回目
日	12月13日(月)	12月22日(水)
時	10:00~11:30	13:00~14:30
	定員：各6人まで	

場所 まちづくりセンター1B会議室
滋賀県長浜市高田町1-2-34 さざなみタウン

内容 スマホの基本操作・LINEの始め方
友だちの追加方法・トークと無料通話
グループLINEの始め方・写真や資料の送り方

お申し込み TEL/FAX 64-2753
長浜地区地域づくり連合会まで

■ 地域のお母さんが地域のシニア世代にLINE講座



■ 幅広い種類の仕事を受注

地域の仕事を地域で短時間就労をしたい方が行う。
人材不足×短時間しか就労できない方の課題が一度に解決できれば。

えきまちテラス長浜とパートナーとして*

■ シェアスペースinえきまちテラス長浜

- ・レンタルスペース+コワーキングスペース(仕事、商談、イベント、交流の場)
- ・まちBASE...市民団体やNPOなどの拠点としての利用
インクルーム利用、住所利用、郵便・荷物管理、ロッカー



■ えきまちテラス長浜の総合窓口

- ・1階en▷gawaスペース+2階イベント広場+アトリウム等の貸スペースの窓口
長浜に暮らす人がチャレンジできる場+多世代が集う居場所



えきまちテラス長浜に シェアオフィス誕生

市民団体、NPO、法人の活動の拠点に//

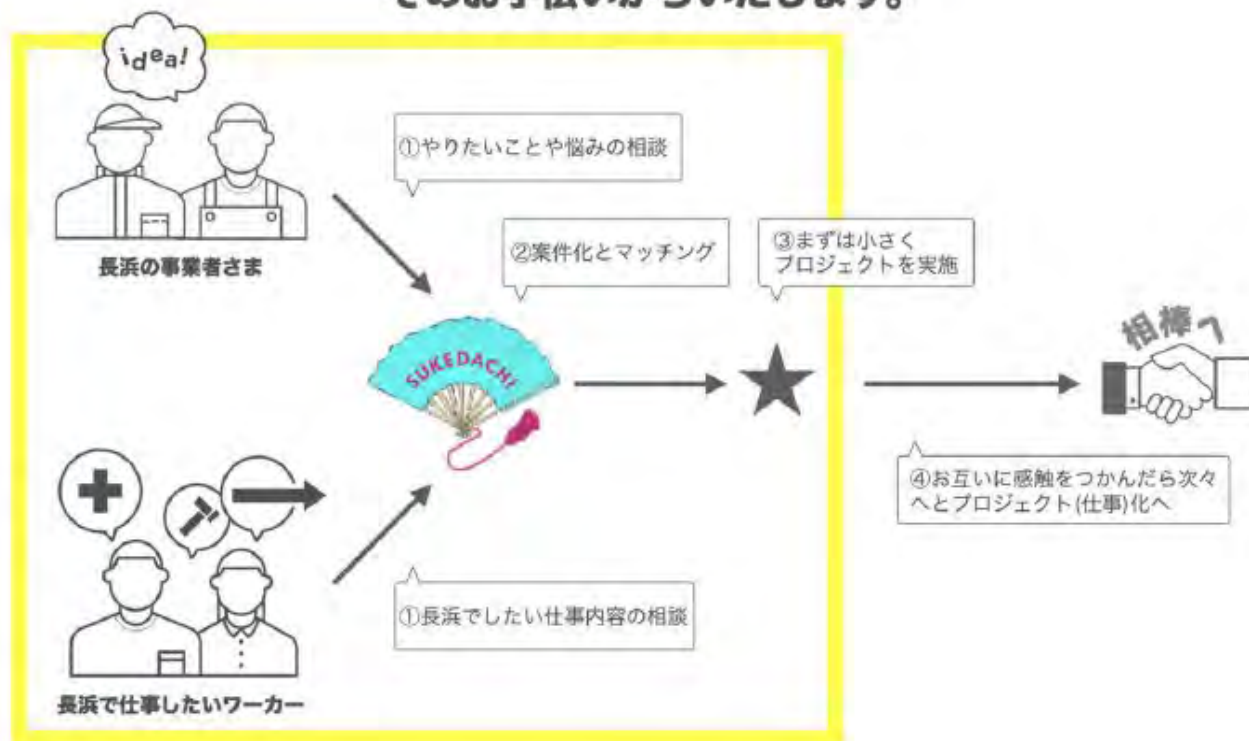
集まる場所がほしい
郵便、荷物の受け取りをしてほしい
そんなお悩みを解決します!!

長浜市の取組

直接寄与型の関係人口創出・拡大施策

長浜ワークロケーション事業

まずは小さくはじめてみる。
そのお手伝いからいたします。

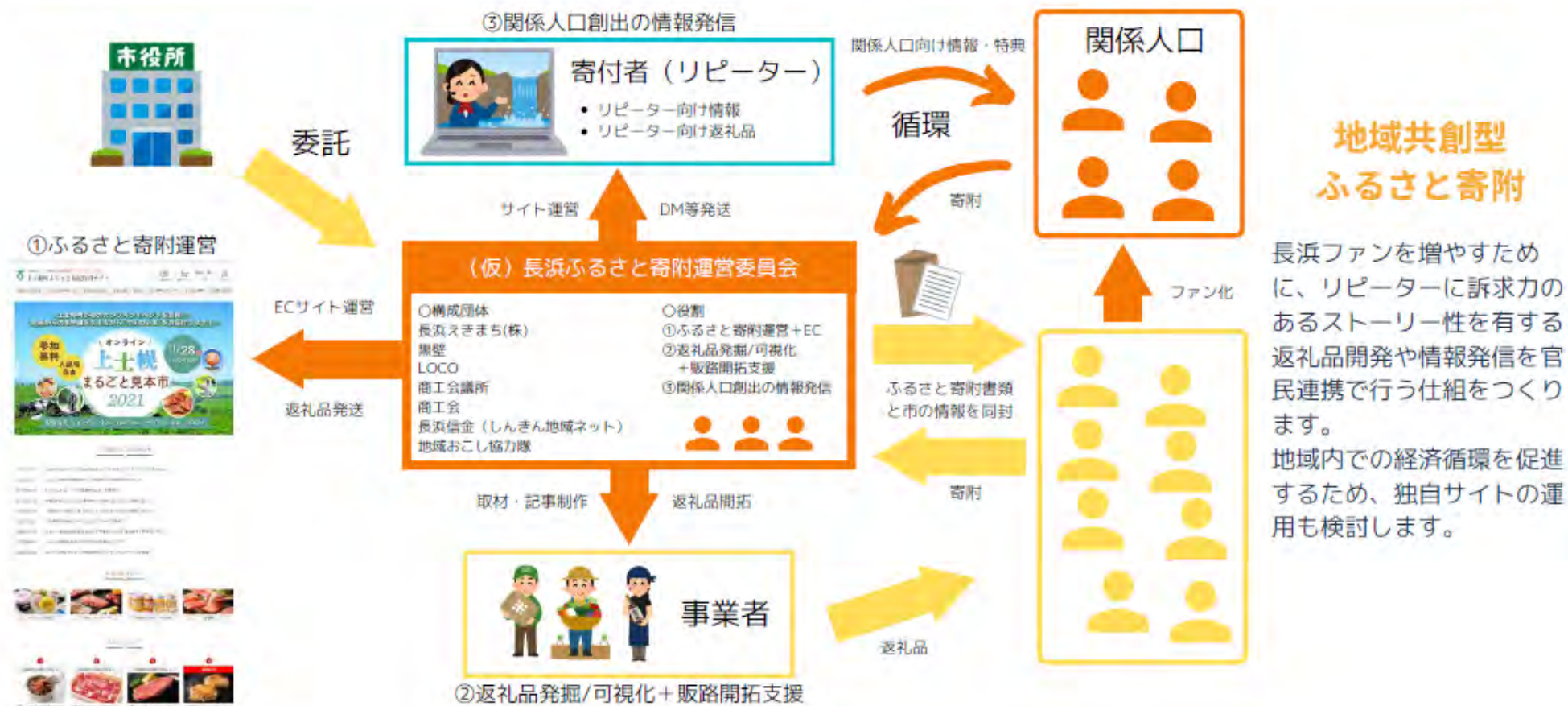


SUKEDACHIプロジェクト

地元企業のやりたいことや課題と、自身のスキルや経験を活かして、長浜に関わりたい都市部のワーカーをマッチングすることで、地域はイノベーションや人材への投資意識の変化を、ワーカーは地域の豊かな暮らしの体験やキャリアの可能性を広げることで、互いの足りない部分を補い合い、良い部分を高めます。単発のマッチングを目的とせず、人材や経験、スキルや価値観が循環し、ともに成長し合える関係を作り出します。

市場としての関係人口創出・拡大施策

ふるさと寄附



5. 取組の方向性

- 合同会社LOCOと連携し、地域の女性が短時間でも就労でき、地域の仕事を地域で回すことが可能となる仕組づくりに取り組む。
- 地元企業とリモートワーカーがつながる仕組「長浜ワークロケーション事業」に取り組む、地元企業のやりたいことや課題と、自身のスキルや経験を活かして関わるワーカーのマッチングを図る。
- 女性・企業・リモートワーカーをつなぐ「しごとづくり」を推進するため、ふるさと寄附の運営を地域で行い、「安定した仕事づくり」と「魅力ある返礼品の開発」を実現する「地域共創型ふるさと寄附」に取り組む。（15頁のとおり）



地域内でのしごとの循環



長浜市生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

6. スケジュール

令和3年度

- 長浜ワークロケーション事業のモデル事業を実施。実施報告会の開催。
- 地域共創型ふるさと寄附の実施体制の検討・調整。

令和4年度

- 地域共創型ふるさと寄附の仕組みを活用した短時間勤務の試行。
- 長浜ワークロケーション事業のロールモデルの拡大。ニーズのマッチング。

7. 今後に向けて

- 中長期的な労働力不足に向けて、市域全体の取組に広げていく。
- 女性の社会参画を進めるには、市民の意識変革（アンコンシャス・バイアスの解消）が必要となるため、令和4年度以降、「仕事」のみならず、地域活動への参画なども視野に入れながら、さらなる検討を進めていく。
- サテライトオフィスや都市部で働く関係人口と市内企業との交流を図り、相互のメリットを見出しつつ、事業の自立的な運営が可能となる体制を模索する。
- 現時点で検討している「交流・居場所」「活躍・しごと」「都市部との人材循環」以外の要素も含めた「全世代・全員活躍型『生涯活躍のまち』」の推進に向け、令和4年度以降、検討を進めていく。

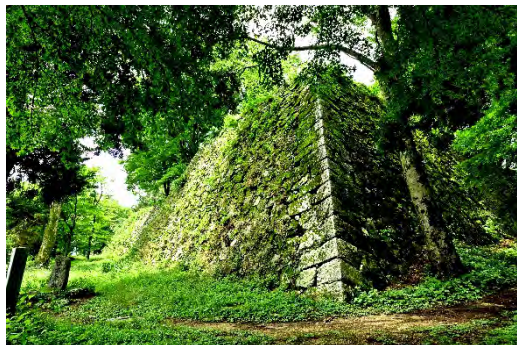
高取町 生涯活躍のコミュニティづくり 実施計画

令和4年3月

高取町生涯活躍のコミュニティづくり実施計画

1. 本計画の趣旨

- 高取町では、昭和25年に9,936人のピークを迎えた人口も、恒常的に減少を続け、平成27年には7,195人となり、令和4年4月から過疎地域に指定されることとなり、コミュニティの維持や労働者の不足などの課題を抱えている。
- 令和元年に実施した住民アンケート調査の結果では、本町から転出しようとする理由は、「仕事をする場所が遠いから」が35.2%を占め、町内でいかに就業を確保することにより転出を食い止め、定住したくなる町にするかが課題となっている。
- そのような中、全世代・全員活躍型「生涯活躍のまち」高取町の実現に向けて、「交流・居場所」「活躍・しごと」「都市部との人材循環」といった機能を有したコミュニティづくりを推進するため、本計画を策定する。



2. 検討課題

- 町内の事業所や地域・地区は、人手不足や担い手不足に悩んでおり、これまで担い手となってきたシルバー人材センターや社会福祉協議会ボランティアでは、メンバーの減少・高齢化・固定化が進んでいる。
- 一方で、高齢者や子育て中の女性、介護をしている人など、働きたいけど働けない町民がいることから、「しごとコンビニ®」導入により、双方の課題解決を図る。

3. 検討体制

- **庁内体制**については、調整会議（町長・副町長・教育長・課長級出席）での説明により、庁内周知・連携を図った上で、各課にヒアリングを行った。
- **庁外連携**については、シルバー人材センター及び社会福祉協議会や商工会と連携して本事業について検討した。
- **調査**については、町内の事業所及び町民に対するヒアリング調査を実施し、現状と課題を把握した。
- 「しごとコンビニ®」の**先進事例を視察**し、実際の運営方法や課題等を把握した上で、高取町の実状に合わせた形を検討する参考にした。

4. 調査結果

【調査対象】

- 町内の事業所：21事業所（経済センサスを基に選定）
町内産業の特徴に鑑み、製薬、医療・福祉、農業を重視した
- 町民：42名
子育て中の女性、高齢者（50～70代）
※新規就農者は昨年度までにヒアリング済み

【調査事項】

- 事業所に対する調査：事業内容、課題、出したい業務等のニーズ
- 町民に対する調査：時間、時間帯、場所、収入、内容等の希望
：自身や身の回り、地域の課題

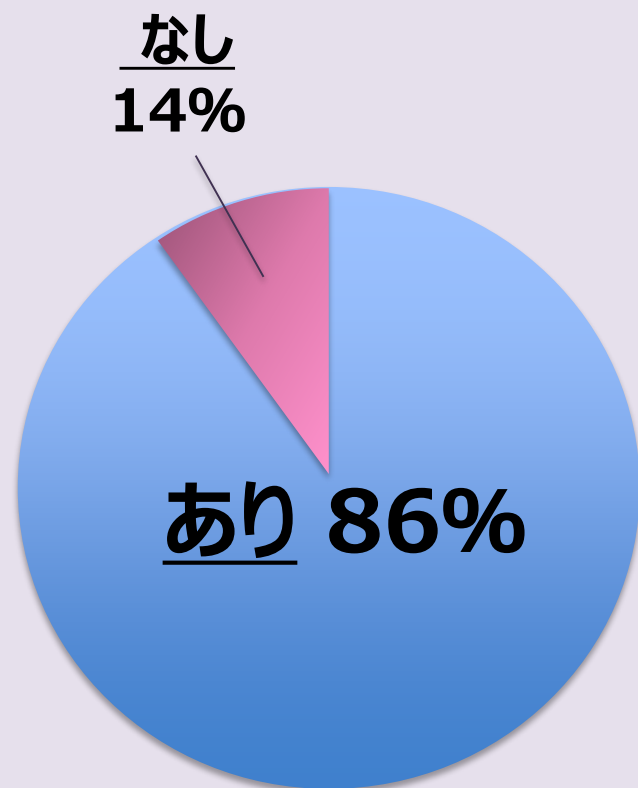
※庁内各課、シルバー人材センター及び社会福祉協議会や商工会のヒアリングも実施した

4. 調査結果

【調査結果の概要】

- 事業所は、人手不足や、新たな雇用への過重負担感、人手不足に伴う事業への影響（事業の拡大や継続・承継の困難）等の課題がある。
- 地域は、担い手が不足し、行事や地域の維持管理等に影響が出ている。
- シルバー人材センター・社会福祉協議会（ボランティア）は、担い手が高齢化・固定化し、足りなくなっている。
- 子育て中の女性や高齢者等は、短時間、都合のいい時間に働きたい、という希望がかなえられていない。お金だけでなく、人の役に立ちたい、つながりが欲しい、気分転換したい、といったニーズもある。
- 町は、既存のコミュニティにつながない町民との接点を探している。

ニーズはあるか



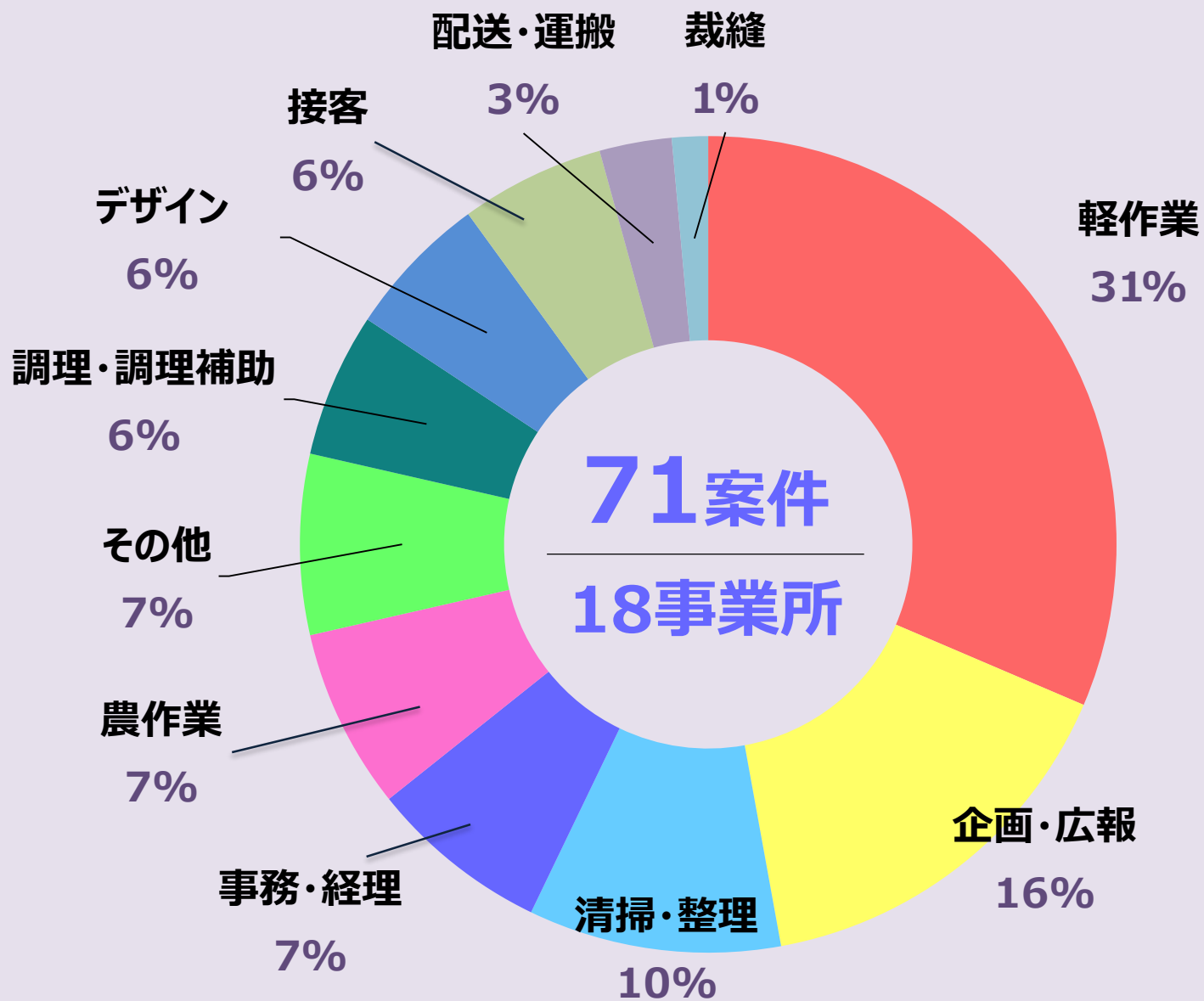
●「ニーズありの理由」の主なもの

- ・経営者が製造に集中できるよう、他の仕事を任せたい。
- ・その仕事を、正社員や職人にさせると、人件費が高く。
- ・新規事業を始めるための、仕組みづくりに役に立つ。
- ・特に、若い人に仕事をしてもらうことで、自社を知ってもらい、今後の仕事にもつなげていきたい。
- ・経営者がパフォーマンスを上げるために、休みを取りたい。
- ・コロナで対面でのやり取りができないので、対策をしておきたい。
- ・高齢化しているメンバーのフォローや、若返りを図りたい。
- ・慢性的な人手不足を解消し、ひっ迫した現場を改善したい。
- ・仕事を生み出す力をつけて、売上の低迷から脱却したい。
- ・社会や地域に貢献をしたい。
- ・雇用するまでもない単発案件での、人材を確保したい。
- ・今すぐにも働いてもらえると、楽しいと思う。

●「ニーズなしの理由」の主なもの

- ・自分の代で、事業終了予定であるため、規模を縮小している。
- ・自分で、できる範囲の仕事をしていくつもりなので。

事業所の声：ニーズ（作業・業務ジャンル別）



しごとのニーズ

事業所等の課題と希望

- ・ 人手が必要で募集をするが、応募がない。
- ・ 人手は必要だが、雇用するほどの体力はない。
- ・ 人手が足りず、事業の拡大に手をつけられない。
- ・ 人手が足りず、事業継続が厳しい。

- ・ 必要な時に必要な分だけ手伝ってもらえると助かる。
- ・ 時間ではなく成果に対する報酬だとありがたい。
- ・ 働いてくれる人が町民だと、安心できる。
- ・ 町で商売をしているので、町に貢献したい。

受け手となってきた方々の状況

●シルバー人材センター

- ・ 草刈りニーズが非常に多いが、登録者の高齢化が進み、担い手不足で断るケースもある状態。
- ・ 町民からもシルバー人材センターだけでは間に合っていないという声が多数ある。

●社会福祉協議会

- ・ 担い手不足。
- ・ 無償ボランティアでは動かない層も増えてきており、有償ボランティアの検討も必要。

●具体的なしごとのニーズ

< 農業 >

果物や野菜の収穫・選別・出荷作業、電気柵の維持管理等、大きな農家の農作業管理(デジタル化)

< 町内事業所 >

商品の組立、封入作業、事務、デザイン、商品モニター、SNSの更新、ブログの更新、ホームページの更新、商品企画、ニュースレターの作成、草刈り、ネットショップの運営・管理、建築(生コンをならす・流す、材料を運ぶ等)、木工品の面取り、製菓会社の季節労働、商品利用時の写真や動画の提供、プラスチックのバリ取り、シール貼り、文書作成、連絡・調整

< 個人 >

草刈り、庭木の剪定、竹を切る、買い物代行や同行、子どもの一時預かり、家事全般(料理・掃除・整理整頓等)、高齢者のちょっとしたお手伝い、高齢者の話し相手、移動、重い荷物を運ぶ

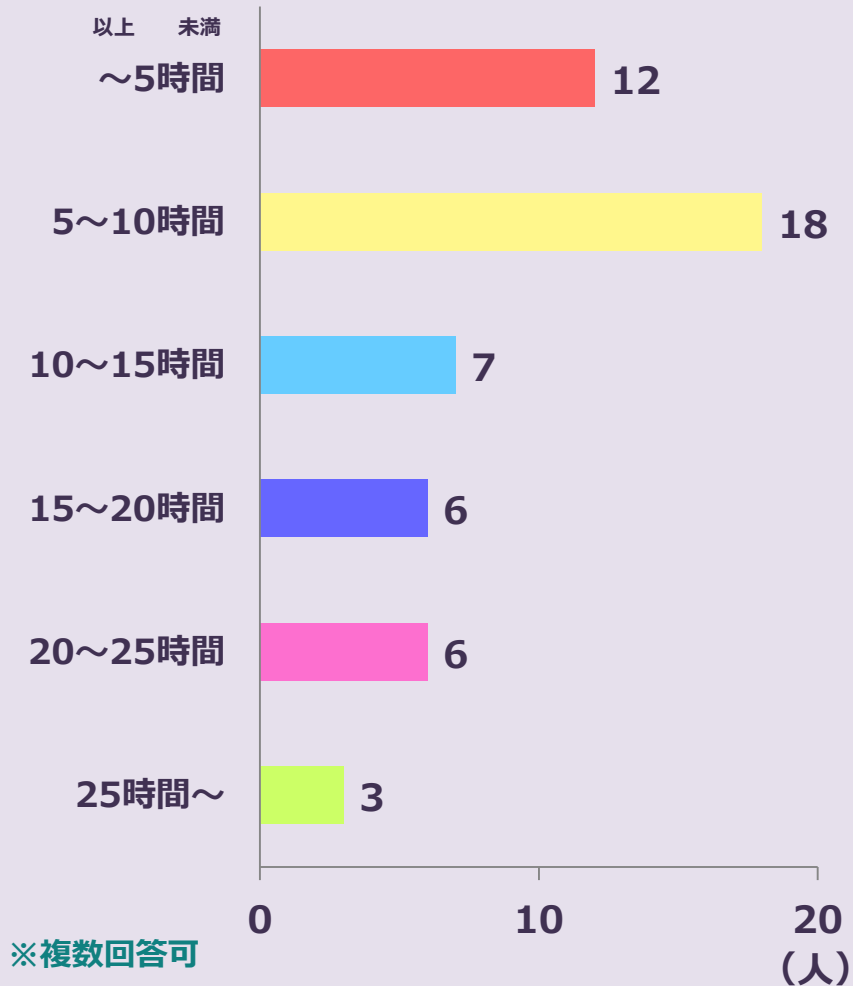
< 役場 >

役場の仕事(事務作業、会議音声の文字起こし等)、古墳の発掘(教育委員会)、道の清掃、観光関係の仕事(情報発信やイベントの手伝い等)、ウェブサイト「和になる高取」のインタビュー、インスタ更新

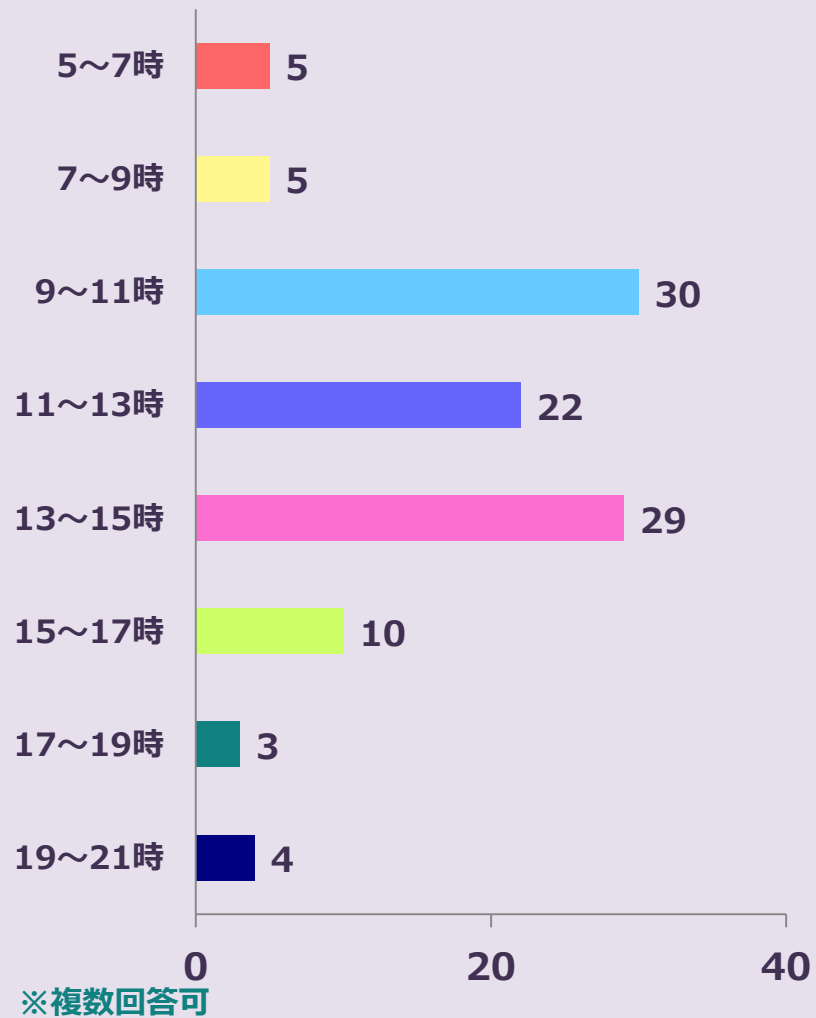
※対象者自身の意見と、こういうところにニーズがありそうという意見も加えている。

シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携することで、より地域の課題解決につながると考えられる

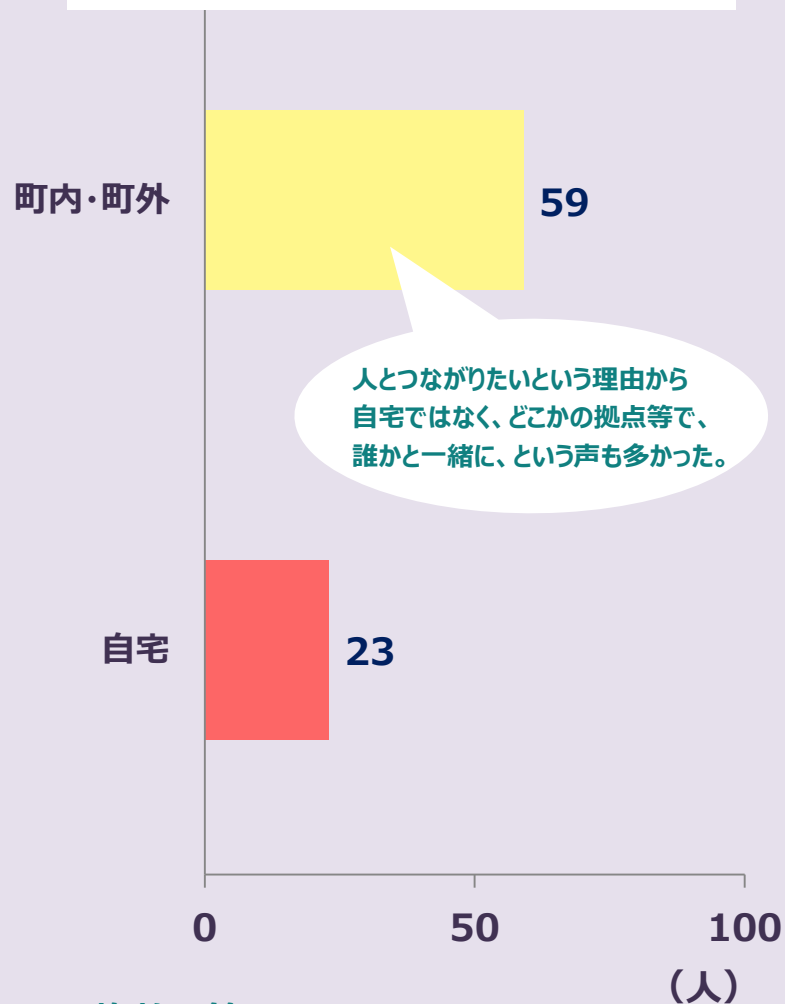
週あたりの働きたい時間数は



1日の働く時間帯は

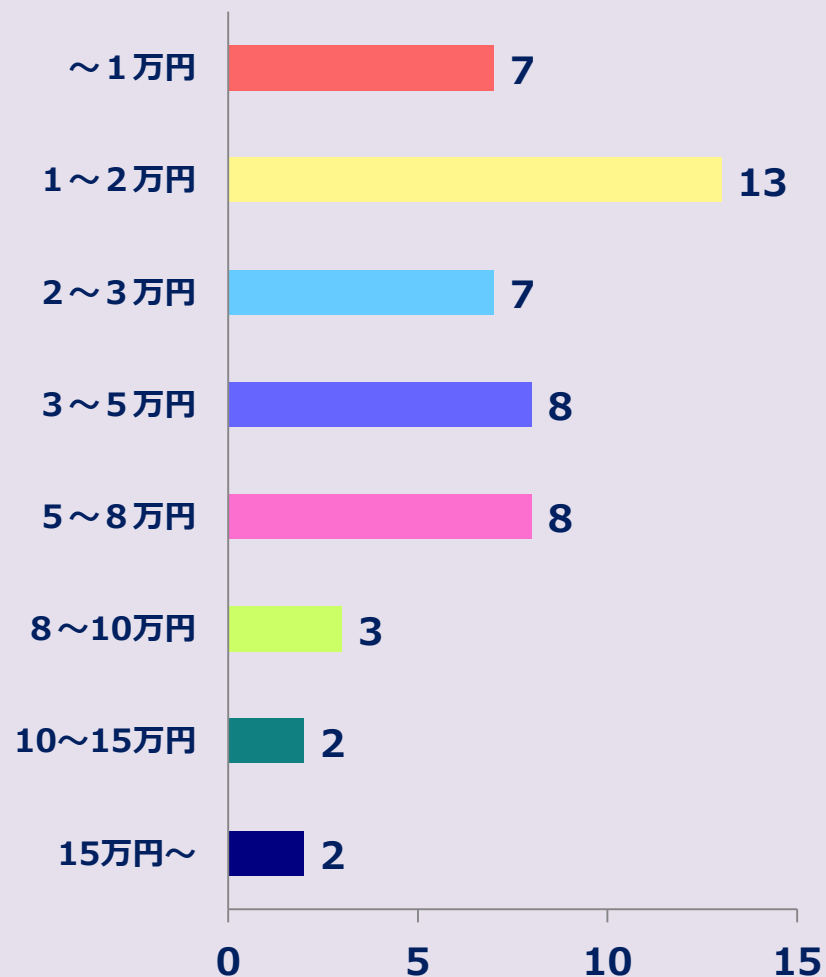


働く場所は



※複数回答可

希望する月の収入は



※複数回答可

希望するしごと内容は



●「希望するしごと内容」の主なもの

- ・勉強会でパソコンが使えるようになったら、ブログ作成等をしたい。
- ・座ってする仕事は苦手なので、体を動かしたい。
- ・デザインは勉強したことはないが、やってみたい。
- ・POP作成や、パッケージデザイン。
- ・一度工場で、働いてみたい。
- ・企画など。
- ・農作業は、室内であればOK。
- ・野菜を育てているので、勉強のために農作業をしたい。
- ・これまでやってきたこと以外のことをしたい。
- ・家でもできそうなので、軽作業が良い。
- ・体力維持のためにシルバーで仕事をして、しごとコンビニ®では、体を使うこと以外の仕事をしたい。
- ・ブログ記事の作成や、更新。
- ・コンピュータ教室の手伝いができる。
- ・子どもが大好きなので、いくらでも相手ができる。
- ・人と接する仕事をしたい。
- ・自宅でできるので、事務系のデータ入力が良い。
- ・何でもやってみようタイプなので、特に嫌なものはない。
- ・体を使うのもたまには良い。
- ・商品企画から、デザインまでできる。
- ・工場系（時間管理が厳しく、同じ作業が続くもの）以外。
- ・やったことがない、色々な仕事に挑戦したい。
- ・人に喜ばれる仕事をしたい。
- ・チラシやポスター作成はできるが、できれば新しいことをしてみたい。

5. 取組の方向性

- 課題解決の仕組みとして、「しごとコンビニ®」に取り組む。
- シルバー人材センターや社会福祉協議会と連携し、高取町らしい仕組みを構築する。
- 「活躍・しごと」を通じたコミュニティづくりという面からも取組を進め、既存のコミュニティに参加していない町民のフォローにもつなげる。
- 合わせて、「しごとコンビニ®」を実施するに当たっては、リアルで集い、仕事をしたり、学んだり、交流したりできる拠点が有効であるため、その開設を検討し、「交流・居場所」機能を、さらに促進する。
- 「しごとコンビニ®」推進の財源確保のため、企業版ふるさと納税を募集・活用し、また、都市部の企業（大手メーカー）人材と協働して、「都市部との人材循環」の下で事業を進める。

6. スケジュール

【令和3年度】

- ・シルバー人材センター等と連携し、「しごとコンビニ®」の実施主体となる法人を設立した。
- ・マネージャーを会計年度任用職員として公募・採用した。
- ・年度内に試験的な運用を行う。
- ・企業版ふるさと納税の募集や、都市部の企業人材との連携を行った。

【令和4年度】

- ・事業所および町民向けの説明会や広報、訪問活動等により、仕事および登録者を集めて、「しごとコンビニ®」事業を開始する。
- ・コミュニティのコーディネートについては、役場担当者がその役割を担いながら、人員配置についても検討していく。
- ・公共施設の空きスペースを活用して事業を開始し、実施する中で、課題や利用者等の要望を踏まえ、遊休施設の活用も念頭に置きながら、拠点についての検討を行っていく。
- ・地方創生推進交付金等の活用（令和5年度以降）についても検討する。
- ・企業版ふるさと納税の募集や、都市部の企業人材との連携を、継続して進める。

7. 今後に向けて

- 今回の取組を契機として、令和4年度以降、「住まい」「健康」の要素を含む、高取町全体での生涯活躍のまちづくりの検討を開始する。
- その際には、地方創生推進交付金や地方創生拠点整備交付金等の活用も視野に入れ、計画内容の実現に向けて推進する。
- そういった取組を通して、女性や高齢者等が活躍でき、全ての人の望む生き方を実現するまちづくりを進め、広く発信することで、高取町のファンを増やし、転出の抑制や転入の増加につなげる。